

# 石橋南遺跡

田村・沖宿土地区画整理事業に  
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第7集

1997

土浦市教育委員会  
土浦市遺跡調査会  
田村・沖宿土地区画整理組合

石橋南遺跡正誤表

凡例 2 (4行目) 順→準

調査者名簿 (6行目)

小松葉子 (6月26日~)

挿図目次 第6図 第6号土坑

写真図版 PL3 第1・4・6号土坑

1頁 (6行目) 溝8条

1頁 (22行目) X軸8,880 Y軸37,960

3頁 (3行目) 0.7m

5頁 SK5→SK4

11頁 第6図 第6号土坑

PL3 第4号土坑→第6号土坑

PL3 第5号土坑→第4号土坑

いし ばし みなみ い せき  
石 橋 南 遺 跡

田村・沖宿土地区画整理事業に  
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第7集

1997

土浦市教育委員会  
土浦市遺跡調査会  
田村・沖宿土地区画整理組合

口絵



遺跡周辺空撮



第4号住居址炭化材出土状況

## 例　　言

- 1 本書は、上浦市田村沖宿土地区画整理事業に伴う、同市沖宿町字石橋に所在する石橋南遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は田村沖宿土地区画整理組合の委託を受け土浦市遺跡調査会が実施した。
- 3 調査期間は1992年（平成4年）6月12日から同年7月31日である。
- 4 発掘調査は関口箇が担当し、調査員として黒澤春彦、小松葉子、吉澤悟、井上敏昭が当った。
- 5 本書の編集は黒澤春彦が担当し、小松葉子が補佐した。
- 6 本書の執筆は石器を渡辺史彦（慶應大学大学院）、縄文時代を関口・吉田匠、古墳時代以降を小松、火葬墓を吉澤、その他を黒澤が行った。執筆者と実測担当者、図版製作者は必ずしも一致していない。
- 7 整理の分担は下記の通りである。  
実測　雨宮瑞生（石器）関口（縄文）小松（古墳時代以降）  
　　青木光恵 阿部秀子 五十嵐曜子 石山晴美 石浜敏子 島津恵美子 中村節子  
　　長嶺道子  
遺構図版作成　関口 小松 青木 島津  
遺物図版作成　雨宮（石器）、関口（縄文）、黒澤（古墳以降）、吉澤（火葬墓）  
トレース　小松崎廣子 松川さち子 田辺利代 村井律子  
写真　黒澤（遺構写真は関口、井上、小松、黒澤が撮影し、航空撮影は鷹取航業が行った。  
また墨書き上器の撮影は、国立歴史民俗博物館教授の平川南氏にお願いした。）
- 8 本調査及び報告書の作成には下記の諸機関にご援助、ご協力を賜った。  
田村沖宿土地区画整理組合　株式会社　株式会社　茨城県教育委員会　県南教育事務所  
財團法人茨城県教育財団
- 9 本調査及び報告書の作成には下記の方々よりご協力ご助言を賜った。記して感謝の意を表したい。また墨書き上器については東洋大学教授鬼頭清明氏、国立歴史民俗博物館教授平川南氏にご教授を受けた。土師器、須恵器については財團法人茨城県教育財団の土生朗治氏よりご教授を受けた（敬称略）。  
大瀬淳史 小川和博 瓦吹堅 加藤真二 加藤博文 川井正一 黒澤彰哉 駒澤悦郎  
齊藤弘道 高島英之 仲山英樹 福田礼子
- 10 本遺跡の資料は土浦市教育委員会が保管する。
- 11 本遺跡の発掘調査報告書は全11集の予定である。各集共通の事項や、考察、科学分析は第11集の総集編に掲載予定である。

## 凡　　例

- 1 造構番号については、造構の種別ごとに付したが、調査や整理の過程で造構でないと判断したものは欠番とした。
- 2 土層観察における色相の判断は「新版標準土色帖」(日本色研事業株式会社)を使用した。
- 3 各造構の実測図は原図の20分の1を使用し、縮尺3分に1を基本としたが、大きさによって2分に1、4分に1を用いた。
- 4 カマドの実測図は、原図の10分の1を使用し縮尺3分に1を基本とした。
- 5 実測図中の標高はすべてm単位で示している。
- 6 実測図中の「K」は搅乱、「P」はピットを示している。
- 7 実測図中の出土遺物に付した番号は、遺物図版及び写真図版の番号に一致する。また接合関係にある遺物は、各々を実線で結んだ。接合しないが同一の固体は破線で結んだ。
- 8 実測図中の破線は推定線を示している。
- 9 実測図中におけるスクリントーンの指示は下記の通りである。  
焼土 カマド袖部粘土
- 10 遺物の縮尺は3分の1を基本としたが、大きさにより原寸、2分の1、4分の1を使用した。
- 11 遺物実測図中心線の一点鎖線は回転(復元)実測を示す。
- 12 各部位の名称と法量表現は下記の通りである。  
A:口径 B:底径 C:器高 D:高台径 E:高台高  
G:つまみ径 H:つまみ高
- 13 遺物実測中の赤色は赤彩を表す。その他のスクリントーンの指示は下記の通りである。  
黒色処理 吸炭・タール 剥れ口 須恵器
- 14 土器観察表について、図版番号は実測図中の番号である。  
種類は上段が器種、下段が種類である。  
法量は上記の12の表記を用い、( )は現存値、〔 〕は復元推定値を表す。  
焼成は良好、普通、不良の3段階の分けた。胎土は半透明透明の鉱物を石英、白色の鉱物を長石とした。
- 15 色調は原則として外面、内面の順に記した。
- 16 備考の数字は通しの実測番号である。

## 調査者名簿

試掘調査	石川 功	土浦市教育委員会社会教育課
	中澤達也	土浦市教育委員会社会教育課
調査主任	関口 淳	土浦市教育委員会社会教育課
調査員	黒澤春彦	土浦市教育委員会社会教育課（6月26日～）
	小松葉子	土浦市教育委員会社会教育課（6月26日～）
	吉澤 悟	筑波大学大学院
	雨宮瑞生	
	井上敏昭	筑波大学大学院
	吉田 匠	国学院大学大学院
調査補助員	星野保則	専修大学
事務担当	秋元照子（～H5.3.31）	中村博子（H5.4.1～）
事務局	土浦市教育委員会社会教育課（平成5年4月1日から文化課）	

### 発掘参加者（10日以上）

赤池定夫 浅川和代 浅野善子 阿部洋子 飯田とみ 飯村洋子 石神良子 伊勢山こう 今泉代志子 岩瀬いま 岩本よし子 大木ちよ 大久保さだえ 大槻陽子 大坪美知子 大竹きみ子 岡村美樹 岡本君子 小倉はる 小沼さと 折本秀子 貝塚雪枝 加藤博司 川島敏子 川俣茂子 神野栄子 菊田浩一 久保田昭 久保庭藤男 倉田俊夫 倉持敬子 郡司征子 小松崎仁男 齋藤恵子 齋藤政男 坂本たえ 坂本みつい 桜井久代 桜井秀子 清水せつ子 清水たまの 清水としえ 白波瀬初代 鈴木きみ 鈴木秀男 鈴木みね 武井静子 富島栄子 富島利治 土肥末 中根延子 野口絹子 野口八重子 福山久之 福田高明 福田まさ 細野重雄 堀越方子 松浦澄子 松浦浩子 松浦正美 松延貞次郎 穂山未義 安田トミエ 山口仁一 吉田包房 吉田ふじ子 横浜長一郎

### 整理参加者（10日以上）

青木光恵 阿部秀子 天谷瑛子 石浜敏子 石山春美 五十嵐曜子 内田さやか 遠藤成江 大坪美知子 大野美津子 川田光子 小松崎廣子 佐久間郁子 椎名まさ子 島津恵美子 須貝和子 田辺利子 富田シズエ 長嶺道子 中村節子 浜田久美子 松川さち子 松島有子 村井律子 横山紀子

## 調査会組織 (平成5年度まで)

会長	永山 正	土浦市文化財保護審議会委員長
会長	須山 直之	"
副会長	青木 利次	土浦市教育委員会教育長
理事	茂木 雅博	土浦市文化財保護審議会委員
	大塚 博	"
	雨貝 宏	土浦市建築指導課長
	横田 紀夫	土浦市耕地課長
	内海崎保生	"
	野口 幹雄	土浦市区画整理課長
	小川 和博	"
監事	藤枝 正	土浦市教育委員会教育次長
	二野岸昌男	"
	船町喜美雄	"
	滝ヶ崎洋之	土浦市企画課長
	廣田 宣治	"
幹事	田中 紀夫	土浦市教育委員会社会教育課長
	福田 統太	"
	竹本喜一郎	"
	宮本 昭	文化課長
	久松 一夫	土浦市教育委員会社会教育課副参事
	岩沢 茂	土浦市教育委員会社会教育課課長補佐
	加倉井藤雄	土浦市教育委員会社会文化課主任
	石山 淳一	土浦市教育委員会社会教育課担当係長
	飯村 基	土浦市教育委員会社会教育課上幹
	石川 功	土浦市教育委員会文化課主任
	黒澤 春彦	"
	中澤 達也	"
	関口 満	"
	塙谷 修	土浦市立博物館学芸員

# 目 次

口絵

例言

凡例

調査者名簿

調査会組織

目次

第1章 調査経過	1
第2章 調査	1
第1節 地区設定	1
第2節 基本層序	1
第3節 造構調査	3
第3章 造構と遺物	7
第1節 旧石器時代	7
第2節 繩文時代	10
第3節 古墳時代	14
第4節 平安時代	112
第5節 中世以降・その他	119
第4章 結語	131
報告書抄録	132

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡分布図	2	第8図 第1号住居址完掘	15
第2図 遺跡周辺地形	4	遺物出土状況	16
第3図 全体図	5	第9図 第1号住居址カマド・貯藏穴	17
第4図 旧石器出土状況	7	第10図 第1号住居址出土遺物(1)	19
第5図 旧石器時代・繩文時代石器	9	第11図 第1号住居址出土遺物(2)	20
第6図 第1・4・6号土坑	11	第12図 第1号住居址出土遺物(3)	21
第7図 繩文土器	13	第13図 第2号住居址完掘	23

第14図	第2号住居址カマド	24	第46図	第9号住居址出土遺物(2)	68
第15図	第2号住居址出土遺物	25	第47図	第9号住居址出土遺物(3)	69
第16図	第3号住居址完掘	27	第48図	第10号住居址カマド	70
第17図	第3号住居址遺物出土・カマド	28	第49図	第10号住居址完掘	71
第18図	第3号住居址出土遺物(1)	29	第50図	第10号住居址遺物出土状況	72
第19図	第3号住居址出土遺物(2)	30	第51図	第10号住居址出土遺物(1)	73
第20図	第4号住居址完掘	32	第52図	第10号住居址出土遺物(2)	75
第21図	第4号住居址遺物出土状況	33	第53図	第10号住居址出土遺物(3)	76
第22図	第4号住居址カマド	34	第54図	第11号住居址出土遺物	77
第23図	第4号住居址出土遺物	35	第55図	第11号住居址遺物出土状況	78
第24図	第5号住居址完掘	37	第56図	第11号住居址完掘	79
第25図	第5号住居址遺物出土状況・カマド	38	第57図	第12号住居址遺物出土状況	80
第26図	第5号住居址出土遺物(1)	39	第58図	第12号住居址完掘	81
第27図	第5号住居址出土遺物(2)	41	第59図	第12号住居址カマド	82
第28図	第5号住居址出土遺物(3)	42	第60図	第12号住居址出土遺物(1)	83
第29図	第5号住居址出土遺物(4)	43	第61図	第12号住居址出土遺物(2)	85
第30図	第6号住居址完掘・遺物出土状況	45	第62図	第12号住居址出土遺物(3)	86
第31図	第6号住居址出土遺物	47	第63図	第13号住居址完掘	88
第32図	第7号住居址完掘	49	第64図	第13号住居址遺物出土・カマド	89
第33図	第7号住居址カマド	50	第65図	第13号住居址出土遺物(1)	90
第34図	第7号住居址遺物出土状況	51	第66図	第13号住居址出土遺物(2)	91
第35図	第7号住居址出土遺物(1)	52	第67図	第14号住居址カマド	92
第36図	第7号住居址出土遺物(2)	53	第68図	第14号住居址完掘	93
第37図	第7号住居址出土遺物(3)	55	第69図	第14号住居址出土遺物(1)	95
第38図	第7号住居址出土遺物(4)	56	第70図	第14号住居址出土遺物(2)	96
第39図	第8号住居址完掘	58	第71図	第15号住居址出土遺物	97
第40図	第8号住居址遺物出土状況・カマド	59	第72図	第15号住居址完掘・カマド	98
第41図	第8号住居址出土遺物	61	第73図	第16号住居址完掘	100
第42図	第9号住居址完掘	63	第74図	第16号住居址遺物出土状況	101
第43図	第9号住居址遺物出土状況	64	第75図	第16号住居址出土遺物(1)	103
第44図	第9号住居址カマド	65	第76図	第16号住居址出土遺物(2)	105
第45図	第9号住居址出土遺物(1)	67	第77図	第16号住居址出土遺物(3)	106

第78図	第17号住居址完掘	108
第79図	第17号住居址出土遺物	109
第80図	第18号住居址完掘	111
第81図	第1号火葬墓	112
第82図	第1号火葬墓出土遺物(1)	113
第83図	第1号火葬墓出土遺物(2)	114
第84図	第2号火葬墓出土遺物	116
第85図	第2号火葬墓	117
第86図	第1号土坑墓	118
第87図	第1号溝	120
第88図	第2号溝	121
第89図	第3・4・6・7・8号溝	122
第90図	第5号溝	123
第91図	近・現代遺構(1)	124
第92図	近・現代遺構(2)	125
第93図	近・現代遺構(3)	126
第94図	近・現代遺構(4)	127
第95図	近・現代遺構(5)	128
第96図	溝・近現代・遺構外遺物(1)	129
第97図	遺構外遺物(2)	130
第98図	第8号住居址出土遺物(追加)	130

## 写 真 図 版

P L 1	調査区全景航空写真
P L 2	試掘状況・旧石器出土状況
P L 3	1号・4号・5号土坑
P L 4	第1号住居址完掘・遺物出土状況
P L 5	第1号住居址遺物出土状況・カマド 第1号住居址カマド遺物出土状況
P L 6	第2号住居址完掘・遺物出土状況
P L 7	第2号住居址遺物出土状況・上層 第2号住居址カマド
P L 8	第3号住居址完掘・カマド
P L 9	第3号住居址カマド・貯藏穴
P L 10	第4号住居址完掘・炭化材出土状況
P L 11	第4号住居址カマド・土層 第4号住居址炭化材出土状況
P L 12	第5号住居址完掘・遺物出土状況
P L 13	第5号住居址カマド・遺物出土状況
P L 14	第6号住居址完掘・遺物出土状況
P L 15	第6号住居址上層・貯藏穴・作業風景
P L 16	第7号住居址完掘・遺物出土状況
P L 17	第7号住居址カマド・遺物出土状況
P L 18	第8号住居址完掘・遺物出土状況
P L 19	第8号住居址カマド・貯藏穴 第8号住居址開仕切
P L 20	第9号住居址完掘・遺物出土状況
P L 21	第9号住居址カマド・貯藏穴 第9号住居址土玉出土状況
P L 22	第10号住居址完掘・遺物出土状況
P L 23	第10号住居址遺物出土状況・土層
P L 24	第11号住居址完掘・遺物出土状況
P L 25	第11号住居址カマド・貯藏穴
P L 26	第12号住居址完掘・遺物出土状況
P L 27	第12号住居址遺物出土状況
P L 28	第13号住居址完掘・遺物出土状況
P L 29	第13号住居址カマド・土層

- |       |                        |       |                     |
|-------|------------------------|-------|---------------------|
| P L30 | 第14号住居址完掘・遺物出土状況       | P L45 | 第5号・6号住居址出土遺物       |
| P L31 | 第15号住居址完掘・遺物出土状況       | P L46 | 第7号住居址出土遺物          |
| P L32 | 第16号住居址完掘・カマド・貯藏穴      | P L47 | 第7号住居址出土遺物          |
| P L33 | 第17号住居址完掘<br>第18号住居址完掘 | P L48 | 第8号・9号住居址出土遺物       |
| P L34 | 第1号火葬墓                 | P L49 | 第9号住居址出土遺物          |
| P L35 | 第2号火葬墓                 | P L50 | 第10号住居址出土遺物         |
| P L36 | 第1号土坑墓・現地説明会           | P L51 | 第10号・11号住居址出土遺物     |
| P L37 | 第1号・4号・5号溝             | P L52 | 第12号住居址出土遺物         |
| P L38 | 石器・繩文土器                | P L53 | 第12号住居址出土遺物         |
| P L39 | 第1号住居址出土遺物             | P L54 | 第12号・13号住居址出土遺物     |
| P L40 | 第1号住居址出土遺物             | P L55 | 第14号住居址出土遺物         |
| P L41 | 第2号・3号住居址出土遺物          | P L56 | 第14号・15号・16号住居址出土遺物 |
| P L42 | 第3号・4号住居址出土遺物          | P L57 | 第16号住居址出土遺物         |
| P L43 | 第5号住居址出土遺物             | P L58 | 第16号・17号出土遺物        |
| P L44 | 第5号住居址出土遺物             | P L59 | 火葬墓・土壙墓出土遺物         |
|       |                        | P L60 | 遺構外・黒色処理土器          |

## 第1章 調査経過

- 1989年3月 試掘調査を行う。トレチは2本設定し、結果、古墳時代後期の集落であることが判明。
- 1992年6月8日 石橋南遺跡の調査にあたり、テント等の設営を行う。
- 6月12日 調査を開始する。遺構確認のための精査を行う。
- 6月19日 精査の結果、竪穴住居址18件、清一条等が確認された。
- 6月22日 遺構の検出を北側の住居址から始める。
- 6月26日 石橋北遺跡が終了したため、黒澤、小松が合流。
- 7月23日 旧石器の調査を始める。
- 7月26日 遺構検出作業をほぼ終了する。
- 7月28日 教員研修。
- 7月29日 航空撮影を行う。
- 7月30日 発掘器材の洗浄、搬出を行う。
- 7月31日 調査を終了する。
- 当遺跡の終了で、田村沖宿遺跡群の発掘調査がすべて終了する。
- 8月8日 当遺跡において田村沖宿遺跡群の現地説明会を開催する。参加者は約120名である。

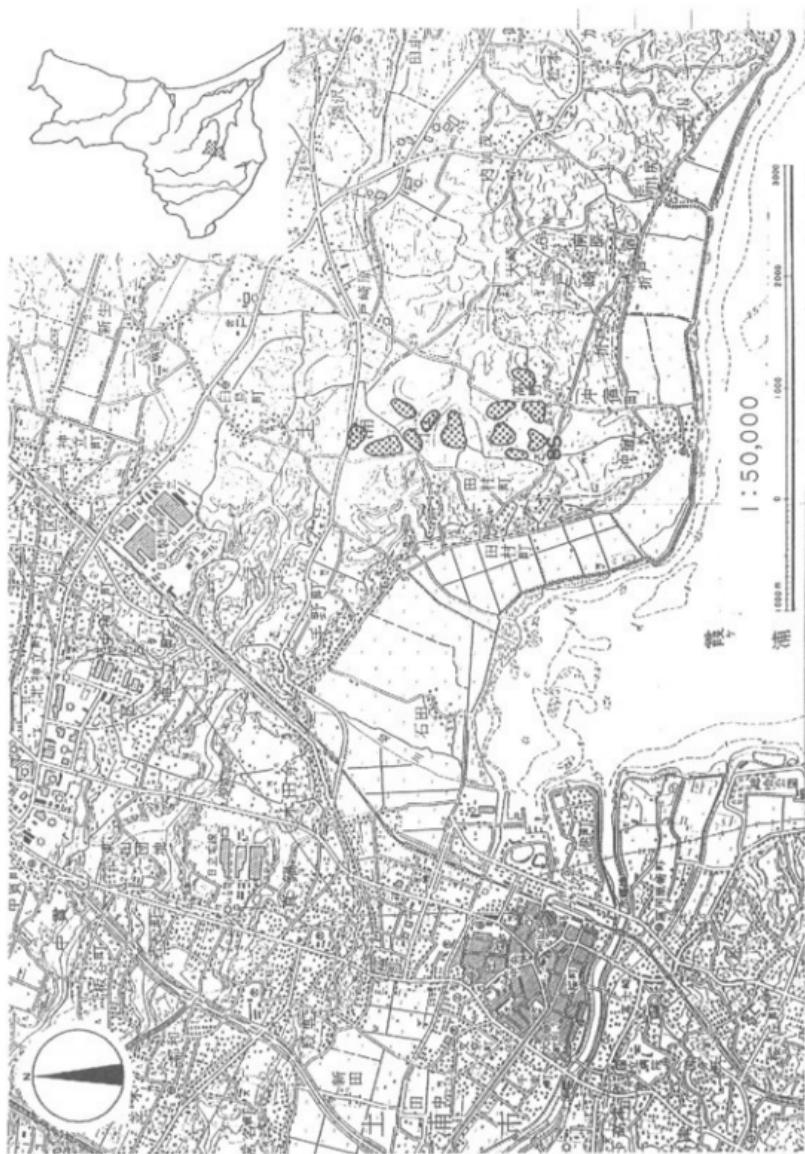
## 第2章 調査

### 第1節 地区設定

発掘調査を実施するにあたり、日本平面直角座標を用い、調査地区を設定した。調査区の名称はアルファベットと算用数字を用い、4m毎に西から東へA, B, C、北から南へ1, 2, 3とし、「A-1区」のように呼称した。「A-1区」は日本平面直角座標第IX座標系、X8,880m軸 Y37,960m軸である。

### 第2節 基本層序

当遺跡の基本的な層位として、上層に表土（耕作土）が約30堆積し、その下にローム層がみられる。ローム層は上層にソフトローム（10YR4/6褐色）が堆積している。この面が遺構の確認面



第1図 遺跡分布図 (国土地理院発行 1/50,000 に加筆)

である。部分的にハードローム塊を含み、火山ガラスも若干みられる。その下はハードローム(10 YR4/6褐色)である。黒色の粒子や橙色の粒子を含んでいる。火山ガラスも1層より多く合っている。この下の層は上層より締まりの強いハードロームである。地表より約 でみられる。埋没谷の部分は表土の下に黒褐色が堆積している。

### 第3節 遺構調査

#### 1 確認調査

平成元年3月に重機による確認調査を実施した。トレーナーは2本設定し幅1で掘り下げはハードローム上面までとした。試掘の結果、遺構の確認面はソフトローム層上面で、地表からの深さは30cmである。

#### 2 表土除去

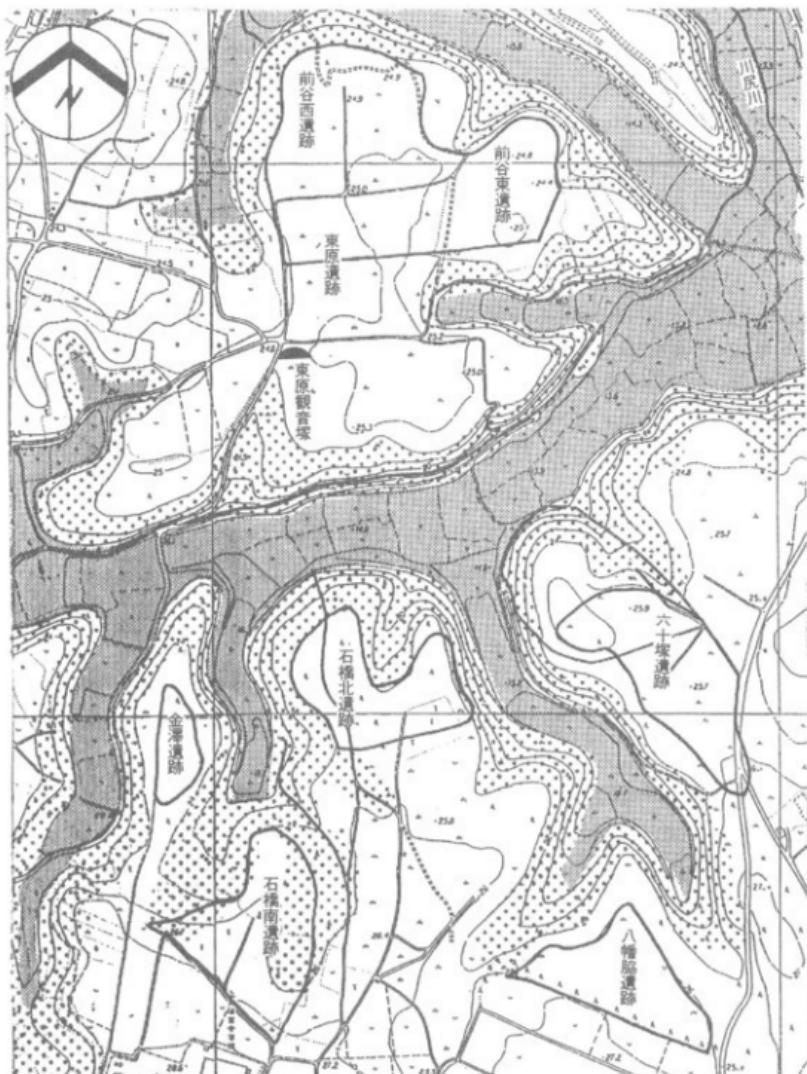
試掘の結果、遺構確認面までの深さが30cm以上あることから、重機を入れても遺構の与える影響は少ないと判断し、重機による表土除去を行った。掘り下げた面はソフトローム上面と、埋没谷の埋没土層上面である。木根については調査時に人力で除去した。

#### 3 遺構調査

住居址の調査は、土層観察用ベルトを十字に設定して検出する方法を原則とした。地区的表記は主軸の右前を1区とし、時計回りに2、3、4区とした。土坑については長軸方向に分割し地区番号は住居址の表記に準じた。検出作業は覆土の変化や遺物に注意して掘り進めた。土層観察は、色調、含有物の種類と量、締まり、粘性等を観察した。土層観察用のベルトを除去した後、遺物を写真や図面等で記録し、レベルを測定して取り上げた。取り上げた後、カマド、柱穴、貯蔵穴等の付属施設を調査し完掘した後、写真、図面等の記録を行って終了した。

平面図は水糸を1m毎に張って測量した。

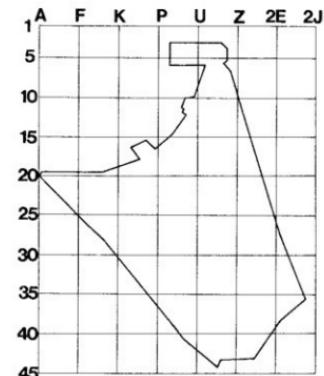
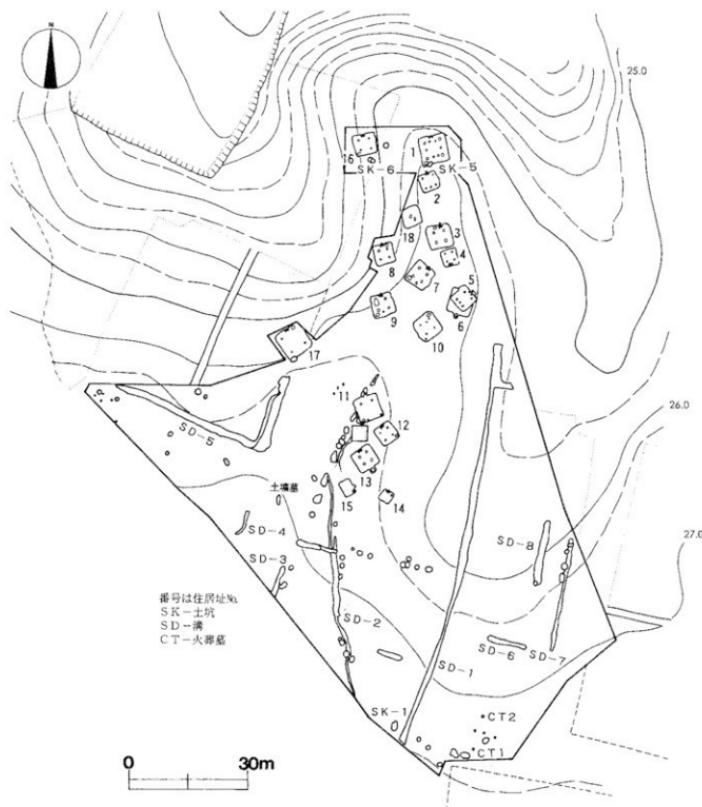
写真は、ローリングタワーや脚立の上から35mm、120mm(中型)で撮影し、フィルムは35mmモノクロ、リバーサル、120mmモノクロを使用した。



1/5000

谷底平野 傾斜面

第2図 遺跡周辺地形



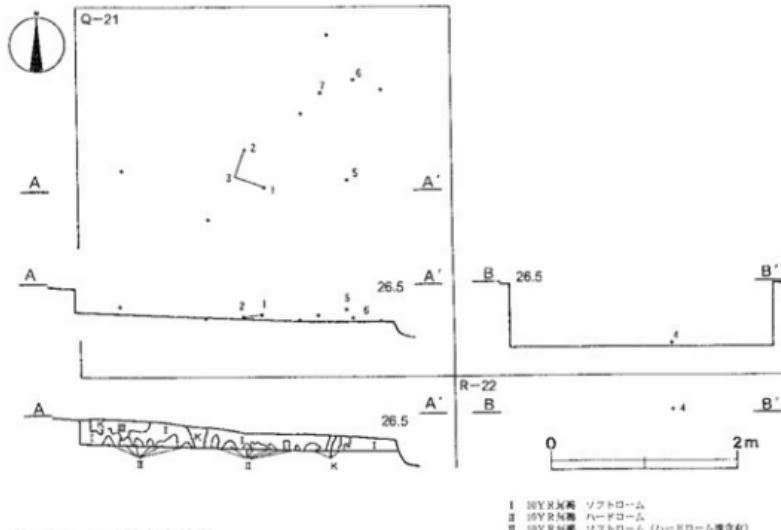
第3図 全体図

## 第3章 遺構と遺物

石橋南遺跡は標高27~24mの台地上に位置し、北西80mに金沢遺跡、北東100mに石橋北遺跡が存在する。本遺跡からは旧石器時代の石器ブロック1か所、縄文時代の上坑3基、古墳時代後期の竪穴住居址18軒、平安時代の大葬墓2基、土壙墓1基、中世以降の溝8条、土坑多数が検出された。中心となる時代は古墳時代後期である。

### 第1節 旧石器時代（第4図・5図）

本遺跡内で旧石器時代の遺物検出を目的として設定された調査区は、第11号住居址周辺のQ-20・21区、R-22区、T-20・21区とU-18・19・21区、X-38区、W-14区である。これらの調査区の中で旧石器時代の遺物が出土した場所は、Q-21区とR-22区である。Q-21区内からは10点の遺物が出土した。No.9以外の9点は標高26.100mレベルを中心としてその上下で出土し、出土層位は2層としたハードロームがソフトローム化が進行しつつある上層である。部分的にハードロームが残っている他はソフトロームとなっている。R-22区内からは遺物が2点出土した。出土層位はQ-21区と同様である。他の調査区でもハードロームが確認される上面まで掘り下げを行ったが遺物は出土していない。



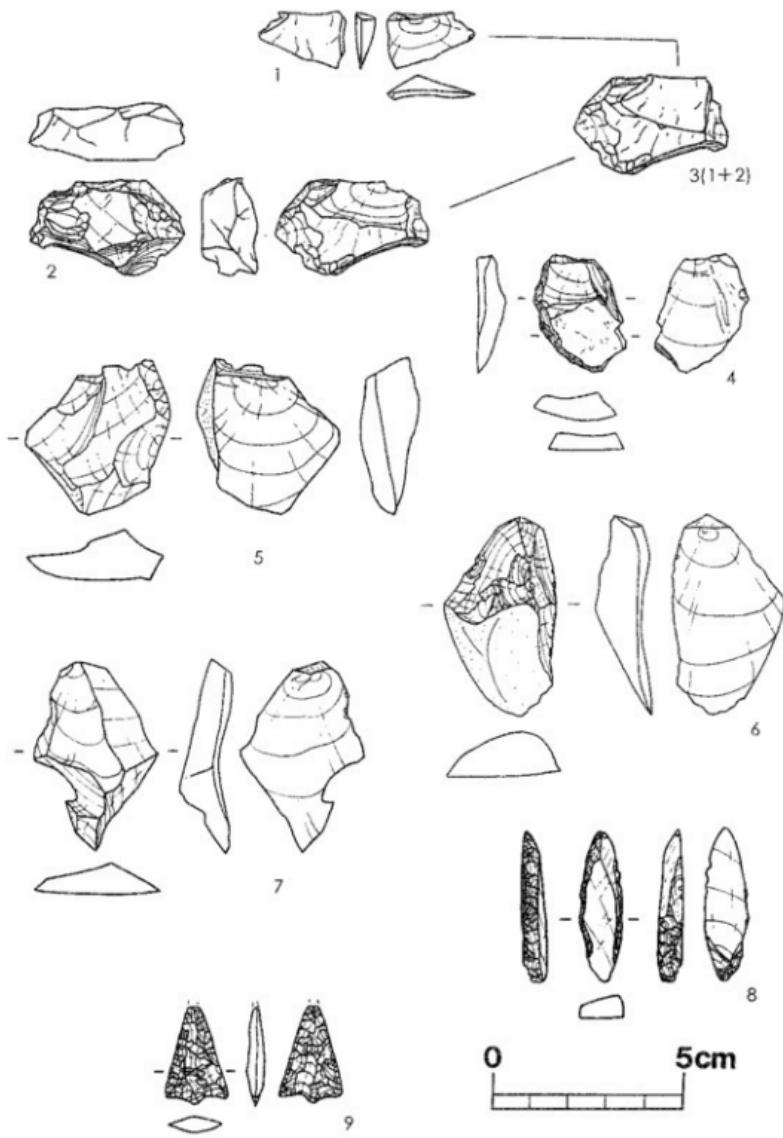
第4図 旧石器出土状況

本発掘調査では、2層（ソフトローム層）より出土の6点を含め、合計8点の石器資料が得られた。出土層位、資料の形態などから、2層中から出土した資料（図5-1・2・4～7）及び図5-8の資料はIH石器時代、9の資料は縄文時代に属する資料と考えられる。石材は1・2・4・5はメノウ、6・7は凝灰岩、8は硬質頁岩、9はチャートである。それぞれの資料の技術的特徴については以下に述べる。尚、各資料の長さ、幅、厚さ、重量については表に示す。図5-1は横長剥片である。打面は単剥離面打面で、末端形状はフェザー・エンドである。図正面の剥離面はポジティブなバルブを有する面である。2は石核である。最終の剥離は裏面図上部に集中する。裏面図下半分の比較的大形の剥離面が、裏面図左上部の剥離面部分を打点とするポジティブなバルブを有することから、本資料が剥片を素材とする石核であると判断される。1の剥片と接合する（図5-3）。4は縦長剥片を素材としたスクレイバーである。素材の左側縁に連続的な剥離を施し、やや角度の浅い作業刃部を作出している。末端部は一部欠損している。5～7はいずれも単剥離面打面を有する不整形は剥片である。このうち、6の資料は背面下半分に大きく蝶表面を残すこと、そして正面図中央の棱から左右両側縁に向けて剥離が施されていることから、素材となった原石の蝶表面除去に伴う、調整剥片であると考えられる。また、正面図右側縁部分に微細剥離痕を観察できるが、その正確については不明である。8は縦長剥片を素材としたナイフ形石器である。正面図左側縁と、右側縁下半分に刃溝し加工が施されている。左側縁部上部に観察される調整は裏面側から、左側縁下部及び右側縁に観察される調整は背面からのはくりによるものである。主要剥離面の末端に見られる、左下方からの剥離面は、素材剥片のバルブ削除に伴う剥離によるものと考えられる。資料の最大長に比較して、やや厚めである。

石器観察表

単位(cm・g)

図版No.	No.	器種	出土地點	長さ	幅	厚さ	重さ	石材
Fig.5	1	剥片	Q-21区No.7	1.2	2.2	0.5	1.20	メノウ
〃	2	石核	Q-21区No.8	2.5	4.0	1.5	15.31	メノウ
〃	3	接合資料	No.7+No.8					
〃	4	スクレイバー	R-22区No.1	2.9	2.2	0.7	5.05	メノウ
〃	5	剥片	Q-21区No.3	3.8	3.6	1.35	17.95	メノウ
〃	6	〃	〃 No.1	5.2	2.95	1.2	15.50	凝灰岩
〃	7	〃	〃 No.2	4.9	3.3	1.1	8.95	凝灰岩
〃	8	ナイフ形石器	SD-1-核	4.0	1.1	0.5	2.74	硬質頁岩
〃	9	石核	SI-8.1区	2.6	1.6	0.5	1.30	チャート



第5図 旧石器時代・縄文時代石器

## 第2節 繩文時代（第6図・7図 PL3・38）

遺跡内から確認された造構は第1・4・6号土坑の3基である。この他U-21~24区とU-Y-21区の緩やかな緩斜面で縄文時代後期前半の遺物がまとまって出土した。

**第1号土坑** 調査区南端のT-40・41区で確認された。平面形は椭円形を呈し、長軸は2.4m・短軸1.1mを測る。深さは1mを測り、壁は急激に落ち底面は平坦である。遺物はまったく出土していない。覆土は上層が暗味の強い褐色で、下層は褐色土である。主軸はN-10°-Eである。

**第4号土坑** 調査区北端の標高25,000m付近で確認された。本造構は第1号住居址と重複関係にある。平面形は径が約1mの円形を呈する。壁はほぼ直立し、底面は平坦で、その一部には深さ20cmの小ピットが存在する。覆土には焼土粒・炭化物粒・ローム粒が含まれる。炭化物粒は上層に目立ち、ロームブロックは中層に目立つ。上層ほどつまりがあり、下層ほど粘性が強い。遺物は縄文時代後期前半の土器片が出土し、造構自体も同時期のものと思われる。

**第6号土坑** 本造構は調査区北端の標高24,000m付近の谷に西面する緩斜面から確認された。本造構の平面形は不正長方形を呈し、西側にテラス状の緩い段差が見られる。壁の立上りは東壁で35cmと残りが良く、西壁では10cmと浅い。底面は平坦である。本造構の上層からは角の丸い自然礫が73点まとめて、土坑内西寄りに出土している。この出土レベルは標高23,900m付近を中心とする皿状の凹地に堆積したかの様に出土している。自然礫のまとまりの両部分には30×70cmの範囲に貝殻がまとめて出土した。貝殻の出土レベルは同所の自然礫の出土レベルと同様である。

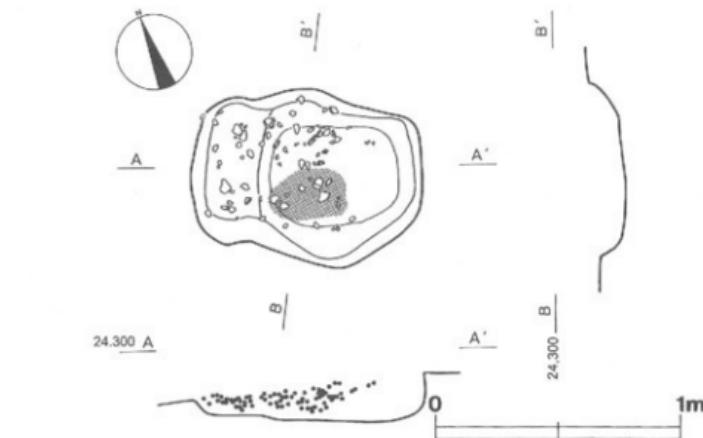
自然礫の重量別の傾向は、1g以上6g未満のものが28点と全体の38.3%を占める。以下重量に反比例して出土固体数は減少する傾向が見られる。礫の表面は被熱を明瞭に受けた痕跡のものはないが割れたものは存在する。また礫の表面の色調は全体的に赤錆色である。中には表面に黒色の付着物の見られるものも存在する。

出土した貝殻の種類は1点のみ汽水域に生息するヤマトシジミで、この他はすべて鹹水域に生息する貝類である。鹹水産の貝はハマグリ・ハイガイ・マガキ・オオノガイが出土している。この中で一番多數出土しているものはハマグリであり、貝(左)が65点・貝(右)が60点出土している。貝の大きさは左右ともに一番多いのが、貝高3.5~3.6cm・貝幅4.2~4.3cmのものである。次ぎに出土固体数の多いものはマガキであり、本体にあたる部分が35点・蓋にあたる部分が34点出土している。マガキは小型のもので占められている。この中には自然礫に付着したマガキも2点ほど見られた。ハイガイは2点ほど出土し、オオノガイは破片が1点出土しているのみである。

ハマグリやマガキの中には、貝殻の内外面に灰白色の付着物が付く固体が多々見られた。この付着物は面的に付着するもので、小さい粒状のものが密集して付着しているものも見られる。ハマグリについて付着物の状況を見てみると、貝殻(右)の内側にのみ付着が見られるものは、

7点、外側のみに見られるものは35点で内外面に見られるものは1点のみである。貝殻（左）においては内面のみに付着の見られるもの18点、外面のみに見られるものは38点であり内外面に見られるものは5点である。付着物それ自体は貝殻表面に付着すると、貝殻の表面の風化を保護する効果があるようで、付着物が剥がれた部分の表面は貝本来の色調が残り、光沢を保つ。

本遺構から出土した他の遺物は土器小破片が2点出土した。いずれも無文で胎土に纖維を含まず砂粒を多く含む。本遺構の年代は縄文時代早・前期の可能性がある。



- 5図-4 土解説
- 1層 菓色土 壁上粒微量、炭化物微量、ローム粒微量、しまりあり
  - 2層 菓色土 しまりあり
  - 3層 菓色土 炭化物微量
  - 4層 菓色土 壁上粒微量、ローム粒多量、粘性・しまりあり
  - 5層 菓色土 ロームブロック、和、粘性・しまりあり
  - 6層 菓色土 硫土鉱、炭化物鉱、ローム粒微量、粘性あり
  - 7層 菓色土 硫土鉱微量、ロームブロックを含み、ローム粒多量、粘性あり
  - 8層 菓色土 硫土鉱、炭化物微量、ロームブロック、粘性あり
  - 9層 菓色土 硫土鉱、ローム粒微量、粘性あり
  - 10層 菓色土 ローム粒微量、粘性あり、しまり差違にあり
  - 11層 菓色土 ローム粒多量、粘性非常にあり

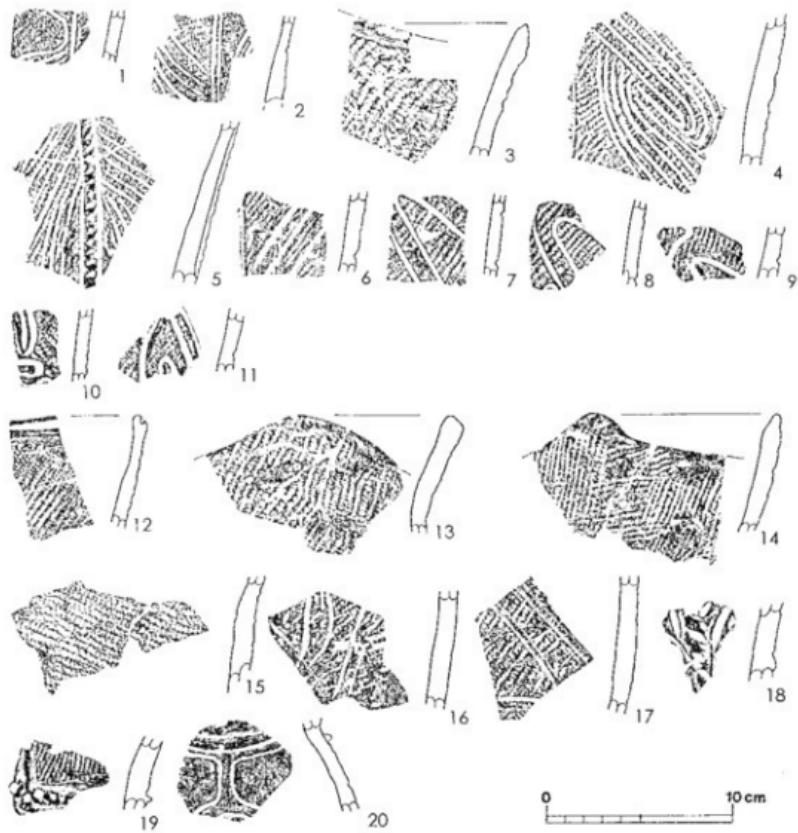
第6図 第1号・4号・6号土坑

#### 出土石器（第5図 9・PL38）

9は回基有茎の石鏃である。表裏両面とも精緻な平坦剝離が施され、薄手に仕上げられている。最終の剝離は、正面図左側縁と裏面図左側縁に集中している。断面はレンズ状の形態をなす。

縄文土器観察表

図版番号	器種	部位	器厚 mm	器形と文様の特徴	内面調査	胎土	色刷 外面・内面		備考
							外	内	
1	深鉢	腹	7	LR縄文横位施文後、沈縦文。縦位沈縫間に 蛇行沈縫等	縦ナデ	長石・石英多 灰黄褐 に赤い斑模	灰黄褐	輪積底	
2	深鉢	腹	6~9	LR縄文(直前段多条?) 横位施文後、縦位 に沈縫文が引かれ。それを中心に斜位の沈 縫文	縦ミガキ	長石・石英多 灰黄褐 に赤い斑模	灰黄褐	輪積底	
3	深鉢	口縁	10	波状口縁 口縁上端に沈縫が造る「LR縄 文横位施文」	横ナデ	長石・石英多 灰黄褐 に赤い斑模	灰黄褐	輪積底	
4	深鉢	腹	12	LR縄文横位施文後、集合沈縫による入模状 の文様	縦ミガキ	長石・石英多 灰黄褐 に赤い斑模	5と同一箇所		
5	深鉢	腹	6~11	LR縄文横位施文後、刻み目が施された陰線 が施された両側に沈縫。陰線を中心して斜位 に沈縫	横ミガキ	長石・石英多 灰黄褐 に赤い斑模	灰黄褐 に赤い斑模	輪積底	
6	深鉢	腹	9	LR縄文横位施文後、縦位沈縫が引かれ。沈 縫間に斜位や曲線的な沈縫	縦ミガキ	長石・石英中 灰黄褐 に赤い斑模	灰黄褐		
9			10						
7	深鉢	腹	7	LR縄文横位施文後、沈縫間は粗縫で横消 (△角形状?)	縦ミガキ	長石・石英中 灰黄褐 炭化物付着	灰黄褐 炭化物付着	輪積底	
8			8						
10	深鉢	腹	7	RL縄文横位施文後、横円や△字状沈縫文	縦ミガキ	長石・石英中 灰黄褐 炭化物付着	灰黄褐 炭化物付着	輪積底	
11	深鉢	腹	8	LR縄文横位施文後、沈縫により入模状の文 様	横ナデ	長石・石英中 灰黄褐 炭化物付着	灰黄褐 炭化物付着	輪積底	
12	深鉢	口縁	8	口縁に沈縫が一条 全面にLR縄文横位施 文	横ミガキ	長石・石英中 灰黄褐 に赤い斑模	灰黄褐 に赤い斑模	輪積底	
13	深鉢	口縁	10	波状口縁 全面にLR縄文が横位・斜位施文	横ナデ	長石・石英多 灰黄褐	灰黄褐		
14	深鉢	口縁	10	山形突起 付加条1種(RL+LR)を横位・斜位 施文	横ナデ	長石・石英多 灰黄褐	灰 明赤褐	炭化物付着	
15	深鉢	腹	11	RL横位施文	不明	長石・石英中 灰黄褐	灰黄褐 に赤い斑模	輪積底	
16	深鉢	腹	10	LR横位施文後、2本1組の沈縫による文様	縦ナデ	長石・石英多 灰黄褐	灰黄褐 に赤い斑模	輪積底	
17	深鉢	腹	10	異条縫文(RL+LR)横位施文後、半裁竹青 状施文具の内皮により浅い沈縫が幾何学文 様に施文(△角形?)	縦ナデ	長石・石英多 灰黄褐	灰黄褐 淡黄	輪積底	
18	深鉢	腹	12	刻み目が斜位施文された縦縫の陰線 両側に 沈縫が沿い、陰線を中心に沈縫文	横ナデ	長石・石英多 灰黄褐 に赤い斑模	灰黄褐 に赤い斑模	輪積底	
19	深鉢	腹	11	確認の陰縫 下部に円形突起の施された陰 縫 沈縫が沿い、全体で方形△内調の文様 地文はLR斜位施文	不明	長石・石英中 灰黄褐 に赤い斑模	灰黄褐 に赤い斑模	輪積底	
20	変型土器	腹	9	新縫が付き瓶部が球形に膨る 腹部に凸壺 状の陰縫が1条、下に沈縫が沿う 剥離に 沈縫による文様	横ミガキ	長石・石英中 灰黄褐 に赤い斑模	灰 明赤褐	丁寧なミカキ	



第7図 繩文土器

### 第3節 古墳時代

古墳時代の遺構は堅穴住居址18軒で、すべて後期に位置づけられる。住居址以外に、この時期の遺構は存在しない。住居址は、北へ延びる緩やかな屋根上から西向きの緩斜面にかけて多くみられ、特に調査区北側に集中している。大部分の住居址は北、北東、北西にカマドを持つが、1軒は南にカマドを持つ。この住居は火災を受け、すぐに埋め戻されている。カマドの対面に張出しピットを持つ住居址も2軒存在する。遺物は杯、甕、壺などの土師器が大部分を占め、カマド内やその周辺から多く出土している。他にコバルトブルー色のガラス玉が出土している。

#### 第1号住居址 (第8・9図 PL4・5)

位置 調査区北端、谷津を見おろす台地尖端部。V-3, 4, 5・W-3, 4, 5区

規模・形態 主軸長6.96m、幅7.08m 49.3m<sup>2</sup>の方形

主軸方位 N-14°-W

壁 垂直に立ち上がり、20~36cmの高さを持つ。

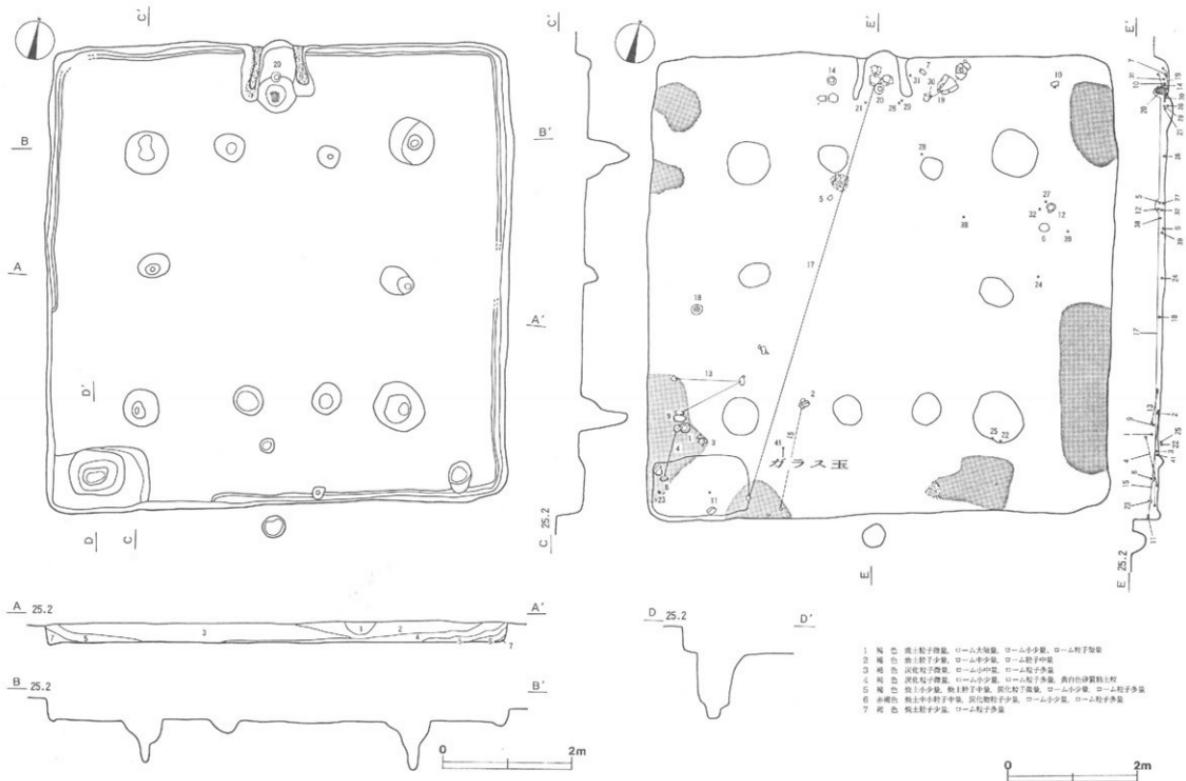
床 平坦で固く明瞭に検出された。壁溝はほぼ全周するがカマドと貯蔵穴付近では検出されない。幅10~18cm、深さ3~5cm。

ピット 15ヶ所、いずれも円形。その内、主柱穴は4ヶ所で径53~76cm、深さ60~74cm。これらの間に配される小形のピットは補助柱穴で、その径は約45cm、深さ20cmあり。柱穴で構成される内区の面積は約17.0m<sup>2</sup>である。他に壁溝に沿って性格不明の小ピットが2個ある。

入り口部はカマドに對面して南壁に設けられており、住居の内外に対応して2ヶ所ピットが検出されている。径は20~35cm、深さは内8cm、外23cm。

西南隅の長方形ピットは貯蔵穴である。北側に幅狭のゆるやかな高まりがあり、堀込みは浅い段を有し、長軸84cm、短軸67cm、深さ1mを測る。底にさらに一段浅いくぼみがある。堆積土の最下層は締まりの強い、水滌したようなきめの細かい土である。上層の廃棄に火を使用した可能性があるが、埋土中層以下は焼土等の混入がない單一土なので焼却以前に人為的に埋め戻したものと考える。

竈 北壁中央部に黄灰色砂質粘土で構築されている。全長1.13m、残留する両袖の間隔は下端で約55cmである。燃焼部は円形に窪められ径約55cm、深さ8cm。燃焼部覆土には多量の焼土が混じっている。

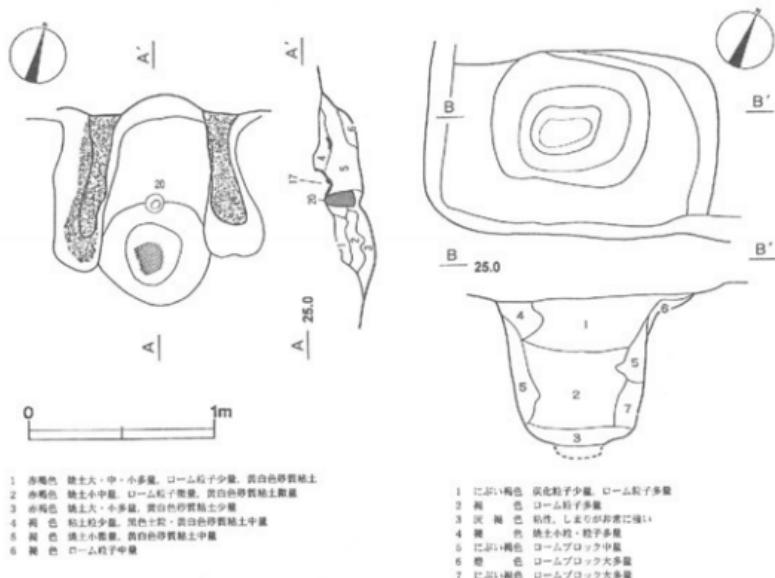


第8図 第1号住居址完掘 遺物出土状況

**覆土** 炭化粒や焼土ブロックを多量に含み赤褐色を呈する土が、竪穴の三方の壁際に断面三角形に堆積している。炭化木材等の痕跡はなく、上層全体が焼失したとするには質量とともに疑問が残るが、廃棄時に何らかの形で火を使用したものである。

**遺物** 竪内燃焼部上端に土製支脚(20)が正立して残される。その脇に横転していた甕(17)は支脚にのっていた可能性もある。竪右脇には甕(19)が破碎されて横転していたがほぼ完形に復元された。左脇の赤彩完形杯(14)は逆位で床面より出土した。炊き口付近には5個の丸玉が散乱している。この他、左外区より出土した穿孔のある赤彩壺(18)も本住居に伴うものと考える。右外区出土の杯2点(12・6)は覆土最下層上の出土である。入り口部と貯蔵穴にはさまれた外区床上からはガラス玉1点(41)が出土している。

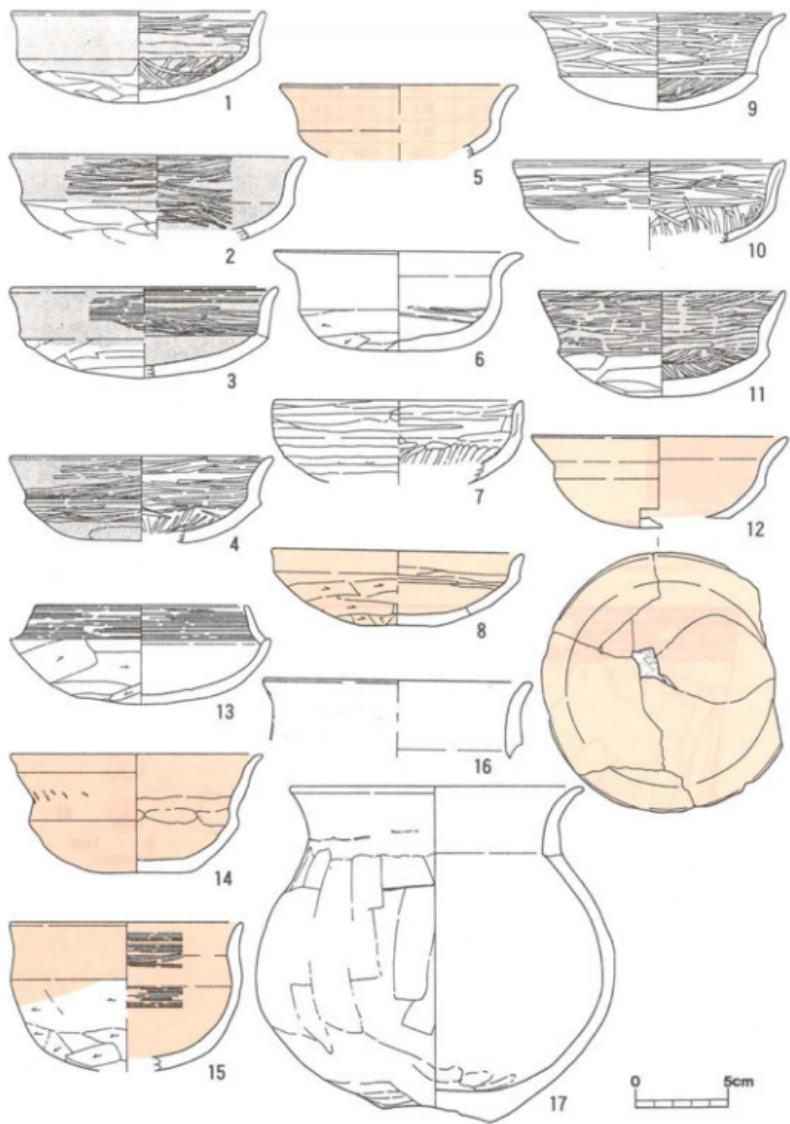
**所見** 出土遺物より6世紀前半の住居と考える。住居廃棄時にガラス玉を床に残した可能性があり、当集落最大規模の床面積を有する。竪は故意に破壊されており、住居廃棄にあたっては火を使用した可能性がある。



第9図 第1号住居址カマド・貯蔵穴

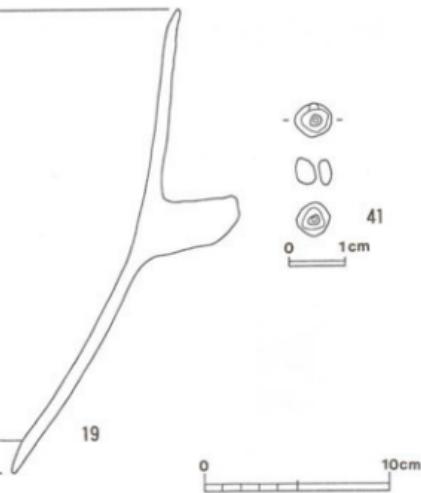
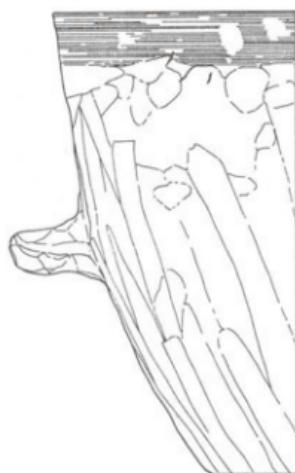
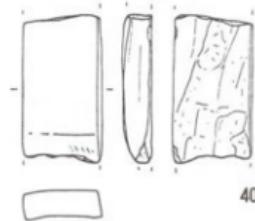
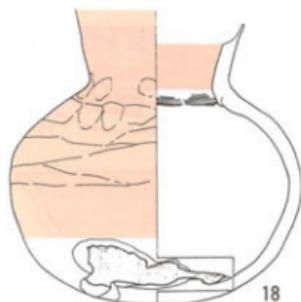
第1号住居址

図版№	器種 部形	法基	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	杯 上脚器	A : 13.7 C : 4.9	覆土中位 燒上 2/3	良好	細砂粒を 少量含む	に赤い帶 -部黒	丸底。口縁部は外反し、横径のヘラミガキ。 体部はケズリの後荒いミガキ。内者の境に 甘い模を有する。内面放射状のミガキ。	内面と口縁部 付況黒彩 (焼仕上) 4
2	杯 土師器	A : [16.0] C : 4.5	底直 1/3	良好	細砂粒を 少量含む	に赤い帶 黒	丸底。口縁部は外反し、横径のヘラミガキ。 体部はケズリ。内者の境は丸みを帯び縁は 凹窪でない。	内面と口縁部 黒彩 (焼仕上) 14
3	杯 土師器	A : [14.6] C : 4.9	覆土下位 燒上 1/2	良好	細砂粒を 少量含む	に赤い帶 黒	丸底。白線部は外反し、横径のヘラミガキ。 体部はケズリ。内者の境に縁は凹窪でない。	内面と口縁部外 部黒彩 (焼仕上) 15
4	杯 上脚器	A : 14.2 C : 4.6	覆土中位 燒土 2/3	良好	細砂粒を 少量含む	黒と黒 混	丸底。口縁部は外反し、横径のヘラミガキ。 体部はケズリの後荒いミガキ。内者の境に 凹窪で模を有する。	外前ののみ黒彩 一部黒彩が不明 瞭な場所あり 1
5	杯 土師器	A : [19.0] C : (3.9)	口縁小片	良好	砂粒幼目 立たない	赤褐色	口縁部はわずかに外反し、内外ともにナデ。 体部との境は非常に凸起。体部外側面へ ナナナ。	内面と外周被下 まで赤彩 12
6	杯 上脚器	A : 13.6 C : 5.4	底直 ほぼ完形	普通	細砂粒を 多く含む	に赤い帶 黒	丸底。口縁部は強く外反し、横径のナデ。 体部はケズリ。周者の境に甘い模を有する。 内面にミガキ成形上の溝を有している。	口縁部一段及び 内面を赤彩 6
7	杯 上脚器	A : [13.6] C : (4.4)	覆土下位 1/3	普通	砂粒・雪母 極細粒を含む	に赤い帶 淡黄	丸底。口縁部はほぼ直立し丸みナタ。	8
8	杯 土師器	A : [15.6] C : 4.0	覆土中位 燒上 1/3	普通	細砂粒を多 く含む	赤 赤褐	丸底。口縫は刻く直立し、縁部はわずかに 外反。体部ケズリ、口縁ナナナ。内面は荒い ミガキ。	内面と、接地面 を除く外体部に 赤彩 7
9	杯 上脚器	A : 13.8 C : 5.2	覆土中位 燒土上 2/3	良好	石英・長石 小粒を多く 含む	黒褐	丸底。口縫は強く外反して横径のヘラミガ キ。体部は丁寧なケズリとナナナ。内者の境 に明瞭な模を有する。内面精緻なミガキ。	3
10	杯 土師器	A : [14.8] C : (4.4)	覆土中位 1/3	良好	細砂粒を少 量含む	に赤い帶 明赤褐	丸底。口縫は直立し横径のヘラミガキ。体 部はナナナ。両者の境は丸みを帯び縁は凹窪 でない。内面放射状のミガキ。	赤色粘土使用用 11
11	杯 上脚器	A : 13.3 C : 5.7	覆土下位 燒上 ほぼ完形	良好	細砂粒を少 量含む	黒褐	丸底。口縫は強く外反して横径のヘラミガ キ。体部はケズリとナナナ。内者の境に凹窪 な模を有する。内面は精緻なミガキ。	内面と口縁部外 部黒彩 5
12	杯 土師器	A : 13.9 C : 4.9	覆土下位 ほぼ完形	普通	細砂粒を少 量含む	明赤褐	丸底。口縫は直立し横径のヘラミガキ。 体部はケズリとナナナ。内者の境に甘い模を有 する。内外とも黒化 内成後穿孔 内・外 9	内外とも赤彩 内成後穿孔 内・外
13	杯 上脚器	A : 11.4 C : 5.3	覆土中位 燒上 2/3	良好	細砂粒を少 量含む	黒 黒褐	丸底。口縫は直立し。内外共ナナナ。体部は ケズリとナナナ。内者の境に明瞭な模を有す る。	10
14	杯 土師器	A : 13.6 C : 6.4	底直カマ 下付延 完形	普通	石英・長石 小粒・雪母 を多く含む	に赤い帶	丸底だが偏平化。口縫部は強く外反してナ ナナ。体部はケズリとナナナ。内者の境に甘い 模を有する。表面が黒化。	内面と接地面 を除く外体部に 赤彩 2
15	碗 土師器	A : [12.6] C : 8.0	底直 1/3	良好	細砂粒を多 く含む	明赤褐 赤褐	丸底。口縫部は外反し、内外ともナナナ。 体部はケズリの鏡、丁寧なナナナ。両者の境 は明瞭でない。最高が高い。	内面と口縁部外 部赤彩 8
16	盤 土師器	A : [14.6] C : (3.3)	小片	普通	石英・長石 小粒を多く 含む	に赤い帶 黒	小笠盤。内外ともナナナ。	少量の炭化物付 着 16
17	盞 土師器	A : 20.0 B : 5.7 C : 18.2	カマト覆 上中位 ほぼ完形	良好	石英・長石 小粒・雪母 を多く含む	黄褐	上げ盤。小型。底部から跡状痕部につなが る。跡部はくの字に屈曲し口縁部は若干 肥厚する。外縁へナナナ。内面ナナナ。	頭部内面及び外 側部赤彩焼成後 穿孔 内・外 18
18	盞 土師器	C : (15.9)	底直 ほぼ完形	良好	石英・長石 小粒を多く 含む	明黄褐	柄部はおむね球状を呈し、ケズリの後ナ ナナナ。内面ナナナ。	頭部中央にはほぼ 水平に貼り付け た把手一封 19
19	瓶 土師器	A : 26.0 B : 8.5 C : 24.9	カマト脇 底直 ほぼ完形	良好	砂粒少量含 む	黄褐	無底型。胴部はゆるやかに内側につぶ開く。 口縫はナナナにより遮ぐらせる。外縁部のケズリ、 内面丁寧なナナナ。	

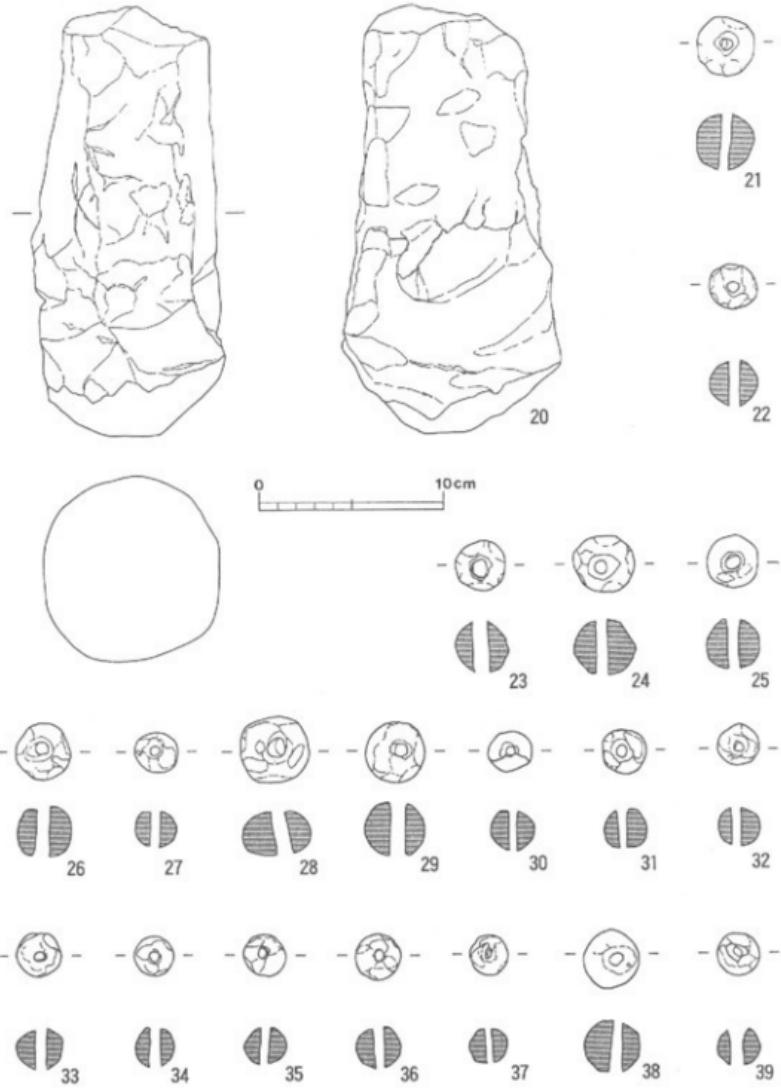


第10図 第1号住居址出土遺物(1)

図版No	種類	最大長	最大幅	重量	孔径	出土位置	残存率	焼成	胎土	色調	備考
20	支脚	23.1	11.6	—	—	電床直	完形	普通	砂粒微量	にほい黄橙	20
21	丸玉	2.9	3.1	22.1	0.6	電焚き口	完形	良好	砂粒微量	灰白	21
22	丸玉	2.4	2.5	9.8	0.6	床直	完形	良好	砂粒微量	浅黄橙	22
23	丸玉	2.7	2.7	16.2	0.8	覆土	完形	良好	砂粒微量	にほい褐	23
24	丸玉	3.0	3.3	26.0	0.7	覆土	完形	良好	砂粒微量	にほい赤褐	24
25	丸玉	2.6	2.7	18.0	0.8	床直	完形	良好	雲母少量	にほい黄橙	25
26	丸玉	2.7	3.0	18.3	0.7	電焚き口	完形	不良	細砂粒少量	灰白	26



第11図 第1号住居址出土遺物(2)



第12図 第1号住居址出土遺物(3)

図版No.	種類	系大長	最大幅	高さ	孔径	出土位置	残存状	焼成	胎土	色調	備考
27	丸玉	2.0	2.4	7.0	0.5	床面	完形	普通	雲母少量	淡黄	27
28	丸玉	2.3	3.6	27.5	1.0	床面	完形	普通	雲母少量	灰黄	28
29	丸玉	2.8	3.2	21.6	0.9	竈荷き口	完形	普通	雲母微量	淡黄褐	29
30	丸玉	2.1	2.4	6.4	0.5	床面	2/3	普通	砂粒微量	淡黄褐	30
31	丸玉	2.1	2.3	8.7	0.5	覆土	完形	普通	砂粒微量	淡黄褐	31
32	丸玉	2.1	2.2	7.5	0.5	床面	完形	良好	砂粒無し	にぶい黄	32
33	丸玉	2.2	2.2	8.7	0.6	床面	良好	砂粒無し	にぶい黄	33	
34	丸玉	2.1	2.1	7.1	0.5	—	完形	普通	雲母微量	明黄褐	34
35	丸玉	2.0	2.3	7.7	0.5	床面	青釉	砂粒微量	にぶい黄褐	35	
36	丸玉	2.3	2.4	10.4	0.5	—	完形	普通	雲母微量	にぶい黄褐	36
37	丸玉	1.8	2.0	6.5	0.3	床面	青釉	砂粒無し	にぶい黄褐	37	
38	丸玉	3.2	2.9	25.1	0.7	覆土	完形	普通	砂粒少量	明褐	38
39	丸玉	2.2	2.3	7.7	1.1	床面	完形	普通	砂粒少量	淡黄褐	39
40	砾石	7.9	4.3	90	—	覆土	2/3	—	—	暗灰黄	
41	ガラス玉	0.7	1.0	0.3	0.3	貼り床	完形	—	—	無	

## 第2号住居址 (第13・14図 PL 6・7)

位置 調査区北端 V-6・7区, W-6区

規模・形態 主軸長4.5m, 幅4.92m 22.1m<sup>2</sup>の方形

主軸方位 N-22°-W

壁 ほぼ垂直に立ち上がり40~56cmの高さを持つ。東南角付近はやや崩れている。

床 平坦で明瞭に検出された。壁溝は南壁にそって約2.5m, 北・西壁で1.5mあまり検出された。元は全周していたと考えるが幅4~10cm, 深さ2cmで掘込みは浅い。

ピット 5ヶ所, いずれも円形。径36~53cm, 深さ28~45cm。

南側中央のピットは規模も大きく主柱穴と比べても遜色ないが, 位置からみて入り口ピットではないかと考える。柱穴で構成される内区の面積は7.3m<sup>2</sup>である。

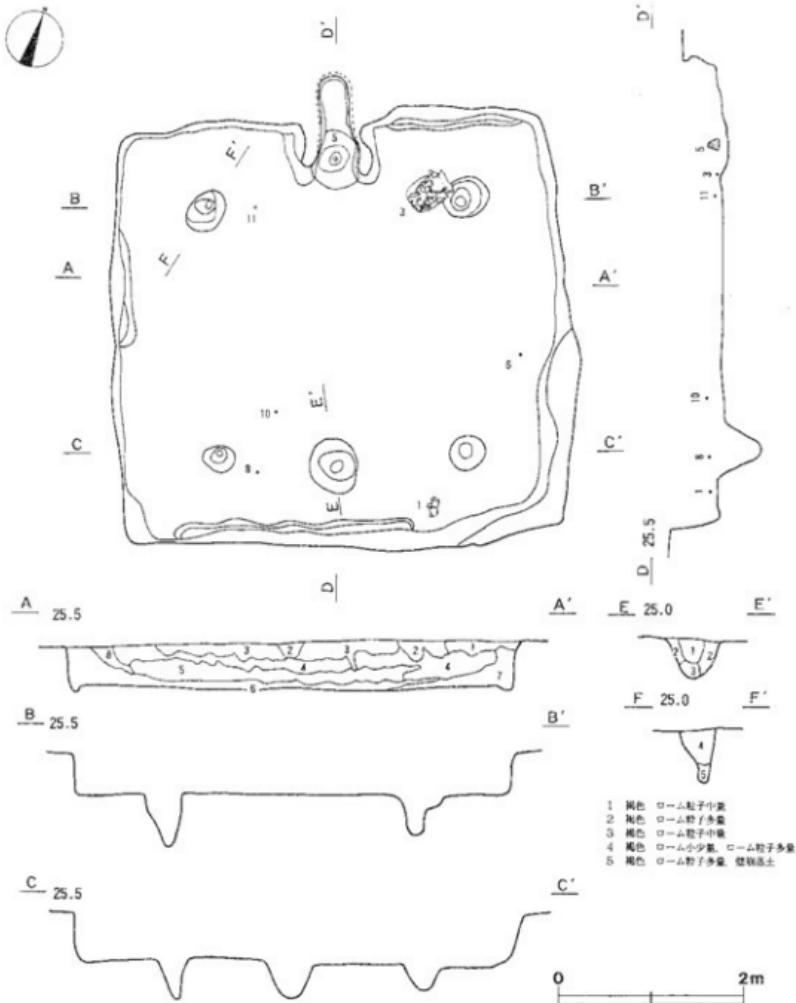
貯藏穴は検出されなかった。

竈 北壁中央部に黄灰色砂質粘土上に構築されている。全長1.2m, 残存高幅約40cm。燃焼部は不正円形に掘りくぼめられ, その径約60cm, 深さ8cm。覆土最下層は焼土や竈構築上を含まない整地層で, この上に支脚を安置している。

覆土 床上約15cmの最下層はローム酷似の土質で, 整地には厚く堆積しており, 人為的な埋め戻し層である可能性を考えている。

遺物 右外区より丸玉や上器小片が出土しているが, いずれも覆土中~下層からである。本住居に伴う遺物は, 竈解体時に安置されたと考える支脚(5)と, その時に竈からはずされ破碎されたと考える甕(3)である。

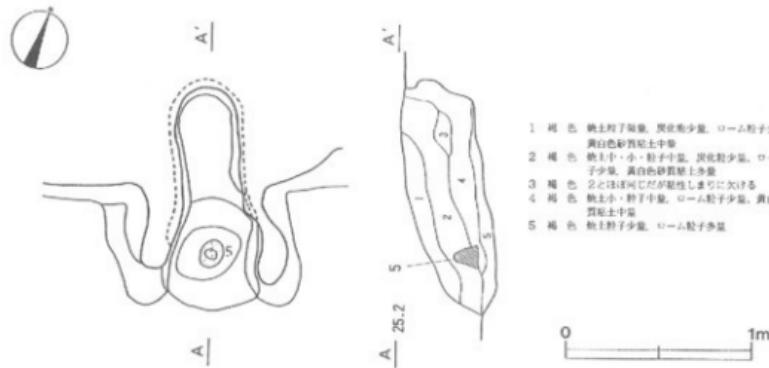
所見 覆土中遺物を総合的に判断して6世紀末から7世紀初頭の住居と考える。



1 黄色 ローム中多量、ローム粒子中量、ローム粒子少量  
 2 黄色 ローム中微量、ローム粒子多量、褐色土粒子中量  
 3 黒褐色 ローム中・粒子微量、ローム少量、黒色十ブロック中量  
 4 墓褐色 ローム中・少・粒子少量、褐色土ブロック中量

5 黑褐色 ローム中・少量、ローム粒子中量、褐色土ブロック中量  
 6 黄色 ローム中・少量、ローム粒子極めて多量  
 7 黑褐色 ローム中

8 黄色 ローム中量、ローム粒子微量

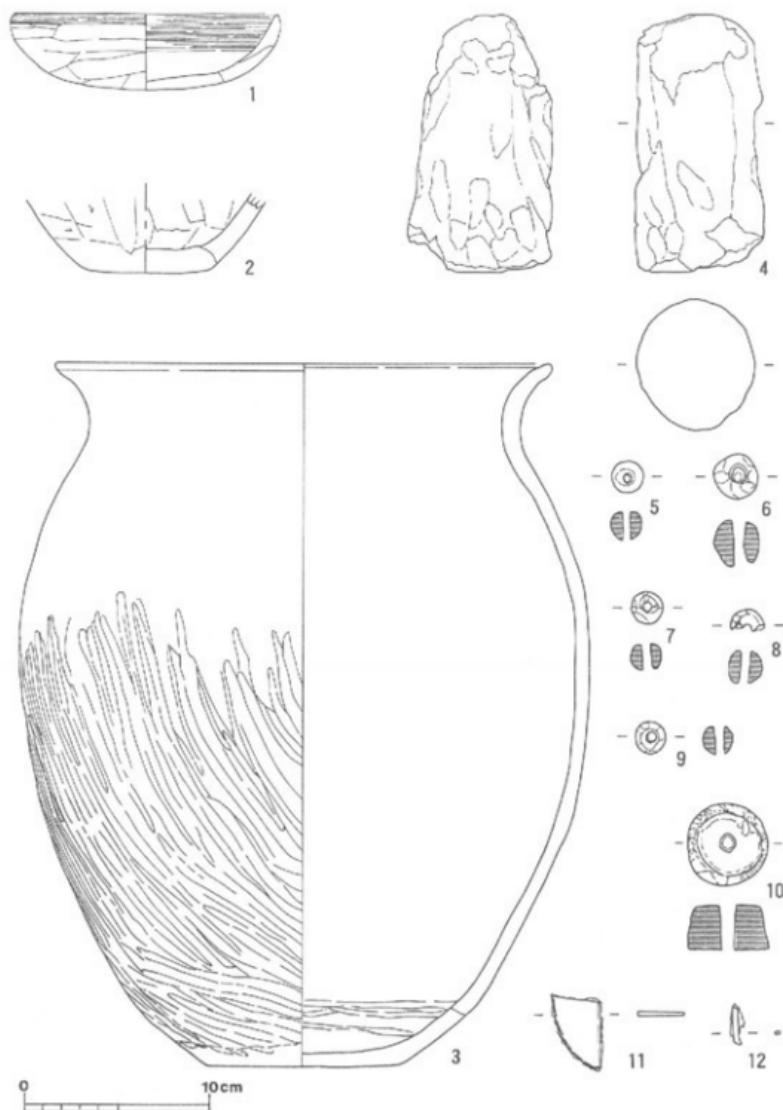


第14図 第2号住居址カマド

### 第2号住居址

調査No	器種 器形	法量	出土位置 残存率	焼成	粘土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	杯 土師器	A : (14.2) C : 4.1	覆土下位 2/3	普通	輪郭砂粒を 混含する	淡黄褐 にぼい黄褐	丸底。口縁部は短く突り気味で直立し、横 径のナデが施される。外体部へラ削り。内 面ナデ。	43
2	盤 土師器	B : (7.9) C : (3.9)	覆土 小片	良好	輪郭砂粒を 混含する	にぼい黄褐	下体部外表面のヘラ削り。内面へラナデ。 木痕痕あり	45
3	甕 土師器	A : 25.8 B : 10.3 C : 38.9	床底 2/3	良好	細砂粒・茎 母細片を含む	にぼい黄褐	平底で直腹気味。底部の屈曲はゆるやかで、 口縁部はやや磨らんでいる。腹部下部に 縱縫のミガキ。上縫部と内面ナデ。	44

調査No	種類	最大長	最大幅	重量	孔孔	出土位置	残存率	焼成	粘土	色調	備考
5	支輪	(13.9)	7.7	—	—	覆土	2/3	不良	砂粒微量	暗褐色	46
6	丸玉	1.5	1.7	4.0	0.4	覆土	完形	良好	砂粒少量	暗	47
7	丸玉	2.5	2.4	12.7	0.7	覆土	完形	普通	砂粒少量	暗	48
8	丸玉	1.4	1.7	3.5	0.5	覆土	完形	普通	砂粒少量	暗	49
9	丸玉	1.7	1.8	2.6	0.6	覆土	1/2	普通	砂粒微量	暗	50
10	丸玉	1.5	1.5	4.2	0.7	覆土	完形	良好	砂粒微量	暗	51
11	筋鉄串	2.4	4.2	49.1	0.8	床底	完形	良好	細砂粒少量	暗	52
12	不明鉄器	2.1	0.3	—	—	覆土	小片	—	—	—	333
13	不明鉄器	3.5	2.6	—	—	覆土	小片	—	—	—	53



第15図 第2号住居址出土遺物

第3号住居址 (第16・17図 PL 8・9)

位置 調査区北寄り W-9・10[他]

規模・形態 主軸長6.06m、幅6.30m 38.2m<sup>2</sup>の方形

主軸方位 N-15°-W

壁 やや外傾して立ち上がり60~68cmの高さで良好な残存状態を示す。

床 平坦で明瞭に検出された。内区ではやわらかく外区は硬化している。壁溝は東北コーナー以外の三方で検出され、深さ4~7cm、幅11~17cmの規模である。

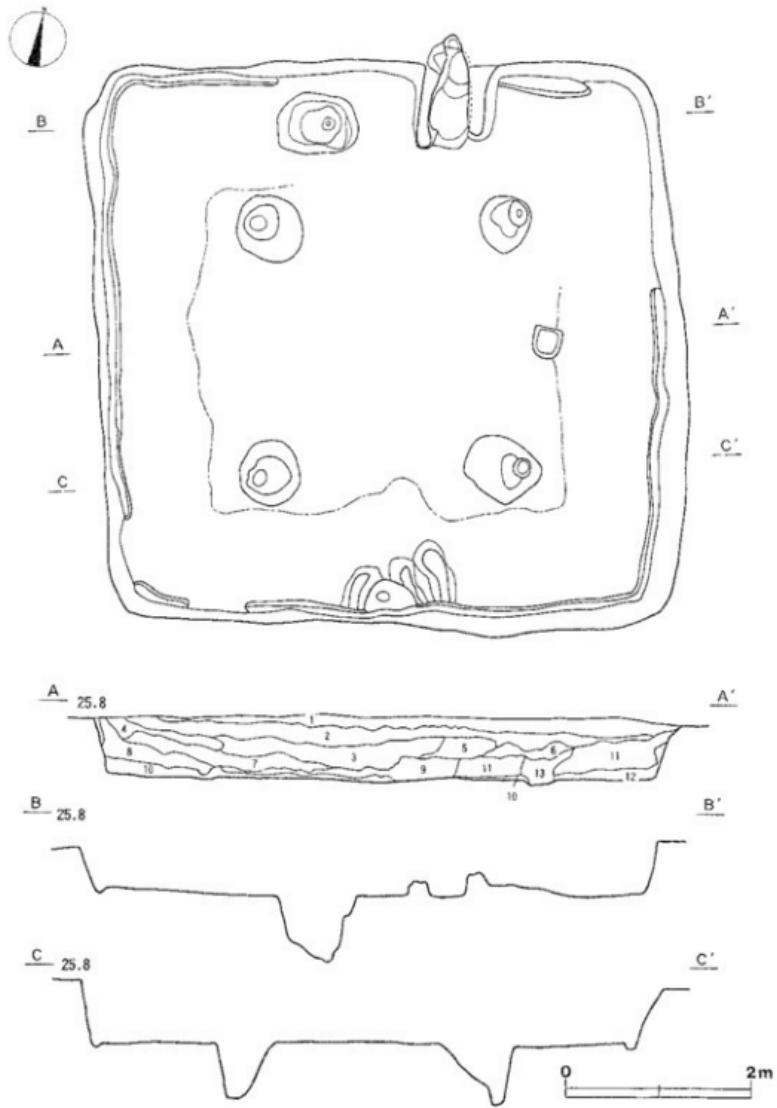
ピット 7ヶ所。主柱穴は4ヶ所でいずれも不正円形。径56~86cm、深さ53~66cm。東側主柱穴間に1個補助柱穴が検出されている。径32cm、深さ5cm。内区の面積は7.34m<sup>2</sup>。竈に対面する南壁下に設けられたものが入り口部ピットと考える。径約50cm、深さ17cm。このピットを囲むように幅狭の緩やかな高まりがみられ、東側ではこれが2重に検出されている。貯蔵穴は竈左脇に設けられ、楕円形を呈す。長軸87cm、短軸63cm、深さ72cmを測る。

竈 北壁やや東寄りに黄白色砂質粘土で構築されている。全長1.22m、残存軸部幅35cm。燃焼部は不正方形で長軸70cm、短軸40cm、深さ10cm程に掘り深められている。

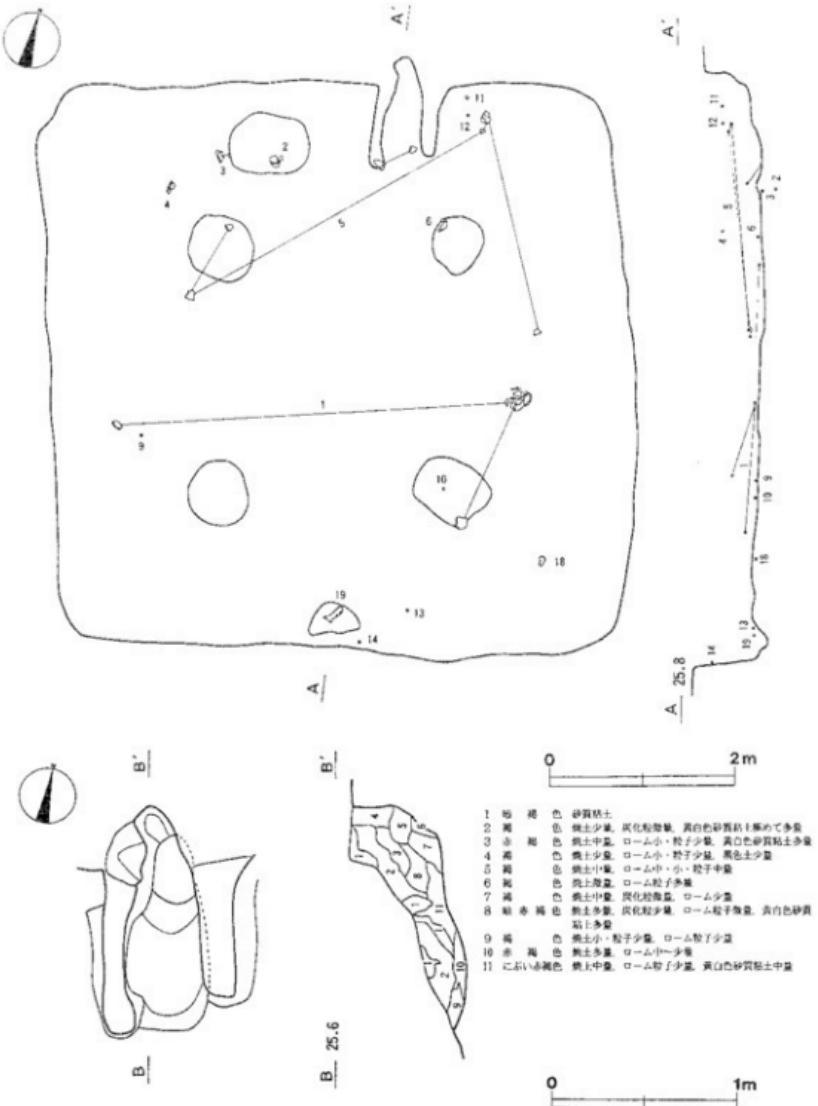
覆土 1	暗褐色土	焼土粒子微量、ロームブロック中・粒子微量、黒色土中小ブロック多量
2	極暗褐色土	焼土粒子微量、ローム粒子少量、黒色中小ブロック中量、褐色斑中量
3	黒褐色土	黒色中小ブロック微量、褐色斑中量
4	暗褐色土	ローム粒子中量、褐色斑中量
5	暗褐色土	焼土粒子微量、ロームブロック小・粒子少量、褐色斑中量
6	暗褐色土	ロームブロック小中量、ローム粒子少量、褐色斑多量
7	暗褐色土	焼土粒子微量、ローム粒子少量、褐色斑中量
8	暗褐色土	ロームブロック大微量、ローム粒子中量
9	暗褐色土	炭化粒子少量、ローム粒子中量、褐色斑中量
10	褐色土	ローム粒子多量
11	褐色土	炭化粒少量、ロームブロック小・粒子中量
12	褐色土	ローム粒子中量
13	暗褐色土	ローム粒子中量
14	褐色土	褐色斑多量

遺物 土製丸玉を含む遺物小片が散見される。本住居に伴うものとしては貯蔵穴脇から出土した杯(3)、貯蔵穴がほとんど埋められてからの儀礼に使用したと推察する穿孔のある杯(2)、床上の砥石(18・19)などである。

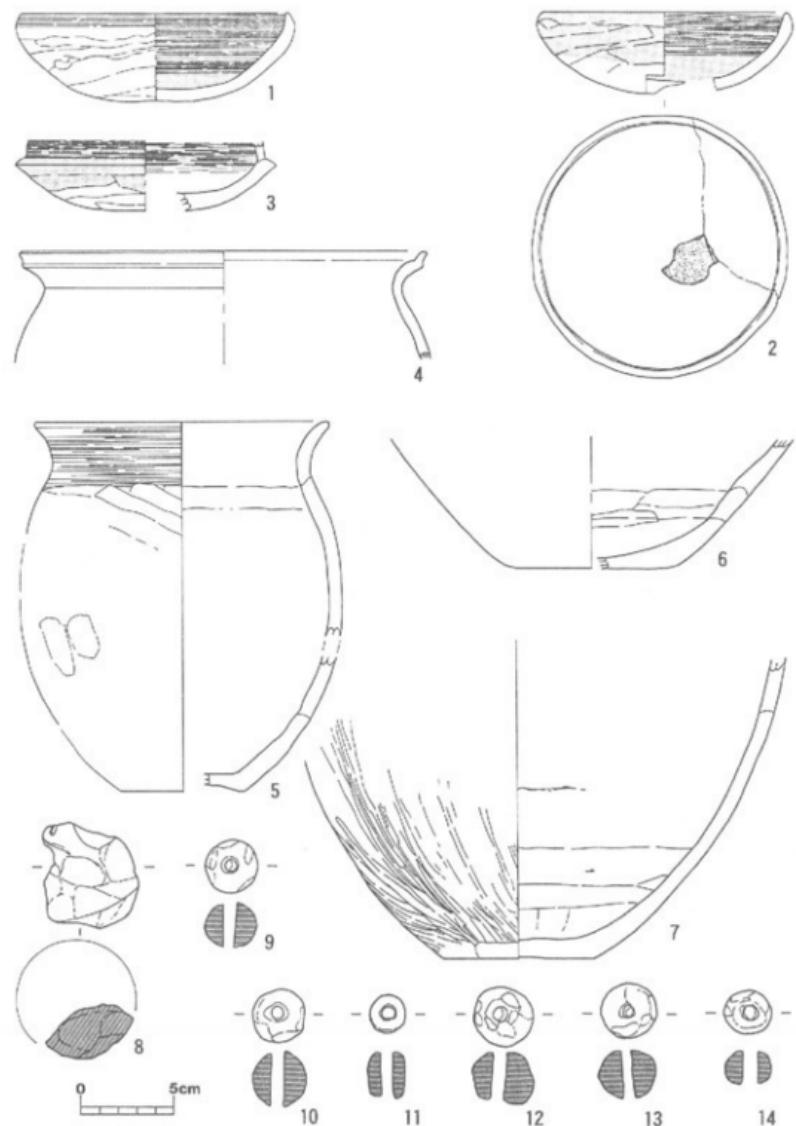
所見 出土遺物より7世紀前半の住居と考える。



第16図 第3号住居址発掘



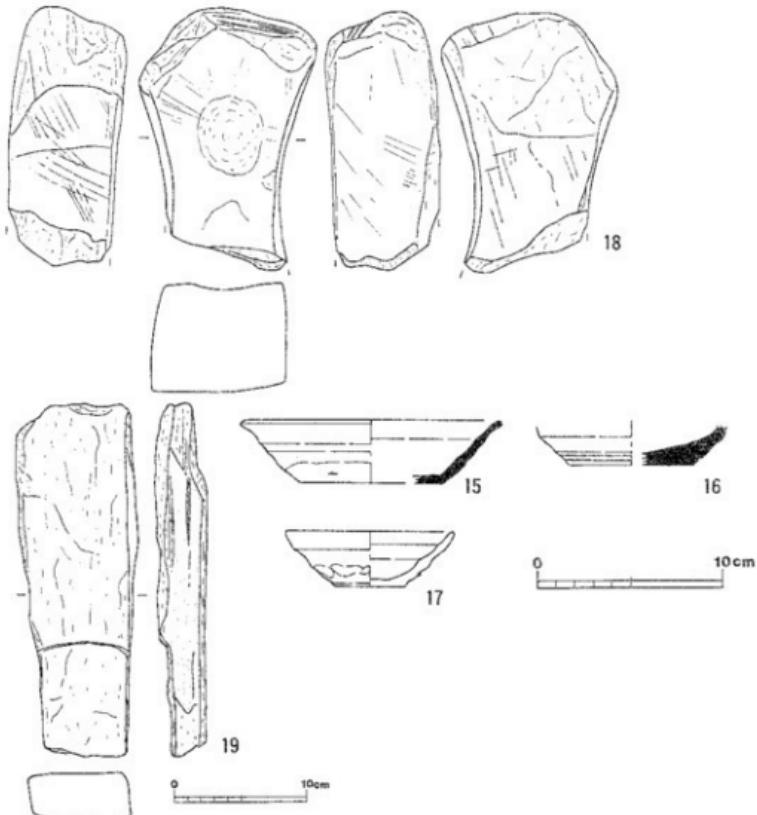
第17図 第3号住居址遺物出土。カマド



第18図 第3号住居址出土遺物(1)

第3号住居址

因数名	器種 形態	法集	出土位置 残存率	地成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	杯 上部器	A : (11.4) C : 4.7	櫛下位 1/3	良好	粗砂粒を 微細含む	にほい褐色	丸底。口縁部は強く尖り気味に内凹し、内外に横條のナデが施される。外体部へラナデ。内面小字。	内側浅仕上げか 54
2	杯 上部器	A : 13.1 C : 4.4	穿穴覆 土 完形	良好	細砂粒を微 量含む	黒褐色	丸底。口縁部は強く尖り気味に内凹し、内外に横條のナデが施される。外体部へラナデ。内面小字。	内外に溝斜 燒成後穿孔し遺 留。内一式 35
3	杯 土師器	C : (3.7)	床直 1/3	普通	粗砂粒を 微量含む	黒褐色 にほい黄褐色	丸底。口縁部は内傾し、内外共ナデ。体部はケズリ。両者の地の模は仄くやや下がり気味。底部は尖る。	口縁部付近の内 外に墨形 (焼仕上げ) 36
4	表 上部器	A : (22.0) C : (5.7)	櫛上位 小片	良好	石英・長石 雲母片を多 量に含む	棕 にほい褐色	外面丁寧なナデ。	61



第19図 第3号住居址出土遺物(2)

回収No	器種 器形	法量	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
5	甕 土瓶	A : 15.8 B : (6.6) C : 19.9	腹上中位 2/3	普通	砂板を多量 に含む	明赤褐色	底部は土げ放氣味。胴部ナデと強なミガキ は縁部内外に複数のナデ。表面で底部の施 工はゆるく、口縁部は丸い。	腹部下位に灰化 物付着
6	甕 土瓶器	B : (9.2) C : (7.0)	底部 小片	普通	砂板を多量 に含む	明赤褐色	内外面ナデ。	60
7	甕 土瓶器	B : 8.0 C : (16.1)	腹上位 1/3	普通	石英、長石 雲母細片を 多量に含む	明赤褐色	平底。外面縦位の稍かいヘラミガキ。内面 標位のヘラ削り及びナデ。	焼上多発に付着 カマドに使用か 63
15	杯 紙漉器	A : (14.2) B : (7.8) C : 3.4	腹上 1/2	普通	石英、長石 大粒を多量 に含む	灰	底部削刃手持ちへラ削り。 口縁部は外反気味。	59
16	高台付 紙漉器	C : (1.7)	腹上 小片	良好	石英、長石 小粒を少量 含む	灰黃褐色 褐灰	底部最下端に二条の沈線がめぐりこれが高 台接合部である。底部へラ切り後軽いナデ。	58
17	杯 土瓶器	A : (9.2) B : (4.0) C : 3.0	腹上 1/3	普通	黑色細颗粒 若干含む	橙	内外面にロクロナデ。 底部角切りの後ナデ。	57

回収No	種類	最大長	最大幅	重量	孔径	出土位置	残存率	焼成	胎土	色調	備考
8	支脚	(5.3)	(6.4)			遺構上	小片	普通	砂板多量	塵	61
9	丸玉	2.5	2.0	10	0.7	墻土	完形	良好	砂板微量	にほい緑	66
10	丸玉	2.4	2.8	18.7	0.7	床底	丸形	普通	砂板少量	にほい緑	67
11	丸玉	2.9	2.8	22.5	0.6	床底	完形	良好	砂板微量	にほい黄緑	65
12	丸玉	2.8	3.3	27	0.8	廻土	完形	普通	砂板多量	にほい黄緑	68
13	丸玉	2.5	3.0	21.5	0.5	床底	完形	良好	砂板少量	にほい黄緑	69
14	丸玉	1.8	2.5	9.6	0.8	住居壁際	完形	良好	芸母微量	にほい黄緑	70

#### 第4号住居址 (第20~22図 PL10・11)

位置 調査区北寄り W-11, X-10・11区

規模・形態 主軸長4.2m, 幅4.1m 17.2m<sup>2</sup>の方形

主軸方位 S-16°-W

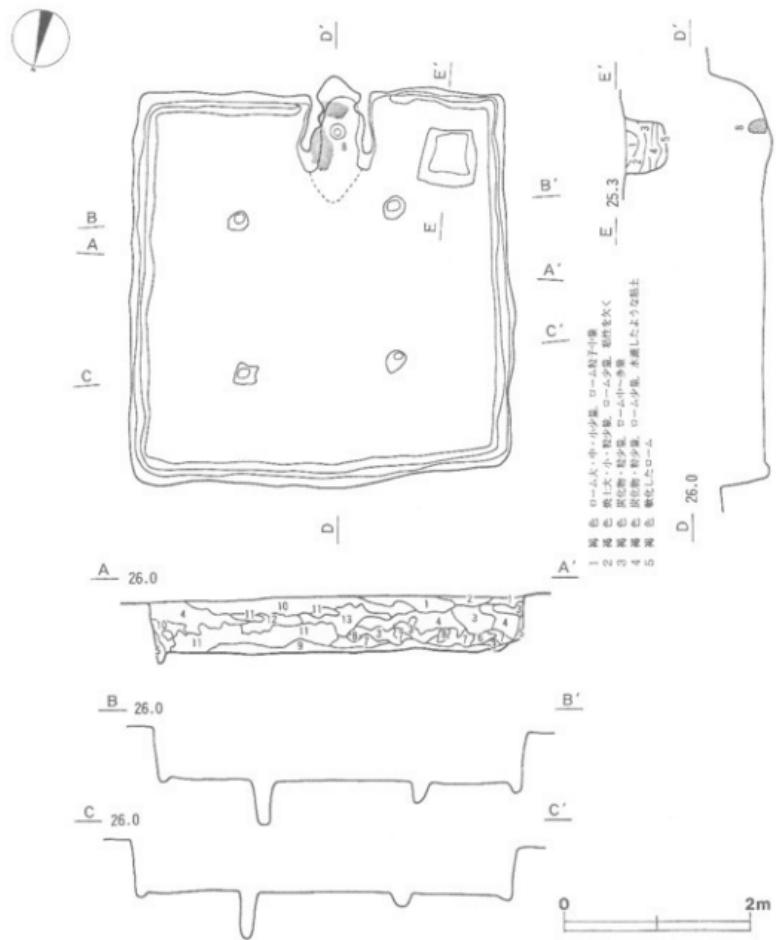
壁 垂直に立ち上がり, 高さ50~57cm

床 平坦で明瞭に検出された。壁溝は全周し幅10~20cm, 深さ5~12cm

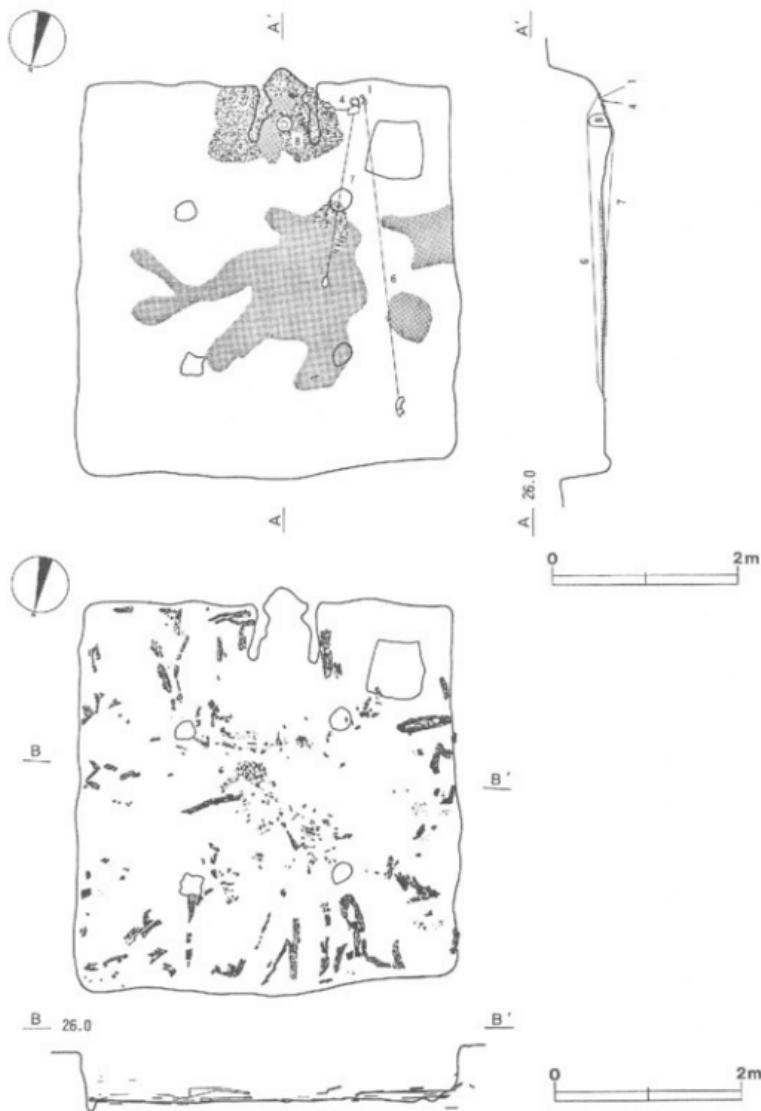
ピット 5ヶ所。内4個は主柱穴で小型・円形。径20~25cm, 深さは東西で顕著な相違があり, 西側2個は48~52cmと深く, 東側は15~25cmと浅い。内区の面積は2.9m<sup>2</sup>。

入り口部ピットは検出されなかった。貯藏穴は竈脇に構築されており, 58×60cmの方形で, 深さ47cm。垂直に立ち上がり良好な残存状態である。最下層は水滲したような質感のしまりの強い粘土上。

竈 当遺跡内で唯一南壁に構築されている。黄白色砂質粘土使用。全長約1.4m, 残存抽幅42cm, 燃焼部に良好な焼土層は見られず, 粘土混じりの灰屑中に土製支脚が正立して残されている。



第20図 第4号住居址発掘

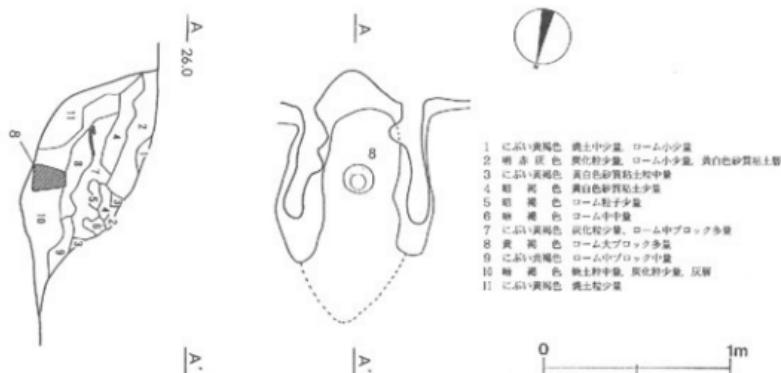


第21図 第4号住居址遺物出土状況

**覆土** 中央部床上に4~5cmにわたって焼土の堆積がみられる。また垂木と見られる炭化材が放射状に検出され、埋土のはほとんどはロームブロックを多量に含む人為堆積土である。上屋焼却後時間を見かず埋め戻したものと解釈できる。

**遺物** 床上に土器小片を少量検出したのみである。

**所見** 日常用什器を取り出した後の意図的な放火をおこなっている。出土遺物が少ないが、杯(1)は小型化しており7世紀前半以降の住居と考える。

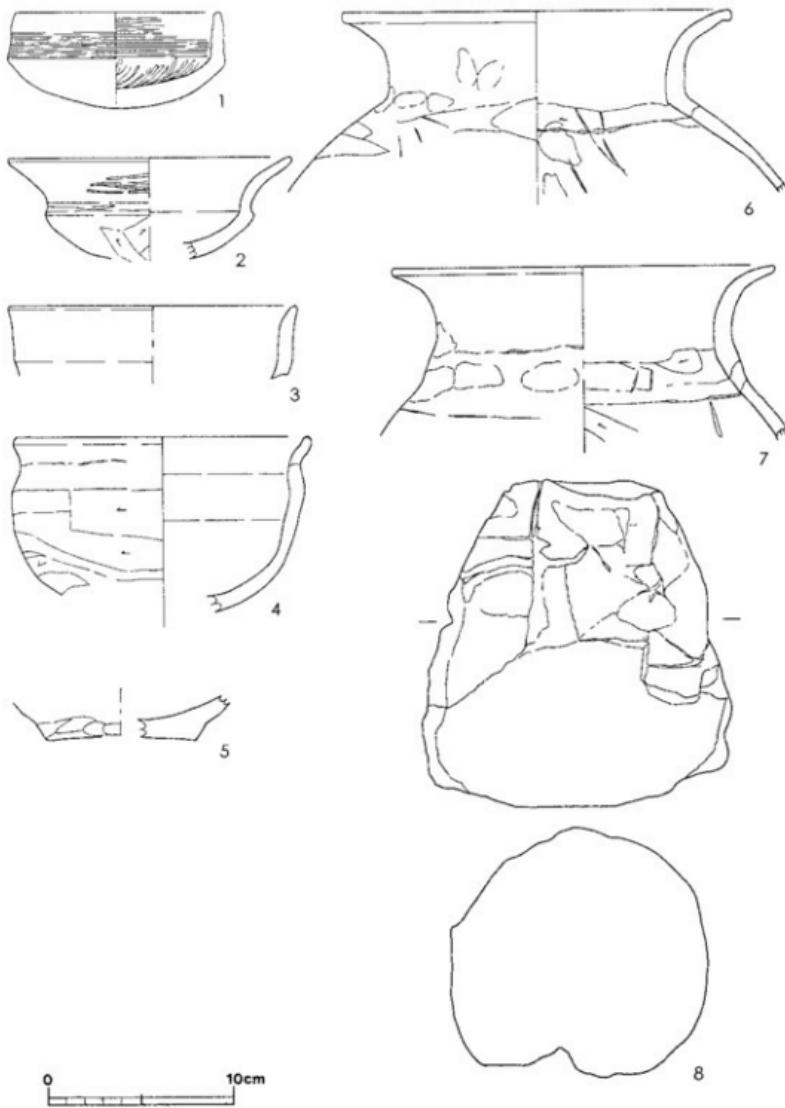


第22図 第4号住居址カマド

#### 第4号住居址

団体No	器種 器形	法性	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	甕 土師器	A:10.8 C:5.2	カマド輪 床底 完形	良好	石英・長石 大粒を多量 に含む	褐	口縁部は直立し、ナデとミガキ。 体部はケズリの後ミガキ状のナデ。内者の 境は甘く丸みを帯びる。内面へラナデ。	72
2	甕 土師器	A:(15.2) C:(5.4)	覆土 小片	普通	石英・長石 小粒を多量 に含む	褐	口縁部は直立し、外表面のナデ、ミガ キ内面丁寧なナデ。境は後は明瞭で、体部 外表面にはヘラナデの痕を残す。	71
3	甕 土師器	A:(15.6) C:(3.7)	カマド輪 床底 小片	不良	板硝砂喰を 多量に含む	赤褐	口縁部は失り気味で僅かに外反。 内外ともナデ。	73
4	甕 土師器	A:16.0 C:(9.4)	カマド輪 床底 2/3	普通	石英・長石 板硝砂喰を多 量に含む	赤褐 明赤褐	口縁部外反しナデ、覆土を僅かにつまみ上 げる。体部はケズリ、内者の境にかすかな 痕が見られる。内面へラナデ。	74
5	甕 土師器	B:8.0 C:(2.0)	覆土 瓶頭小片	普通	石英・長石 大粒を多量 に含む	褐 黄褐	底部を指頭圧痕で明瞭に形成し、瓶頭は斜 傾のミガキの痕跡あり。内面丁寧なナデ。	75
6	甕 土師器	A:(21.0) C:(9.6)	床底 口縫部 1/2	良好	石英・長石 小粒を多量 に含む	に赤褐色	口縫部は最初直立して外側する。窓部 は丸くふくらます。瓶頭はヘラナデし、口 縫部との境にはつくりした変化点を持つ。	77
7	甕 土師器	A:(20.6) C:(9.0)	床底 口縫部 1/3	普通	石英・長石 大粒を多量に含む	明褐 に赤褐色	口縫部は丸くゆるやかに屈曲する。窓部内 面にヘラナデ。	76

団体No	種類	最大長	最大幅	重量	孔径	出土位置	残存率	焼成	胎土	色調	備考
8	支脚	17.6	13.8	—	—	竪床直	完形	不良	極細沙粒	に赤褐色	78



第23図 第4号住居址出土遺物

第5号住居址 (第24・25図 PL12・13)

位置 調査区北寄り X-13・14, Y-13・14区 第6号住居址と重複しており本住居が新しい。

規模・形態 主軸長5.06m, 幅4.98m 25.2m<sup>2</sup>の方形

主軸方位 N-44°-E

壁 西壁一辺と北壁半分がやや崩れているが、おおむね垂直に立ち上がり、その高さは30~60cm。

床 平坦で明瞭に検出された。壁溝は全周し幅12~16cm, 深さ8~10cmで残りが良い。

ピット 6ヶ所。主柱穴は4ヶ所で径50~72cm, 深さ27~34cm。これに囲まれる内区の面積は6.75m<sup>2</sup>で、このほぼ中央に補助柱穴と考えるピットが1個ある。径40cm, 深さ5cm余りである。竈と対面する側の主柱穴間には、径45cm, 深さ20cmの規模のピットが検出され、その位置から入り口部ピットと考える。貯蔵穴は検出されなかった。

竈 黄白色砂質粘土を使用して北壁に構築されている。全長1.7m, 残存袖部幅35cm, 燃焼部は梢円形に浅く掘り進められ、最深部で3cmほどの深さがある。竈底面には明瞭な焼土層が確認されず、一度きれいにさらわれたものと考える。竈窓がはずされていることなどからみても竈は人为的に解体され、その時に内部に落ち込んだと見られる構築土(天井部か)の堆積がある。

覆土 1 7.5YR 2/1 黒色 粘性のないさらさらの上

2 7.5YR 4/2 灰褐色 ロームブロック中・小を多量に含む

3 7.5YR 3/1 黒褐色 ロームブロック中を多量に含む

4 7.5YR 5/6 明褐色 ロームブロック中・小を多量に含む

5 7.5YR 4/3 暗褐色 ロームブロック小を多量に含む

6 7.5YR 5/3 にぶい褐色 ロームブロック中・小・粒子を多量に含む

7 7.5YR 4/1 暗灰色 8 7.5YR 4/2 灰褐色

9 7.5YR 5/3 にぶい褐色 ロームブロック小を多量に含む

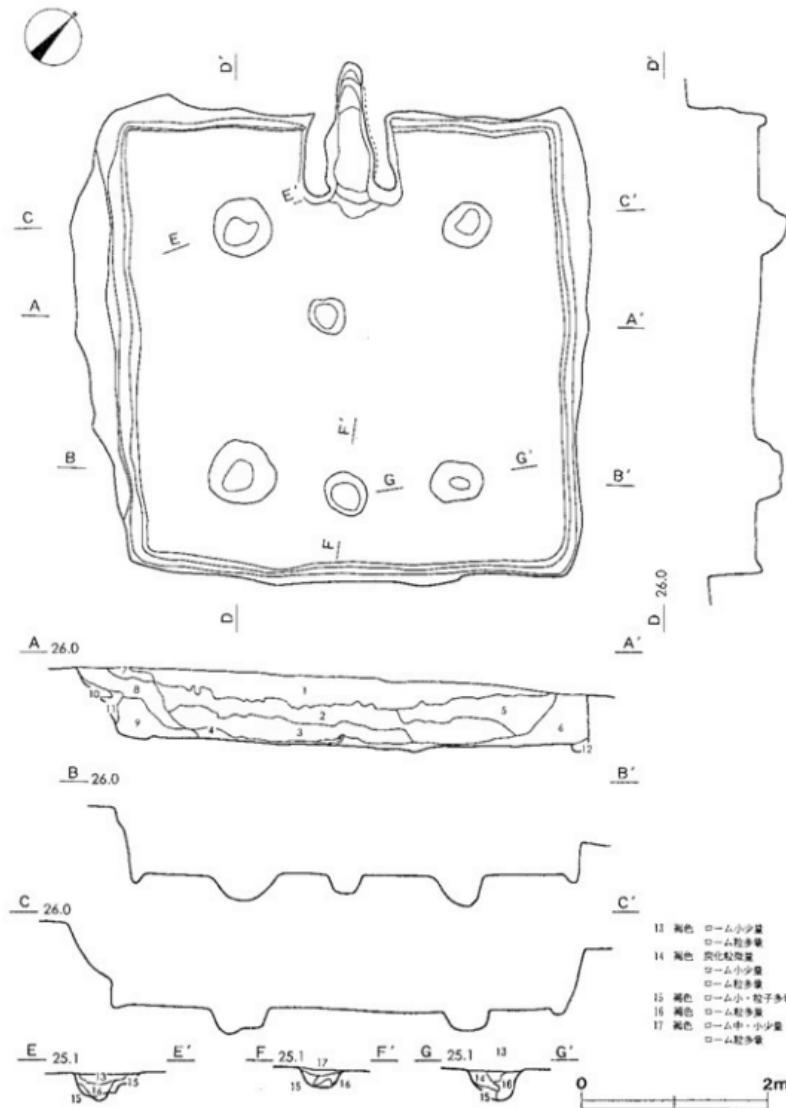
10 7.5YR 4/2 灰褐色

11 7.5YR 5/3 にぶい褐色

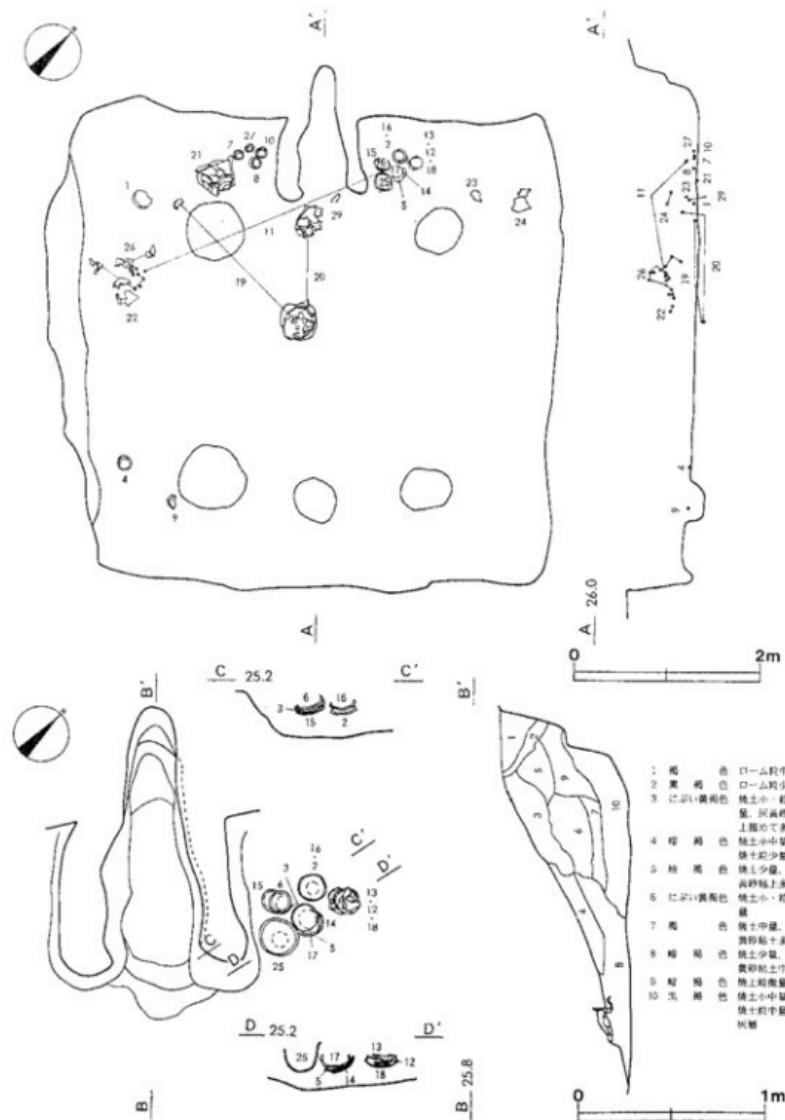
12 7.5YR 5/4 にぶい褐色 壁溝埋土

遺物 竈脇より16枚の重なりあった大小杯(2・3・5・6・7・8・10・12・13・14・15・16・17・18・25・27)と瓶(21), 炊き口より甕(20)と支脚(29), 内区中央部に穿孔された甕(19), 外区西側より杯(1・4・9)がいずれも床上から検出され、すべて当住居に伴う遺物と考える。なお、床から30cmあまり浮いて6個の土製丸玉がまとまって出土している。

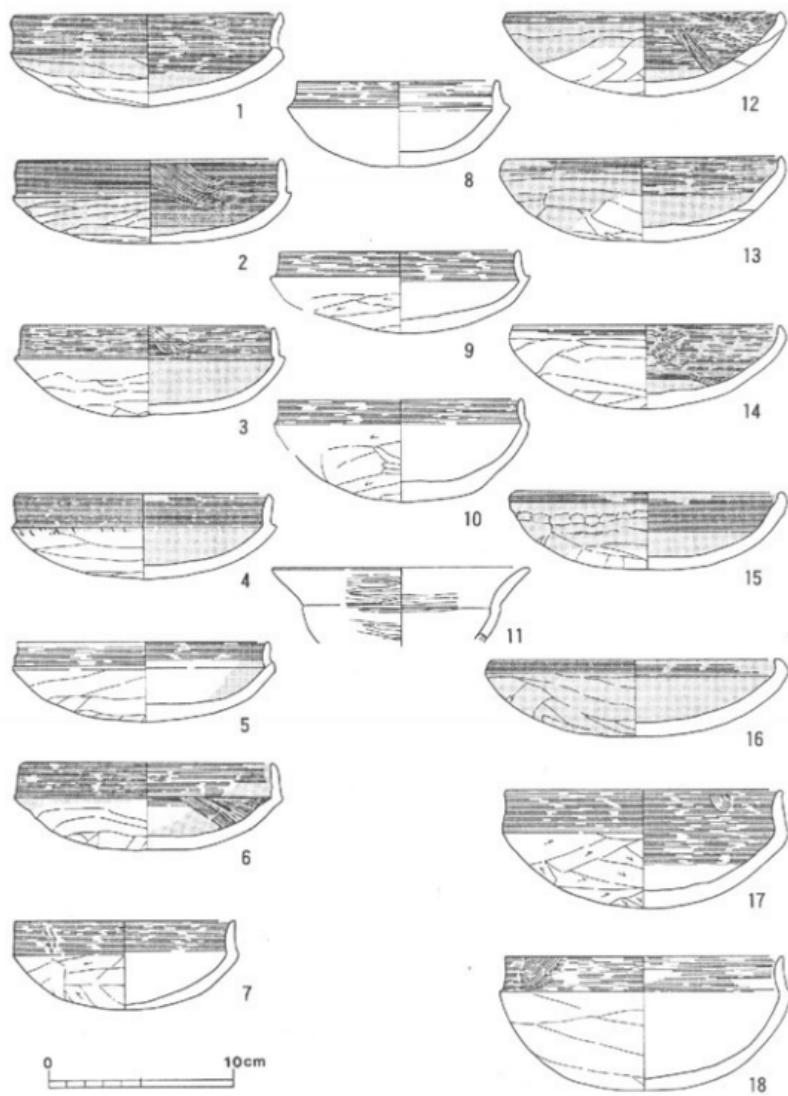
所見 出土遺物から6世紀後半の住居と考える。



第24図 第5号住居址完掘



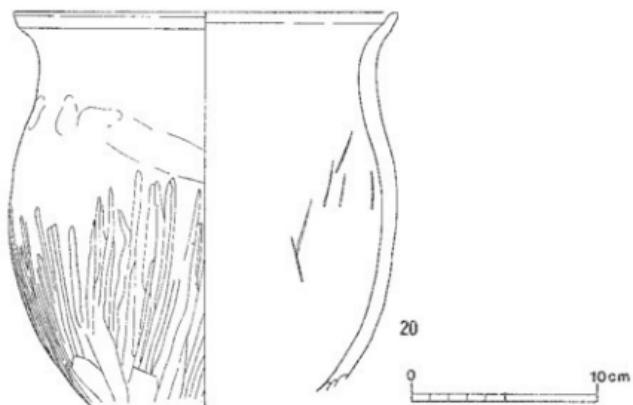
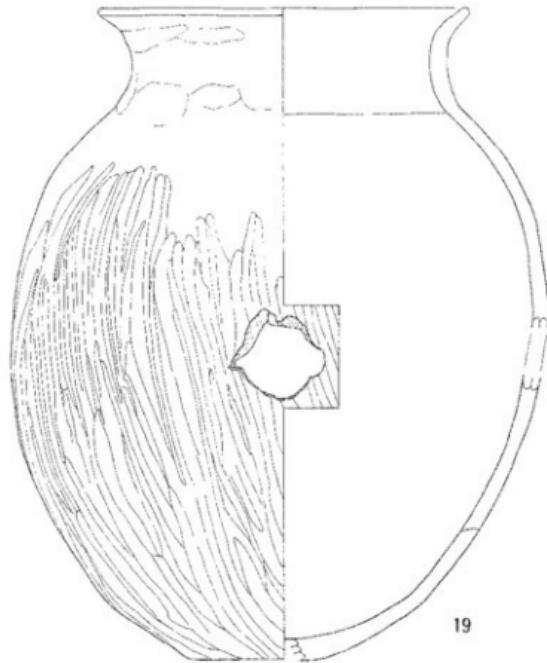
第25図 第5号住居址遺物出土状況・カマド



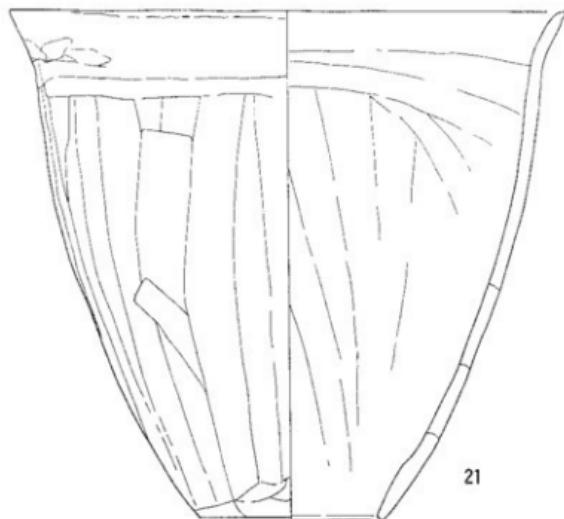
第26図 第5号住居址出土遺物(1)

## 第5号住居址

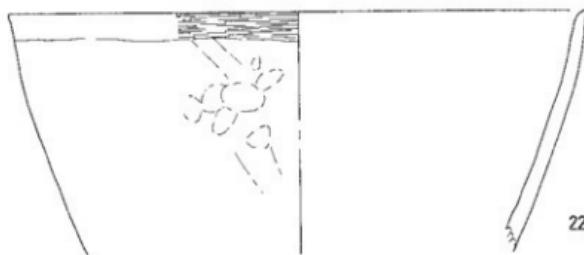
遺跡名	器種 器形	法量	出土位置 検査序号	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1 移 土師器	A : 14.1 C : 5.0		撲土下位 2/3	良好 砂粒殆ど目立たない	墨		口縁部は直立し、端部で内凹する。内外ともにナデ。外体部はケズリ。両者の境の棗は明瞭で角張っている。	内面と外口縁付 近墨彩 (鑄仕上げ) 93
2 移 土師器	A : 14.3 C : 4.5	カマド鍋 一括資料 完形	良好	砂粒殆ど目立たない	墨		口縁部は直立し、端部で僅かに内凹する。内外ともにナデ。外体部はケズリ。両者の境の棗は明瞭で角張っている。	内面共に墨彩 (焼仕上げ) 84
3 移 土師器	A : 13.6 C : 4.9	カマド鍋 一括資料 完形	良好	砂粒殆ど目立たない	墨		口縁部は直立し、端部で僅かに内凹する。内外ともにナデ。外体部はケズリ。両者の境の棗は明瞭で丁寧に造り込まれている。	内面と外口縁から上方を墨彩 (焼仕上げ) 92
4 移 土師器	A : 13.4 C : 4.6	底直 光沢	良好	砂陶粒を少々含む	灰褐色 墨褐色		口縁部は直立し、端部で僅かに内凹する。内外ともにナデ。外体部はケズリ。両者の境の棗は明瞭で角張っている。	内面と外口縁から上方を墨彩 (焼仕上げ) 89
5 移 土師器	A : 13.4 C : 4.3	カマド鍋 一括資料 2/3	良好	砂陶粒を少々含む	明黄褐色		口縁部は短く直立し、内外共にナデ。外体部はケズリ。両者の境の棗は明瞭で、角張っている。(鑄仕上げ)	内面墨彩、半手 上部削除、外面 にも墨彩跡。 95
6 移 土師器	B : 13.8 C : 4.6	カマド鍋 一括資料 完形	良好	砂粒殆ど目立たない	明褐紅 底白		口縫部は内燃氣味で、内外共にナデ。外体部はケズリの後ハラナデ。両者の境の棗は明瞭で、丁寧に造られる。(焼仕上げ)	内面と外口縁から上方を墨彩、 半分ほど削除 83
7 移 土師器	A : 11.8 C : 4.8	カマド鍋 一括資料 完形	良好	陶器粒を多量に含む	にぼい黃褐		小型。口縁部は直立して、内外共に丁寧なナデ。外体部は削除。両者の境の棗は明瞭でく尖っている。	
8 移 土師器	A : 11.0 C : 4.6	カマド鍋 一括資料 完形	良好	陶器粒を多量に含む	灰黃褐色 にぼい黃褐		小型。口縫部は短く内傾し、内外ともにナデ。外体部は削除。両者の境の棗は明瞭で、粗く尖っている。	
9 移 土師器	A : (13.0) C : 4.4	底直 1/2	良好	陶器粒を多量に含む	にぼい黃褐		口縫部は短く内傾し、内外ともにナデ。外体部は削除。両者の境の棗は明瞭で、粗く尖っている。	
10 移 土師器	A : (13.2) C : 5.5	カマド鍋 一括資料 2/3	普通	陶器粒を多量に含む	棕		口縫部は短く直立し、内外ともにナデ。外体部は削除。両者の境の棗は明瞭で、粗く尖っている。表面がやや歪めて丸みをおびる。	
11 移 土師器	A : (14.0) C : (4.1)	裏土中位 1/1縫部 2/3	普通 特殊土質少 量含む	石英・長石 特殊土質少 量含む	深		口縫部は反し内外共に擦れのミガキ。体部との境の棗は甘い。	内外ともに墨彩 86
12 移 土師器	A : 14.7 C : 4.5	カマド鍋 一括資料 1/2完形	良好	砂粒殆ど目立たない	墨		口縫部は短く短く内傾し、端部は突起氣味。内外共に丁寧なナデ。外体部はハラナデ。両者の境の棗は明瞭でない。	内面と外面上 体部に墨彩 (焼仕上げ) 80
13 移 土師器	A : 15.0 C : 4.5	カマド鍋 一括資料 1/2完形	良好	砂粒殆ど目立たない	墨		口縫部は短く短く内傾し端部は突起氣味。内外共に丁寧なナデ。外体部はミガキ状のハラナデ。両者の境の棗は明瞭でない。	内面と外面上 体部に墨彩 (焼仕上げ) 81
14 移 土師器	A : 14.4 C : 4.5	カマド鍋 一括資料 完形	良好	砂粒殆ど目立たない	にぼい黃褐 黒		口縫部は短く内傾し端部は突起氣味。内外共に丁寧なナデ。外体部はミガキ状のハラナデ。両者の境の棗は明瞭でない。	内面墨彩 82
15 移 土師器	A : 14.4 C : 4.2	カマド鍋 一括資料 ほぼ完形	普通	砂粒殆ど目立たない	灰白 墨		口縫部は短く短く内傾し端部は突起氣味。内外共に丁寧なナデ。外体部はミガキ状のハラナデ。内面の境の棗は明瞭でない。	内面と外口縁付 近墨彩 (焼仕上げ) 94
16 移 土師器	A : 15.6 C : 4.1	カマド鍋 一括資料 ほぼ完形	普通	砂粒殆ど目立たない	灰白		口縫部は短く短く内傾し端部は突起氣味。内外共に丁寧なナデ。外体部はミガキ状のハラナデ。両者の境の棗は明瞭でない。	内面共に墨彩 があるが削除 90
17 移 土師器	A : 14.7 C : 6.3	カマド鍋 一括資料 完形	良好	陶器粒を少 量含む	棕		口縫部は直立し端部で僅かに外反する。内外ともにナデ。体部はケズリで、両者の境に浅い凹痕が有るが棗は明瞭でない。	
18 移 土師器	A : 14.8 C : 7.2	カマド鍋 一括資料 完形	良好	陶器粒を多 量に含む	明黄褐色 にぼい黄		口縫部は内燃氣味で内外共に丁寧なナデ。外体部はケズリ。両者の境に明瞭な棗を有す。若尚が高。	
19 黒 土師器	A : 20.0 B : (6.9) C : 28.8	底直 1/2	良好	陶器粒を多 量に含む	灰赤褐色 にぼい黃		平底で長脚氣味。底部の脚部はゆるやかで口縫部は側面に削除され平ら。脚部大半に縫合のミガキ。内面は丁寧なナデ。	脚部中央に焼成 後穿孔外・内 101
20 黒 土師器	A : 20.8 C : (21.2)	底直 2/3	良好	砂粒・雲母 陶器粒少 量含む	にぼい褐 明褐色		底部欠損。脚部は長脚氣味で脚部の脚部は短く、口縫部はつまみ上げられる。脚部下平底位のミガキ。内面ヘラナデ・ナデ。	



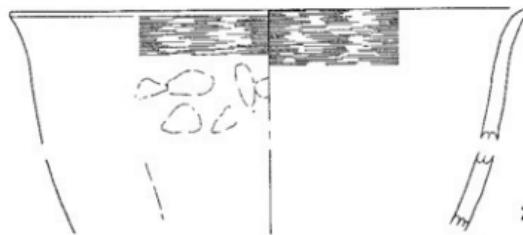
第27图 第5号住居址出土遗物(2)



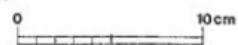
21



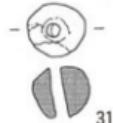
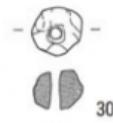
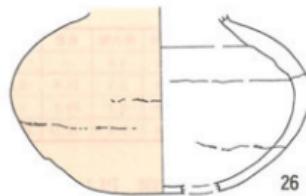
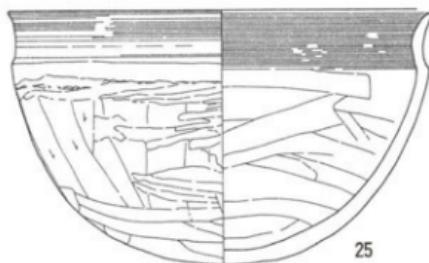
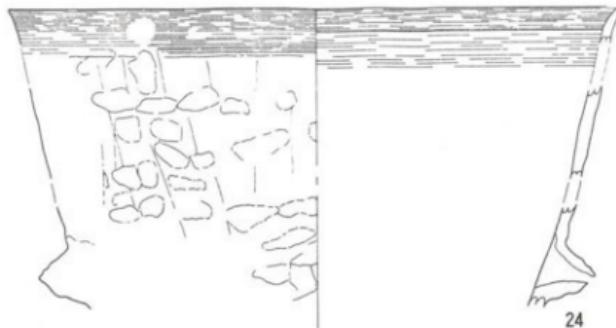
22



23



第28図 第5号住居址出土遺物(3)



第29図 第5号住居址出土遺物(4)

調査No	部材番号	法量	出土位置 残存率	焼成	粘土	色調	基形・技法の特徴		備考
							基形	技法	
21	壁 土陣器	A : 30.0 B : 9.9 C : 28.3	カマド馬 一括資料 は17形	良好	砂利少 量合む	明黄褐 黄橙	無底型。底部はストレートに外側し、口縁で再構成して、底部は肥厚し丸められる。 脚部組立のケツリ。直脚・内面ナナ。		106
22	壁 土陣器	A : (31.0) C : (12.0)	壁上中位 1段脚小 片	普通	砂利砂被を 少量含む	明黄褐 明褐	体部は直に外傾し、口縁は數ナナでつまみ上げられる。外面ヘラナナ・ナナ。内面丁字ナナ。		105
23	壁 土陣器	A : (28.0) C : (12.0)	壁上中位 1段脚小 片	良好	砂粒殆ど目 立たない	橙	体部はほぼ直に外傾し口縁部はわずかに外反。外反部分は横位のナナ。目下指痕有 りとヘラナナ。内面丁字ナナ。		103
24	壁 土陣器	A : (33.2) C : (16.1)	壁上中位 1/3	良好	苔青均質・ 施御砂被を 少量含む	明赤褐	体部はゆるやかに内傾して立ち上がり。口 縁でケツリ砂被につまみ出される。外面裏面 のナナが後ナナ。内面丁字ナナ。	側部中位に中空 の指手が一対贴 り付けられる	164
25	鉢 土陣器	A : 23.3 C : 13.7	カマド馬 一括資料 完形	良好	砂利殆ど目 立たない	塵 にほい橙	口縁に僅かに外反し、底部は丸く納められ る。内外ともにナナ。体部組立のケツリの 後構立のミガキ。縁に目立つ變形有。丸脚。		97
26	蓋 土陣器	C : (9.8)	壁上中位 2/3	普通	砂粒殆ど目 立たない	明赤褐	體部は最大径が体部1/2又上方にあり、そ の間に疊状を呈す。外縁ケツリの該点彰。 ミガキ。倒し殆ど剥離している。	側部以上が欠損 外側部足跡	102
27	手縫ね 土陣器	A : 9.6 B : 7.0 C : 4.5	カマド馬・ 一括資料 完形	普通	砂粒殆ど目 立たない	黄褐	小型箱型。底部は平底でヘタ切り。口縁内 外にナナしているが、体部は接合器と指組压 痕をほっきり残す。		96
28	壁 土陣器	B : (12.0) C : (1.2)	壁上 1段脚小片	普通 石塊・ 瓦片	石塊を多量 に含む	にほい橙 浅黄	内面ヘラナナおよびナナ。外面剥離。		100

調査No	種類	最大長	最大幅	遺存率	孔径	出土位置 残存率	焼成	釉上	色調	備考
29	支脚	11.0	5.0	—	—	窓袖壁 完形	普通	砂粒極少量	明赤褐	高脚軽用 334
30	丸長	2.0	2.7	15.8	0.6	覆土 完形	普通	砂粒極少量	橙	335
31	丸玉	2.8	3.1	23.3	7.0	覆土 完形	普通	砂粒極少量	橙	336
32	丸玉	2.4	2.6	(7.1)	(0.6)	覆土 1/2 普通	砂粒極少量	にほい橙		337

### 第6号住居址 (第30図 PL14・15)

位置 調査区北寄り。X-13・14、Y-13・14区。第5号住居址と切り合い関係にあり当住居が古い。

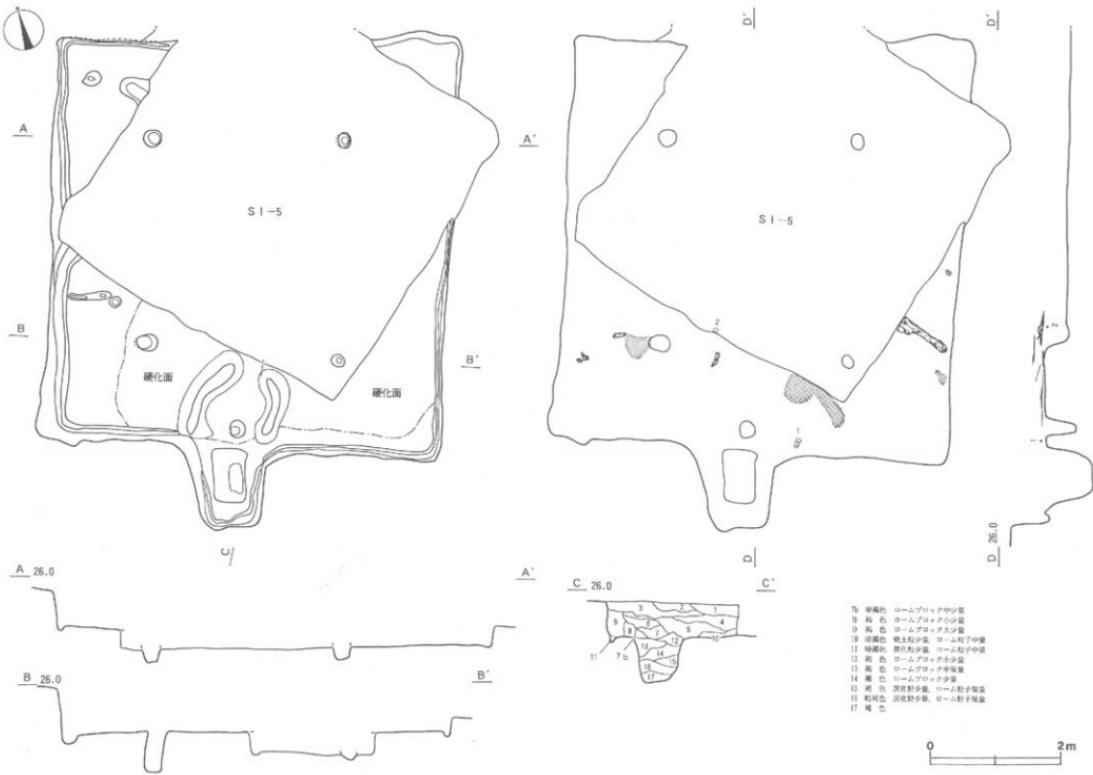
規模・形態 復元主軸長7.78m(張り出し部を含む)、幅6.12mの方形で、南辺に短冊形の張り出し部を持つ。総面積38.3m<sup>2</sup>。

主軸方位 N-18°-E

壁 残存部から判断すると高さ74cm余りではほぼ垂直に立ち上がる。

床 内区と北・東外区は第5号住居址に切られているため状況は不明だが、残存部では平坦で明瞭に検出された。入り口部を含む南・東側外区床は硬化している。號溝はごく短い途切れはみられるものの、元は張り出し部を含めて全周しており、その幅10~24cm、深さ8~16cmである。また住居西壁に直交する形で西外区床に間仕切り溝が一条見られる。幅10cm、深さ7cm。

ピット 現存7ヶ所。主柱穴は4ヶ所、比較的小型でいずれも円形。径20~34cm、深さ42~62cmを測る。これらに囲まれた内区の面積は9.3m<sup>2</sup>である。西外区の北側コーナー付近に1ヶ所、中央やや南寄りに1ヶ所補助柱穴が見える。径は18~24cm、深さ8~14cmである。大形で短冊形の張



第30図 第6号住居址発掘・遺物出土状況

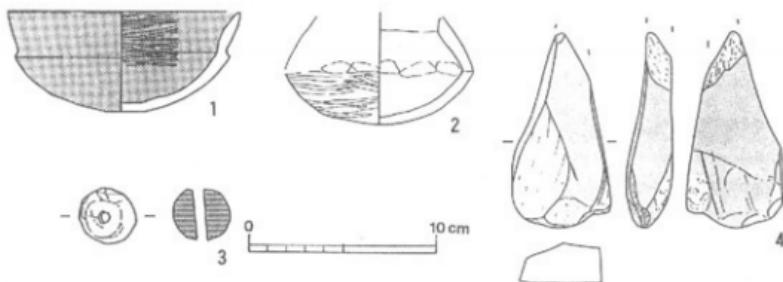
り出し部は南壁ほぼ中央に掘削されており、長軸1.2m、短軸1.0m。壁は外傾して立ち上がり、深さは75cmである。覆土下位に上屋焼失時のものと思われる炭化粒が少額含まれる。張り出し部の北側20cmのところに径25cm、深さ47cmのピットがU字状の緩やかな高まりに囲まれるようにして検出され、位置からみてここが入り口部であると考える。

**竈** 本米北側壁に構築されていたものと考えるが第5号住居址に壊されている。

**覆土** 4・5・6層はロームブロックを多量に含み人為的埋め戻し土と考える。床面直上には焼土がみられ、同じレベルに炭化材が散っている。垂木の一部と思われる木材も含まれることから上屋は焼失したものと考える。

**遺物** 床面上および覆土下位に土器小片が散見されるが、残存状況は不良。

**所見** 出土遺物および張り出し部を持つ住居構造からみて6世紀前半の住居と考える。



第31図 第6号住居址出土遺物

### 第6号住居址

図版No.	器種 器形	法量	出土位置 残存率	焼成	粘土	色調	器形・技法の特徴		備考
1	杯 土師器	A: 12.5 C: 5.4	床底 1/3 完形	普通	雲母・砂粒 を含む	黒	口縁部は外傾し内外ともミガキ。体部は丸 みを帯び、ケズリの後丁寧なナデ。両者の 境の辺は明瞭。剥離と磨滅が進む。	内外面ともに黒 彩	107 (調仕上げか)
2	壺 土師器	C: (5.8)	床底 1/3	良好	石英・長石 小粒を少量 含む	に赤い黄澄	小型、丸底。最大径が胴部1/2付近にありそ ろばん球状を呈す。ケズリの後ミガキ及び ナデ。		108

図版No.	種類	最大長	最大幅	重量	孔径	粘土位置	残存率	焼成	粘土	色調	備考
3	丸玉	2.7	3.0	25.0	0.6	覆土中位	完形	良好	砂粒を含む	赤褐色	109

第7号住居址 (第32・33図 PL16・17)

位置 調査区北寄り。V-11・12, W-13ほか

規模・形態 主軸長5.92m, 幅5.8mの方形。面積34.2m<sup>2</sup>

主軸方位 N-53°-E

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、高さ26~54cmを測る。東壁は一部樹木による搅乱を受けている。

床 外区北東コーナー付近はやや窪んでいるが、他はおおむね平坦で明瞭に検出された。壁溝は残存状態が悪く、西壁下では検出されなかった。現存幅は13cm、深さ8cmほどである。また、西側主柱穴を結ぶ位置に、壁と平行して間仕切り溝が一条掘り込まれている。幅は太いところで38cm、深さ2~5cm。

ピット 7ヶ所。このうち主柱穴は4ヶ所で、上端はひときわ大きく円形を呈する(径58~80cm)が、下端はすぼまり、これがそのまま柱根棒を表すものと考える(径20~22cm、深さ45~66cm)。内区の面積は5.6m<sup>2</sup>である。

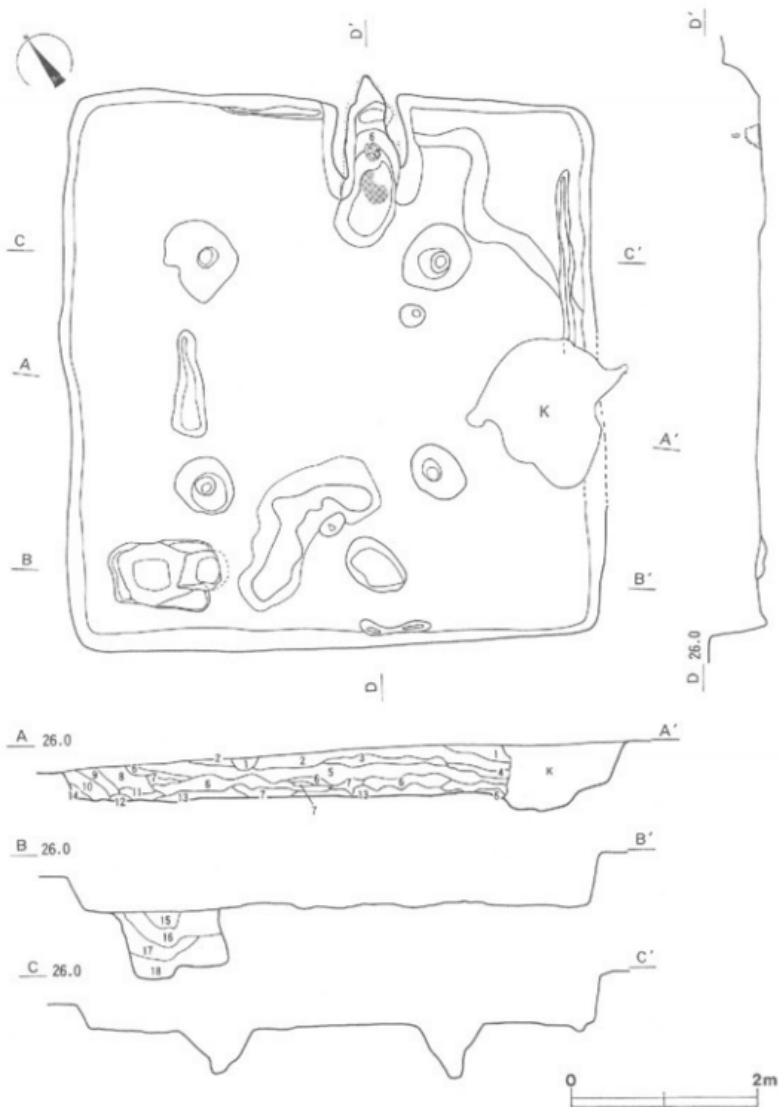
東主柱穴脇に径28cm、深さ6cmほどの補助柱穴がある。また、竈に対面してL字状の緩やかな高まりに囲まれるように小型のピットがみられ(径25cm、深さ15cm)、これは入り口部ピットと考える。20cmほど離れて竈構築土(黄白色砂質粘土)が円形に検出された。用途不明。

貯蔵穴は入り口側のコーナーに構築されており、おおむね長方形を呈する。長軸1m、短軸70cm、深さ76cmを測る。壁は西側では浅い段を持ちほぼ垂直に掘削されているが、東側では壁にえぐれるようにピット状の掘り込みがある。この位置が主柱穴の列と並ぶので、あるいはこれも補助柱穴とすべきかもしれない。層序からの貯蔵穴との切り合い関係は不明である。ちなみに貯蔵穴の最下層は水中に沈殿したような粒子の細かい、粘りのある泥土である。最上層には焼土ブロックや炭化粒が混入している。

竈 北壁中央に黄白色砂質粘土を使用して構築されている。全長1.85m、残存袖幅49cm、燃焼部は梢円形で長軸1.28m、深さ4cmほどに掘り込まれている。底面は被熱によって赤色硬化しており、上部には10cm以上焼土の堆積がある。火床上端には赤彩杯を含む杯(1・6・7)と甕片(16・19)を利用した代用支脚が残されている。

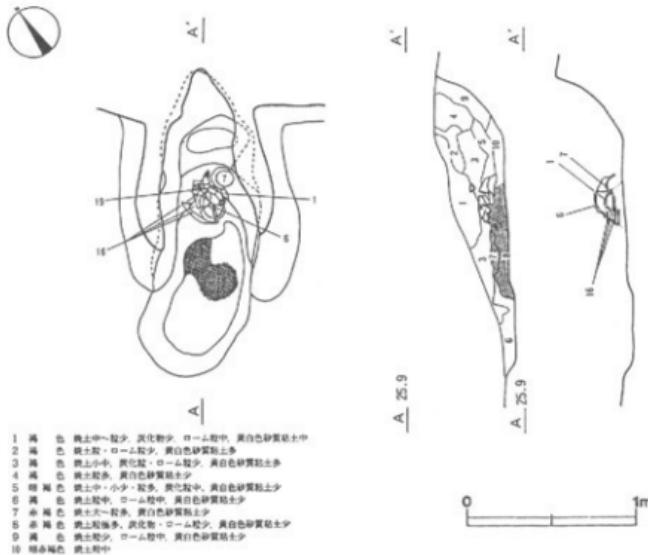
覆土 東外区床上に焼土の堆積がある。貯蔵穴内にもその時のものと思われる炭化物が少量みられるので、上層の一部は焼失した可能性がある。

- |   |       |     |      |                      |
|---|-------|-----|------|----------------------|
| 1 | 7.5YR | 2/2 | 黒褐色  | 焼土粒少量、ローム粒少量、粘性・しまり強 |
| 2 | 7.5YR | 3/4 | 暗褐色  | ローム粒多量、粘性・しまり強       |
| 3 | 7.5YR | 2/3 | 極暗褐色 | 焼土粒少量、ローム小少量、粘性・しまり強 |
| 4 | 7.5YR | 4/3 | 暗褐色  |                      |
| 5 | 7.5YR | 4/3 | 褐色   | ローム小中量、粘性・しまり強       |

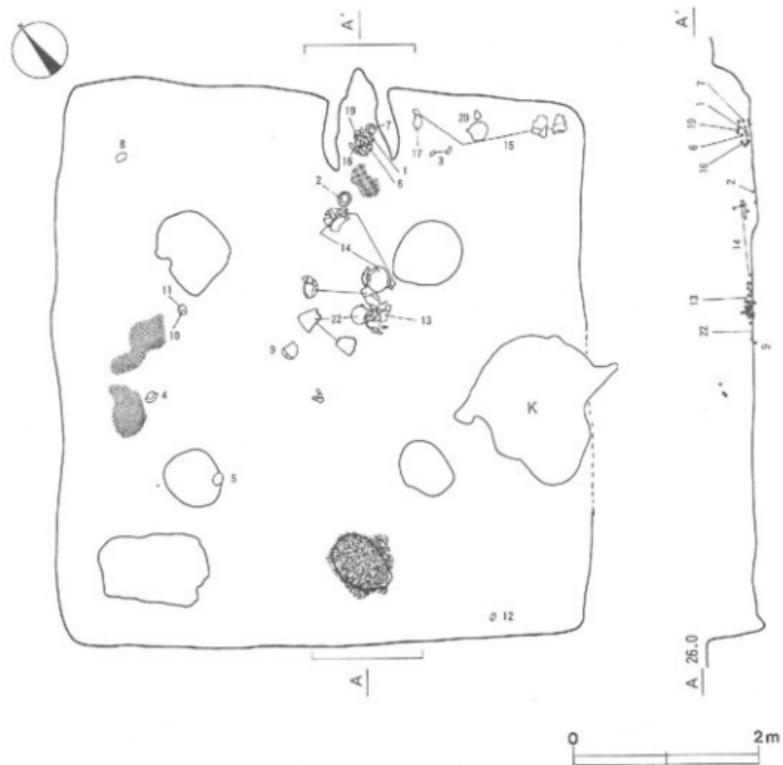


第32図 第7号住居址完掘

- 6 7.5YR 6/3 にほい褐色 ローム大・中多量, 粘性・しまり強  
 7 7.5YR 3/1 黒褐色 ローム小・粒中量, 粘性・しまり強  
 8 7.5YR 4/3 褐色 炭化粒中・ローム粒多量, 粘性・しまり強  
 9 7.5YR 3/3 暗褐色 ローム小・粒中量, 粘性・しまり強  
 10 7.5YR 4/3 褐色 ローム中・小中量, 粘性・しまり強  
 11 7.5YR 4/3 褐色 焼土粒多量, 炭化粒中量, ローム粒多量, 粘性・しまり強  
 12 7.5YR 3/3 暗褐色 焼土粒多量, 粘性・しまり強  
 13 7.5YR 4/3 灰褐色  
 14 7.5YR 3/3 暗褐色 ローム粒少量, 粘性・しまり強  
 15 7.5YR 4/4 褐色 焼土小・粒・炭化粒極少量, ローム中・粒中量, しまり弱  
 16 7.5YR 2/3 褐色 ローム中, 小少量, 粒中量, しまり弱  
 17 7.5YR 4/4 褐色 ローム粒中量, しまり弱  
 18 10YR 4/4 褐色 ローム粒中量, 粘性強, しまり中  
 19 10YR 4/3 褐色 炭化粒微量, ローム粒中量, 小石微量  
 20 7.5YR 4/6 褐色



第33図 第7号住居址カマド



第34図 第7号住居址遺物出土状況

21 10YR 4/4 褐色 ローム大微, 中中, 小少, 粒多

22 10YR 4/4 褐色 ローム粒中

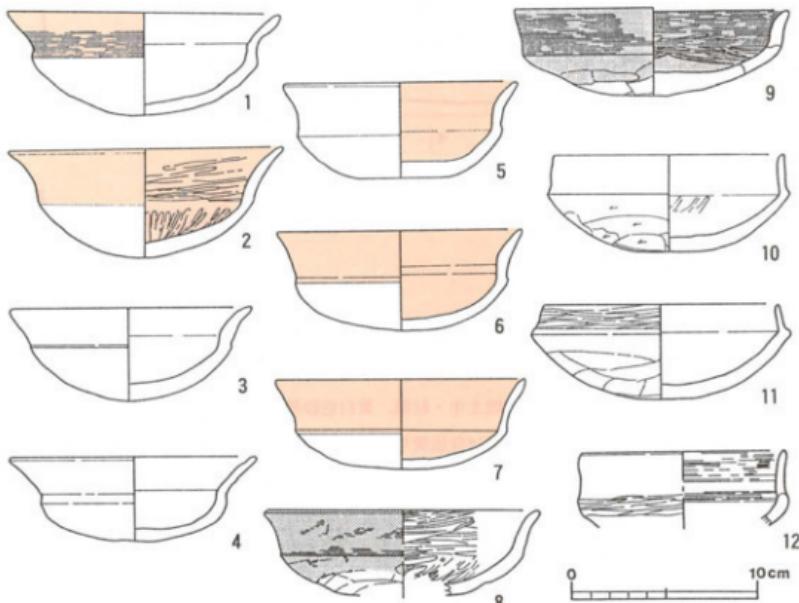
23 10YR 5/6 黄褐色 燃土中・粒微, 黄白色砂層, 縫り強

**遺物** 上記代用支脚に使用された土器は住居使用時のものである。また竈炊き口の杯(2), 内区中央床に横転する甕(13・14 内13は穿孔), 甑(22), 黑彩杯(9)なども当住居に伴うものと考える。

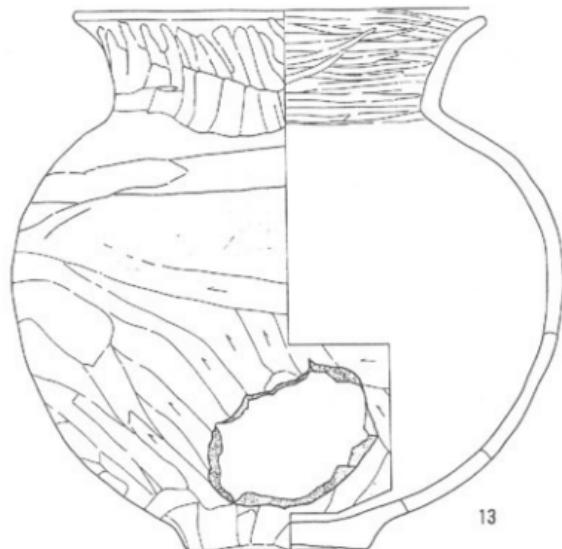
**所見** 人为的な電解体を行っており、貯蔵穴はあらかた埋め戻された後、上屋解体を行ったもので、これには火を使用した痕跡がある。出土遺物から6世紀前半の住居と考える。

## 第7号住居址

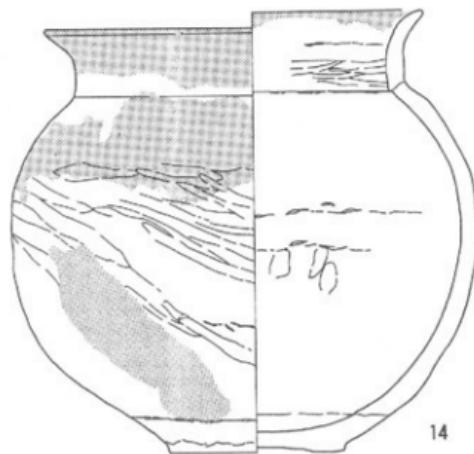
図版No	器種 器形	法量	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	杯 土師器	A : 14.4 C : 5.6	カマド ほぼ完形	普通	石英・長石 小粒を多量に含む	澄	口縁は外反し外面ナデ。体部は丸みを帯び、ケズリの後丁寧なナデ。両者の境の接合は甘い。カマド使用で剥離と磨滅が著しい。	支脚代用か 117
2	杯 土師器	A : 14.7 C : 6.0	床直 ほぼ完形	普通	雲母細片・ 砂粒を多量に含む	澄 にほい橙	口縁は外反し内外横位のミガキ。体部は丸みを帯びケズリの後丁寧なナデ。境の接合は明瞭でない。内面放射状のミガキ。	内面と外口縁を赤彩 110
3	杯 土師器	A : 13.2 C : 5.0	床直 2/3	不良	石英・長石 雲母片多量に含む	澄	口縁は外反し、外面横位のナデ。体部は丸みを帯びヘラナデ、ただし磨滅が進む。境には沈線が一秉走り後を作り出している。	特に内面剥離磨滅が著しい。 112
4	杯 土師器	A : [12.8] C : 4.6	覆土下位 1/2	普通	石英・長石 粒少量含む	澄	口縁は外反し内外ミガキ。体部は偏平化しケズリ、境の接合は明瞭でない。内面は赤彩の可能性があるが剥離と磨滅が著しい。	内面赤彩か 120
5	杯 土師器	A : 12.6 C : 5.0	床直 ほぼ完形	普通	細砂粒を多量に含む	にほい橙 澄	口縁は外反し内面横位のミガキ。体部は丸みを帯び、ケズリの後ナデ。両者の境の接合は甘い。外面の剥離と磨滅が著しい。	内面赤彩 119
6	杯 土師器	A : 13.2 C : 5.4	カマド 完形	普通	石英・長石 細砂粒多量に含む	澄 明赤褐	口縁は外反、調整痕不明。体部は丸みを帯びナデ。両者の境の接合は甘い。カマド使用で剥離と磨滅が著しい。	内面と外口縁赤彩 支脚代用か 116
7	杯 土師器	A : 13.2 C : 4.8	カマド 2/3	普通	石英・長石 粒多量に含む	澄	口縁は強く外反し、端部で僅かに内側する。体部との境の接合は甘い。カマド使用で剥離と磨滅が著しい。	内面と外口縁に赤彩の痕跡 支脚代用か 111
8	杯 土師器	A : [14.8] C : 4.6	覆土下位 1/3	良好	極細砂粒を 少量含む	黒褐	口縁は外反し、内外ともナデの後横位のミガキ。体部ケズリの後ミガキ。内面ランダムなミガキ。	外口縁に近赤彩 (漆仕上げか) 115



第35図 第7号住居址出土遺物(1)



13



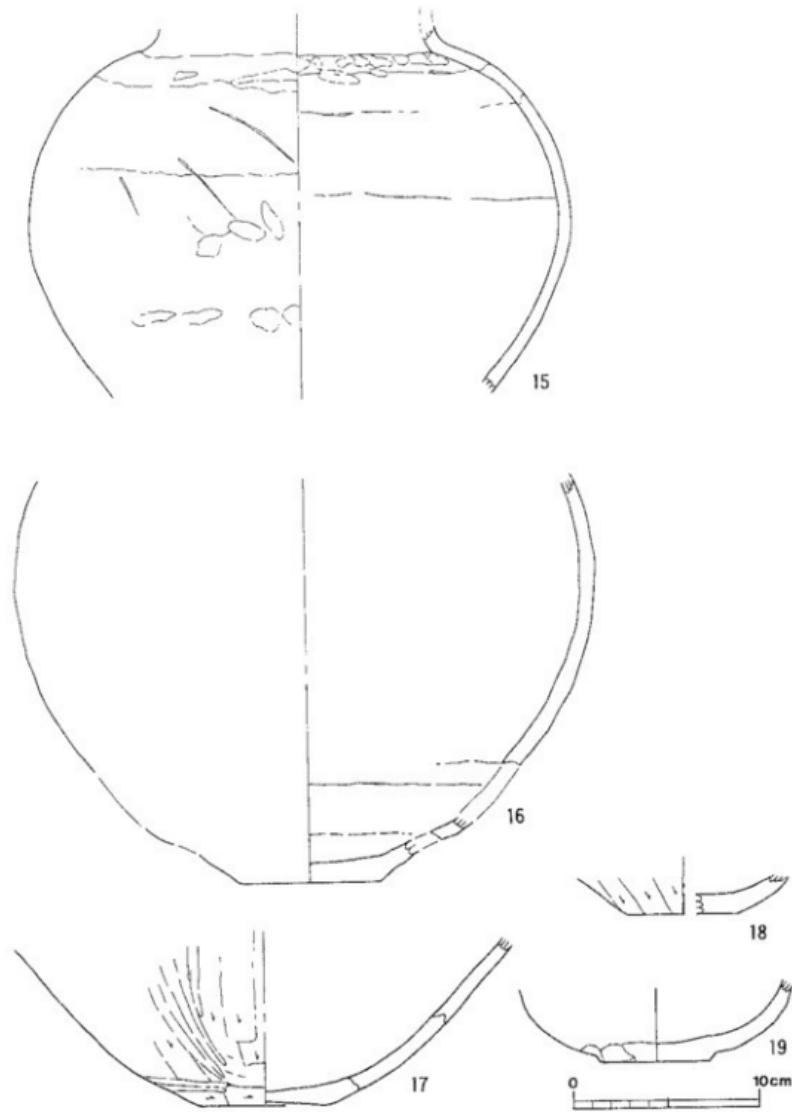
14



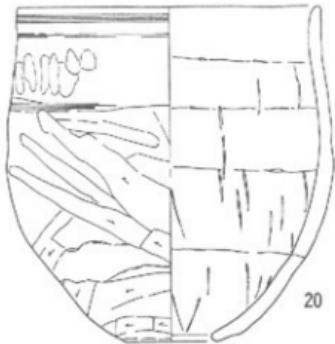
第36図 第7号住居址出土遺物(2)

図版No	基種 基形	法量	出土位置 復原率	地成	胎土	色調	基形・技法の特徴	備考
9	杯 土師器	A : 14.7 C : 4.7	床底 2/3	不良	砂粒殆ど目立たない	黒褐	口縁は外傾気味で内外ともナゲの後ミガキ。外底部はケズり後ヘラナデ。内面はランダムなミガキ。	内面及び外周上部墨彩 121
10	杯 土師器	A : (12.4) C : 5.2	床底 1/3	普通	石英・長石 小粒多量に含む	にふい黄褐 明赤褐	口縁は直立し、内外とも丁寧なナデ。体細ケズリ。内面放射状のミガキ。縁の様は明脱。	118
11	杯 土師器	A : 12.7 C : 5.1	床底 ほぼ完形	良好	雲母細粒片 多量に含む	にふい黄褐	口縫は直立し、横位のミガキを施す。体部はケズリ後ミガキ、内面ミガキ。縁の後は角張っている。	口縫付近漆引上げか 113
12	杯 土師器	A : (11.0) C : (4.0)	覆土下段 口縫部小片	良好	砂粒殆ど目立たない	黒褐	口縫は直立する。内外ともよくナデられ。外縁部は底は横位のミガキ育り。縁は非常に甘く、叩感でない。	114
13	甕 土師器	A : 22.3 B : 9.7 C : 29.0	床底 ほぼ完形	良好	石英・長石 を少量含む	にふい黒 にふい赤褐	平底から球状の胴部につながり、頸部は短く外端。口縫端部は丸い。胴部ケズリ、頭部に横位のミガキ。内面部は横位のミガキ。	下脚部に焼成後穿孔 内・外脚部炭化物付着
14	甕 土師器	A : 20.5 B : 9.4 C : 23.7	床底 ほぼ完形	良好	砂粒・雲母 細粒片を多量に含む	棕	平底から球状の胴部につながり、頭部は短く直立。口縫は外反する。胴部に斜位のミガキ。頸部にも横位のミガキ。	主脚部にぐるりと炭化物付着 9 124
15	甕 土師器	C : (19.8)	床底 1/3	良好	砂粒を少 量含む	明赤褐 黒褐	球形の胴部を持つ。外縁はヘラナデ・ナデ、頭部以上はココナテ。内面下部ナデ。	129
16	甕 土師器	B : 7.6 C : (22.0)	カマド 1/3	普通	石英・長石 小粒多量に含む	にふい黄褐	平底から球状の胴部につながる。内外共ナデ。	支脚代用か 135
17	甕 土師器	B : (6.8) C : (8.6)	床底 小片	良好	石英・長石 雲母粒を多量に含む	明赤褐 黒褐	平底。外縁はケズリ後縱位のミガキ。内面ナデ。	127
18	甕 土師器	B : (5.8) C : (2.0)	覆土 底部小片	良好	石英・長石 小粒を多量に含む	褐 にふい黒	小型の底部より剥離部につながる。外縁縱位の強いヘラナデ。内面丁寧なナデ。	内面におこげの付着有り 128
19	甕 土師器	B : (5.6) C : (4.0)	カマド 小片	普通	雲母細粒片 多量に含む	棕	内外共ナデ。内面底部近くに赤色顔料のついた指痕あり。	木葉模有り 支脚代用か 122
20	甕 土師器	A : (16.4) B : (5.0) C : 18.0	床底 1/2	良好	砂粒少量含む	にふい赤褐 明褐	口縫はほぼ直立し、最大径を胴部中央に持つ。下脚部はケズリで、底部に向かってすぼまっている。上部は要いミガキ。	131
21	瓶 土師器	A : 18.6 B : 4.8 C : 15.0	覆土 2/3	良好	砂粒少量含む	棕	口縫はほぼ直立し、最大径もここにある。外縁縱位のケズリ。口縫付辺は内外ともヨコナデ。内面ケズリ。	130
22	甕 土師器	A : 23.5 C : (19.4)	床底 ほぼ完形	普通	輪郭砂粒を 多量に含む	赤褐	無底型。胴部はストレートに外傾し、口縫はナデで尖り製成。外縁縱位のケズリ。内面丁寧なナデ。	132

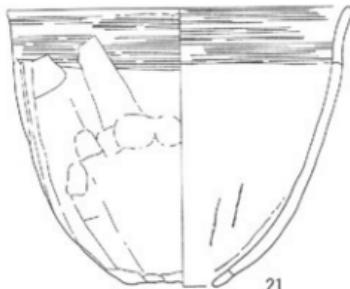
図版No	種類	最大長	最大幅	重量	孔径	出土位置	残存半	地成	胎土	色調	備考
24	支脚	5.2	8.0	—	—	覆土	小片	不良	砂粒微量	明赤褐	—
25	丸玉	3.3	1.7	10.0	0.5	覆土	1/3	良好	砂粒少量	棕	—
26	丸玉	2.9	3.3	22.5	0.6	覆土	1/2	普通	砂粒少量	棕	—
27	丸玉	2.9	3.0	22.2	0.8	覆土	完形	普通	砂粒少量	淡黄	—



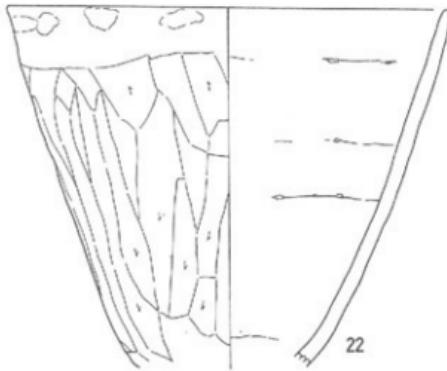
第37図 第7号住居址出土遺物(3)



20



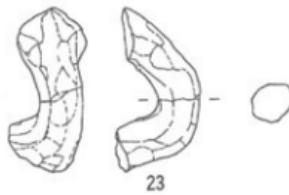
21



22



24



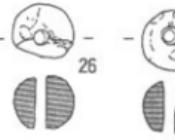
23



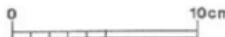
25



26



27



第38图 第7号住居址出土遗物(4)

第8号住居址 (第39・40図 PL18・19)

位置 調査区北寄り, S-10・11, T-10・11区。

規模・形態 主軸長5.22m, 幅5.22mの方形。面積27.2m<sup>2</sup>

主軸方位 N-19°-W

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、高さ40~82cmの良好な残存状態である。

床 平坦で明瞭に検出された。内区と竈周辺は硬化している。壁溝は一部途切れも見られるが、元は全周していたものと考える。幅は20cm内外、深さ4cm程度である。

東西外区にはそれぞれの壁に直交するように、6本・3本の溝状構造が床に走っている。残存状態の良い東外区の構造から判断すると、各々の間隔は20~30cm、一本の長さ1m余り、幅約6~10cm、深さ3cmほどである。一本ごとの間隔が一定して狭いこと、本数が多いことなどから、これらをユカ構造の一端である根太の痕跡と判断する。

ピット 5ヶ所検出されている。うち主柱穴は4ヶ所、いずれも円形で径約65cm、深さは45~50cmである。これらに囲まれた内区の面積は5.3m<sup>2</sup>を測る。南側主柱穴間に中央部床に、ゆるやかな高まりが検出されており、これは入り口部施設に関するものと考える。

貯藏穴は竈右脇に掘削されている。梢円形を呈し、長軸88cm、短軸78cm、深さ70cmである。周囲の床には穴を囲むようなゆるい土堤状の高まりが見られ固い。壁は傾斜して底面へいくにつれすぼまり、断面はバケツ状である。最下部の堆積層は非常にしまりの強い粘土で、埋土には上屋焼失時のものと思われる焼土・炭化物が混入している。

竈 北壁中央に黄白色砂質粘土を用いて構築されている。全長1.28m、残存袖部幅約40cmである。燃焼部は不明瞭でわずか2cmほど窪んでいるにすぎないが、床はよく焼けて赤変しており2~8cmの薄い焼土の堆積がみられる。

覆土 最下層には焼土が塊で見られ、その上層(5・6・7・8・10・13層)は壁近くでは厚く、中央部では薄くレンズ状に堆積するが、いずれもロームブロックを多量に含み人為的埋め戻し層と判断する。

1 7.5YR 3/3 黒褐色 焼土小・ローム小・粒子少量、焼土粒微量、黒色土中多量、しまり強

2 7.5YR 4/4 褐色 粘性極弱、しまり強

3 7.5YR 4/4 褐色 ソフトロームブロック中量、粘性弱

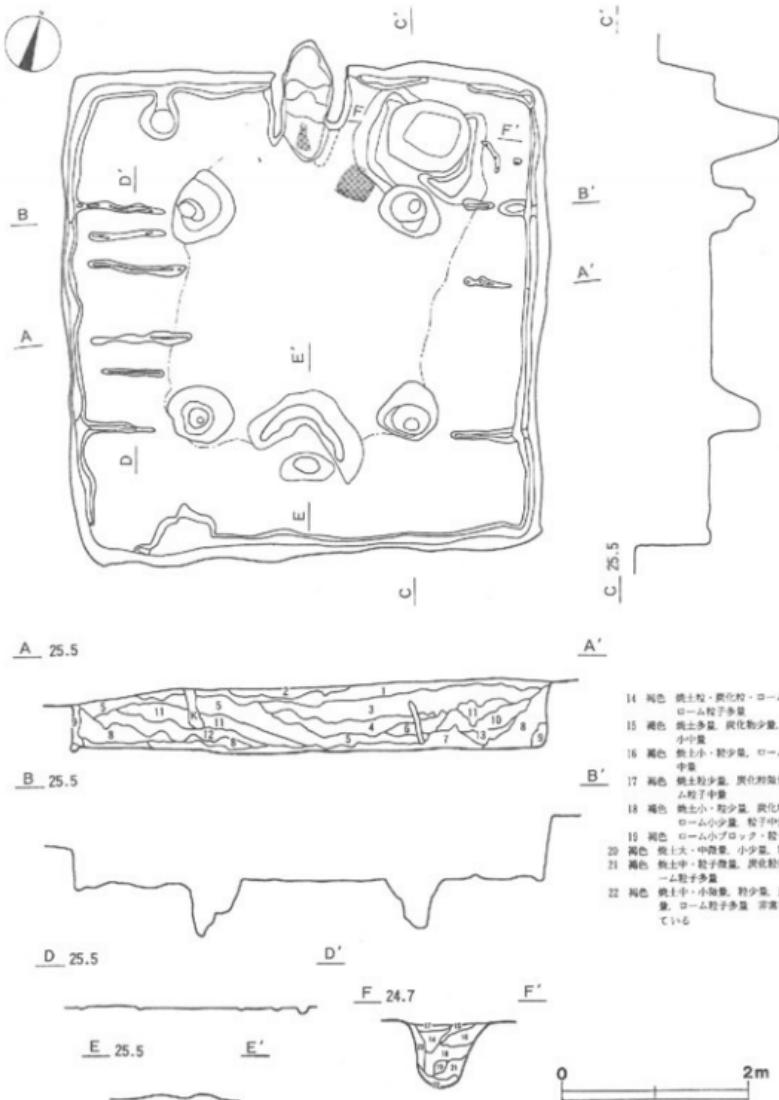
4 7.5YR 4/6 褐色 ローム中・小・粒子少量、粘性・しまり弱

5 10YR 4/4 褐色 ローム大・中・小・粒子多量

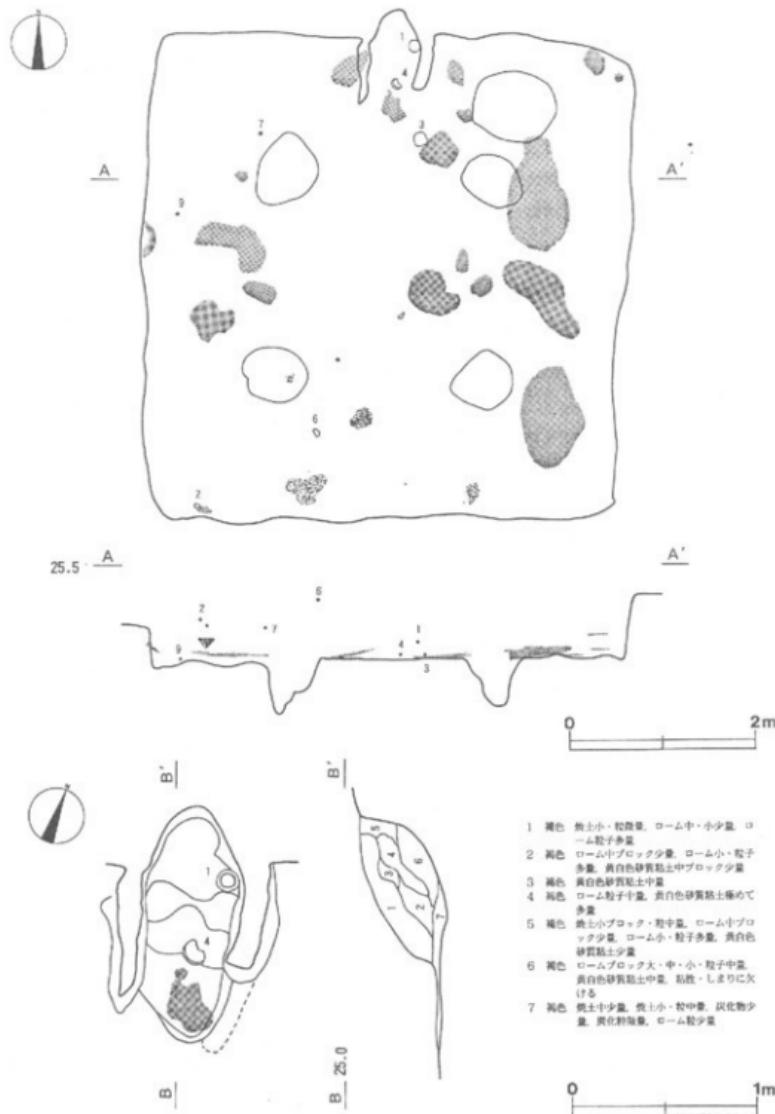
6 7.5YR 4/6 褐色 ローム中・小少量、粒子中量

7 10YR 4/6 褐色 焼土中・小・粒子中量、炭化物・粒子少量、ローム小・粒子中量

8 10YR 4/6 褐色 ローム大・中少量、ローム小・粒子中量、しまり弱



第39図 第8号住居址発掘



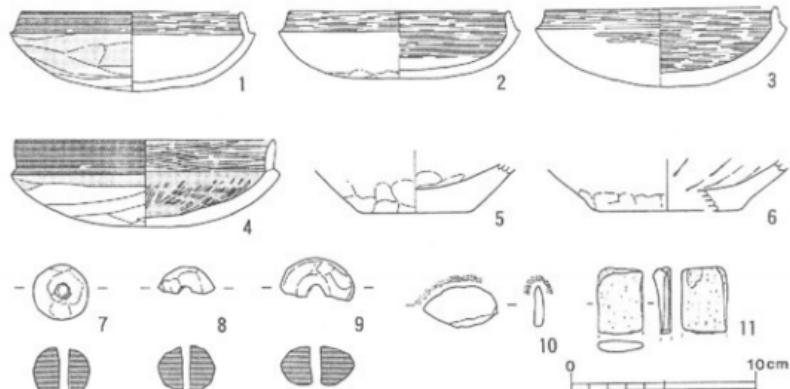
第40図 第8号住居址遺物出土状況・カマド

- 9 10YR 4/4 褐色 ローム粒子多量、しまり極弱  
 10 10YR 4/4 褐色 ローム大・中少量、粒子多量  
 11 10YR 4/3 褐色 焼上粒子・ローム小微量、ローム粒子多量、粘性弱  
 12 7.5YR 4/4 褐色 ローム大少量、粒子中量、粘性・しまり弱  
 13 10YR 4/6 褐色 ローム中少量、ローム粒子極多、しまり弱
- 遺物** 焼土とほぼ同じレベルに土器小片が散見されるが残存状態は不良。床土に2点非常に精巧な造りの、数珠に似た土製小玉が検出されている。竈内からは杯が2点検出された。1つは構築上の上から(1), 他は焼土上(4)からの出土である。遠東されたものかどうかは不明。
- 所見** 竈と入り口部を除く東西外区にはユカ構造が設けられていたと考える。カマド婆等の大型遺物は残されておらず、カマドを解体して持ち出したものであろう。土製小玉は住居施設時に遠東された可能性がある。上屋は焼失したものと考える。本住居に明確にともなう上器はないが出土遺物を総合的に判断して6世紀末から7世紀初頭の住居と考える。

### 第8号住居址

回収No.	品種	法量	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	杯 土師器	A : 11.8 C : 4.3	カマド覆 土 ほぼ完形	良好	砂粒幼ごとに立たない	橙	口縁は短く内傾し内外丁寧なナデ。体部は扁平でヘラナデ。両者の境の接は明瞭で夫り気味。薄手の精製品。	外口拂付近黒彩 139
2	杯 土師器	A : (11.8) C : 3.6	床直 1/3	良好	砂粒幼ごとに立たない	橙	口縁は短く内傾し内外丁寧なナデ。体部は扁平でケズリとナデ。両者の境の接はシャープで端部も夫り気味。薄手の精製品。	(直仕上げか) 141
3	杯 土師器	A : 12.6 C : 4.2	覆土下位 ほぼ完形	良好	砂粒幼ごとに立たない	黄褐	口縁は短く内傾し内外丁寧なナデ。体部はやや丸みを帯び丁寧なナデ。両者の境の接は明瞭で夫り気味。薄手の精製品。	口縁付近漆仕上げか 138
4	杯 土師器	A : (14.0) C : 4.7	カマド床 直 1/2	普通	石英・長石 雲母板細片 を含む	にふい縁 粗	口縁は直立し、内外とも横長のミガキ。体部はケズリの後ナデ。境の接は明瞭。四面は削鉋が進行しているが底板表ミガキ。	内面と外口拂付 近黒彩 140
5	罐 土師器	B : (6.2) C : (2.3)	覆土 底部小片	普通	石英・長石 小粒を多量に含む	灰褐	腹部端よりすぐ原部にいたる。蓋端部に横位の割り痕。内面風化が進む。	
6	盖 土師器	B : (8.0) C : (2.3)	覆土上位 底部小片	普通	石英・長石 小粒を多量に含む	黑褐	底部を叩鍛で作り出す。外面削離磨滅が進行し剥離状が明らかでない。内面織目へのナテ後丁寧なナデ。	142 143

回収No.	種類	最大径	深入解	重量	孔径	出土位置	残存率	焼成	胎土	色調	備考
7	丸玉	2.0	2.0	24.5	0.7	覆土	完形	普通	砂粒少量	橙	146
8	丸玉	1.4	3.0	(8.8)	0.5	床直	1/2	良好	砂粒少量	にふい黄粉	147
9	丸玉	2.1	4.0	(13.9)	0.6	床直	1/2	不良	砂粒微量	にふい橙	148
10	不明	2.2	4.0	—	—	覆土	—	普通	砂粒少量	橙	擦痕あり 145
11	砾石	3.4	2.3	10	—	覆土	小片	—	—	灰白	



第41図 第8号住居址出土遺物

第9号住居址 (第42~44図 PL20・21)

位置 調査区北寄り, S-14・15区他

規模・形態 主軸長5.2m, 幅5.45m。28.34m<sup>2</sup>の方形

主軸方位 N-19°-W

壁 ほぼ直立に立ち上がり, 高さ40~70cmの良好な残存状態である。

床 北西側主柱穴付近に樹木による擾乱がみられるが明瞭に検出された。

入り口部・竈付近を含む内区は固く踏みしめられており, 中央部は径1.5mにわたり深さ7cm余り盛んでいる。この盛みの内側にも硬化が及んでいる。

壁溝は全周しており, 幅14~30cm, 深さ3~7cmである。

東側外区で壁に直交して長さ1.1m, 幅14~20cm, 深さ8cmの間仕切り溝が検出されている。

ピット 6ヶ所検出され, うち主柱穴は4ヶ所。径52~93cm, 深さ58~64cmで円形を呈す。北西部の主柱穴は擾乱で上部が壊されている。内区の面積は6.5m<sup>2</sup>となる。

竈に面する側に入り口部施設にかかるものと考える小型のピットがみられる。径35cm, 深さ42cm。

貯藏穴は入り口側のコーナーに掘削されている。おおむね方形を呈するが南壁の一部は壁溝から伸びる間仕切り状の溝に壊されている。長辺1.1m, 短辺72cm, 深さ54cmを測る。壁はなだらかに外傾し, 底面は丸みを帯びる。埋土は最下層に粘性の強いしまりのある土が薄く堆積し, 上部層には焼土粒子や炭化物が混入している。

竈 北壁中央に黄白色砂質粘土で構築されている。全長86cm, 残存幅35cmである。

燃焼部は円形に5cmほど掘りこまれ、炊き口に若干の焼土が残る。しかし内部の堆上は構築土のブロックを含む粘土が主体で、使用時の堆積物は見られない。支脚などのほか土器類の出土も見なかった。竈清掃の他に甕をはずすなどの解体行為が行われたものと考える。

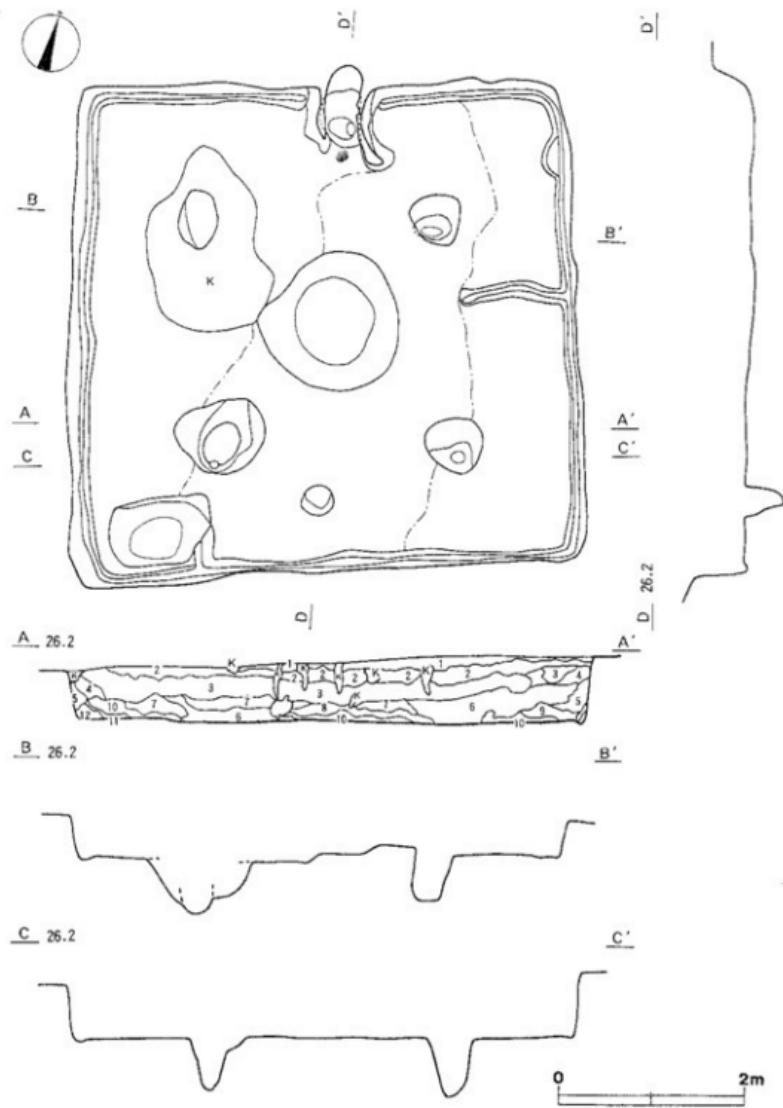
覆土 堆穴下部に堆積するロームブロックを多量に含む層（6・9・10・11・12層）は人為的な埋め戻し層と考える。

- |    |       |     |     |                                   |
|----|-------|-----|-----|-----------------------------------|
| 1  | 7.5YR | 2/2 | 黒褐色 | ローム小・粒子微量、黑色土大・中多量、粘性・しまり弱        |
| 2  | 7.5YR | 3/2 | 黒褐色 | 焼土小・粒子・ローム小・粒子微量、黑色土大中量、中・小微量、粘性弱 |
| 3  | 7.5YR | 3/2 | 黒褐色 | 焼上粒子・ローム小微量、ローム粒子少量、黑色粒極多量        |
| 4  | 7.5YR | 3/6 | 黒褐色 | 焼上小微量、ローム小・粒子少量、粘性弱               |
| 5  | 10YR  | 4/6 | 褐色  | ローム粒子多量、しまり弱                      |
| 6  | 7.5YR | 4/3 | 褐色  | 焼土小・粒子微量、ローム小中量、粒子多量、粘性・しまり弱      |
| 7  | 7.5YR | 3/2 | 黒褐色 | 焼土小・粒子微量、ローム小中量                   |
| 8  | 7.5YR | 3/2 | 黒褐色 | 焼土小・粒子・ローム粒子微量                    |
| 9  | 7.5YR | 4/6 | 褐色  | 焼土粒子・ローム小微量、ローム粒子多量、しまり弱          |
| 10 | 10YR  | 4/6 | 褐色  | 焼土粒子微量、ローム粒子多量、しまり弱               |
| 11 | 7.5YR | 4/6 | 褐色  | 焼上小中量、粒子・ローム粒子多量、しまり弱             |
| 12 | 7.5YR | 4/3 | 褐色  | 黑色土大中量、しまり弱                       |

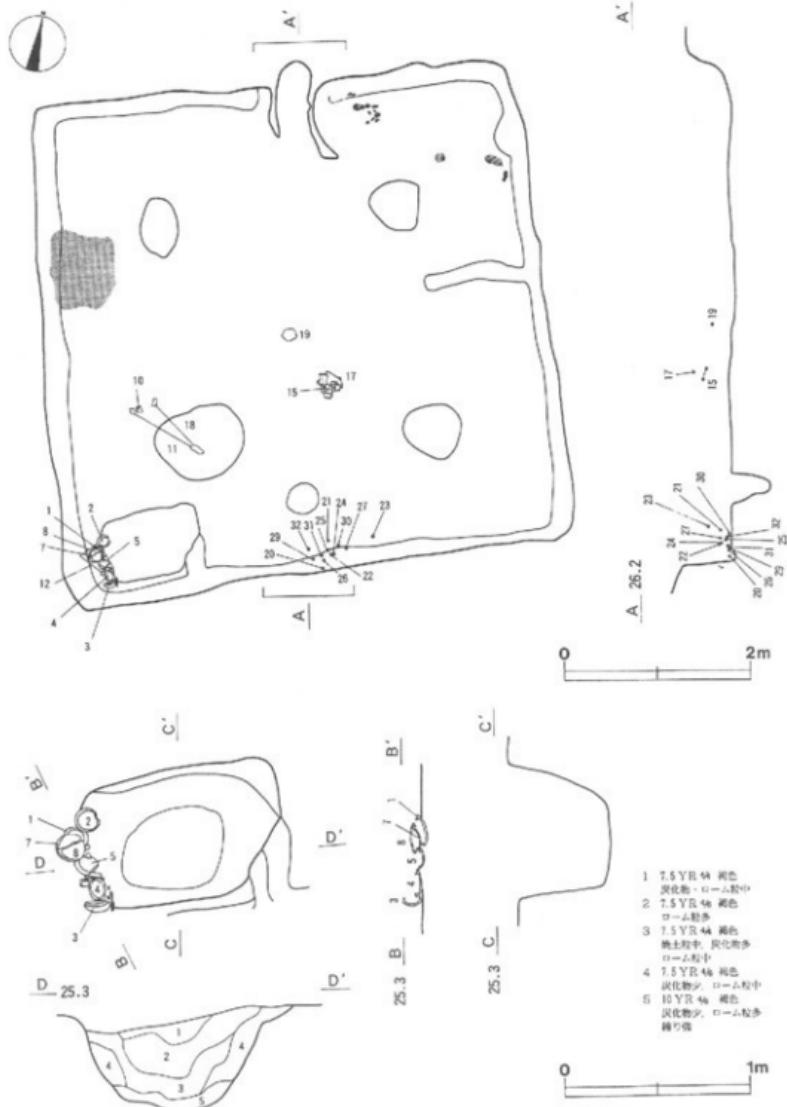
遺物 住居中央床より墓種不明須恵器(19)が1点出土している。また入り口部では覆土中層から床にかけて流し込まれたような土製丸玉の集中出土があった。他に当住居にとまらう上器は貯蔵穴脇に一列に並べて安置された杯(1・2・3・4・5・7・8)7個体である。

所見 瓦は解体され、使用甕などは持ち去られている。上屋の解体にあたり一部火を使用している。須恵器は当遺跡中で唯一床から出土したものである。

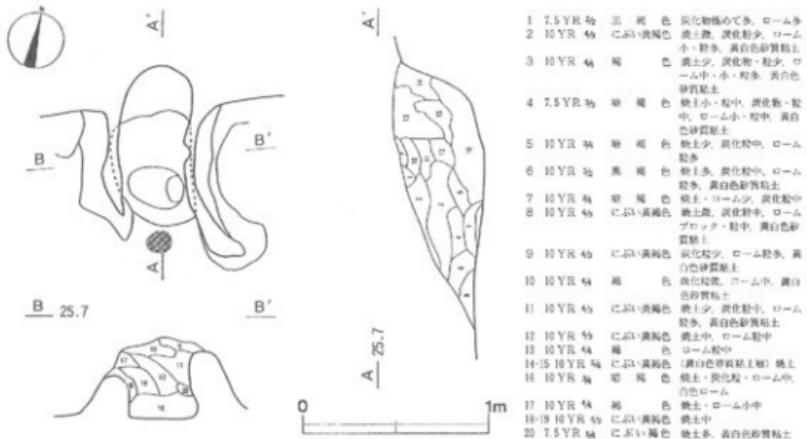
貯蔵穴脇に安置された土器を住居廃棄時のものと判断し、当住居を6世紀後半のものと考える。



第42図 第9号住居址完掘



第43図 第9号住居址遺物出土状況



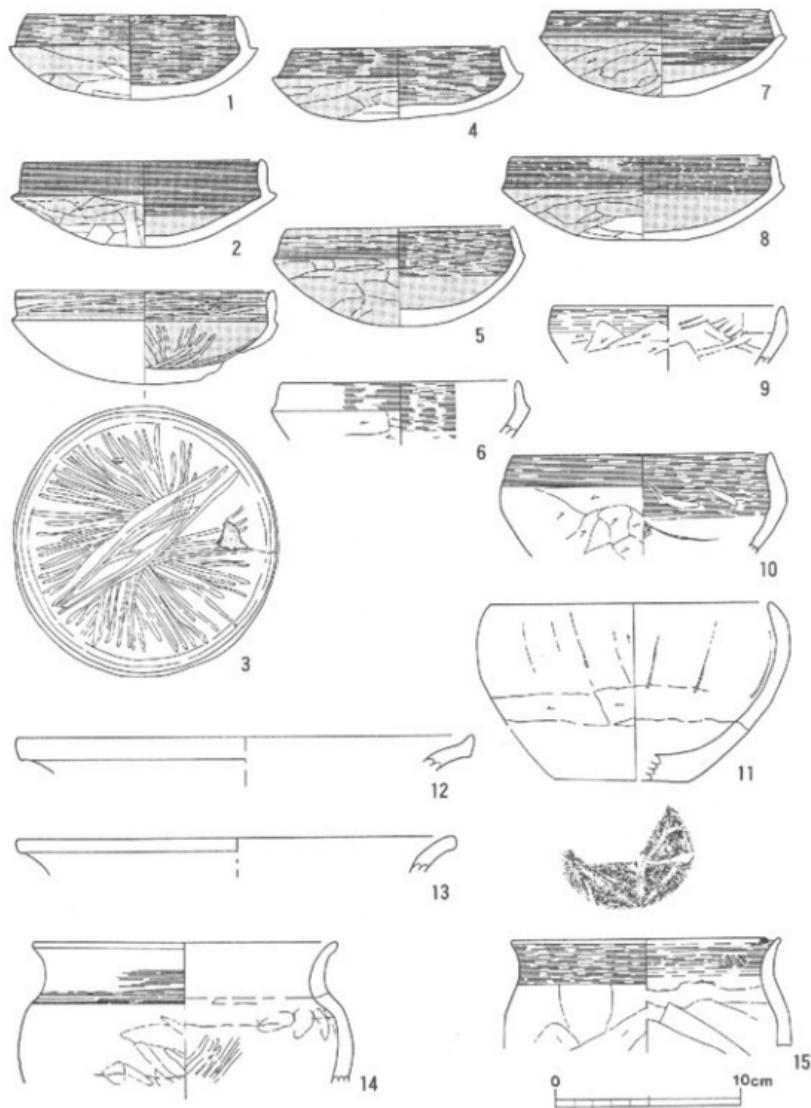
第44図 第9号住居址カマド

### 第9号住居址

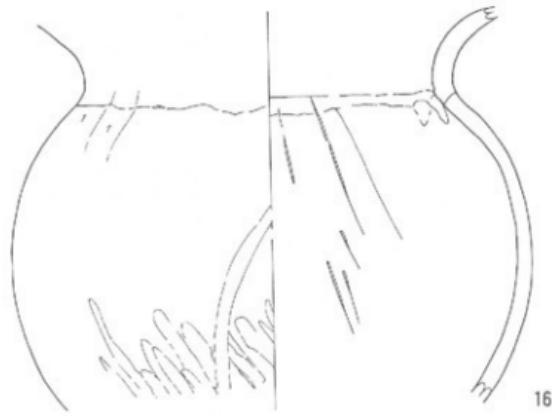
調査番号	部種 器形	法量	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	杯 土師器	A : 11.4 C : 4.6	貯藏穴上 一括資料 完形	良好	砂粒粘土目 立たない	黒褐	口縁は高く内傾し、内外とも丁寧なナデ。体部はケズリ、両者の境の縁はシャープで尖っている。内面丁寧なナデ。	内外共に黒彩 152
2	杯 土師器	A : 17.0 C : 4.6	貯藏穴上 一括資料 ほぼ完形	良好	砂粒粘土目 立たない	明褐色 に赤い縁	口縁は高く内傾し、内外とも丁寧なナデ。体部はケズリ、両者の境の縁はシャープで尖っている。内面丁寧なナデ。	内外共に黒彩 (胎土上げか) 153
3	杯 土師器	A : 14.0 C : 5.0	貯藏穴上 一括資料 完形	良好	砂粒粘土目 立たない	棕	口縁は直立し端部は低い。内外共にミガキ。体部は丸みを帯びケズリ後ナデ。境の後は明瞭。内面放射状のミガキ。	内面と統一する墨彩 149
4	杯 土師器	A : 11.4 C : 3.9	貯藏穴上 一括資料 完形	良好	砂粒粘土目 立たない	に赤い縁	口縁は内傾し内外共に丁寧なナデ。体部は偏平でケズリ後ミガキ状のヘラナデ。内面ナデ。	内外共に黒彩 (胎土上げか) 150
5	杯 土師器	A : 12.4 C : 5.3	貯藏穴上 一括資料 1/2	良好	砂粒粘土目 立たない	黒褐	口縁は内傾気味で内外共に丁寧なナデ。体部は丸みを帯びケズリ後ミガキ状のヘラナデ。後は直立しない。内面ナデ。	内外共に黒彩 155
6	杯 土師器	A : (13.0) C : (3.0)	覆土 小片	良好	陶細泥片 少量含む	棕	口縁はほぼ直立し、内外ともに丁寧な模ナデ。体部は模位のヘラナデ。境の後は明瞭だが甘い。	156
7	杯 土師器	A : 12.0 C : 5.6	貯藏穴上 一括資料 ほぼ完形	良好	砂粒粘土目 立たない	黒	口縁は内傾気味で内外共に丁寧なナデ。体部は丸みを帯びケズリ後ミガキ状のヘラナデ。後は直立しない。内面ナデ。	内外共に黒彩 151
8	杯 土師器	A : 13.8 C : 4.5	貯藏穴上 一括資料 ほぼ完形	良好	砂粒粘土目 立たない	に赤い縁 に赤い縁	口縁は内傾気味で内外共に丁寧なナデ。体部はケズリ後ミガキ状のヘラナデ。後は直立しない。内面ナデ。	内外共に墨彩 (胎土上げか) 154
9	杯 土師器	A : (12.4) C : (3.1)	覆土 小片	普通	雲母板細片 を少量含む	棕	口縁は直立し内外共に丁寧な模ナデ。体部は模位のヘラナデ。境の後は不明瞭で非常に甘い。内面ナデ。	157
10	杯 土師器	A : (14.0) C : (5.4)	覆土中段 小片	良好	砂粒粘土目 立たない	明褐	口縁は内傾し、内外共に丁寧な模ナデ。体部は複数のヘラナデ。境の後はない。	158

固版No	種類 器形	法量	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	芯形・技法の特徴	備考
11	瓶 上部器	A : 15.1 B : (7.2) C : 9.7	底 2/3	不良	砂粒少 含む	明赤褐色	平底。口縁部は丸く内側に、端部は尖り気味。 外下脚部はケズリ。上脚部及び内面ナデ。	木蓋痕あり 160
12	甕 上部器	A : (24.8) C : (1.9)	良好	石英・長石 小粒を多量に含む	明黄褐色		口縁端部は明顯に削取られ、尖り気味。 内外とも1塗なナデ。	166
13	甕 土師器	A : [23.8] C : (1.9)	普通	石英・長石 小粒を多量に含む	明黄褐色		外腹横縫のナデ。端部はやや肥厚し丸められている。	167
14	甕 上部器	A : (16.2) C : (7.3)	普通	小砂粒少量 含む	明赤褐色 黒褐色		小型。頭部の細部はゆるやかで頭部は球状を呈す。 嘴の口縁に車輪。制脚部直径は比較的小位にある。口縁部ナデ。肩部ナデ後ミガキ。	168
15	小型甕 土師器	A : (14.6) C : (5.8)	覆土中位 小片	良好	石英・長石 砂粒少量含む	明黄褐色	口縫はわざかに外気なし。内外ともに横ナデ。 外面部はヘラナデ。内面1塗なナデ。	159
16	甕 土師器	C : (21.4)	覆土中位 1/3	普通	石英・長石 小粒多量に含む	明黄褐色	頭部の風曲はゆるやかで頭部は球状を呈す。 外回丁寧なナデ後下部はミガキ、内面ヘラナデ後ナデ。	161
17	甕 上部器	B : (6.8) C : (11.7)	覆土中位 1/3	普通	石英・長石 小粒多量に含む	明黄褐色	平底。外側はナデ接舷位のミガキ。内面ナデ。倒し制限が過剰。	162
18	杯か？ 土師器	C : (2.5)	覆土中位 底部	普通	石英・長石 小粒を少量 含む	明赤褐色	丸底。外面部へラナデ。内面へラナデ。特に外面部は氯化が進む。	赤彩か？ 164
19	甕 須恵器	C : (2.2)	覆土下位 2/3	良好	石英・長石 無色砂を多量に含む	灰	弁形部のみ円形に残し口縁部以下欠損。 偏平で大型化したもので、ややゆがみを生じている。ロクロは時計通り。	168

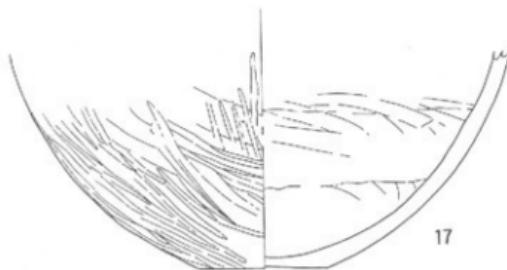
固版No	種類	最大長	最大幅	重量	孔径	出土位置	残存率	焼成	胎土	色調	備考
20	丸玉	2.9	3.1	25.5	0.7	入口一括	完形	良好	砂粒微量	明赤褐色	169
21	丸玉	2.9	3.1	30.9	0.7	入口一括	完形	良好	砂粒微量	橙	170
22	丸玉	2.5	3.1	29.6	0.7	入口一括	完形	良好	砂粒微量	橙	171
23	丸玉	2.9	2.9	21.2	0.7	入口一括	完形	良好	砂粒微量	黑褐色	172
24	丸玉	2.6	3.4	25.4	0.7	入口一括	完形	良好	砂粒微量	明褐色	173
25	丸玉	3.0	3.2	27.9	0.7	入口一括	完形	良好	砂粒微量	明褐色	174
26	丸玉	3.2	3.2	29.0	0.9	入口一括	完形	普通	砂粒微量	にじい赤褐色	175
27	丸玉	2.4	3.0	23.8	0.7	入口一括	完形	不良	石英多量	にじい黃褐色	176
28	丸玉	2.6	3.1	19.7	0.7	覆土	完形	普通	砂粒微量	橙	177
29	丸玉	2.9	3.3	26.6	0.6	入口一括	完形	普通	砂粒微量	橙	178
30	丸玉	3.0	2.9	22.7	0.7	入口一括	完形	普通	砂粒微量	橙	179
31	丸玉	3.2	3.0	30.6	0.6	入口一括	完形	不良	砂粒微量	橙	180
32	丸玉	3.1	3.2	26.6	0.8	入口一括	完形	良好	砂粒微量	橙	181
33	丸玉	3.6	3.3	34.8	0.8	覆土	完形	良好	砂粒微量	橙	入口付近 182
34	丸玉	2.8	3.0	24.3	0.6	覆土	完形	良好	砂粒微量	黑褐色	人白付近 183
35	丸玉	2.8	3.3	27.6	0.7	覆土	完形	普通	砂粒微量	橙	入口付近 184
36	丸玉	2.8	2.7	20.1	0.6	覆土	完形	普通	砂粒微量	黑褐色	人口付近 185
37	丸玉	3.1	3.3	28.8	1.0	覆土	完形	普通	砂粒微量	橙	入口付近 186
38	丸玉	3.0	3.0	23.9	0.7	覆土	完形	不良	石英多量	黑褐色	入口付近 187
39	丸玉	3.2	3.1	26.8	0.7	覆土	完形	不良	砂粒少量	明赤褐色	入口付近 188
40	丸玉	2.8	3.4	(18.7)	0.8	覆土	1/2	普通	砂粒少量	橙	入口付近 189
41	丸玉	3.1	3.1	26.1	0.9	覆土	完形	不良	砂粒少量	橙	入口付近



第45図 第9号住居址出土遺物(1)



16



17



18



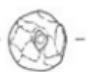
19



20



21



22



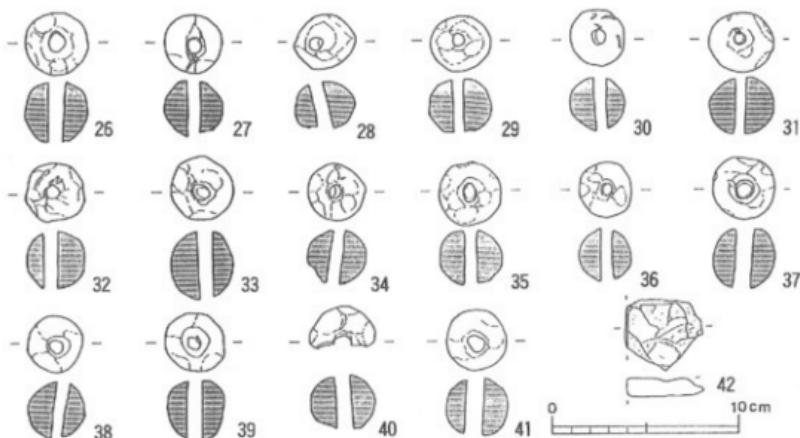
23



25



第46図 第9号住居址出土遺物(2)



第47図 第9号住居址出土遺物(3)

第10号住居址 (第48~50図 PL22・23)

位置 調査区北寄り V-15・16, W-15・16区

規模・形態 主軸長5.6m, 幅5.8m。32.5m<sup>2</sup>の方形。

主軸方位 N-36°-W

壁 60~70cmの高さで垂直に立ち上がり、良好な残存状態である。西側で一部崩れが見える。

床 北東部貯蔵穴付近は一部搅乱を受けているが、ほとんどは平坦で明瞭に検出された。

壁溝は全周しており、幅10~18cm、深さ2~6cmである。

ピット 11ヶ所検出された。うち主柱穴は4ヶ所、全て円形で径25~40cm、深さ77~90cmと非常に深い。北東側の主柱穴上部は壊されている。内区の面積は7.8m<sup>2</sup>である。

竈に正対するものは径28cm、深さ9cmで、周辺の床は硬化しており、位置からみて入り口部ピットと考える。

また竈焼き口向かいに深いピットが掘り込まれるほか、5ヶ所に円形の小型ピットが検出されているが用途は不明である。

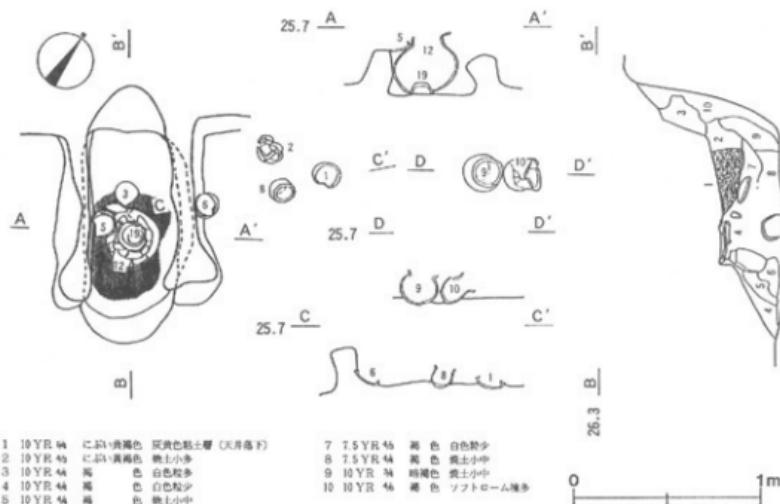
貯蔵穴は竈左脇に設置されている。南側は上部に搅乱を受けているが、おむね楕円形を呈す。長軸88cm、短軸62cm、深さ76cmである。

竈 北壁中央部に黄白色砂質粘土を使用して構築されている。全長1.37m、残存袖部幅40cm、燃焼部は深さ4cmほど楕円形に掘りくぼめられる。中央部床に片口の小型鉢(19)を逆位に置いて支

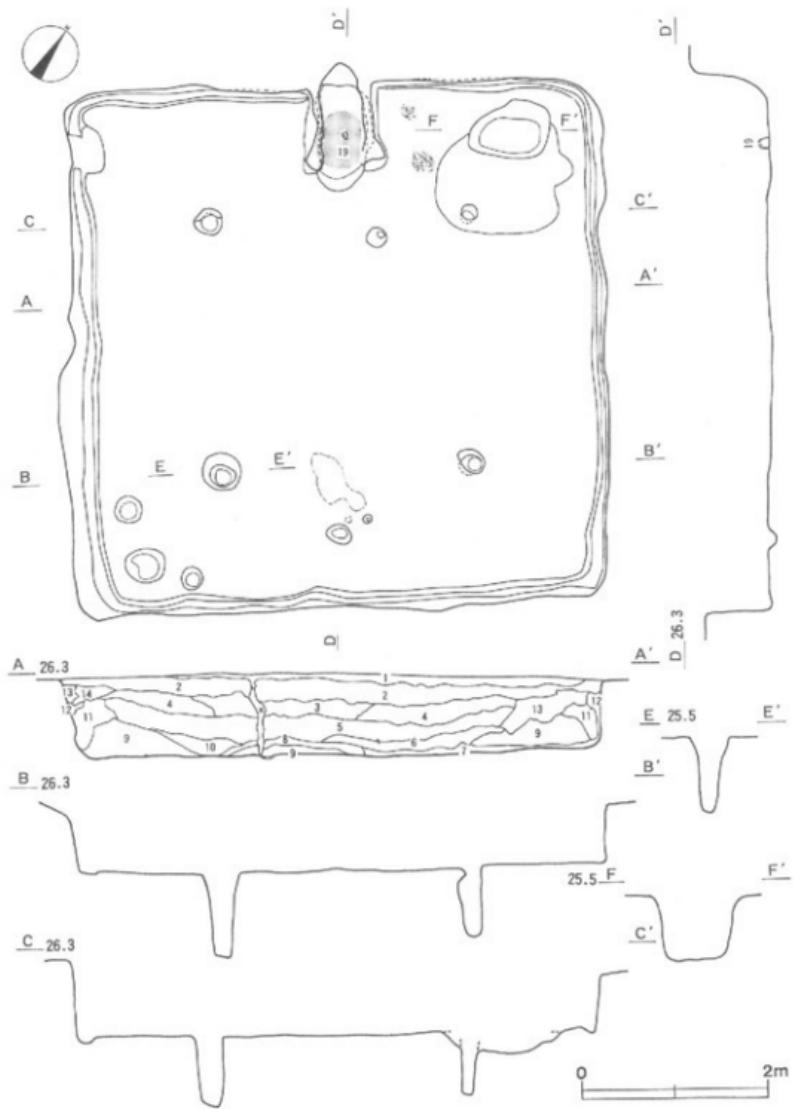
脚の代用とし、その上に竈甕(12)を据えている。甕の頸部を補強するように杯(3・5)が出土している。全て原位置を動いておらず、竈構築当時の様相をとどめていると考える。

**覆土** 下層(主として9・10層)はロームブロックを多量に含む埋め戻し層と考える。その上部(4・5・6・7層)に焼土・炭化物が散見される。量的に上層の全てが焼失したとはい難いが、大ざっぱな埋め戻し後、一部の部材を燃した可能性がある。また、この時のものと思われる焼土や炭化物が貯蔵穴の埋土上層に含まれるので、火を使用したとき貯蔵穴はまだ埋まりきっていなかったと判断する。

- 1 7.5YR 4/3 深褐色 焼土粒子微量、ローム粒子中量、粘性極く弱
- 2 7.5YR 3/2 黒褐色 ローム粒子少量、粘性極く弱
- 3 7.5YR 3/2 黒褐色 ローム粒子中量、褐色土大ブロック少量、粘性・しまり弱
- 4 7.5YR 3/3 暗褐色 焼土中・小・粒子微量、ローム粒子中量、褐色土大中量、粘性弱
- 5 7.5YR 2/3 極暗褐色 焼土中微量、小・粒子・炭化粒・ローム粒子少量、褐色土大少量
- 6 7.5YR 3/4 暗褐色 焼土中微量、小・粒・ローム小・粒子中量、炭化微少量、粘性弱
- 7 7.5YR 4/6 深褐色 焼土小・ローム粒子多量、焼土粒・ローム小中量、炭化粒少量
- 8 10YR 4/6 深褐色 ローム大微量、中少量、粒子多量、5層が斑状に混入
- 9 10YR 4/6 深褐色 ローム大・中少量、粒子極めて多量
- 10 10YR 4/4 深褐色 焼土小・炭化粒・ローム小中量、焼土粒・炭化物少量、ローム粒子多量



第48図 第10号住居址カマド

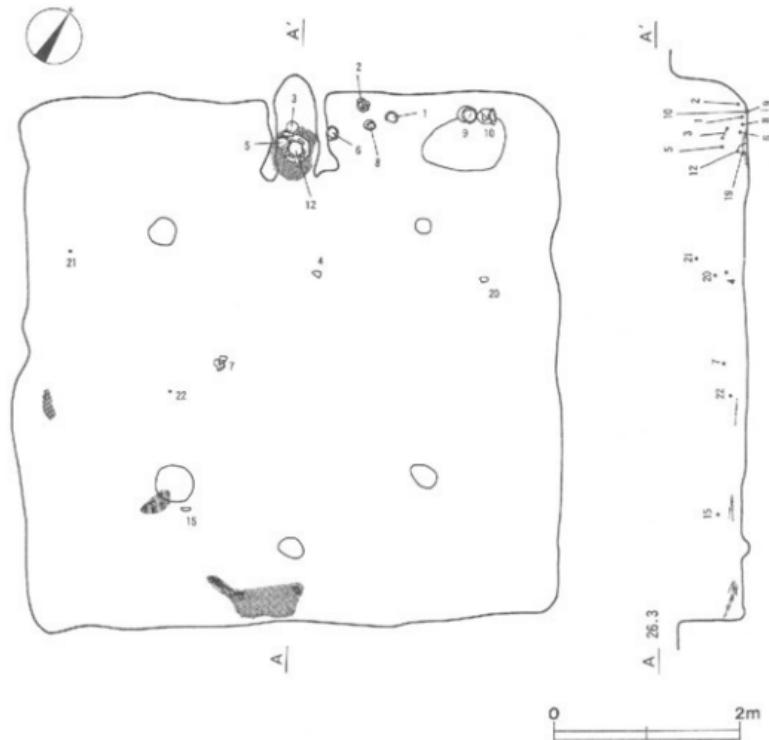


第49図 第10号住居址完掘

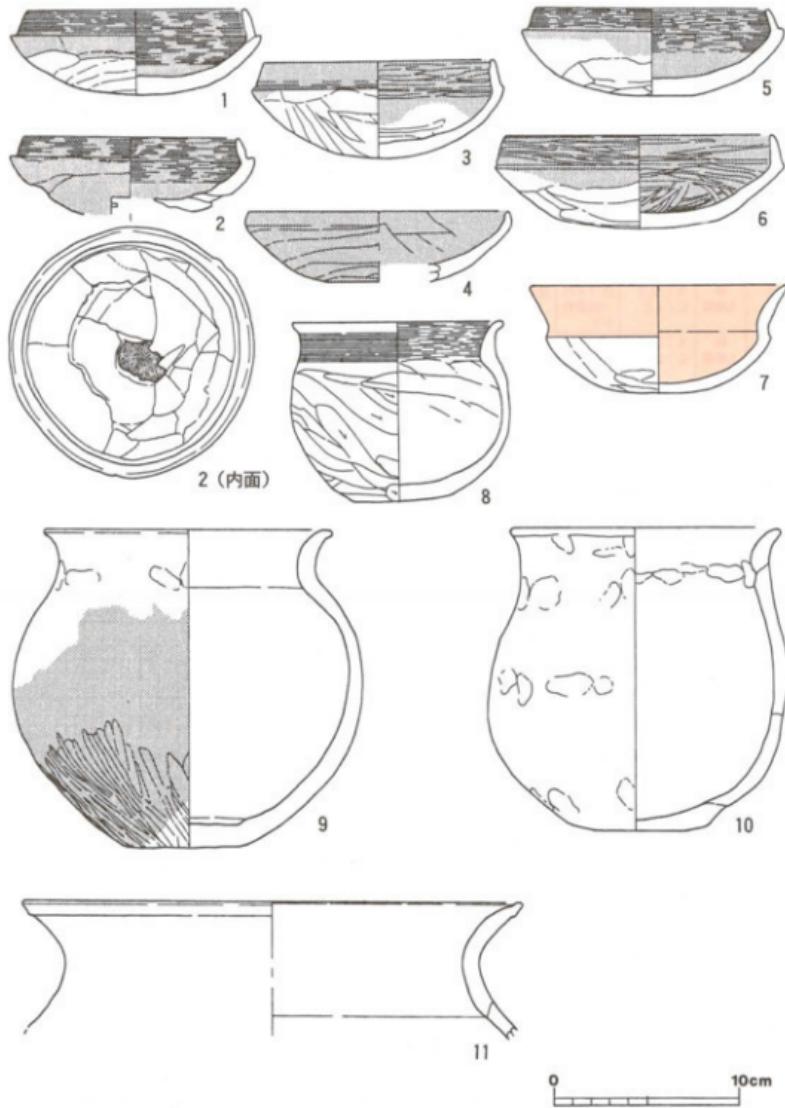
- 11 7.5YR 4/4 褐色 焼土小・粒子少量、ローム中・小中量、ローム粒子多量、粘性・しまり弱  
 12 10YR 4/6 褐色 ローム粒子極めて多量、ほとんどソフトローム、粘性弱、しまり極く弱  
 13 7.5YR 4/6 褐色 ローム粒子多量、粘性・しまり弱  
 14 7.5YR 3/2 黒褐色 ローム粒子中量、粘性弱

**遺物** 当住居にともなうものは、竈内に残された片口・甕・杯2点、貯蔵穴脇の小型甕(9・10)のほか、竈脇より出土した杯(1・2・6うち2は穿孔)、甕(8)である。

**所見** 竈内の土器は動かされておらず住居建築当時の土器、竈脇と貯蔵穴脇の一帯は住居廃棄時の土器であると考える。ただし両者に明確な時期差はうかがえない。総合的に判断して当住居は6世紀後半のものと考える。



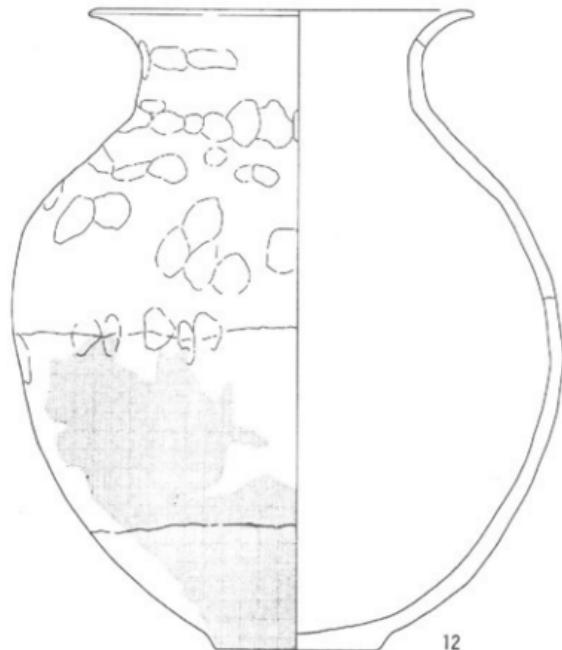
第50図 第10号住居址遺物出土状況



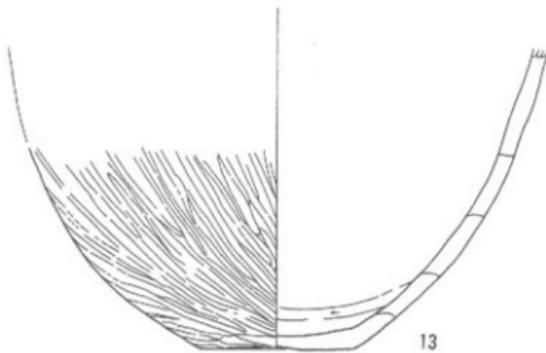
第51図 第10号住居址出土遺物(1)

第10号住居址

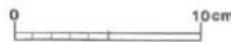
固版No	種類	法規	出土位置 残存率	焼成	粘土	色調	器形・技法の特徴	備考	
1)	杯 土師器	A : 11.8 C : 4.6 2/3	カマド焼 一括資料 ほぼ完形	良好	砂粒殆ど目 立たない	黒褐色	口縁は内側し、内外とも丁寧なナデ。体部 はケズり後ミガキ状のナデ。両者の境の 境はシャープで美っている。内面丁寧なナデ	内外共に黒彩 (達仕上げ) 191	
2)	杯 土師器	A : 11.6 C : 4.2	カマド焼 一括資料 ほぼ完形	普通	砂粒殆ど目 立たない	にほい青黄	口縁は細く内側し内外とも丁寧なナデ。体部 はケズり後ミガキ状のナデ。両者の境の 境はシャープで美っている。内面丁寧なナデ	内外共に黒彩。 焼成後穿孔造 内→外 194	
3)	杯 土師器	A : 12.3 C : 5.2	カマド内 一括資料 ほぼ完形	良好	砂粒殆ど目 立たない	黒褐色	口縁は内側し内外共に焼成のミガキ。体部 は丸みを帯びケズり後ミガキ状のナデ。内面 は丸みを帯びてている。	内面と接以上墨 彩。(達仕上げ) 192	
4)	杯 土師器	A : (14.4) C : (4.8) 1/3	焼土 下位	良好	砂粒殆ど目 立たない	黒褐色	口縁は粗く内側し、内外共に丁寧なナデ。体部 はミガキ状のナデ。内面ナデ。	内外共に黒彩 (達仕上げ) 195	
5)	杯 土師器	A : 12.5 C : 4.7 2/3	カマド内 一括資料 ほぼ完形	普通	砂粒殆ど目 立たない	黒褐色	口縁は細く内側し、内外共に丁寧なナデ。内面 は丸みを帯びケズり後ミガキ状のナデ。後 は甘く丸みを帯びる。内面ナデ。	内面と外ロ押撻 近攝記。 (達仕上げ) 193	
6)	杯 土師器	A : 14.4 C : 5.0	カマド焼 一括資料 ほぼ完形	普通	雲母板細片 を多量に含む	にほい塵 明褐色	口縁は内側気陰地で内外共に模様のミガキ。体 部ケズリ後丁寧なナデ。端の縁は甘く殆ど 突出しない。内面ランダムなミガキ。	内面と外ロ押撻 近攝記。 (達仕上げ) 196	
7)	杯 土師器	A : (13.6) C : 5.8	覆土上位 2/3	普通	砂糖粒を 含む	明褐色	口縁は部は高く外反し、内外共ナデ。体部は ケズリとナデ。縁は甘いが強烈。内面剥離 しているがナデ。	上部引出 197	
8)	甕 土師器	A : 11.4 B : 5.2 C : 9.6	カマド焼 一括資料 完形	良好	石英・長石 小粒を多量に 含む	橙	小型。口縁部は頬部近くで急に外に屈曲す る。内外共ナデ。底部はケズリ後ミガキ状 の丁寧なヘラナデ。内面丁寧なナデ。	内面と外ロ押撻 近攝記。 (達仕上げ) 200	
9)	甕 土師器	A : 15.2 B : 6.3 C : 17.1	焼成火點 一括資料 完形	良好	石英・長石 小粒を多量に 含む	明赤褐色	手底。底部はゆるやかに外反し、端部は九 くおきめられる。底部は球状で下位を擬似 のヘラミカキ。内面丁寧なナデ。	側部に擦痕有 198	
10)	甕 土師器	A : 14.4 B : 5.7 C : 16.3	焼成火點 一括資料 完形	不良	砂粒を多量 に含む	橙	平底。底部の周辺はほとんど無く、底部は 下凹。内外共にナデであるが焼成が悪く 破裂が見れている。内面指痕任意とナデ。	側部に擦痕有 199	
11)	甕 土師器	A : (26.8) 覆土 1/3	カマド内 一括資料 ほぼ完形	良好	石英・長石 小粒を含む	橙	縫合はゆるやかに外反し、口縁は面取りし て端部を尖らせる。	内面共に丁寧なナデ	201
12)	甕 土師器	A : 18.8 B : 9.1 C : 34.3	カマド内 一括資料 ほぼ完形	普通	石英・長石 小粒を多量に 含む	黃褐色	平底で側部最大径を肩附近に持つ。底部は 内側氣陰地。口縁はラップ状に開く。かまと 付箋による縫合の荒れが目立つ。	下側部に灰化物 付着あり	207
13)	甕 土師器	A : 8.4 C : (16.1) 1/3	焼土 2/3	良好	石英・長石 小粒を多量に 含む	橙	縫合の底部に施された縫合のミガキは、半 窓の底部にまで及ぶ丁寧なナデ。内面ケズ り後ナデ。	206	
14)	甕 土師器	A : (21.2) 覆土 2/3	カマド内 一括資料 ほぼ完形	良好	石英・長石 小粒を多量に 含む	橙	外面上丁寧なナデ。内面丁ナデ後丁寧なナ デ。	203	
15)	甕 土師器	A : (20.8) 覆土上位 小片	カマド内 一括資料 ほぼ完形	普通	石英・長石 小粒を多量に 含む	浅黃	口縁は外反し端部は丸く納められる。内外 共丁寧な横ナデ。	202	
16)	甕 土師器	B : (8.0) C : (1.5) 小片	普通	砂粒殆ど目 立たない	灰褐色	側部外縁下端に粘土綴り痕あり。内面ヘラ ナデ後ナデ。	本要項あり	345	
17)	甕 土師器	A : (20.2) B : (7.1) C : 20.6 2/3	焼土 2/3	不良	砂粒を多量 に含む	橙	焼成型。下部茎からくろんで口縁がストレ ートに広がる。内外共縫合のミガキ。底部 近くに小孔1ヶ所あり。	焼成後穿孔 小孔外→内	208
18)	甕 土師器	A : (31.0) C : (11.9) 小片	焼土 2/3	普通	砂粒殆ど目 立たない	明黃褐色	口縁部はわざかに外反し、内外共に丁寧な 横ナデ。底部はヘラナデ。	294	
19)	甕 土師器	A : 10.5 B : 6.4 C : 7.6 完形	カマド底 直 高 完成	不良	石英・長石 小粒を多量に 含む	橙	焼成後打削(内→外)して片口とする。内 外共に縫合押紋灰痕有。支脚として軸附 され、上部にNo12(甕)が繋えられる。	代用支撑	292
20)	手捺 土師器	A : (8.0) B : (5.2) C : 14.0 1/2	覆土中位	普通	雲母板細片 雲母片を含 む	褐 黑褐色	平底。外縁へラ削り及びナデ。内面指痕有	209	
固版No	種類	最大長 最大幅 直徑	重量	孔径	出土位置 残存率	焼成	輪上 色調	備考	
21)	丸玉	3.0	3.3	28.1	0.7	覆土 完形	普通	砂粒微量 黒	210
22)	丸玉	2.3	2.5	12.5	0.7	覆土 完形	良好	砂粒微量 橙	211



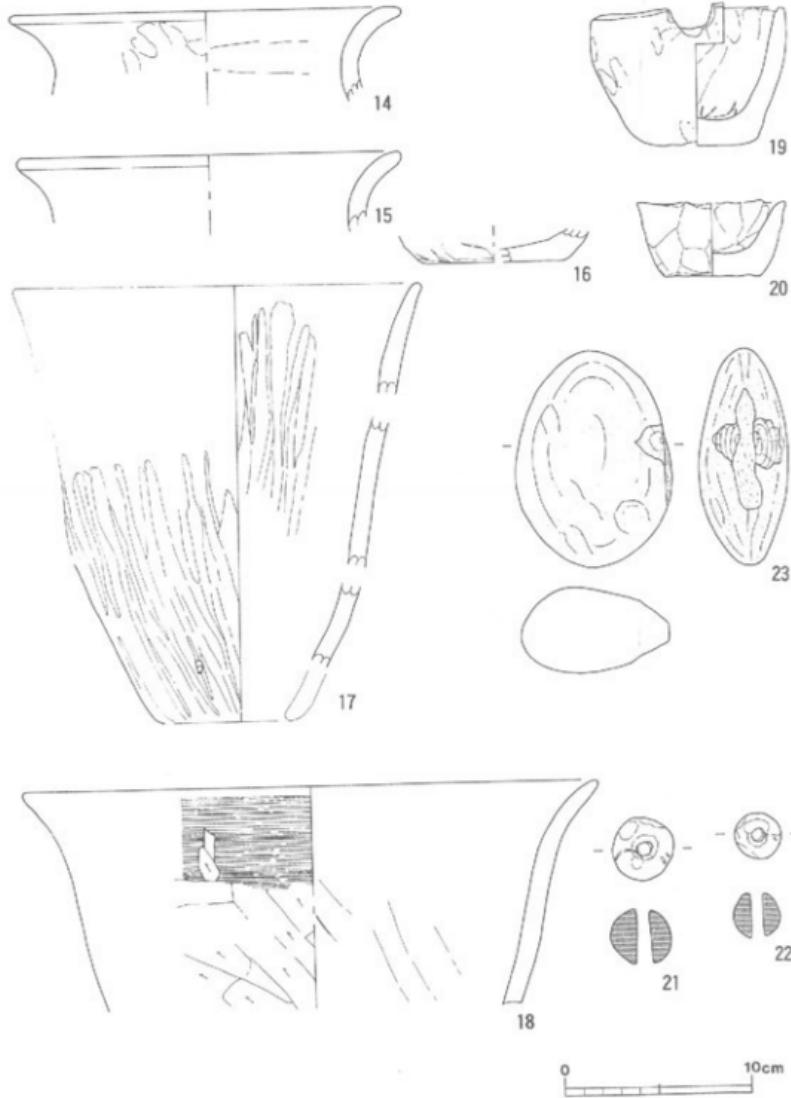
12



13



第52図 第10号住居址出土遺物(2)



第53図 第10号住居址出土遺物(3)

### 第11号住居址 (第55・56図 PL24・25)

位置 調査区中央部 R-20・21 S-20・21区

規模・形態 主軸長6.14m、幅6.14m。37.7m<sup>2</sup>の方形

主軸方位 N-22°-W

壁 ほぼ垂直に立ち上がるが高さは20~39cmと低く、北壁を中心に搅乱を受けている。

床 平坦で明瞭に検出された。壁溝は南壁でとぎれがみられるが元は全周していたと考える。幅10~14cm、深さ2~5cm。南西と南東の両コーナーを囲むように幅14~15cm、深さ5cm余りの浅い溝状造構が検出されている。南西側には貯蔵穴があり、あるいはこれに付随する間仕切り施設の痕跡かも知れない。ただし南東側では浅い不正円形のピットを除き特殊な施設はないし、溝が主柱穴の位置に連続して検出されるなど、ユカ構造が検出されるときの有り方と共通点もあり、これらの溝が根太の痕跡である可能性も捨てきれない。

ピット 10個のピットが検出されたがこのうち主柱穴は4ヶ所。いずれも円形で、径は12~40cmと小形だが70~80cmと深い。これらに囲まれた内区の面積は10m<sup>2</sup>である。他のピットは前述の間仕切り状の溝造構に隣接するものが多く、ユカ構造を支えるものかも知れないが詳細は不明である。

貯蔵穴は南西コーナーに検出されている。長軸90cm、短軸70cmの楕円形を呈する。深さ60cm。最下部には上屋解体にともなうとみられる炭化物と焼土粒が多量に出土したので、解体まで貯蔵穴は閉口していたと考える。入り口部は明瞭でない。

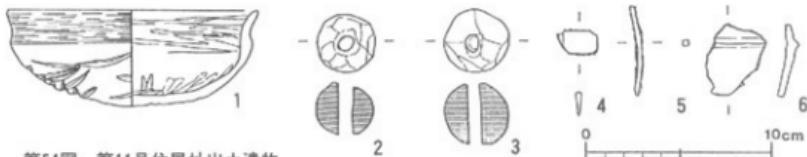
竈 北壁中央に黄灰色砂質粘土を用いて構築される。煙道部を含む北部分は搅乱を受けているが、復元全長約1.2m、残存袖部幅60cmである。燃焼部はほぼ平坦でよく焼け赤変している。

覆土 壁際の床面直上には上屋解体にともなうと考える焼土が堆積し、特に東側で顕著である。

南壁側には人為埋め戻し土と考える14・15・16・17・18層が竪穴上縁まで堆積する。

遺物 焼土中に小片が散見されるのみで非常に少ない。竈付近の搅乱を差し引いても、日常什器は全て持ち出した後に放火・焼却・埋め戻しを行ったと考える。

所見 覆土出土遺物から総合的に判断して6世紀後半の住居かと考える。



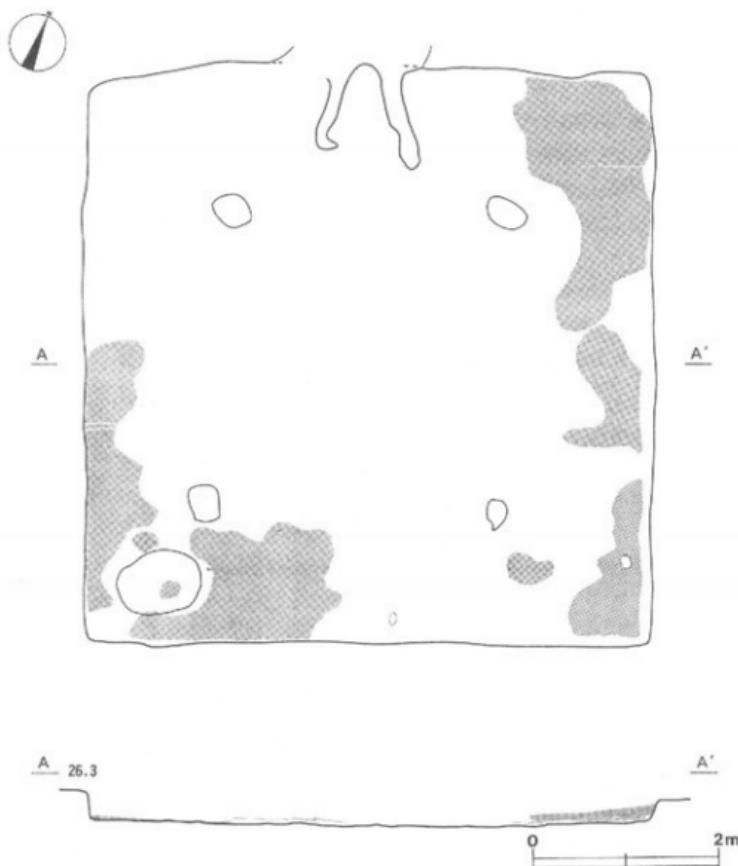
第54図 第11号住居址出土遺物

### 第11号住居址

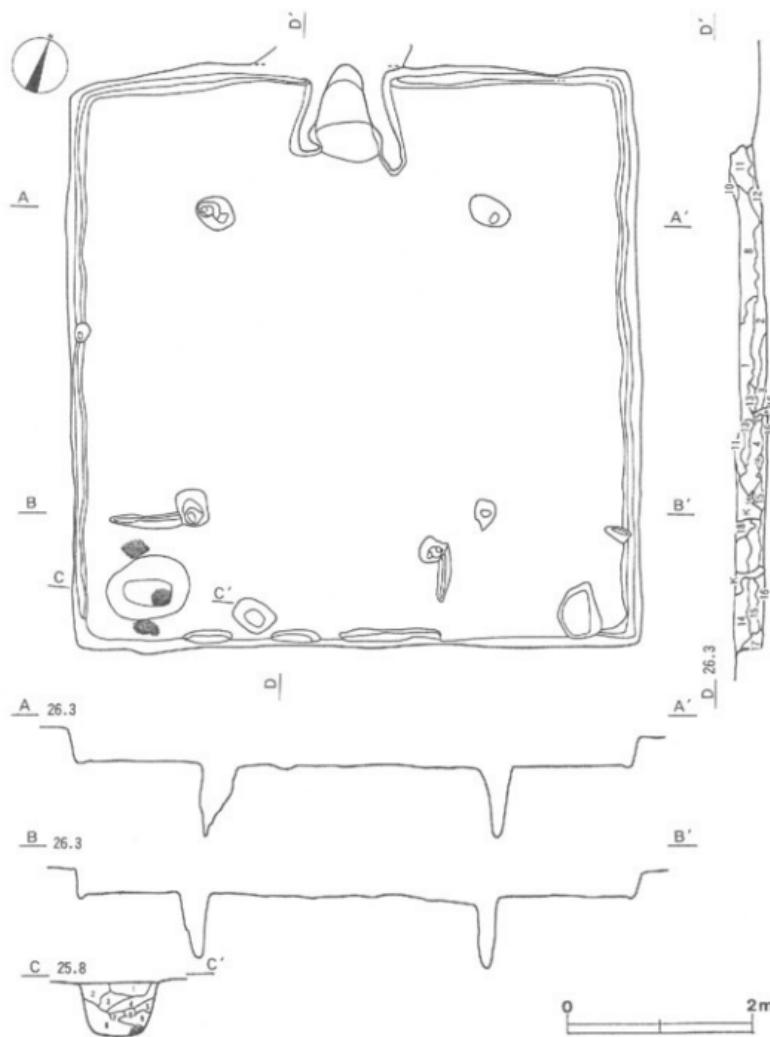
調査No.	器種 器形	法量	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	杯 土罐器	A: 13.3 C: 5.2	床底 2/3	普通	砂粒・雲母 板細片を含む	棕	口縁は内傾後すぐ短く外反。外面はナデ。内面は横位のミガキ。体部はケズリ線へラ で傷つけられている。内面放射状のミガキ。	213

圖版No	種類	最大長	最大寬	重量	孔徑	出土位置	殘存率	造成	胎土	色調	備考
2	瓦	2.8	3.1	25.2	0.8	灰土	完形	良好	砂粒微量	明褐	214
3	瓦	3.3	3.4	36.4	0.6	灰土	完形	普通	砂粒微量	明赤褐	215

圖版No	種類	器種	最大長	最大寬	最大厚	出土位置	殘存率	備考
4	陶製品	刀子	(2.1)	1.3	0.3	灰土	小片	216
5	陶製品	勺?	(4.9)	0.3	0.3	灰土	1/3	216
6	陶製品	不明	3.8	2.9	0.6	灰土	小片	217



第55図 第11号住居址遺物出土状況



第56図 第11号住居址発掘

第12号住居址 (第57~59図 PL26・27)

位置 調査区中央部 S-22, T-21・22・23区

規模・形態 主軸長5.05m, 幅5m, 25.3m<sup>2</sup>の方形

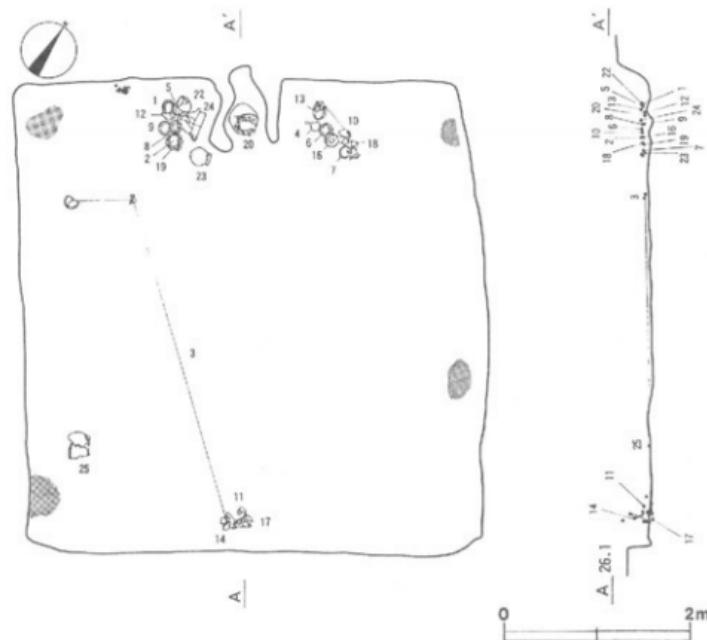
主軸方位 N-36°-W

壁 やや外傾気味に立ち上がり、高さは30cm余りで低い。

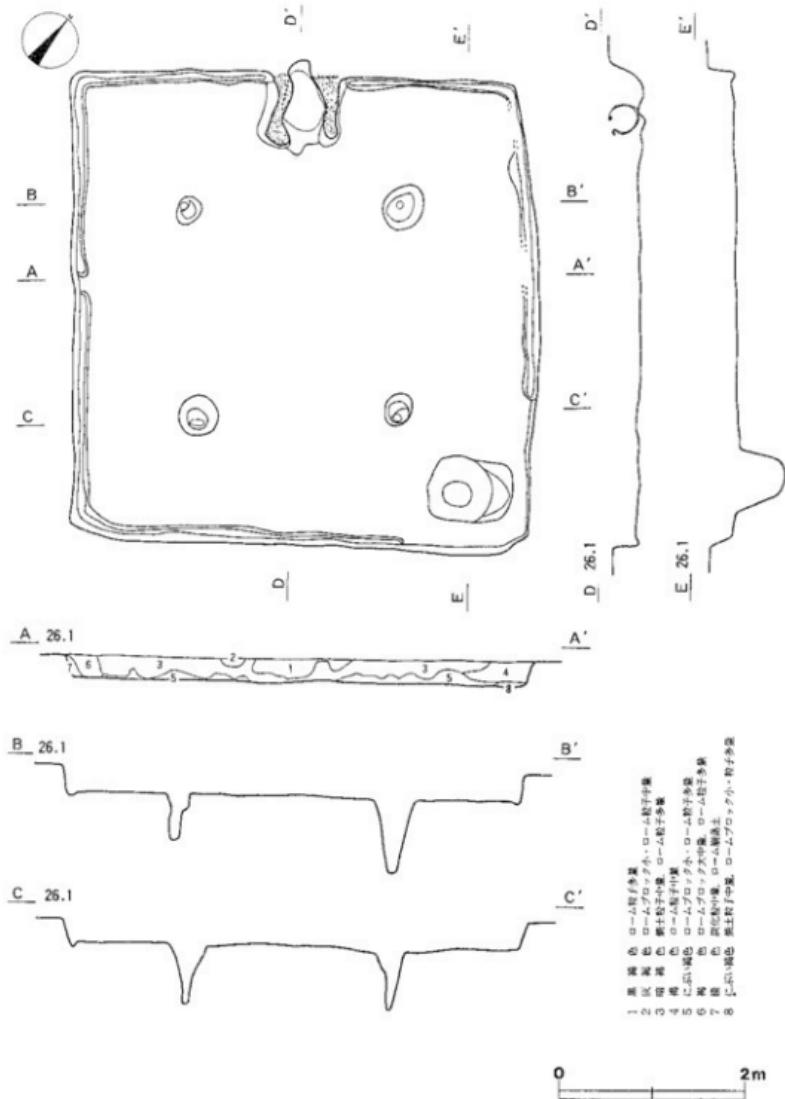
床 平坦で明瞭に検出されている。硬軟の変化は特に見られない。壁溝はおおむね全周しているが東コーナーにある貯蔵穴付近では曖昧になる。幅8~12cm, 深さ4~5cmである。

ピット 5ヶ所検出された。うち主柱穴は4ヶ所である。いずれも円形で径27~42cm, 深さ50~80cmと深い。これらに囲まれた内区の面積は5.1m<sup>2</sup>である。

貯蔵穴は竈と対面する壁の右コーナーに検出された。東壁際に浅い段を有して掘りこまれるが、本体は小形の円形を呈し径70cm, 深さ54cmを測る。底面は丸みを帯びている。入り口部ピットは検出されなかった。



第57図 第12号住居址遺物出土状況



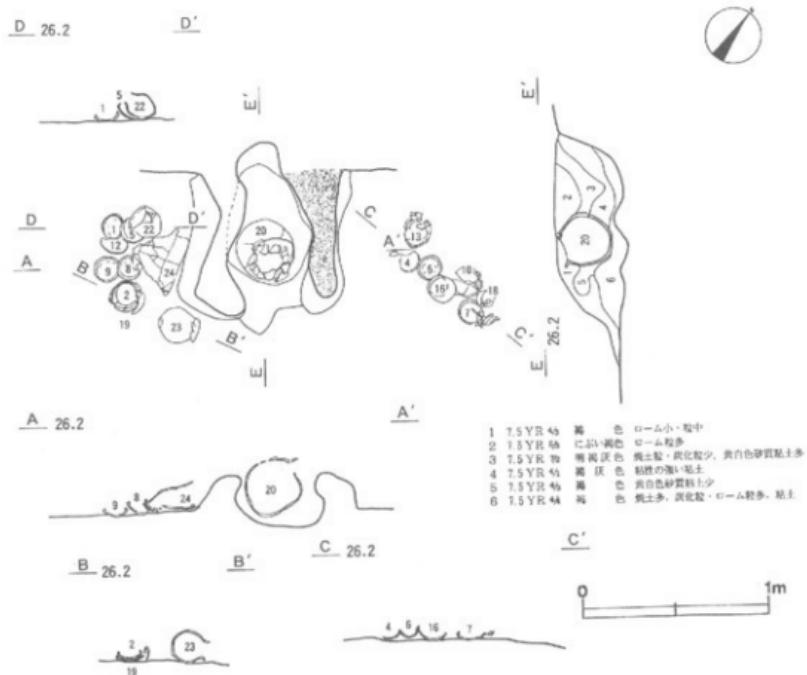
第58図 第12号住居址発掘

**龜** 北壁中央部に黄白色砂質粘土を使用して構築されている。全長1m、残存袖部幅30cmである。燃焼部底面から若干浮いた焼土混じりの粘土上に竈囊(20)が残されている。支脚は残っていない。

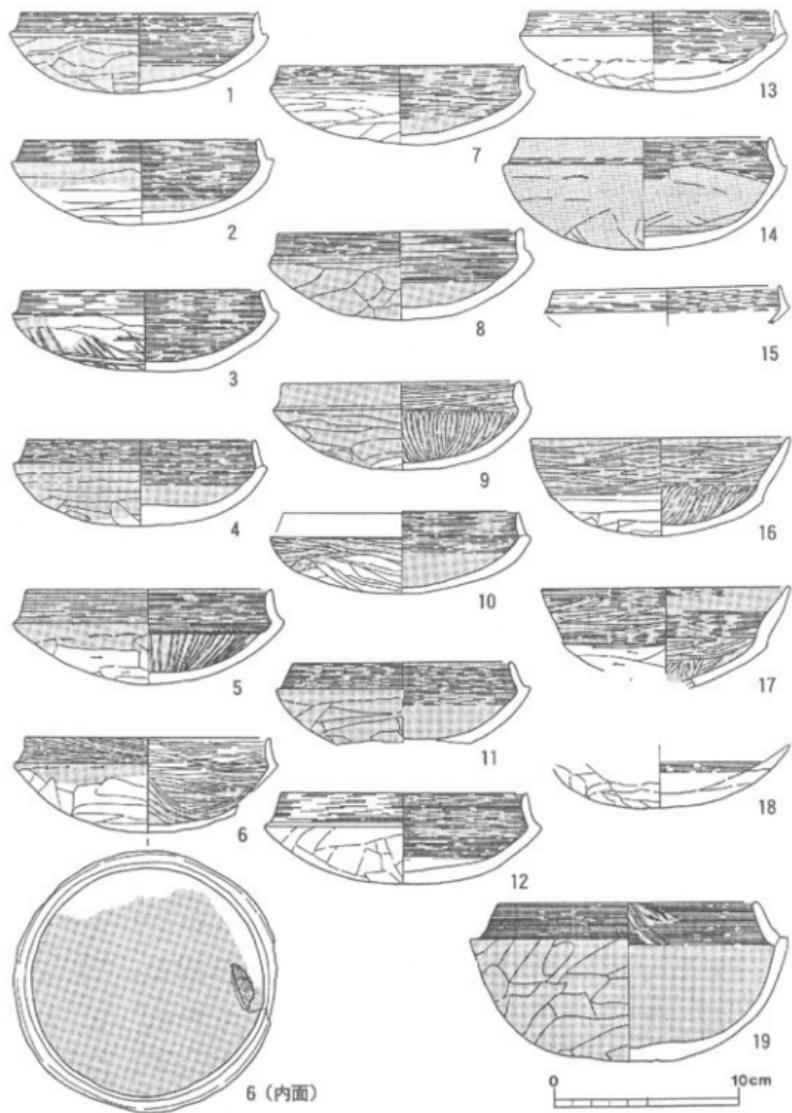
**覆土** 穴壁際の堆積土はロームブロックを多量に含み埋め戻し土かと考える。床からかなり浮いて少量の焼土塊が散見される。あらかじめ戻した後一部に火をつけて片付けしたものと考える。

**遺物** 竈周辺には袖の両脇に多量の一括上器群が遺棄されている。左脇には瓶(24)・小型甕(22, 23)・杯7個体(1・2・5・8・9・12・19), 右脇には杯7個体(4・6・7・10・13・16・18), うち1個(6)に穿孔が見られる。また竈に正対する壁際に3個体分の杯(11・14・17)が覆土上層から床にかけて流れ込んだ様に出土している。

**所見** 燃焼部の甕を含む上記の遺物は全て当住居で使用され、住居解体時に遺棄されたものであると判断する。従って当住居の帰属時期を6世紀後半と考える。



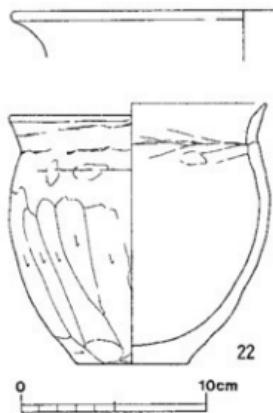
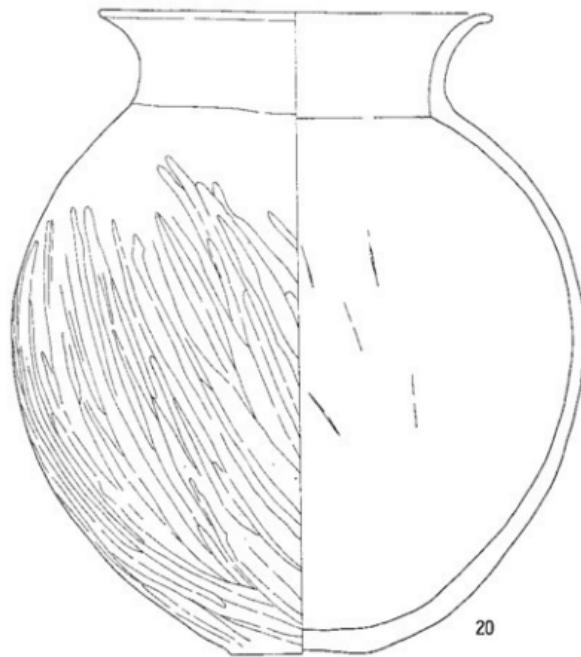
第59図 第12号住居址カマド



第60図 第12号住居址出土遺物(1)

## 第12号住居址

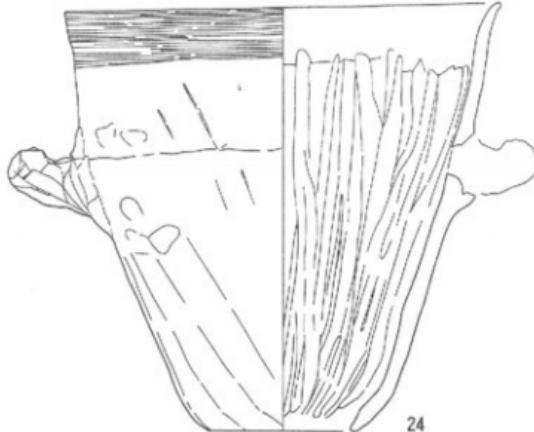
固版No.	基盤 地形	法量	高さ位高 残存率	焼成	粒土	色調	器形・技法の特徴	備考
1 上師部	林 上師部	A : 12.7 C : 4.3	カマド場 一括資料 完形	良好	砂粒殆ど目 立たない	黒褐色	口縁は幅く内傾し、内外とも丁寧なナデ。体部はケズリ後ミガキ状のナデ。墻の様はシャープで丸っている。内面丁寧なナデ。	内面丸に黒彩 (造仕上げ) 220
2 林 土師器	林 土師器	A : 12.6 C : 4.5	カマド場 一括資料 完形	良好	砂粒殆ど目 立たない	黒褐色	口縁は幅く内傾し、内外とも丁寧なナデ。体部はケズリ後ミガキ状のナデ。墻の様は明瞭で尖り気味。内面丁寧なナデ。	内面と外縁付近 墨彩 (造仕上げ) 221
3 林 土師器	林 土師器	A : 10.9 C : 4.4	入口部床 直付 ほぼ完形	良好	砂粒殆ど目 立たない	黒褐色	口縁は幅く内傾し、内外とも丁寧なナデ。体部はケズリ後ミガキ状のナデ、さらにも流い木口によるナデ。底面シャープで尖る。	外面の一部と内 面黒彩 (造仕上げ) 223
4 林 土師器	林 土師器	A : 12.3 C : 4.6	カマド場 一括資料 2/3	良好	砂粒殆ど目 立たない	黒褐色	口縁は幅く内傾し、内外とも丁寧なナデ。体部はケズリ後ミガキ状のナデ。墻の様は明瞭で尖り気味。内面丁寧なナデ。	内外共黒彩 (造仕上げ) 224
5 林 土師器	林 土師器	A : 13.3 C : 5.1	カマド場 一括資料 2/3	普通	砂粒殆ど目 立たない	黒褐色	口縁は内傾気味で、内外とも丁寧なナデ。体部はケズリ後ミガキ状のナデ。底面は丸みを帯びている。内面斜め状にギザ。	内面と外縁付 近黒彩 (造仕上げ) 225
6 林 上師部	林 上師部	A : 13.2 C : 5.1	カマド場 一括資料 完形	良好	砂粒極端 に含む	暗赤褐色 にほい赤褐色	口縁は内傾し内外とも横筋のミガキ。体部は丸みがありケズリ後ミガキ状のナデ。墻の様は明瞭で尖り気味。内面丁寧なミガキ。	内面と外縁付 近黒彩 (造仕上げ) 226
7 林 土師器	林 土師器	A : 13.2 C : 4.2	カマド場 一括資料 ほぼ完形	良好	砂粒殆ど目 立たない	黒褐色	口縁は幅く内傾し、内外とも丁寧なナデ。体部はケズリ後ミガキ状のナデ。墻の様は明瞭で尖り気味。内面丁寧なナデ。	内面と外縁付 近黒彩 (造仕上げ) 227
8 林 土師器	林 土師器	A : 13.4 C : 4.7	カマド場 一括資料 ほぼ完形	良好	砂粒殆ど目 立たない	にほい褐色 黒褐色	口縁は内傾気味で、内外とも丁寧なナデ。体部はケズリ、複数の棱窓だが丸く丸みを帯びてを持つ。内面丁寧なナデ。	内外共黒彩 (造仕上げ) 227
9 林 土師器	林 土師器	A : 13.0 C : 4.7	カマド場 一括資料 ほぼ完形	良好	砂粒殆ど目 立たない	明赤褐色 にほい赤褐色	口縁は内傾気味で、内外とも横筋のミガキ。体部は丸みがありケズリ後ミガキ状のナデ。底面は丸みがありケズリ後ミガキ状のナデ。墻の様は廿字が付く。内面斜め状のミガキ。	内外共黒彩 青黒彩 近黒彩 (造仕上げ) 228
10 林 土師器	林 土師器	A : 12.6 C : 4.6	カマド場 一括資料 ほぼ完形	良好	砂粒殆ど目 立たない	黒褐色	口縁は幅く内傾し、内外とも丁寧なナデ。体部はケズリ後ミガキ状のナデ。墻の様は明瞭で尖り気味。内面丁寧なナデ。	内面と外縁付 近黒彩 (造仕上げ) 229
11 林 土師器	林 土師器	A : (11.8) C : (4.4)	入口部底 土中位 1/3	良好	砂粒殆ど目 立たない	黒	口縁は幅く内傾し、内外とも丁寧なナデ。体部はケズリ後ミガキ状のナデ。墻の様は明瞭で尖り気味。内面丁寧なナデ。	内外共に黒彩 (造仕上げ) 230
12 林 土師器	林 土師器	A : 13.3 C : 4.9	カマド場 一括資料 2/3	良好	砂粒殆ど目 立たない	暗	口縁は幅く内傾し、内外とも丁寧なナデ。体部はケズリ後ミガキ状のナデ。墻の様は廿字が付く。内面斜め状のミガキ。	(造仕上げ) 231
13 林 土師器	林 土師器	A : 13.3 C : 4.3	カマド場 一括資料 2/3	普通	砂粒殆ど目 立たない	にほい黃褐色 にほい	口縁は幅く内傾氣味。内外とも丁寧なナデ。体部はケズリ後ミガキ状のナデ。墻の様は丸く鈍い。内面丁寧なナデ。	内外共黒彩 (造仕上げ) 235
14 林 土師器	林 土師器	A : 13.5 C : 6.0	入口部底 下位 2/3	良好	砂粒殆ど目 立たない	黒	口縁は内傾し、内外とも丁寧なナデ。体部は丸みがあり深く、ケズリ後ミガキ状のナデ。底面は明瞭でシャープ。内面丁寧なナデ。	内面と外縁付 近黒彩 (造仕上げ) 234
15 林 土師器	林 土師器	A : 13.3 C : 4.3	カマド場 一括資料 2/3	良好	砂粒殆ど目 立たない	にほい黄褐色 にほい	口縁は内傾し、内外とも丁寧なナデ。体部は丸みでヘラナデ。外底部に数枚の擦痕あり。研磨痕も付くと思われる。	扁平しているが 黒彩かどうか問題 でない。233
16 林 土師器	林 土師器	A : 14.0 C : 5.3	カマド場 一括資料 完形	良好	更張格子 細 を含む	黒褐色	口縁は幅く外傾し、端部は尖り気味。口口は横に上部を横位のミガキ。体部は丸みを帯び、ケズリ、内面へ3段ギザ。	内面と外縁付 黒彩 (造仕上げ) 234
17 林 土師器	林 土師器	A : 13.4 C : (5.5)	入口部底 直付 2/3	良好	砂粒殆ど目 立たない	黒褐色	口縁は幅く外傾し端部は尖り気味。体部は丸みを帯びて上部を横位のミガキ。底面は丸みを帯び、ケズリ。内面丁寧なヘラミガキ。	内面と外縁付 黒彩 (造仕上げ) 235
18 林 土師器	林 土師器	C : (3.0)	カマド場 一括資料 1/3	良好	砂粒殆ど目 立たない	にほい褐色 黒褐色	底の底盤。 外面ケリ、内面丁寧なナデ。	237
19 林 土師器	林 土師器	A : 14.0 C : 8.5	腹上位 ほぼ完形	良好	砂粒を微 量含む	黒褐色	丸洗。口縁部は内傾し内外とも横筋のシャープなナデ。体部はランダムなヘラナデで、焼痕の場所に焼肉有す。	内外共面に黒彩 (造仕上げ) 238
20 鹿 土師器	鹿 土師器	A : 21.2 B : 7.6 C : 14.2	カマド内 床直 ほぼ完形	普通	右耳、左耳 等骨格を多 量含む	兩耳褐色	上げ底底の底部から耳部につながる、頭部→口跡は外反し、端部は膨らませる。下脚部横位のミガキ、内面ナデ。	カマド通り付け 42
21 鹿 土師器	鹿 土師器	A : (25.0) C : (25)	覆土 口縫部 小片	普通	砂粒殆ど目 立たない	赤褐色 明黄褐色	外反し内外共に丁寧な模ナデ。	236
22 鹿 土師器	鹿 土師器	A : 13.8 B : 6.0 C : 14.1	カマド場 一括資料 ほぼ完形	普通	小砂粒多量 を含む	赤褐色 明黄褐色	平底の底部とその周辺は横位のケズリ、胴部→頭部にかけて横位のケズリ。口縁に凹る周辺はゆるく端部は尖い。内面丁寧なナデ。	238
								239



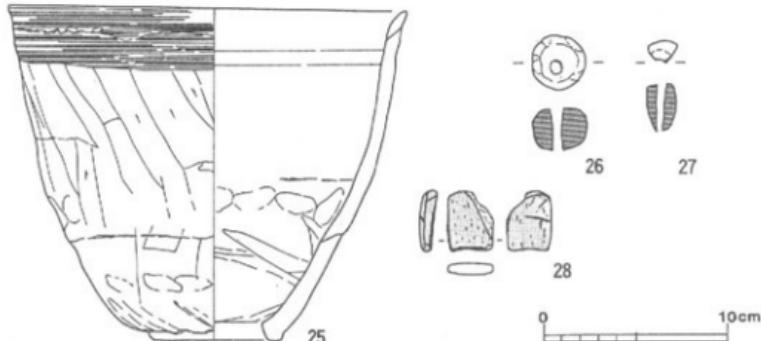
第61図 第12号住居址出土遺物(2)

図版No	器種 基形	法量	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・枝法の特徴	備考
23	唐 土師器	A : 13.2 B : 6.5 C : 19.3	カマド脚 一括資料 ほぼ完形	普通	細砂粒を多 量に含む	暗赤褐 暗暗赤褐	平底。脚部はやや長脚気味。裏面内面は肥 厚し口縁は丸くなめられる。削型ケズリ後 斜位のミガキ、内面丁寧なナデ。	237
24	唐 土師器	A : 23.6 B : 7.9 C : 23.1	カマド脚 一括資料 ほぼ完形	良好	砂粒殆ど目 立たない	黄褐	無底型。肩部はストレートに外傾。口縁は ナデて、薄く仕上げる。下割部腰位のヘラ ナデ、内面鍛錬のミガキ。足付把手2ヶ所。	241
25	唐 土師器	A : 21.4 B : 7.0 C : 21.0	床直 2/3	良好	石英・長石 小粒を少度 含む	棕	ドーナツ状の輪を底部にし、側形は直に外 傾する。口縁部はナデで尖らせる。外面鍛 錬のケズリ、内面ナデ。	240

図版No	種類	最大長	最大幅	重量	孔径	出土位置	残存率	焼成	胎土	色調	備考
26	丸玉	2.4	1.6	(1.7)	(0.5)	覆土	1/4	普通	砂粒微量	明褐	243
27	丸玉	2.2	2.8	17.5	0.7	覆土	完形	普通	砂粒微量	棕	242



24



25

第62図 第12号住居址出土遺物(3)

第13号住居址 (第63・64図 PL28・29)

位置 調査区中央部 R-23・24, S-23・24X

規模・形態 主軸長7m (張り出し部1.5mを含む)、幅5.5mの方形で、南壁中央に短冊形の張り出し部を持つ。総面積は32m<sup>2</sup>である。

主軸方位 N-34°-W

壁 床から18~25cmと低く、全体的に後世の削平を受けている。

床 明瞭に検出された。中央部は平坦だが、入り口部は凹凸があり硬化している。

壁構は竈周辺と東壁下でとぎれがみられたが、元は全周していたと考える。幅10~12cm、深さは5~6cmである。

ピット 8ヶ所検出され内4個が主柱穴である。いずれも径70~80cmの大形円形を呈し、一旦、段をもって深く掘り込まれている。最深部は床から60~65cmを測る。これらに開まれた内側の面積は5.6m<sup>2</sup>である。

西側主柱穴列に並んで北壁下と入り口寄りに2個小形のピットが検出されている。形も不整形で、深さも3cm、14cmと浅い。性格は不明。

竈に正対する小形円形ピットは入り口部と考える。径20cm、深さ10cmで、周辺の床は帯状に盛り上がりピットを囲むように回っており、踏み固められて硬化している。

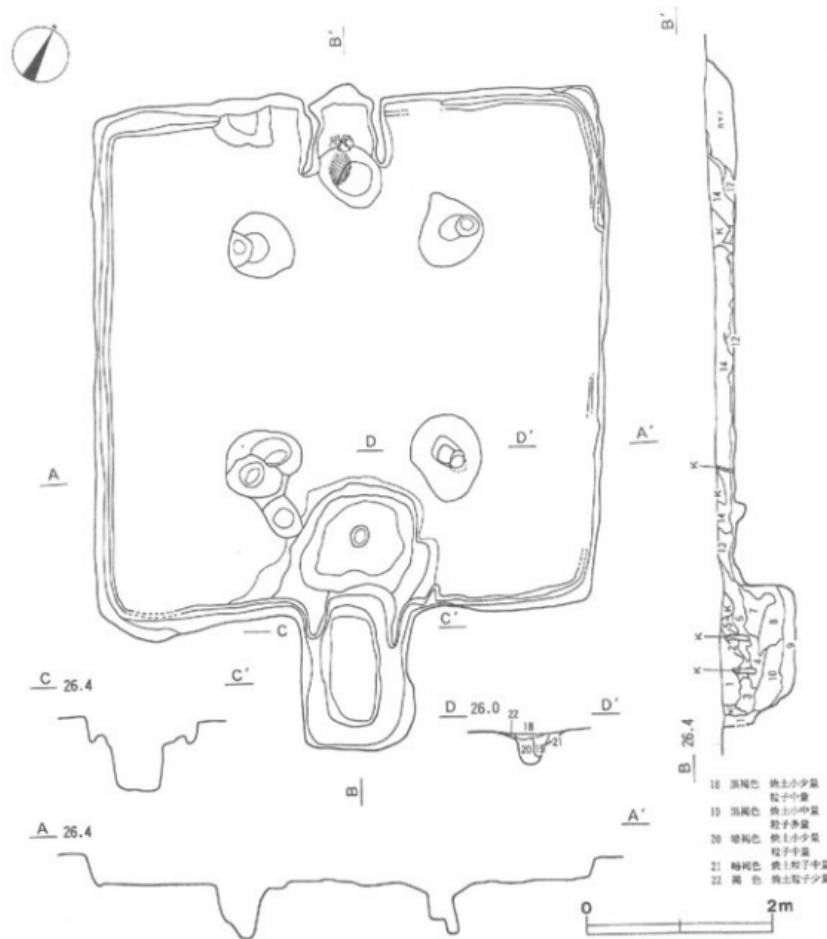
張り出し部ピットは長軸1.5m、短軸1.1mの短冊形で南壁中央部に検出された。床レベルまで掘り下げた後、さらに一段掘り込んでおり、検出面から底までの深さは80cmである。埋土の最下層には水浸されたような均質土が平坦に堆積しており、その上部に上屋焼失時のものと思われる焼上粒の散った土がのっているので、上屋解体時までピットは開口していたものと考える。

竈 北壁中央部に黄白色砂質粘土を使用して構築されている。全長1.3m、残存袖部幅60cm。燃焼部は径約65cm、深さ3cmほどの楕円形に掘りくぼめられ、焼上が若干検出された。この燃焼部の上端床より小型甕(9)と桶(6)が重なって出土しており、器壁が荒れていることなどから代用支脚と考える。9を据えた後6を打ち欠いて置き、高さの調節を行っている。

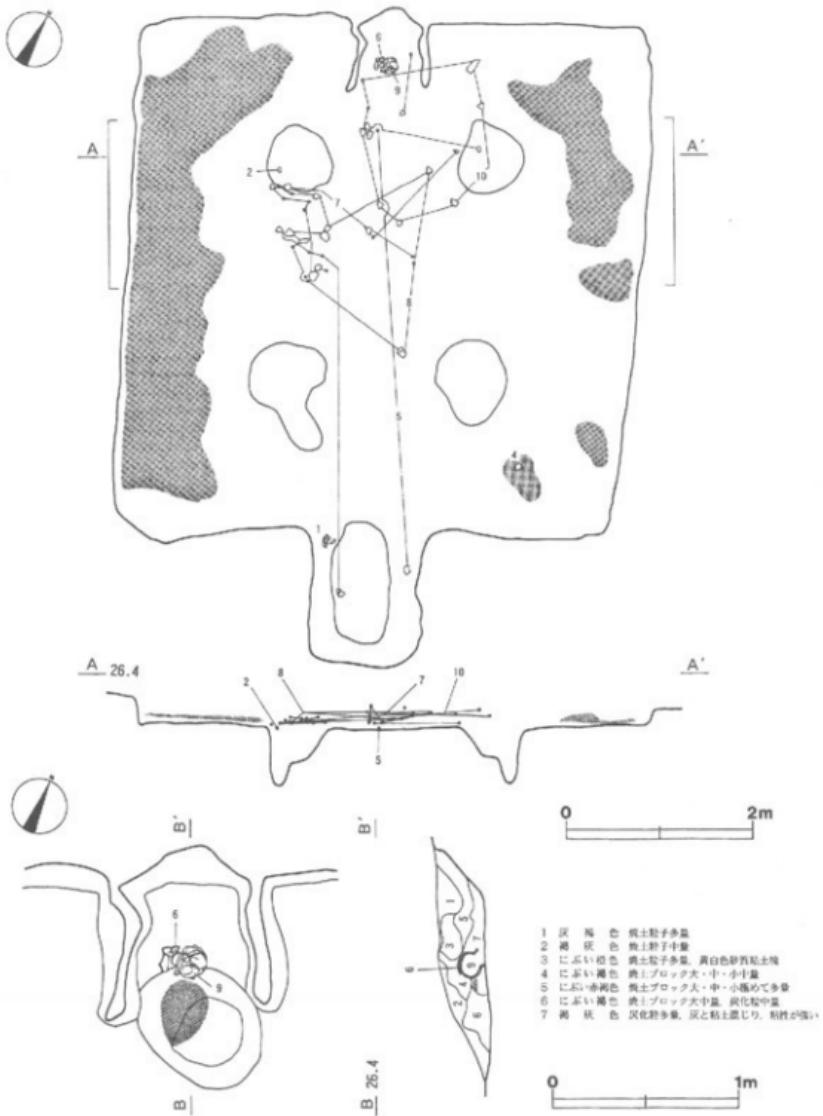
覆土 削平により残存状態が悪い。最下層には焼土・炭化物とも見られず、その上に遺物細片を含む焼土混じりの土が堆積する。焼上は東西壁際に多く特に西側で顯著である。中央部では焼土にかわって土器細片が散乱しているが、上屋焼失・崩壊の前後、時間をあけずに廃棄されたものと考える。

遺物 当住居にともなうと考える遺物は竈に遺棄された代用支脚(6・9)である。

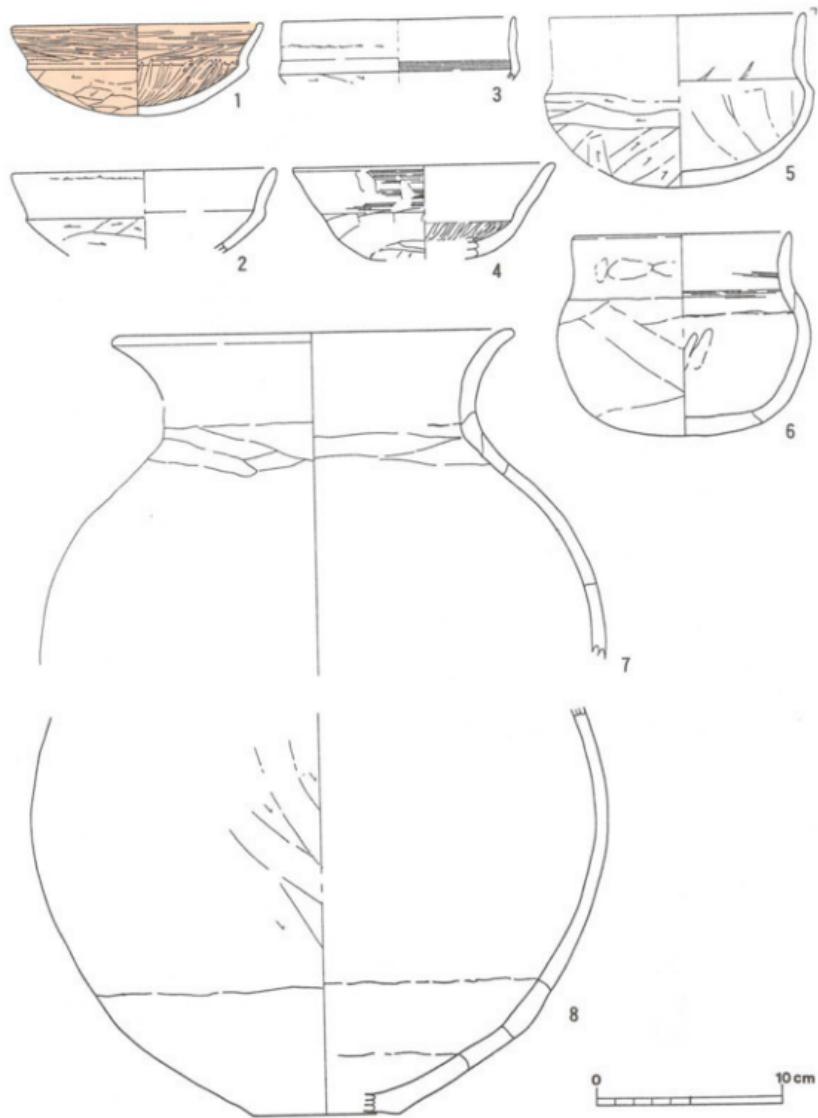
所見 日常什器をほとんど持ち出した後、上屋解体の手段として放火したものと思われる。時期を示す良好な遺物が出土していないが廃棄遺物・住居構造から総合的に判断して6世紀前半の住居と考える。



第63図 第13号住居址完掘



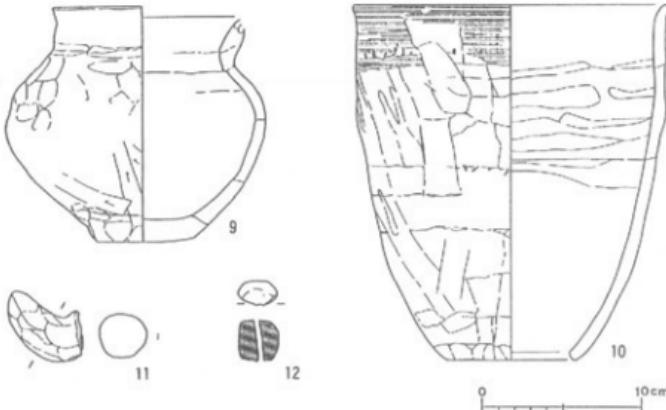
第64図 第13号住居址遺物出土・カマド



第65図 第13号住居址出土遺物(1)

第13号住居址

回収No	器種 器形	法量	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	参考				
1	杯 土師器	A : 13.6 C : 4.9	入口部裏 土下位 完形	良好	砂粒など目 立たない	橙	口縁は外傾し、済子の積製品。内外共側位 のミガキ。体部はケズリ。後は崩陥。内面 放射状のミガキ。	内外丸赤彩 244				
2	杯 土師器	A : [14.0] C : (4.5)	小片	良好	石英・長石 中粒を少量 含む	明黄褐	口縁は外傾し、内面ミガキ。外面ナデ。体 部はヘラナデ	内面と外口縁を 赤彩 245				
3	杯 土師器	A : [12.6] C : (3.4)	小片	良好	石英・長石 小粒を少量 含む	明赤褐	非常に薄手で焼成も堅牢。口縁はやや膨ら みを有し直立する。内外共に丁寧な輪ナデ。 体部との境の部はよく焼けた。	246				
4	杯 土師器	A : (14.2) C : (5.1)	覆土下位 1/3	良好	石英・長石 特大粒を少 量含む	橙	口縁はほぼ直に長く外傾。外面模ナデ後 輪位のミガキ。内面見込み部に放射状のミ ガキ。後はない。	247				
5	碗 土師器	A : (13.8) C : 9.2	覆土下位 1/3	普通	石英・長石 小粒少量含 む	橙	口縁は高く直立し、内外共丁寧なナデ。体 部は外面ヘラナデ、内面ヘラナデ後ナデ。 境の後はない。	248				
6	楕?	A : (11.4) C : (10.9)	カマド床 1/3	良好	石英・長石 小粒少量含 む	明赤褐	口縁は直立し、内外共横ナデ。体部は丸改 でヘラナデ後ナデ。内面ナデ。ただし剥離 風化が進行している。	代用支柱 No.9とセットで 出土 249				
7	甕 土師器	A : (21.7) C : (17.8)	覆土下位 口縁部 1/2	普通	石英・長石 小粒を多量 に含む	明黄褐	頸部は比較的高く、ゆるやかに外反。胎部 は丸く熱められた。外面ナデ。内面頸部付 近ケズリ。以下ナデ。	252				
8	甕 土師器	B : (8.0) C : (21.6)	覆土下位 底部1/2	普通	石英・長石 小粒を多量 に含む	褐 にぶい橙	平底。肩部は膨大。 ケズリの後ナデ。内面主にナデ、剥離。	251				
9	甕 土師器	A : 12.0 B : 5.9 C : 14.9	カマド床 2/3	普通	石英・長石 中粒を多 量含む	橙	全体に逆頭丘瓶を残し器壁は凸凹している。 口縁は直立、底部はわずかに外傾する。特に 内面剥離風化が著しい。	代用支柱 No.6とセットで 出土 250				
10	甕 土師器	A : (19.6) B : (7.6) C : 22.5	覆土中位 1/2	良好	石英・長石 少量含む	橙	無底甕。ほぼストレートに覆く口縁の頸部 は丸く熱められる。外面ケズリの後窓位の ヘラナデ。内面ミガキのナデ。	253				
回収No	種類	最大長	最大幅	重量	孔径	出土位置	残存率	焼成	胎土	色調	備考	
11	把手	5.6	2.8	—	—	覆土	小片	良好	砂粒微量	赤褐	鉢	254
12	丸玉	2.5	2.5	(9.3)	(0.3)	覆土	1/3	普通	砂粒微量	にぶい橙	鉢	255



第66図 第13号住居址出土遺物(2)

第14号住居址 (第67・68図 PL30)

位置 調査区中央部 S-26, T-26区

規模・形態 主軸長3.1m、幅3.1m。面積9.6m<sup>2</sup>の方形

主軸方位 N-34°-E

壁 垂直に立ち上がり、高さ40cm。

壁溝は竈付近で途切れがあるが、元は全周していたものと考える。幅9~12cm、深さ5cmである。

床 平坦で明瞭に検出された。

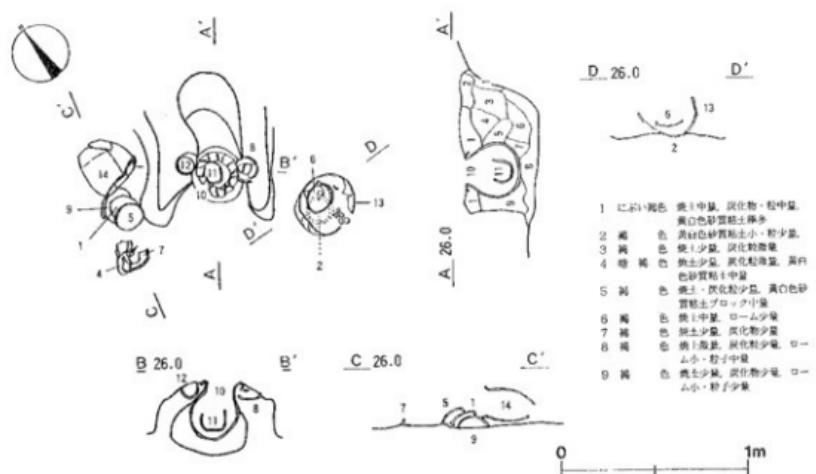
ピット 小形の貯蔵穴が1ヶ所、竈右脇に検出されたのみである。長軸60cm、短軸48cmの楕円形を呈し、深さ33cm。

竈 北壁中央部に黄白色砂質粘土を使用して構築されている。全長80cm、残存袖部幅約40cmである。

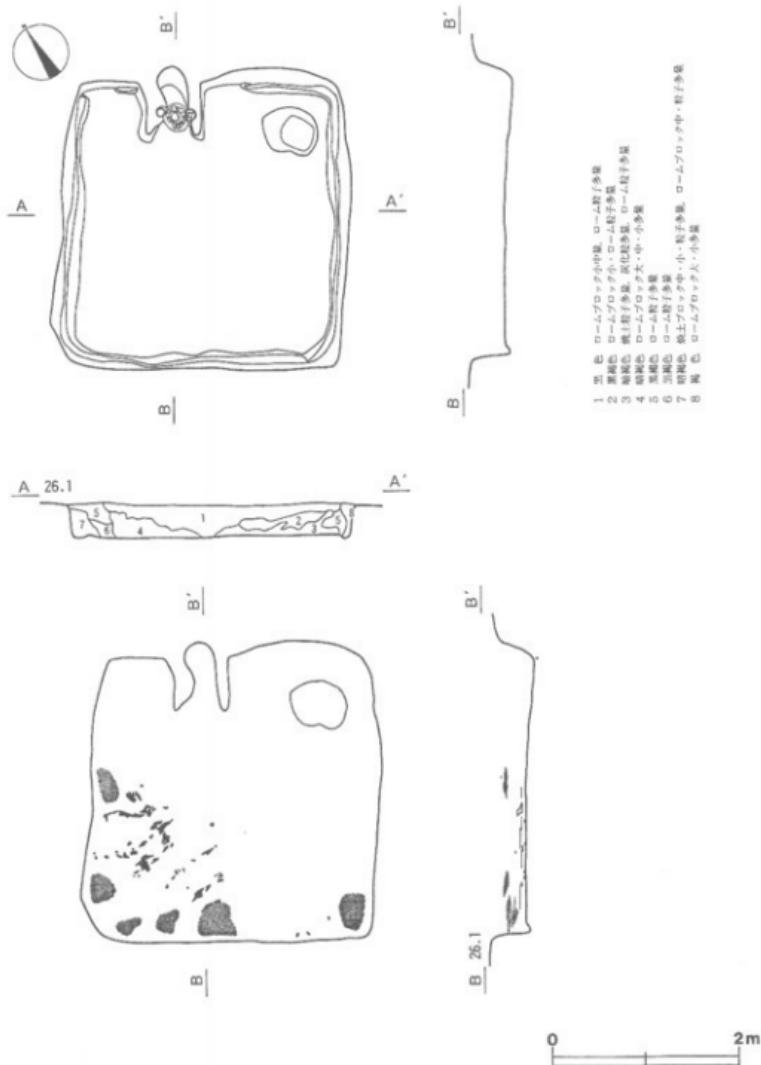
燃焼部には竈袋(10)が造営され、この頸部補強と思われる杯(8)・小型袋(12)が構築七中に埋設されていた。竈袋の内部には、もともと口縁に架けていたと思われる小型袋(11)が落ち込んでいた。下部にあるべき支脚は抜かれている。

覆土 床直上に比較的まとまった炭化物が検出されており、その上位に焼土の出土が見られた。

焼土は西南コーナーから南壁付近に集中している。



第67図 第14号住居址カマド



第68図 第14号住居址完掘

**遺物** 電脇脳に土器が集中する。左脇には瓶(14)・伏せられた杯3点(1・5・9)・正位の杯2点(4・7)，右脇からは杯(2)の上に，上下端をそろえて打ち欠いた甕の胴部(13)を据え，さらに内部に杯(6)を入れ子にしたセットが出土している。これらは窓内の一括土器と共に当住居にともなうものと考える。

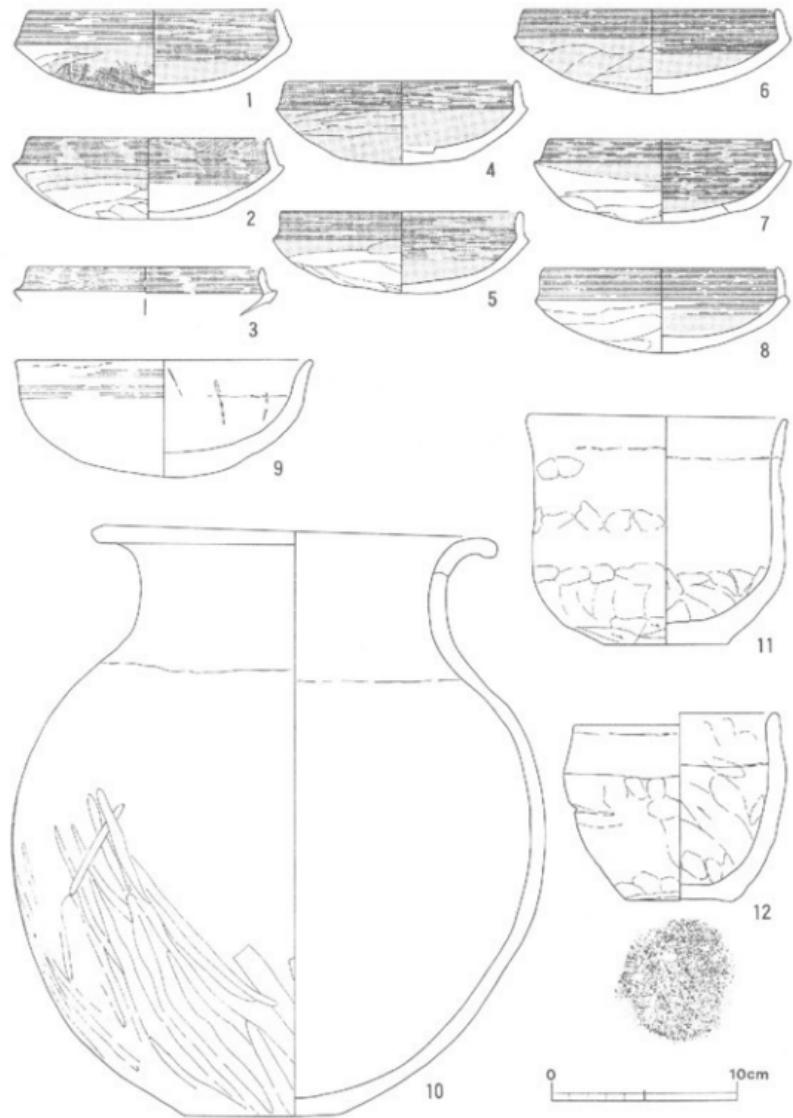
**所見** 当集落では最小の所有面積である。主柱穴が検出されないのも生活面の確保の為，従来と異なる造築法をとったからであろう。

電脇の一括土器が大破していないことから屋根材の焼失・崩落など激しい動きはなかったと考えるが，解体に際しては火を使用している。

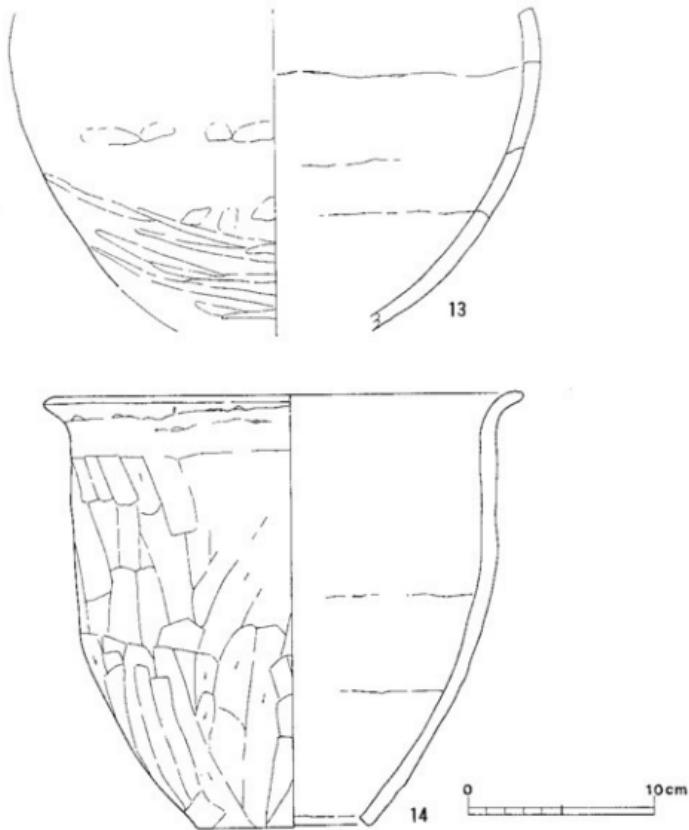
出土した土器から判断して6世紀後半の住居と考える。

#### 第14号住居跡

団体名	器種 形態	法算	出土位置 現存跡	焼成	粘土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	杯 土師器	A : 13.6 C : 4.5	カマド脇 一括資料 完形	良好	砂粒殆ど目 立たない	黒褐	口縁は内傾し、内外共にナデ。体部は刷毛目。棱は甘く丸みを帯びている。内面ナデ。	内面と外底部に 黒彩の軋跡あり (造付上げ) 256
2	杯 土師器	A : 13.0 C : 4.4	カマド脇 一括資料 ほぼ完形	良好	砂粒殆ど目 立たない	にせい褐色	口縁は内傾し、内外共にナデ。体部はケズリ後ミガキ状のナデ。境の棱は明顯に盛り出される。内面丁寧なナデ。	Na.13號の下部よ り出土 (造付上げ) 261
3	杯 土師器	A : (12.6) C : (1.9)	カマド脇 一括資料 小片	良好	砂粒目立た ない	明赤褐	口縁は低く内傾し、内外共に楕ナデ。境の棱は明顯で歯々突起している。	Na.9號より出土 258
4	杯 土師器	A : 12.6 C : (4.5) 2/3	カマド脇 一括資料	良好	砂粒殆ど目 立たない	黒褐	口縁は低く内傾し、内外共にナデ。体部はミガキ状のナデ。棱は歯々突きしている。	内外共に黒彩 (造付上げ) 259
5	杯 土師器	A : 13.0 C : 4.4	カマド脇 一括資料 完形	普通	砂粒殆ど目 立たない	明赤褐 黒褐	口縁は直立し、内外共にナデ。体部はケズリで境の後は厚膜だが短い。内面ナデ。	内面と外口縁付 近黒彩 (造付上げ) 262
6	杯 土師器	A : (13.8) C : 4.5 2/3	カマド脇 一括資料	良好	砂粒殆ど目 立たない	黒褐	口縁は内傾気味で、内外共にナデ。体部はケズリ後ミガキ状のナデ。内面ナデ。	内外共に黒彩 Na.13號の内部か ら出土、直立上 げかげ 257
7	杯 土師器	A : (12.2) C : 4.5 2/3	カマド脇 一括資料	良好	砂粒殆ど目 立たない	にせい褐色 黒褐	口縁は内傾し、内外共にナデ。体部はケズリ。境の棱は明顯につまみ出される。内面 丁寧なナデ。	内面と外口縁付 黒彩 (造付上げ) 260
8	杯 土師器	A : 12.6 C : 4.6	カマド内 一括資料	良好	砂粒殆ど目 立たない	にせい褐色	口縁は直立し、内外共にナデ。体部はケズリ後ミガキ状のナデ。境の棱は厚膜だが甘く丸みを帯びている。内面ナデ。	内面底部に黒彩 Na.10・11・12と 共伴 263
9	瓶 土師器	A : 16.9 C : 6.3	カマド内 一括資料 ほぼ完形	普通	石英・長石 少量含む	橙	口縁はヨコナナメで体部と区別され、強かに外傾した後端部を丸く削っている。体部はケズリ後ナデ。内面ナデ。	264
10	甕 土師器	A : 21.8 B : 8.6 C : 31.9	カマド内 一括資料 ほぼ完形	普通	石英・長石 小粒を多量に 含む	明赤褐	平底。瓶の側面から腹部は長めに直立し、口縁部はリバーオーに開く。全体に丁寧なナデ。下脚部は研磨のミガキ。	内部よりNo.11號 出土 266
11	甕 土師器	A : 13.8 B : 6.6 C : 12.4	カマド内 一括資料 ほぼ完形	普通	石英・長石 小粒を多量に 含む	橙	平底で、下脚部の下脚部ははば直立する口 縁につながる。外面ナデ。底部周辺はケズリ。内面ナデ。底部小薙痕あり。	No.10號の内部か ら出土 267
12	甕 土師器	A : 11.0 B : 5.8 C : 10.1	カマド内 一括資料 完形	普通	石英・長石 棱を多量に 含む	赤褐 明赤褐	平底。体部は直に外傾するが、上脚部に変化点を持つ。外脚半に指擦れ痕。内面ユビナデ。底部木薙痕。	No.8・10・11と 共伴 266
13	甕 土師器	C : (17.2)	カマド脇 一括資料 1/3	普通	石英・長石 棱を多量に 含む	明赤褐	底脚の縫、外面ナデ。底部近くは底いミガキ。内面剥離・風化が進むが、主にナデ。土器の上、下脚そろえて打ち欠いている。	No.2杯上にのっ ており内部より Na.6が出土 268
14	甕 土師器	A : 30.0 B : 9.3 C : 23.1	カマド脇 一括資料 ほぼ完形	普通	石英・長石 中筋。雪母 多量に含む	にせい褐色 にせい赤褐	無底型。脚部は内側気味に開き、上部では 直立。口縁部を強くにぎり曲げる。脚 部底位のケズリ。口縁・内面丁寧なナデ。	269



第69図 第14号住居址出土遺物(1)



第70圖 第14號住居址出土遺物(2)

### 第15号住居址 (第72図 PL31)

位置 調査区中央部 集落址の南端 R-26, Q-26・27区

規模・形態 主軸長3.9m, 幅4.2m。16.38m<sup>2</sup>の長方形

主軸方位 N-30°-E

壁 なだらかに傾斜して立ち上がる。高さ18~26cm。検出面は全体的に後世の削平をうけている。

床 おおむね平坦で明瞭に検出された。壁溝はない。

ピット 2ヶ所。うち1ヶ所は貯蔵穴で、竈右脇、竪穴のコーナーに掘削されている。小形の不整円形を呈し、径68cm、床からの深さ29cmである。底面は丸みを帯び、壁際には浅い平坦面を有す。

他の1ヶ所は貯蔵穴にはば対面しており、径30cm、深さ5cm余りである。明瞭に主柱穴と呼べるものは検出されなかった。

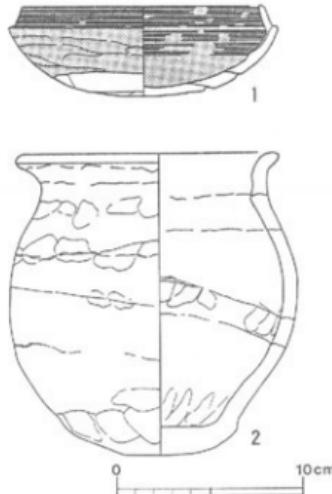
竈 住居北壁東コーナー寄りに黄白色砂質粘土を使用して構築されている。全長96cm、袖は残っていない。

燃焼部は径40cmほどの円形に掘りくぼめられ、深さは10cmと深い。

覆土 竪穴中央部の床面上に焼土の堆積がみられ、床自体も焼けて赤変しているところがある。これに混じって少量の炭化材も出土している。これらの上に堆積する4層は焼土・炭化物とともに含まない粘土で、人為的な埋め戻し層の可能性がある。

遺物 貯蔵穴周辺の床上からほぼ完形に復される謎(2)と杯(1)が出土しており、この住居にともなうものと考えるが廃棄・遺棄の別は明瞭にしがたい。

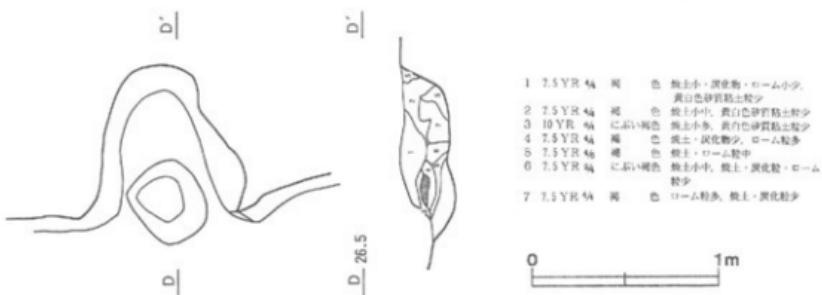
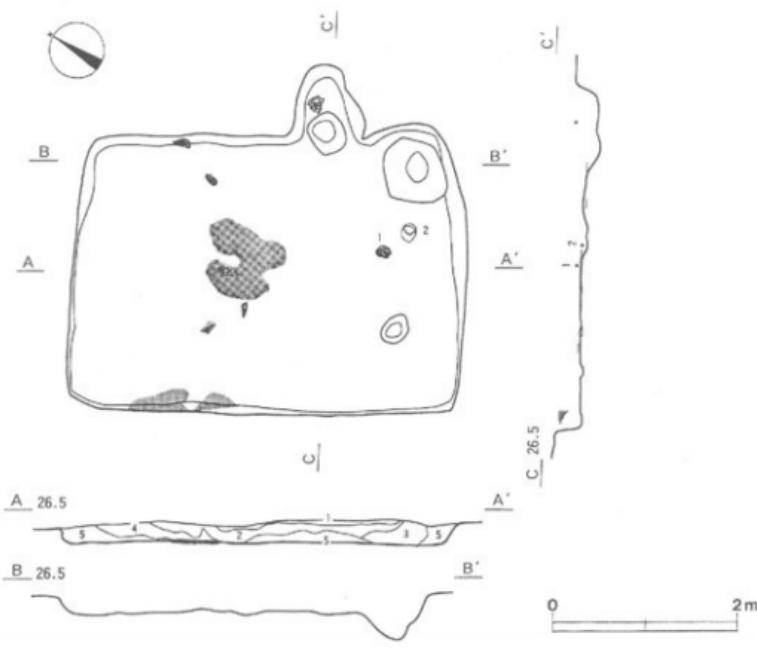
所見 出土遺物より6世紀後半の住居と考える。



第71図 第15号住居址出土遺物

### 第15号住居址

器種 器形	法量	出土位置 残存率	焼成	粘土	色調	器形・技法の特徴	施号
1 杯 土師器	A: 13.0 C: 4.8	竪穴下位 ほぼ完形	良好	砂質粘土 立たない	黒褐色	口縁は内折し内外共ナデ。全体はケズリ後 ミガキ洗いナデ。接は明瞭でシャープに造 り出される。内面ナデ。	内面と外上体部 に黒彩 270 (漆仕上げか)
2 甕 土師器	A: 14.3 B: 8.6 C: 16.1	床直 ほぼ完形	普通	石英・長石 繊維を少度 含む	にぼい開	丸みを帯びた平底。器形は不整形で、肩部、 口縁部などにむかみを生じている。内外共 主にナデ。粘土巻き上げ痕を残す。	271



第72図 第15号住居址完掘・カマド

第16号住居址 (第73・74図 PL32)

位置 調査区北端。谷津を見おろす台地突端の傾斜地。R-3・4, S-3・4区

規模・形態 主軸長5.36m, 幅5.54m, 29.7m<sup>2</sup>の方形

主軸方位 N-15°-W

壁 斜面に構築されているために西側は崩壊をうけているが、残存状況のよいところで判断すると、元は70~80cmの深さでは直立に掘り込まれていたものである。

床 内区中央は樹木根による擾乱をうけているが、他は平坦で明瞭に検出された。

壁溝は窓部を除いて全周し、幅8~18cm、深さ4~10cmを測る。

ピット 8ヶ所検出された。うち主柱穴は4ヶ所、いずれも円形で径40~46cm、深さ47~58cmである。内区の面積は7.28m<sup>2</sup>となる。東側主柱穴の間に二個は補助柱穴と考える。径は14~30cmと小形で、10cm内外の深さである。

竈に正対するものは入り口部ピットと考える。径16cm、深さ8cmと小形である。隣接して赤彩された杯(8)が床から出土している。

貯蔵穴は入り口側の左コーナーに掘削されている。梢円形を呈し、長軸90cm、短軸67cm、深さ73cmを測る。穴の縁辺(1・3・4・7・13)と内部(2・6・9・11)に杯の集中がみられ、お互いに接合する為、元は全て縁辺部に安置されていたものと考える。

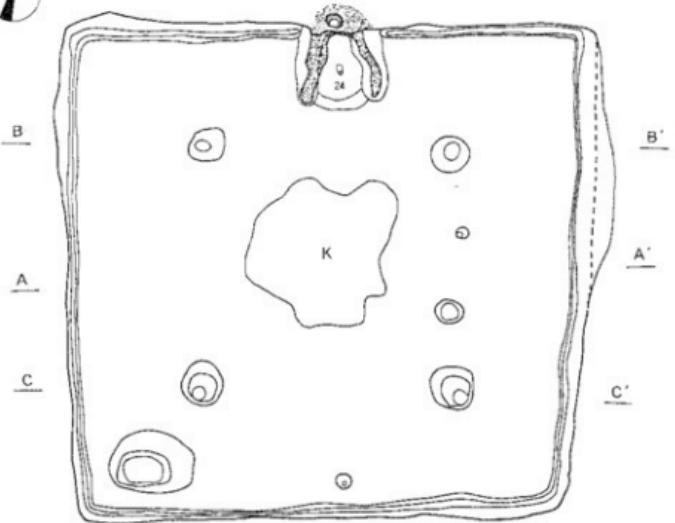
竈 北壁中央部に黄白色砂質粘土を使用して構築されている。煙道部ピットが良好に残存しており、上端径36cmで、内面號および検出面の輪郭はよく焼けて赤変している。煙道部を含む全長1.05m、残存袖部幅55cmである。

燃焼部は約7cm掘り込まれており、底面に貼りついて土製支脚(24)とその上部に甕(22)が検出された。甕は肩部を穿孔されており造楽されたものである。

覆土 中央部を除く各外区に焼土が見られ、特に貯蔵穴・竈脇周辺が顕著である。

遺物 当住居にともなう遺物は上記竈と貯蔵穴脇の一一群である。また東側外区の覆土中から穿孔土器(14)を含む4個体(10・12・18)の杯が出土しており、特に14は穿孔した破片も同所から発見されたので、竈穴埋没以前にここで儀礼が行われたことを暗示していると思われる。

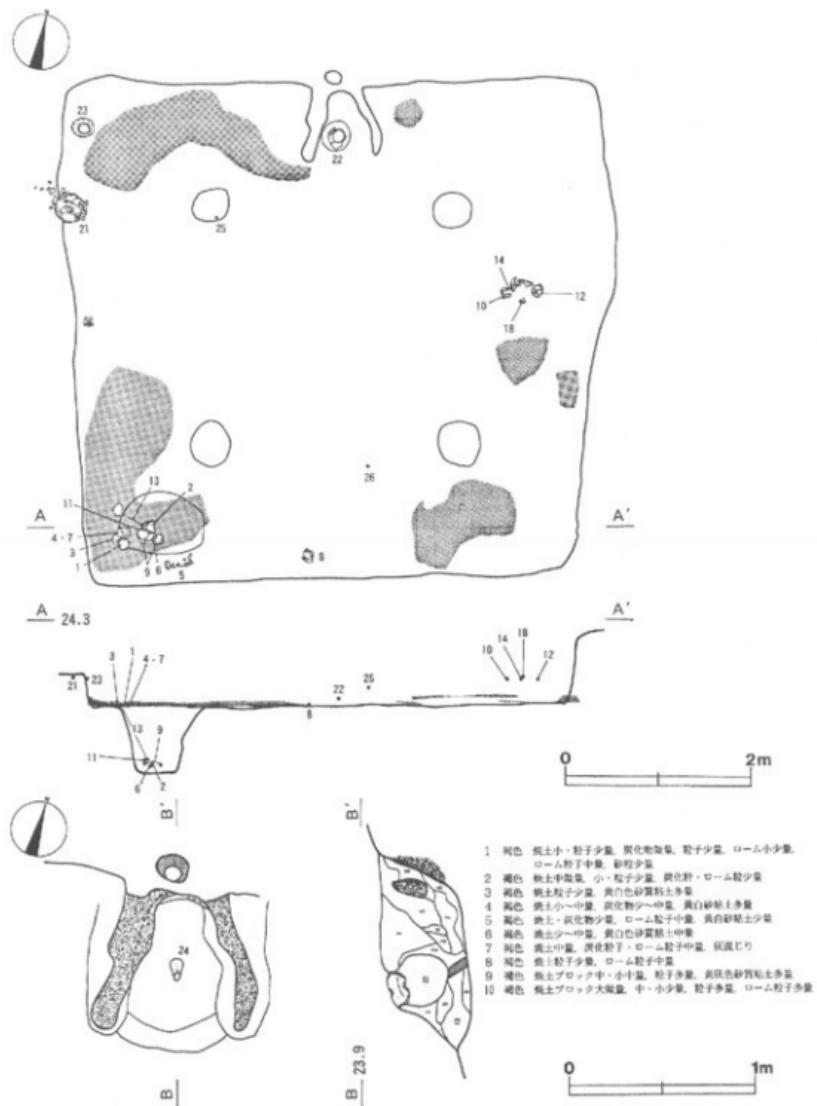
所見 焼土をはさんで2度の儀礼が行われた可能性がある。一度めは竈底穿孔および貯蔵穴脇への土器安置、二度めは上屋解体後で竈穴が埋まりきるまでの間である。出土一括遺物から6世紀末から7世紀初頃の住居と考える。

A 24.3B 24.3C 24.3A'B'C'

1. 面. ロームブロック小少量. ローム粘土少量.
2. 面. 地上灰砂層. ロームブロック小. 粘土多量.
3. 面. ロームブロック小少量. 粘土少量.
4. 面. ロームブロック中等量. 小. 粘土中等. ロームブロック小少量. 粘土少量.
5. 面. 地上灰砂層. ロームブロック中等量. 小. 粘土中等. ロームブロック小少量. 粘土少量.

2m

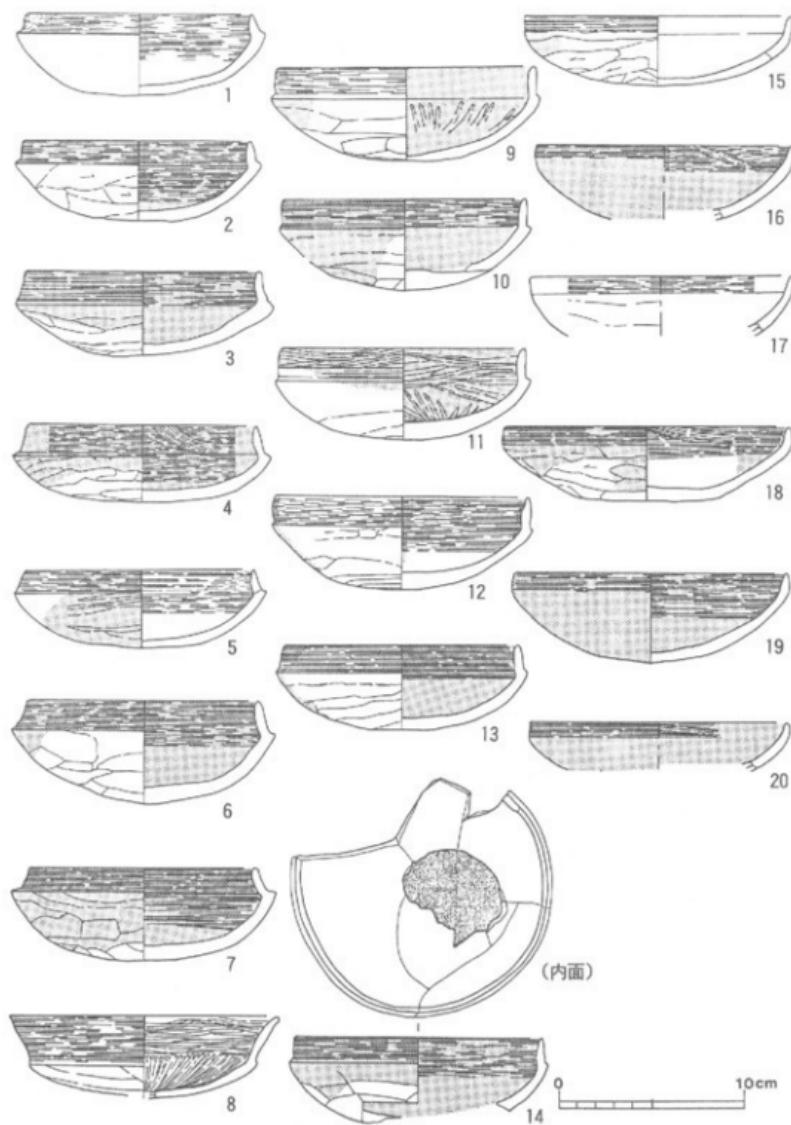
第73図 第16号住居址完掘



第74図 第16号住居址遺物出土状況

## 第16号住居址

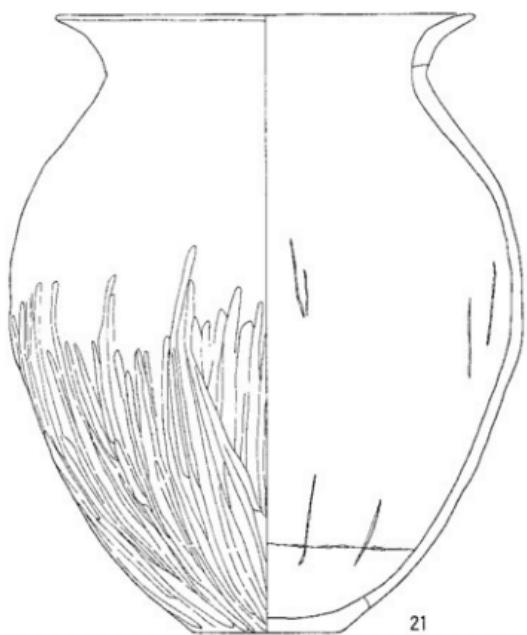
図版No.	部屋番号	法環	出土位置 或有り	焼成	胎土	色調	造形・技法の特徴	備考
1	移 土師器	A : 12.0 C : 4.4	野鹿穴脇 一括資料 未定形	良好 砂粒殆ど目 立たない	に赤い褐	白織灰(内側)し内外灰ナテ。体部はケズリ 後ミガキ状のナテ。窓の縁はシャープで尖 っている。内面ナテ。		273
2	移 土師器	A : 12.2 C : 4.3	野鹿穴内 一括資料 ほぼ未形	良好 砂粒殆ど目 立たない	黒褐	口縁は短く直立し内外共ナテ。体部はケズリ 後ミガキ状のナテ。窓の縁はシャープで尖 っている。内面ナテ。	内面と外口縁付 近黒彩柄あり (漆仕上げ) 274	
3	移 土師器	A : 12.4 C : 4.6	野鹿穴脇 一括資料 未定形	良好 砂粒殆ど目 立たない	に赤い黄褐	口縁は内側灰味で胎部近くでやや反る。内 外共ナテ。体部はケズリ。窓の縁はよく角 張っている。内面ナテ。	内面と外口縁付 近黒彩柄あり (漆仕上げ) 280	
4	移 土師器	A : [12.2] C : 4.1 1/2	野鹿穴脇 一括資料	良好 砂粒殆ど目 立たない	黒褐	口縁は内側灰味で胎部近くでやや反る。内 外共ナテ。体部はケズリ。窓の縁はよく角 張っている。内面ナテ。	内面と外口縁付 近黒彩柄 (漆仕上げ) 289	
5	移 土師器	A : 12.3 C : 4.2 2/3	覆工下段	良好 砂粒殆ど目 立たない	明黄褐	口縁は極く内側灰味。内外共ナテ。体部は ケズリ後ミガキ状のナテ。窓の縁はシャー プで尖っている。内面ナテ。	外口縁付近に黒 彩柄あり (漆仕上げ) 299	
6	移 土師器	A : 12.4 C : 4.6 2/3	野鹿穴内 一括資料	普通 砂粒殆ど目 立たない	明黄褐	口縁は長く内側し内外共ナテ。体部は丸み があり。ケズリ後ミガキ状のナテ。窓の縁 は明瞭につまみ出される。内面ナテ。	内面と外口縁付 近黒彩柄あり (漆仕上げ) 283	
7	移 土師器	A : 12.2 C : 5.0	野鹿穴脇 一括資料 未形	良好 砂粒殆ど目 立たない	黒褐	口縁は内側稍粗荒くでやや反る。内外共 ナテ。体部は丸みがあり。ケズリ後ミガキ 状のナテ。窓はより灰味につまみ出される。 (漆仕上げ) 282	内面と外口縁付 近黒彩柄あり (漆仕上げ) 282	
8	移 土師器	A : 14.4 C : 4.5	床直 ほぼ未形	良好 砂粒殆ど目 立たない	複合	口縁は高く外反し外ほか。内は横位のみ ガラ。体部はケズリ。窓は口縁ナテにより 内面に造り出される。内面放射状のミガキ。	内面と外口縁付 近黒彩柄 (漆仕上げ) 291	
9	移 土師器	A : 14.0 C : 5.1	野鹿穴内 一括資料 2/3	不良 石英・貝具 堅密性強烈片 を含む	褐 に赤い	口縁は内側灰味で直立し内外共ナテ。体部ケ ズリ。窓は堅密につまみ出される。内面放 射状のミガキ。	内面と外口縁付 近黒彩柄 (漆仕上げ) 275	
10	移 土師器	A : [13.2] C : 4.9 1/2	覆工上位	良好 砂粒殆ど目 立たない	に赤い褐	口縁は内側灰味で直立し内外共ナテ。体 部はケズリ後ミガキ状のナテ。窓は明瞭だ が丸みを帯びる。内面ナテ。	漆仕上げ 279	
11	移 土師器	A : 13.1 C : 4.9	野鹿穴脇 一括資料 未定形	普通 雲母樹脂片 を多量に含 む	黄褐 黒褐	口縁は直立し内外共横位のみガラ。体部 はケズリ。窓は明瞭で直立している。内面放 射状のミガキ。	内面と外口縁付 近黒彩柄 (漆仕上げ) 281	
12	移 土師器	A : 13.6 C : 5.0	覆工中段 ほぼ未形	良好 砂粒殆ど目 立たない	に赤い黄褐	口縁は内側灰味で直立し内外共ナテ。体 部はケズリ。窓は明瞭で尖っている。内面ナ テ。	漆仕上げ 286	
13	移 土師器	A : 12.6 C : 4.5	野鹿穴脇 一括資料 ほぼ未形	良好・少 砂粒 量多く 含む	に赤い褐	口縁は直立し内外共ナテ。体部はケズリ 後ミガキ状のナテ。窓は内面が丸みを帯 びている。内面ナテ。 (漆仕上げ) 287	内面と外口縁付 近黒彩柄 (漆仕上げ) 287	
14	移 土師器	A : 13.4 C : (4.6) 2/3	覆工中位	良好 砂粒殆ど目 立たない	灰黄褐	口縁は直立し胎部で極く内側。体部はヘラ ナテ。窓は明瞭で鋭く尖り気味。	内外共に圓錐 底部丸い・外 (漆仕上げ) 276	
15	移 土師器	A : [14.4] C : 3.8 1/2	覆土	良好 砂粒・雲母 樹脂片を多 量に含む	に赤い褐	口縁は極く鋭く直立し内外共ナテ。体部 はケズリ。内面ナテ。	外口縁の一辺に 黒彩柄あり (漆仕上げ) 285	
16	移 土師器	A : (13.6) C : (4.0) 小片	覆工 1/2	良好 砂粒殆ど目 立たない	無色	口縁は極く内側し内外共に丁寧な横ナテ。 体部はヘラナテ。	内面共に黒彩 (漆仕上げ) 278	
17	移 土師器	A : (14.0) C : (3.2) 小片	覆土	良好 砂粒殆ど目 立たない	褐 に赤い黄褐	口縁は極く直立し内外共に横ナテ。体部 外側ヘラナテ。	漆仕上げ 277	
18	移 土師器	A : [15.4] C : 4.0 1/2	覆土中段	良好 砂粒殆ど目 立たない	明褐色 に赤い褐	口縁は鋭く直立し内外共に丁寧な横ナテ。 体部はヘラナテ。内面丁寧なナテ。	内面の一部と外 口縁に黒彩柄 (漆仕上げ) 272	
19	移 土師器	A : 14.6 C : 4.9 2/3	覆土	良好 砂粒目立た ない	褐褐	口縁は極く内側し内外共に丁寧な横ナテ。 体部ヘラナテ。内面丁寧なナテ。	内外共に黒彩 (漆仕上げ) 284	
20	移 土師器	A : (14.2) C : (3.5) 小片	覆土	良好 砂粒目立た ない	褐 に赤い褐	口縁は極く直立し内外共に丁寧な横ナテ。	内外共に黒彩 (漆仕上げ) 288	
21	覆 土師器	A : (22.8) B : 8.2 C : 33.1	覆土上位 1/2	普通 石英・長石 粒多量に含 む	褐	平底。長石氣味の柄部で、兩部はゆるやか に屈折し口縫部は尖り氣味。柄部下部は 窓部のミガキ。内面ヘラナテ。ナテ。	294	



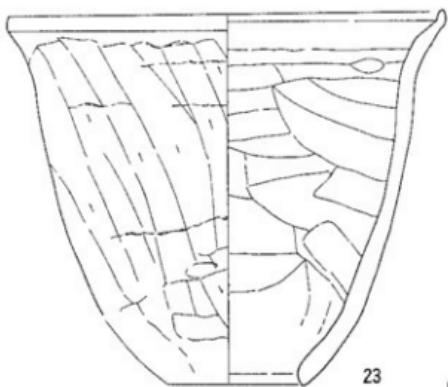
第75図 第16号住居址出土遺物(1)

図版No	器種 器形	法算	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
22	甕 七跡甕	A : 25.0 B : 9.7 C : 31.0	カマド内 床底 はねだ形	普通	石英・長石 多量に含む	明赤褐	手施の中央部粘土が内部にはずれる。底部 の孔を後に充填したかのよう。最大径は測 中央上寄り、底部は外傾し口縁はラップ状	肩部に細長い穿 孔あり焼成後外 →内 293
23	甕 土師甕	A : 23.4 B : (7.3) C : 20.8	腰上位 はねだ形	普通	石英・長石 大粒を多量 に含む	黄褐	無底型。底部近くは尾すぼまりで口縁はゆ るやかに外反。底部は傾く被られ直立する。 外面磁化のケズリ。内面ナデ。	295

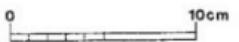
図版No	種類	最大径	最大幅	高さ	孔径	出土位置	残存率	焼成	胎土	色調	備考
24	支脚	13.9	7.8	—	—	覆土	完形	普通	砂粒微量	棕	298
25	丸玉	3.2	3.5	36.0	0.8	腰上・下位	完形	普通	砂粒微量	明赤褐	296
26	丸玉	2.6	2.9	19.6	7.5	覆土中位	完形	普通	砂粒少草	明赤褐	297



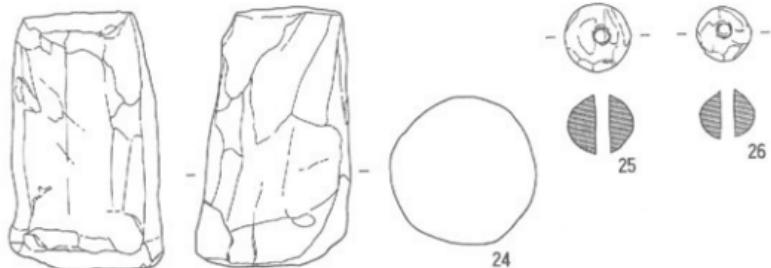
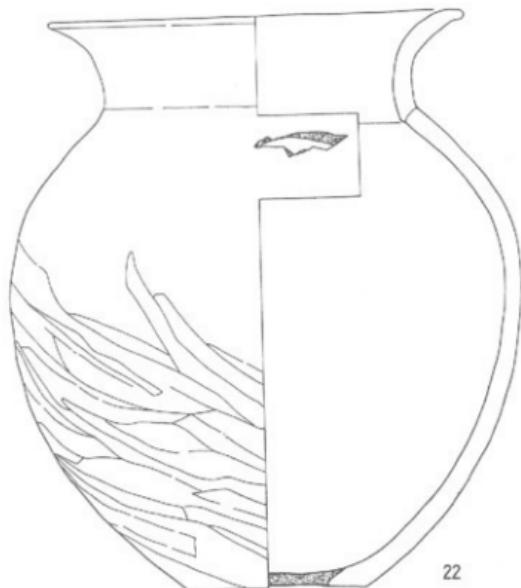
21



23



第76図 第16号住居址出土遺物(2)



第77図 第16号住居址出土遺物(3)

## 第17号住居址 (第78図 PL33)

位置 調査区西端 谷津を見おろす緩斜面突端。M-15・16, N-15・16, O-16・17区

規模・形態 主軸長7.4m, 7.3m。面積54m<sup>2</sup>の方形

主軸方位 N-31°-E

壁 やや外傾して立ち上がり、残存状態のよいところの高さは45~50cm。北側斜面の壁は削平をうけて一部消滅している。また南西コーナー付近は後世の擾乱をうけている。

床 平坦で明瞭に検出された。壁溝は南東コーナー付近で検出されるのみである。その幅8cm, 深さ6cm。

ピット 6ヶ所検出された。うち主柱穴は4ヶ所、いずれも小形の円形を呈し、径30~46cm、深さ60~77cmを測る。内区の面積は16.8m<sup>2</sup>である。

竈に正対する壁下の小形ピットは入り口部と考える。径40cm、深さ約9cmである。

貯蔵穴は竈左脇にもうけられる。おおむね円形を呈し、径1m、深さ68cm。壁は緩やかに傾き底面は平坦である。

窓 北壁中央部に黄白色砂質粘土を使用して構築されている。全長約1m、残存袖部幅55cm、ピットは検出されなかつたが、煙道にかかるものと思われる焼土が窓外側の検出面で見つかっている。燃焼部は径60cm余り、深さ4cmの不整円形に掘り深められる。

### 覆土

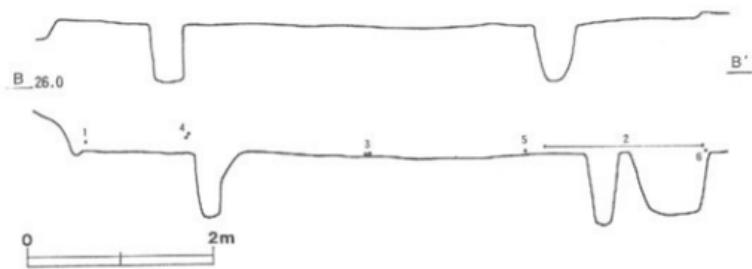
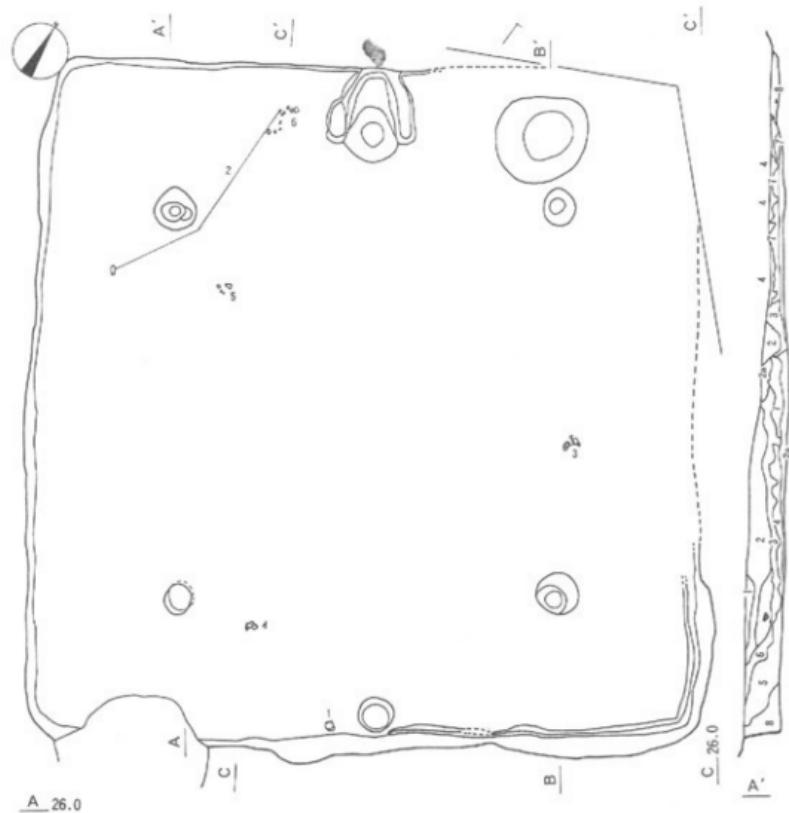
- 1 7.5YR2/3 黒褐色土 焼土小ブロック・粒子微量、ロームブロック小・粒子微量 しまり強
- 2 7.5YR2/3 黒褐色土 焼土粒子微量、ロームブロック小・粒子少量
- 3 7.5YR3/4 暗褐色土 ロームブロック中微量・小少量・粒子多量
- 4 10YR4/6 褐色土 ローム粒子多量・黒色土粒少量 しまり弱
- 5 10YR4/6 褐色土 焼土小ブロック・粒子微量、ロームブロック大微量・同小中量、粒子極めて多量
- 6 7.5YR3/3 暗褐色土 焼土小ブロック・粒子微量、ロームブロック小・中・粒子少量
- 7 10YR4/6 褐色土 焼土・炭化物粒子微量、ローム粒子極めて多量 粘性弱
- 8 10YR4/6 褐色土 ローム粒子極めて多量

遺物 覆土中に散見されるのみで残存状態はよくない。住居にともなう可能性の強いものは3と5の杯だが、いずれも細片で廃棄されたものであろう。

所見 大形の住居にかかわらず遺物が少ないが、杯は小型化して粗製のものが含まれるなど総合的に判断して、7世紀前半以降の住居と考える。

## 第17号住居址

剖面No	器種 器形	法量	出土位置 残存率	焼成	粘土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	杯 土師器	A:12.6 C:4.4	覆土下位 2/3	良好 砂粒殆ど無 立たない	種		口縁は内傾気味で内外共ナデ。体部は偏平でケズリ後ミガキのナデ。接はシャーブに劣っている。内面ナデ。	305
2	杯 土師器	A:(12.8) C:(3.7)	覆土下位 小片	普通 砂粒殆ど無 立たない	赤黒		口縁は短く直立気味で横ナデ。体部へラナデ。内面丁寧なナデ。器の縁は明顯で三角状に太く尖っている。	299



第78図 第17号住居址完掘

図版No	器種 形態	法量	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	参考
3	杯 土師器	A : (11.0) C : 3.8	床直 2/3	良好	板小鉢を 含む	明黄褐	小型の杯。口縁は短く僅かに内傾し、内外共ナデ。体部はケズリ。縁は突出しないが明瞭。内面ナデ。	301
4	杯 土師器	A : 10.8 C : 4.1	覆土中位 1/2±完形	良好	砂粒帯と目 立たない	黒褐	小型の杯。口縁は内傾し、内外共ナデ。体部はケズリ後ミガキ後のナデ。成形上の柔みを生じている。縁は突出しないが明瞭。	309
5	杯 土師器	A : (14.8) C : (3.5)	覆土最下 部 小片	良好	砂粒目立た ない	明褐灰 程	口縁は極度に内傾し、内外共に横ナデ。体部もヘラナデ後ナデ。	303
6	杯 土師器	A : (14.8) C : (3.7)	床直 1/3	普通	細砂粒を少 量含む	棕 灰黄褐	口縁は極度に内傾し、内外共ナデ。体部ケズリ。内面ナデ。	302
7	杯 土師器	A : (14.8) C : (2.9)	覆土 小片	良好	石英、長石 小粒少量含む	棕	口縁は極度に内傾し、内外共に丁寧な横ナデ。体部ヘラナデ、内面丁寧な横ナデ。	304
8	高台付杯 土師器	A : (12.8) C : (5.7)	覆土 1/3	良好	石英、長石 雲母小粒を 含む	に赤い程 黒	外側クロナデ、内側ほのミガキ。	内画 307
9	小皿 土師器	B : (3.0) C : (1.1)	覆土 小片	普通	石英、長石 小粒少量含 む	明赤褐 橙	無切りの底面部。体部に幾筋回転痕がわざかに残る。	涅入品 306

図版No	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	出土位置	残存率	参考
10	鉄製品	不明	—	(2.8)	0.1	覆土	小片	308
11	鉄製品	不明	(2.5)	1.0	0.4	覆土	1/3	309
12	鉄製品	鍼	(14.0)	3.6	0.4	覆土	小片	310

第78図 第17号住居址出土遺物

第18号住居址 (第80図 PL.33)

位置 調査区北寄り U-8・9, V-8・9区

規模・形態 調査区外に伸びるため全掘されていないが検出状態から復元すると  $5 \times 4.8\text{m}$  の方形となる。復元面積は  $24\text{m}^2$

主軸方位 N- $22^\circ$ -W

壁 北西コーナー付近は区外に伸びており削平も受けている。残存する南壁で判断するとやや傾斜を持ち、32cm余りの高さとなる。

床 平坦で明瞭に検出されている。塗溝は全周するようであるが、南壁で幅26cm、深さ25cmと異常に大きく、東壁では幅8cm、深さ6cmのノーマルな規模に縮小する。

ピット 2ヶ所。柱穴は検出されなかった。1つは性格不明上坑で竪穴中央床に検出され、ほぼ楕円形を呈し長軸1m、短軸80cm、深さ57cmを測る。

他の1つはやや南よりの住居床に掘削されており、楕円形で長軸76cm、短軸56cm、深さ30cmである。

廐 検出されなかった。焼土や構築土などの分布もなく、構築されていたものか疑わしい。

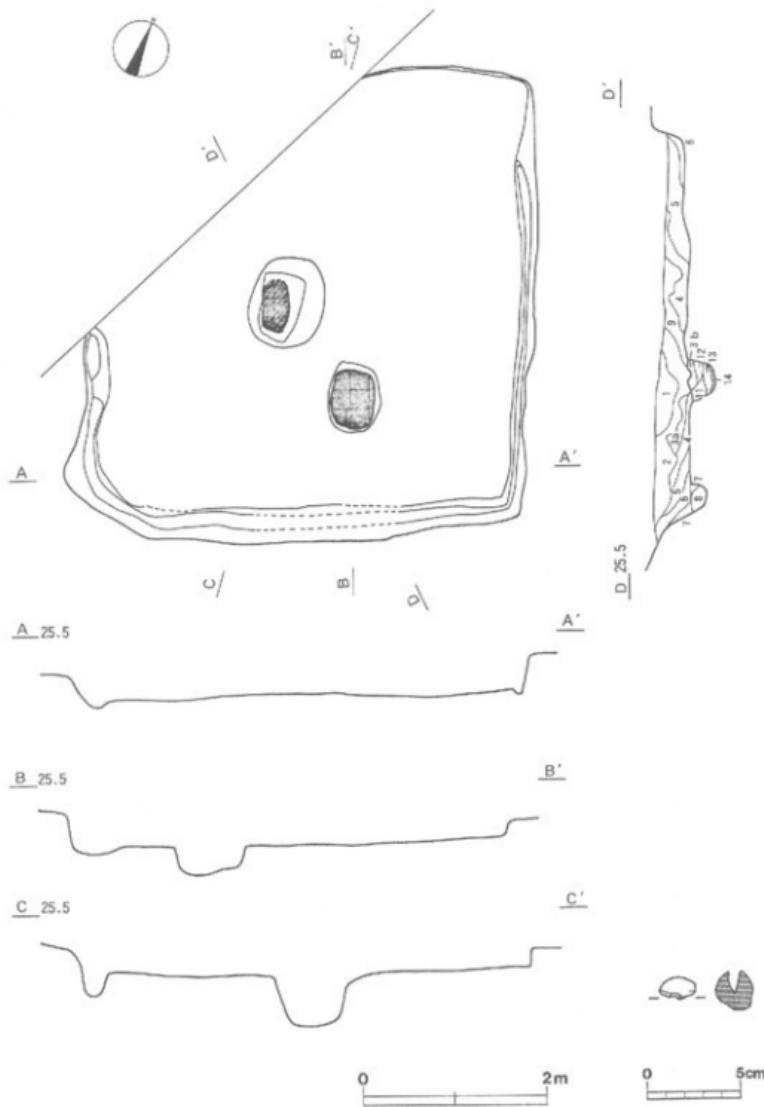
覆土

- 1 10YR4/6 褐色土 ロームブロック大少量、ロームブロック中～粒子多量、粘性弱
- 2 7.5YR4/4 褐色土 炭化物・ロームブロック大微量、ロームブロック中～粒子多量、粘性・しまり弱
- 3a 10YR4/6 褐色土 ローム粒子極めて多量、粘性弱
- 3b 10YR4/6 褐色土 ローム粒子極めて多量、しまり極めて強
- 4 7.5YR4/6 褐色土 炭化物微量、ロームブロック小中量、ローム粒子多量、しまり強
- 5 7.5YR4/4 褐色土 ロームブロック中中量、ロームブロック小・粒子少量
- 6 7.5YR4/6 褐色土 ローム粒子中量、しまり弱
- 7 10YR4/6 褐色土 ロームブロック小少量、ローム粒子多量、しまり弱
- 8 10YR4/6 褐色土 ロームブロック小少量、粒子中量、粘性強、しまり弱
- 9 7.5YR4/4 褐色土 ロームブロック小少量、粒子少量、粘性弱
- 10 7.5YR4/4 褐色土 ロームブロック小微量、しまり弱
- 11 7.5YR4/4 褐色土 ロームブロック中・小少量、粘性弱
- 12 7.5YR4/6 褐色土 炭化物少量、ロームブロック中少量、粘性強、しまり弱
- 13 7.5YR2/2 黒褐色土 炭化物・炭化粒極めて多量、ローム粒子少量、粘性極めて強、しまり弱

遺物 土製丸玉以外は閲示できるようなものは出土しなかった。

第18号住居址

回数No	種類	最大長	最大幅	重量	孔径	出土位置	残存率	焼成	輪上	色調	備考
1	丸玉	(2.1)	(2.0)	(2.9)	60.6	覆土	1/3	普通	砂粒少量	明褐色	311

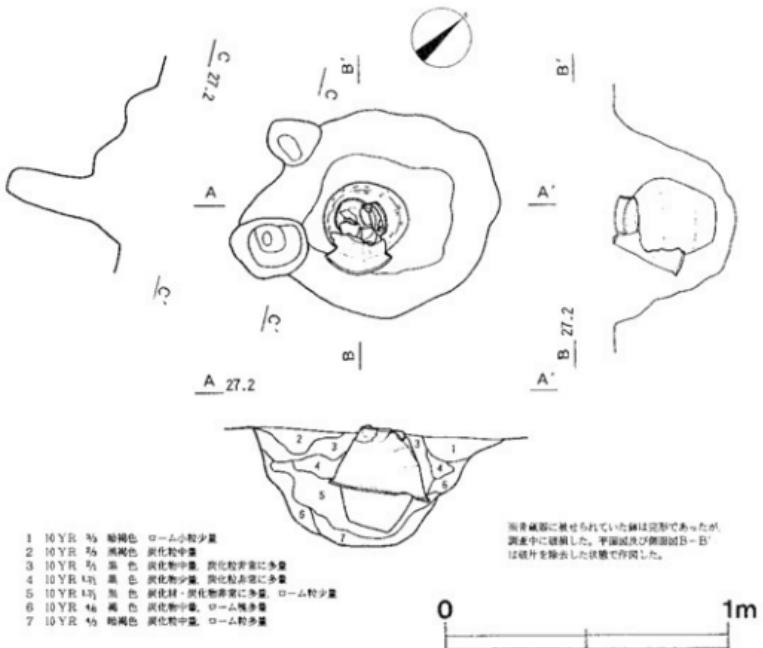


第80図 第18号住居址完掘

## 第4節 平安時代

当遺跡では火葬墓2基、土壙墓1基を検出している。これらは、丘陵上の平坦面に位置し、2つの火葬墓の距離は約8m、土壙墓とはや70m以上離れて分布している。当調査区内において明確に平安期の造構と考えられるものはこれ以外に検出されていない。唯一8号住居土上層のより灰釉陶器の長頸壺の破片が検出されているが、同造構はその他の遺物から古墳時代に属するものと判断されている。

なお、当調査区の南約10mの地点から、耕作によって上陣器窓の骨蔵器が掘り出されたことがあったとの伝聞を得ている。その骨蔵器は現在、近隣に無縫仏の墓として埋め戻されているとのことであり、詳細を知り得ないが、今回調査できた火葬墓と同一の群をなすものであった可能性が高く、付記しておく。



第81図 第1号火葬墓

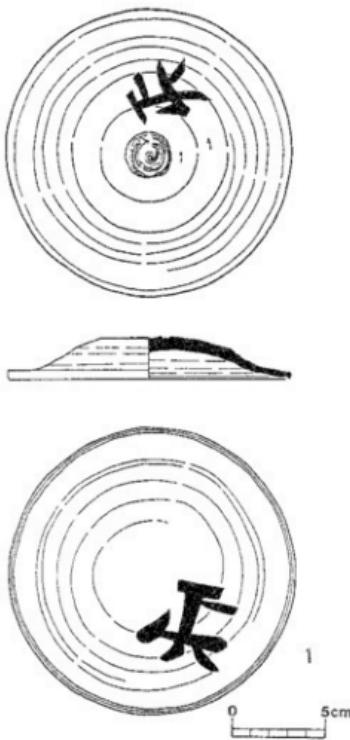
### 第1号火葬墓 (第81図 PL34)

調査区の南端、南へと展開する丘陵上の高く平坦な地点に存在する。確認面では、黒色土が詰まった円形土坑の中に須恵器鉢の底部が僅かに露出している状態で発見された。土坑は、長軸90cm、短軸75cmの不整格円形で、深さは確認面から40cmである。この南側に精円径の深い土坑がみられるが、覆土が柔らかく單一層であったため植物の根の擾乱と考えている。骨蔵器は須恵器甕に大きめの須恵器鉢を被せた状態で正位に埋納されており、本体である甕はやや南側に傾きながら炭化物層の中に据えられていた。甕の体部と鉢の口縁部との間の隙間に、甕を底部から回繞する炭化物の層が続いて入り込んでいた。従って、甕と鉢は最初から組み合せた状態で埋納されたのではなく、あらかじめ甕を炭化物層の中に据えて固定し、その後、上から鉢を被せるようにして埋納していたことが推定される。鉢を被せた後は、炭化物を含む黒色土がこれを包むように充填されている。このように骨蔵器の埋納にあたっては、甕を据える第一段階と、これを封する第二段階の、二つの埋納段階を想定することが可能である。

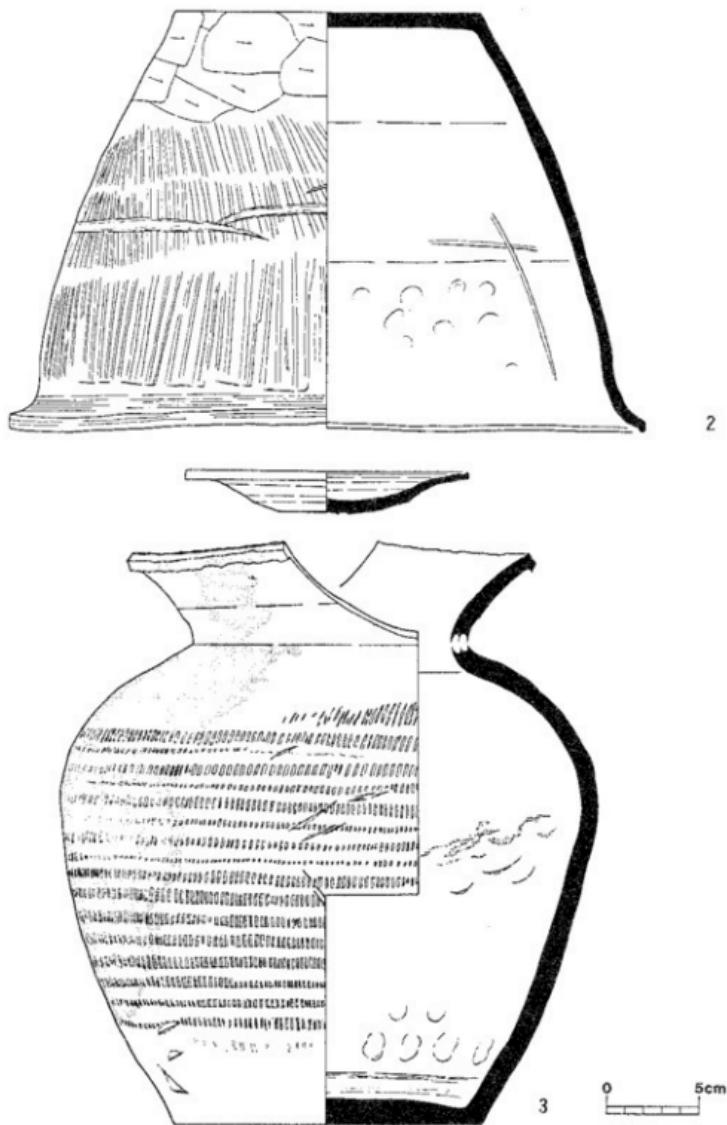
### 出土遺物 (第82・83図 PL62)

骨蔵器は須恵器の甕と鉢、及び蓋の3点によって構成されている。甕は比較的横幅が大きく、体部に細かな刻み目の紋様を付ける特異なものであり、他の甕にはみられない堅鐵な焼き締まりを呈している。口縁部は約2/3を欠損している。これは骨蔵器としての使用の当初からのものである。その為、蓋はこの口縁部に合わせて傾けて使用され、天井部を甕の内側に向ける逆位の状態で甕を封していた。また、甕の内外面のほぼ同じ位置には淡い墨書きがみられる。両面とも「正」と「八」を組み合わせた文字であり、「長」と解読した。鉢は比較的大柄であるが、軟質な焼成の須恵器である。口縁部に僅かな欠損部があり、摩耗がみられるため、骨蔵器への利用以前から使用されていたものと思われる。

火葬人骨の残存状況は、鉢と蓋による密封状態にあったため、比較的良好である。甕の内壁には、人骨に含まれているリンやカルシウムなどと思われる成分が白色の粉末となって付着しているのが観察さ



第82図 第1号火葬墓出土遺物(1)



第83图 第1号火葬墓出土遗物(2)

れた。火葬骨は甕の底からおよそ10cm程の厚さで残っていたが、これに対してこの白色粉末の付着は、甕の底から16cm程の位置にみられる。恐らく納骨時にはこの程度の高さまで火葬骨が充填されていたのであろう。1215gが残存しており、成人男性の骨と鑑定されている。

回収 番号	器形	法量 (cm)	残存量 出土位置	焼成	胎土	色調 外面 内面	器形・技法の特徴		備考
							外 面	内 面	
1	甕 須恵器	A:15.2 C:(2.3)	ほぼ完形	良好	約1~3mmの 長石・石英粒 を中心	灰色 灰色	体部は丸みを帯び、口縁部付近では反りぎみに なった大きく開く口唇部は端部をごく小さく 削りさせて作り出している。体部上位に同軸通 切りを施す。つまみ筋邊に同軸なてを施す。	つまみ筋を 欠く。体部 内外面に墨 者「灰」	
2	甕	A:(21.4) B:16.6 C:31.7	ほぼ完形	堅鉛	約1~5mmの 石英粒を中心	灰色 灰色 種は滑緑色 と墨色	横幅があり安定感のある甕である。最大径は体 部中央やや上にあり、ハの字状に大きく開く口 部がいくつ。体部外表面は、細かな削み目をつけ これを横方向のなでにより約1cm間隔で擦り消 している。内面は横方向の窪などで押さえられ、 擦痕跡などが右半分に残る。高茎も焼成も他の 甕とは異なっている。	口縁部は約 2/3を欠いて いる。内 面中位に骨 の成分が付 着している	
3	甕 須恵器	A:34.0 B:16.4 C:22.6	ほぼ完形	やや 不良	約1mmの長 石・石英粒を多 量、窓母片 を中心	灰褐色 灰褐色	体部は僅かに丸みを帯びて立ち上がり、直角に近 い角度で口縁部が外反する。口縁部はいく度重 ねつまみ上げられる。体部外面上には比較的幅 広い平行線の叩きを縱方向に施す。また、中位 にはこれを押り出す横方向の窪などを一列させ、 下位にはこれを削りを行っている。内面は横方向の 窪と縦によるなでを施し、多数の擦痕跡がみ られる。	やや軟質。 口縁部の一 箇所が欠けて おり、割れ 口は発見して いる	

## 第2号火葬墓 (第85図 PL35)

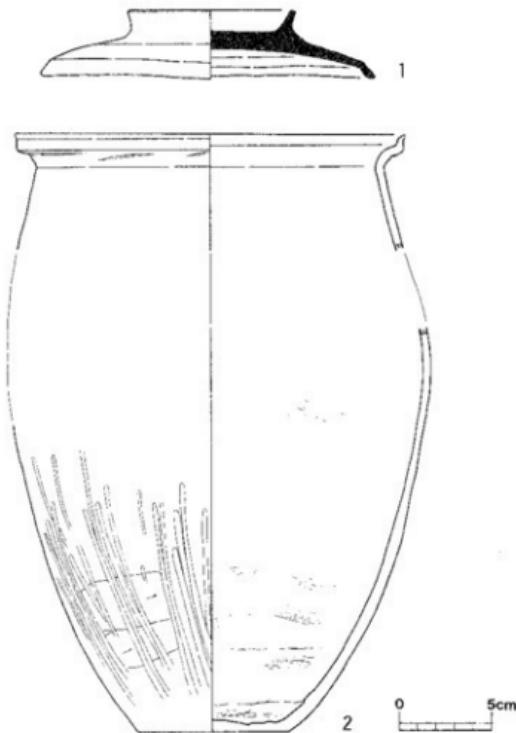
調査区の南端、1号火葬墓から北へ約8mの地点に位置する。確認面では、炭化物の充填された円形土坑が発見され、その中央に土師器甕の破片と須恵器盤の高台部が見える状態であった。遺構の上半分は重機による削平を受けている。しかし、調査以前から骨蔵器は土に等によって漬されていたため、蓋として利用した盤や甕の口縁部は、甕の内部に落ち込み残存していた。

土坑は径約44cmの不整円形で、確認面からの深さは約20cmを測る。また土坑の周囲には、ごく浅く小さな溝状の掘り込みが認められた。この掘り込みの中には細い炭化材が詰まっていた。骨蔵器は土師器甕を利用して、土坑のはば中央に正位に埋納されていた。骨蔵器の周囲には炭化物を多量に含む黒色土を充填しており、部分的にロームブロックが混入している状況であった。

## 出土遺物 (第84図 PL62)

骨蔵器は本体に土師器甕を用い、蓋として須恵器の高台付盤を利用している。甕は、比較的大きが大きく、穂やかに立ち上がる体部をもつ。高台付盤は、口縁部を下に向けて使用されており、そのままの状態で甕の中に落ち込んでいた。口縁部の開きが比較的大きく、若干の歪みをもつ。

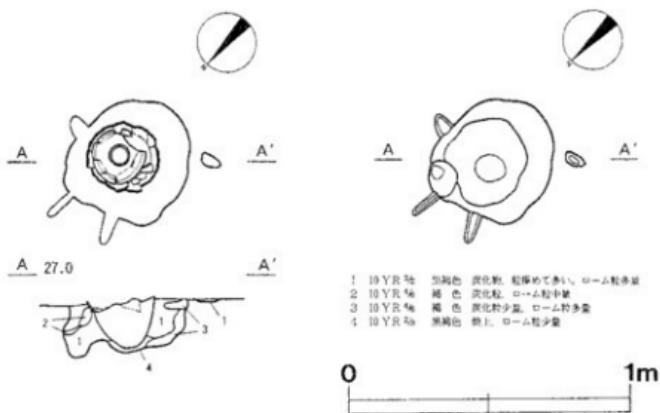
人骨は585g残存しており、性別不明の青年期のものと鑑定されている。



第84図 第2号火葬墓出土遺物

### 2号火葬墓

固形 標号	器形	法量 (cm)	残存量 出土位置	焼成	胎L.	色調 外觀 内面	器形・技法の特徴	備考
1	高台付盤 須恵器	A : 18.0 C : 2.7 D : 9.1 E : 1.1	完形	普通	約 1 mm の 長 石・石英粒を 少量。雲母片 を多量。	灰黄色 灰黄色	底部付近の器壁が厚く、体部には若干に歪みがある。体部は非常に緩やかな角弧で大きく開き、は縫部の立ち上がりも緩やかである。高台は直線的でハの字に開く。底部は切り離し後回転削削りを行い、高台を成り付けた周辺には同様なでを施している。	内面は使用により滑らかで、口柱状の染みもみられる
2	底 土器器	A : (19.8) B : 8.0 C : (32.4)	1/2	普通	約 1 mm の 長 石・石英粒を 多量。雲母片 を少量	褐色 にぼい褐色	器の体部中位以下と口縁部付近の破片が残存。最大径は体部中位にあり、肩部が直線的に落ちている。口縁部はハの字に開き、小さく外反する口唇部がつく。底部下位に茎削りを行い、さらに縦方向の摩きを加えている。内面は横・斜方向の溝などでを施す。	



第85図 第2号火葬墓

第1号土壤墓 (旧第2号土坑) (第86図 PL36)

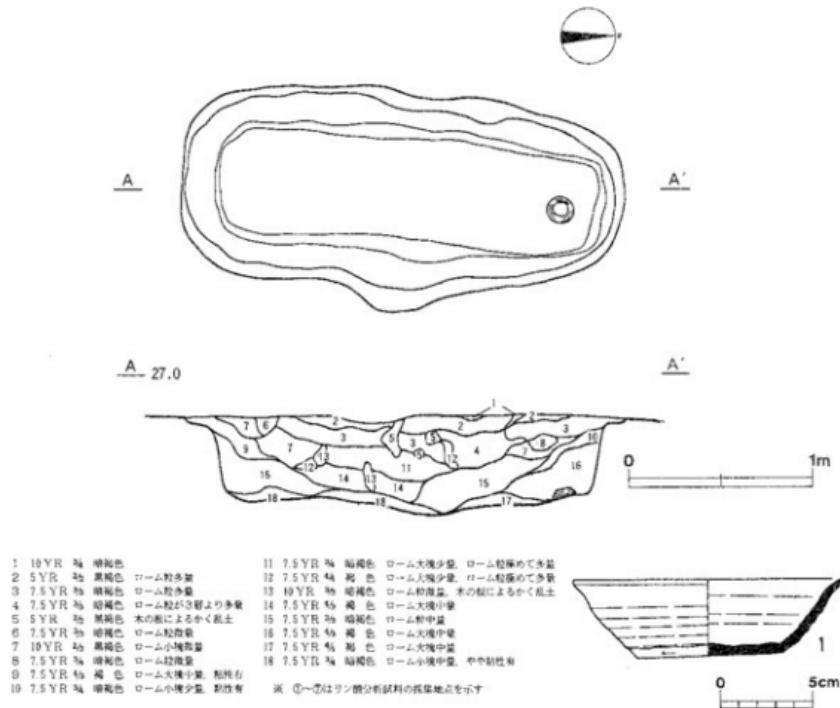
丘陵上の平坦面に位置し、1号火葬墓との距離は約70mである。土壇は二段に掘り込まれた長方形で、主軸をほぼ南北にとる。規模は、確認面において長軸2.4m、短軸1.2m、下段の掘り込みの上場では長軸2.1m、短軸1.2mを測る。深さは確認面より約1mであるが、上段の掘り込みは僅か5cm程の浅いものであった。土坑の北隅には、須恵器杯が土坑の底面に伏せた状態で検出された。当土坑の覆土は褐色土を主体としており、一度に埋められたというよりもむしろ自然堆積に近い状態であった。

当土壇は、その規模が人体を埋葬するのに適した大きさであり、南北軸を意識して構築されていること、さらに一点のみであるが完形の須恵器杯が納入されていたこと、などからこれを土坑墓と判断している。頭位を北にとっていたとすれば、須恵器杯は位置にあたるであろう。なお鉄釘等は検出されていないため、棺を使用したかどうかは明らかでない。しかし、覆土の状態から判断して、木製の蓋のようなものが当初はあり、これが腐朽した後に地表面が陥没し、土が自然堆積していった可能性も考えられる。

なお、覆土及び土壇底面から土壤サンプルを採取し、リン酸分析を行ったが、一般土壤に含有される以上のリン酸分を検出することは出来なかった。したがって遺体の埋葬を確証するには至らなかったが、上記の点から一応、これを土壇墓と判断しておきたい。

#### 出土遺物

完形の須恵器杯一点のみである。比較的大きな底盤と浅く立ち上がる体部をもつ。



第86図 第1号土壌基

固版 番号	器形	法量 (cm)	残存量 出土位置	焼成	給土	色調 外面 内面	器形・技法の特徴	備考
1	杯 須恵器	A:14.4 B:7.9 C:4.3	完形	良好	φ 1mm の長 石・石英粒を 多量	灰色 灰色	径の大きな底部からやや丸みを帯びて体部が立 上がり。口縁部付近で外反する。底部下辺に向 軸置割り、底部は切り離し後回転置形を施す。	

## 第5章 中世以降・その他

### 第1号溝 (第87図 PL37)

南北に延びる長い溝で、途中、東に直角に延びる溝と分かれる。両端はエリア外となっている。調査区内の規模は長さ104m、幅1~2m、深さ0.7mである。約0.3mの深さで堅固な面が見られるため、道路跡の可能性が考えられる。

### 第2号溝 (第88図)

南北に延びる溝で、調査区内の規模は長さ56m、幅0.1~0.8m、深さ0.07mである。

### 第3号溝 (第89図)

南北に延びる溝で、調査区内の規模は長さ8m、幅0.7m、深さ0.05mである。

### 第4号溝 (第89図 PL37)

調査区の南に位置する。規模は長さ8m、幅0.4~0.7m、深さ0.03mである。

### 第5号溝 (第90図 PL37)

調査区の西側に位置する。直線的に延びる溝は、途中直角に曲がる。調査区内の規模は南北20m、東西42m、幅2~2.5m、深さ0.2mを測る。境界の溝と思われる。

### 第6号溝 (第89図)

東西に延びる溝で、規模は長さ8m、幅1.4m、深さ0.3mを測る。

### 第7号溝 (第89図)

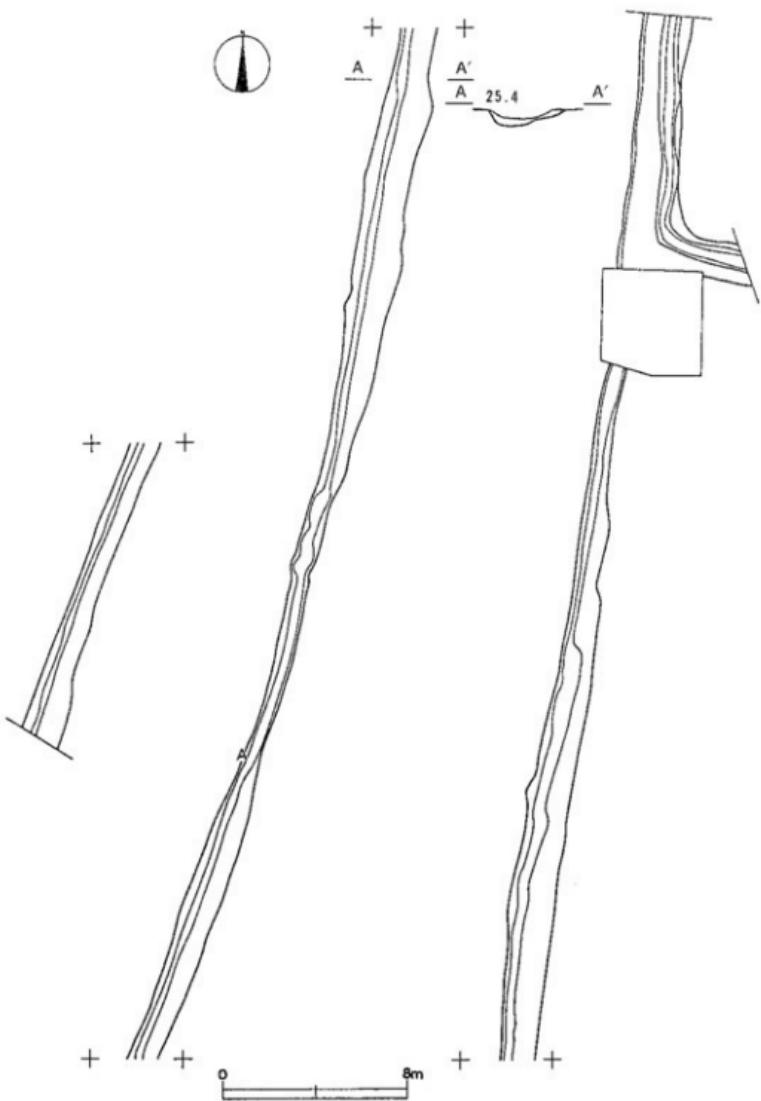
調査区の東に位置し、南北に延びる溝である。規模は長さ27m、幅0.6~1m、深さ0.3mを測る。

### 第8号溝 (第89図)

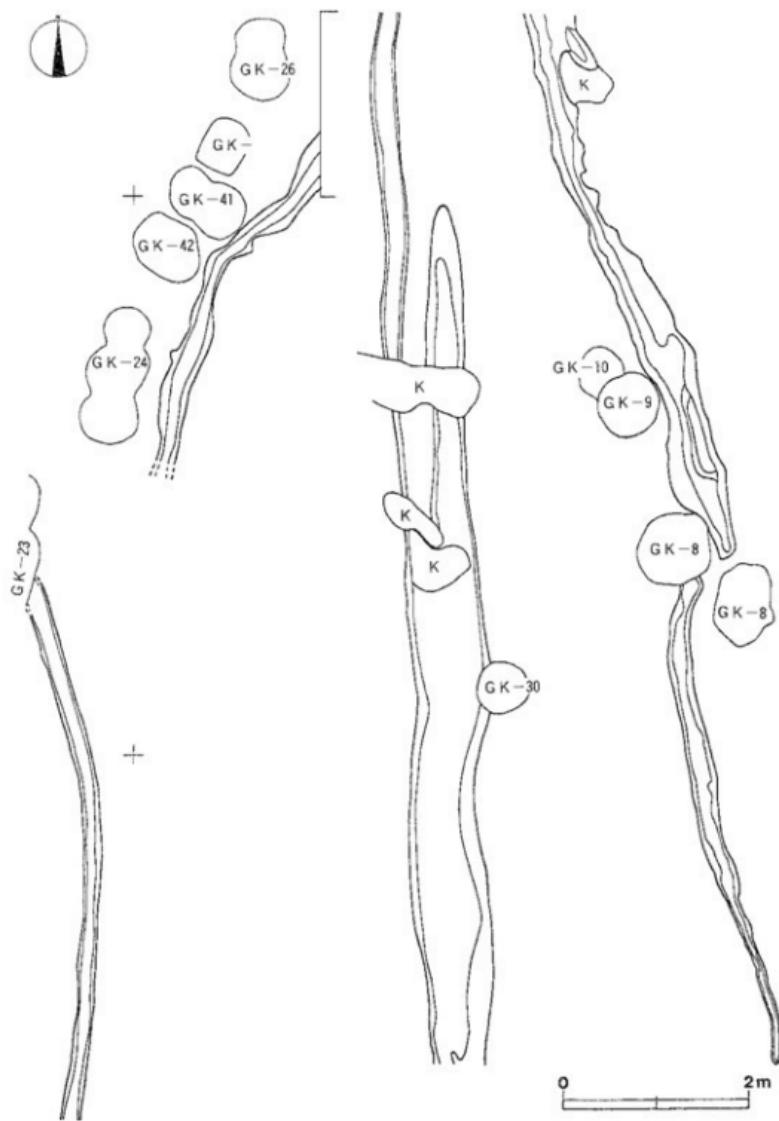
調査区の東に位置し、南北に延びる溝である。規模は長さ16m、幅0.5m、深さ0.1mを測る。

### 他の遺構 (第91図~95図)

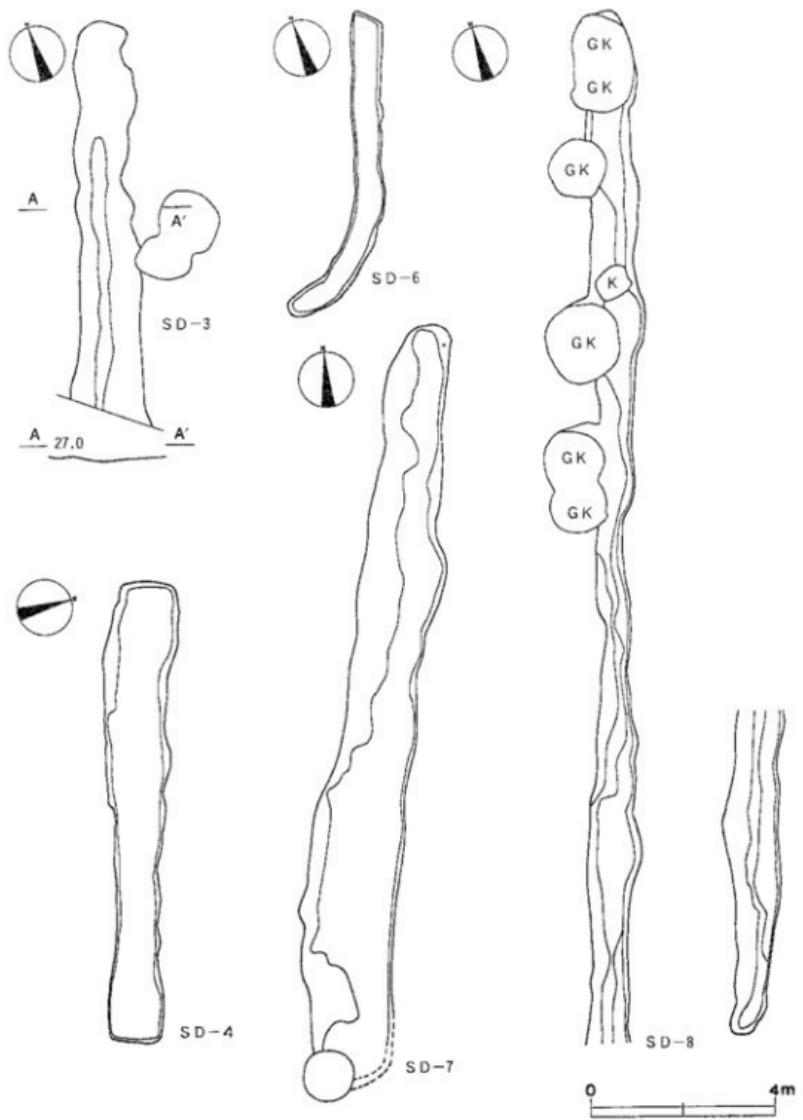
近現代につくられた貯蔵用の土坑（イモ穴）が多数検出された。多くは農道の脇で見られる。



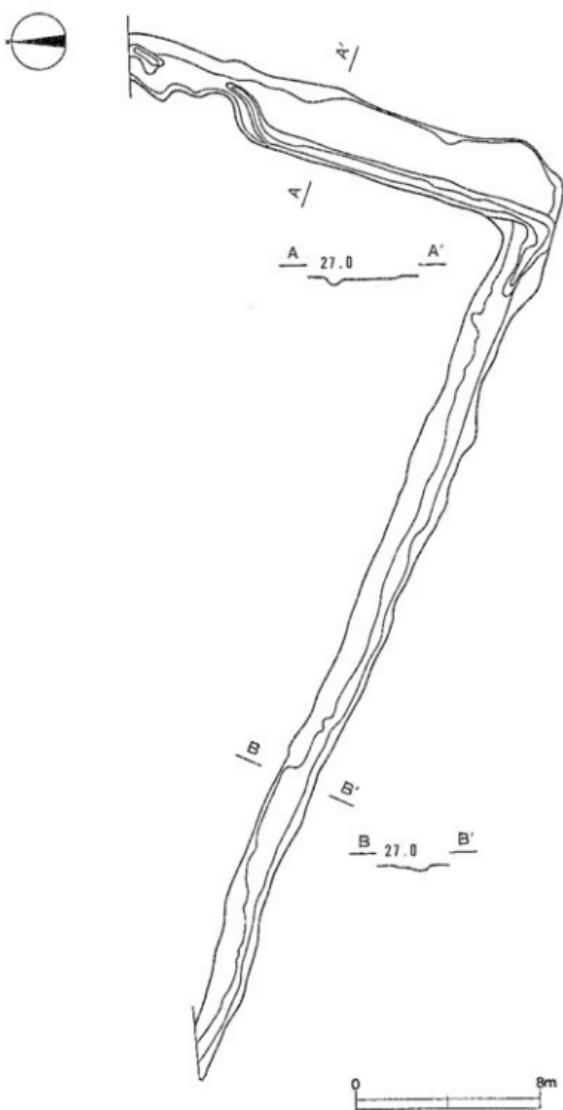
第87図 第1号溝



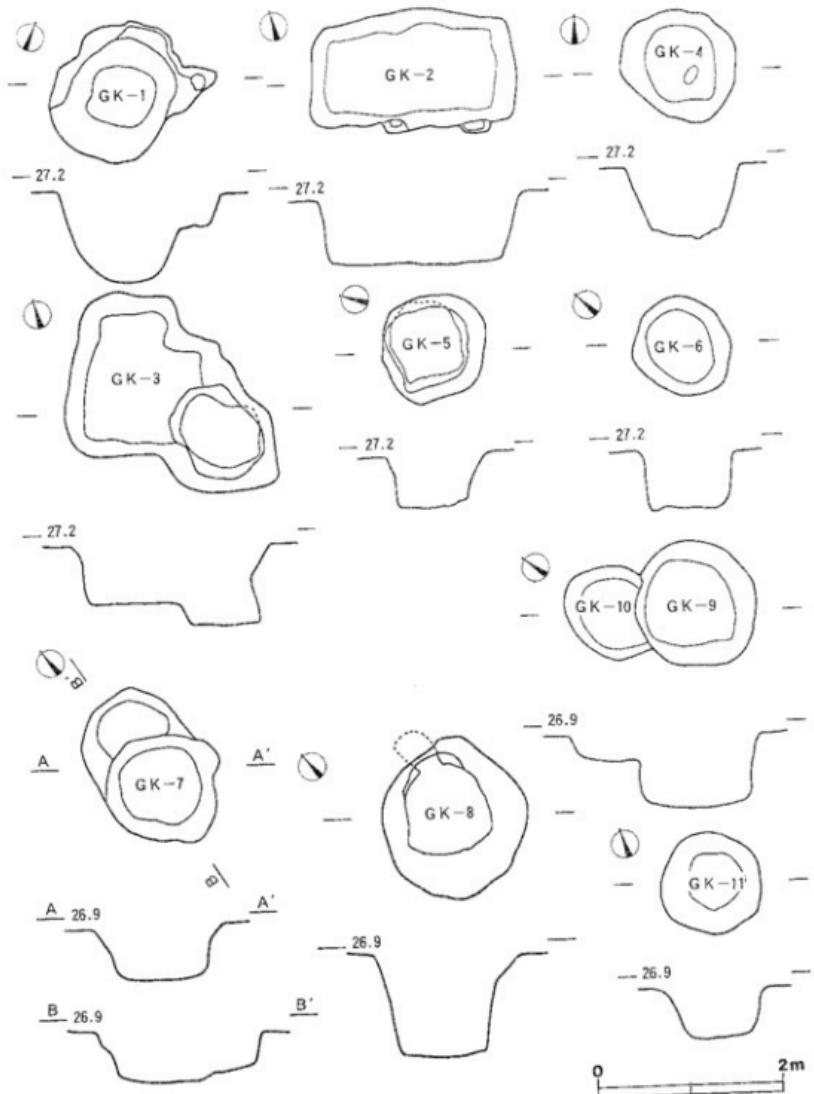
第88図 第2号溝



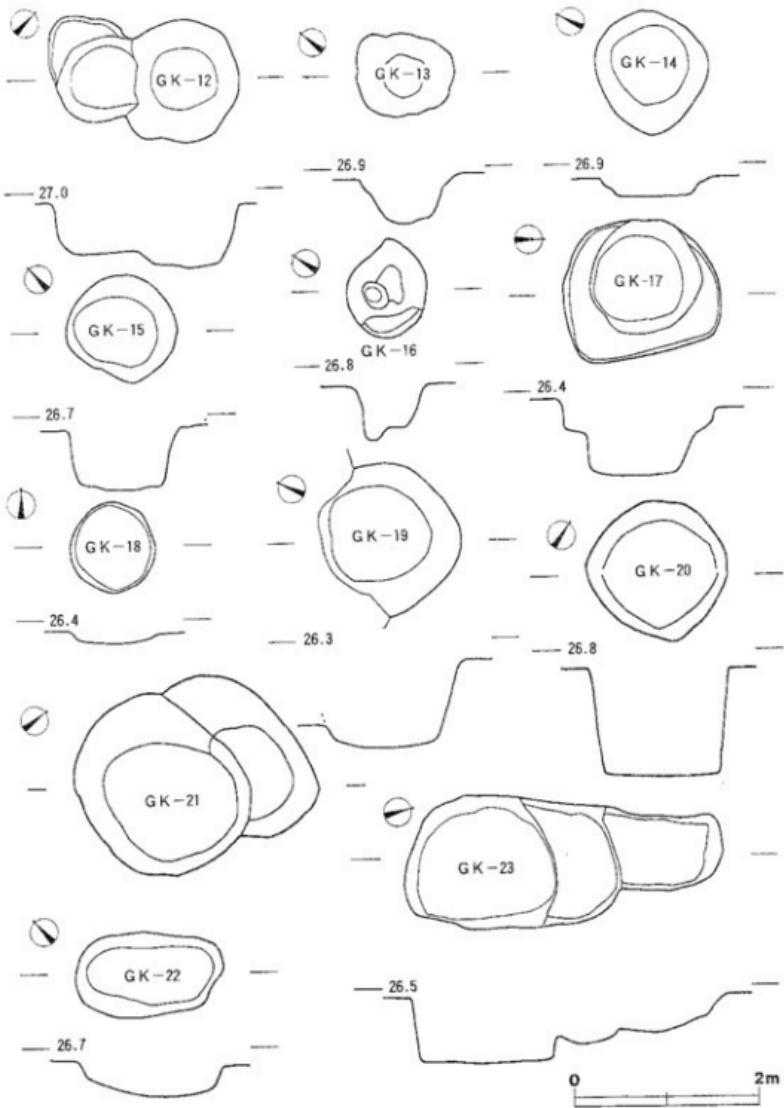
第89図 第3・4・6・7・8号溝



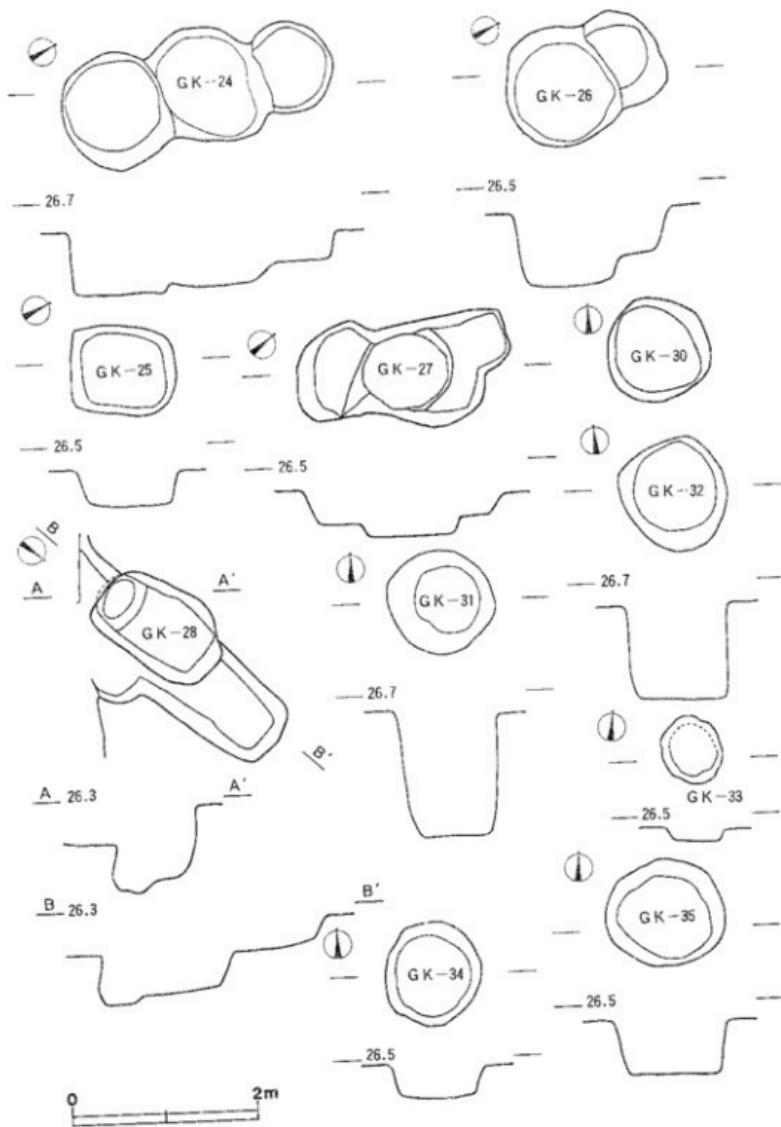
第90図 第5号溝



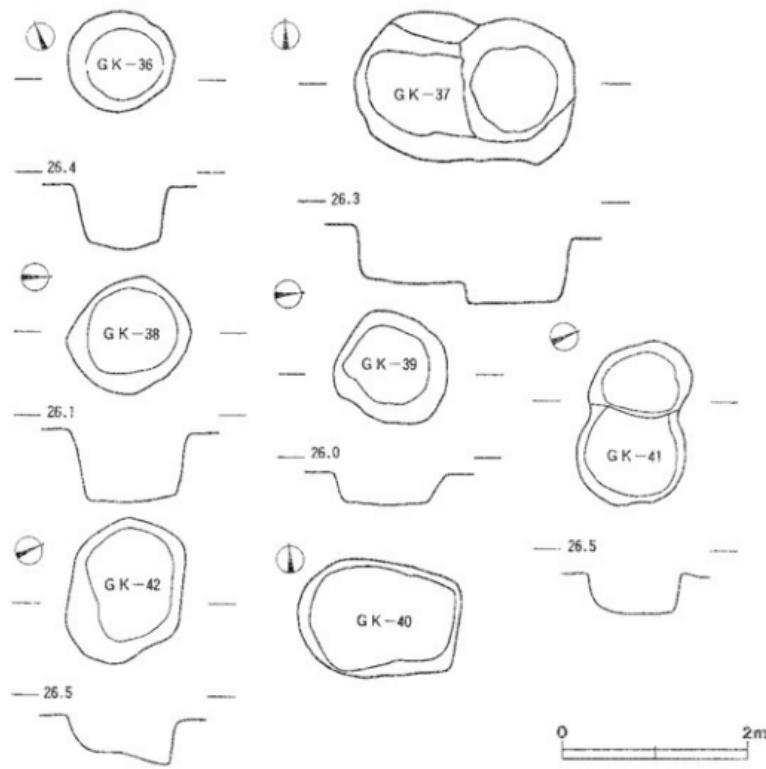
第91図 近・現代遺構(1)



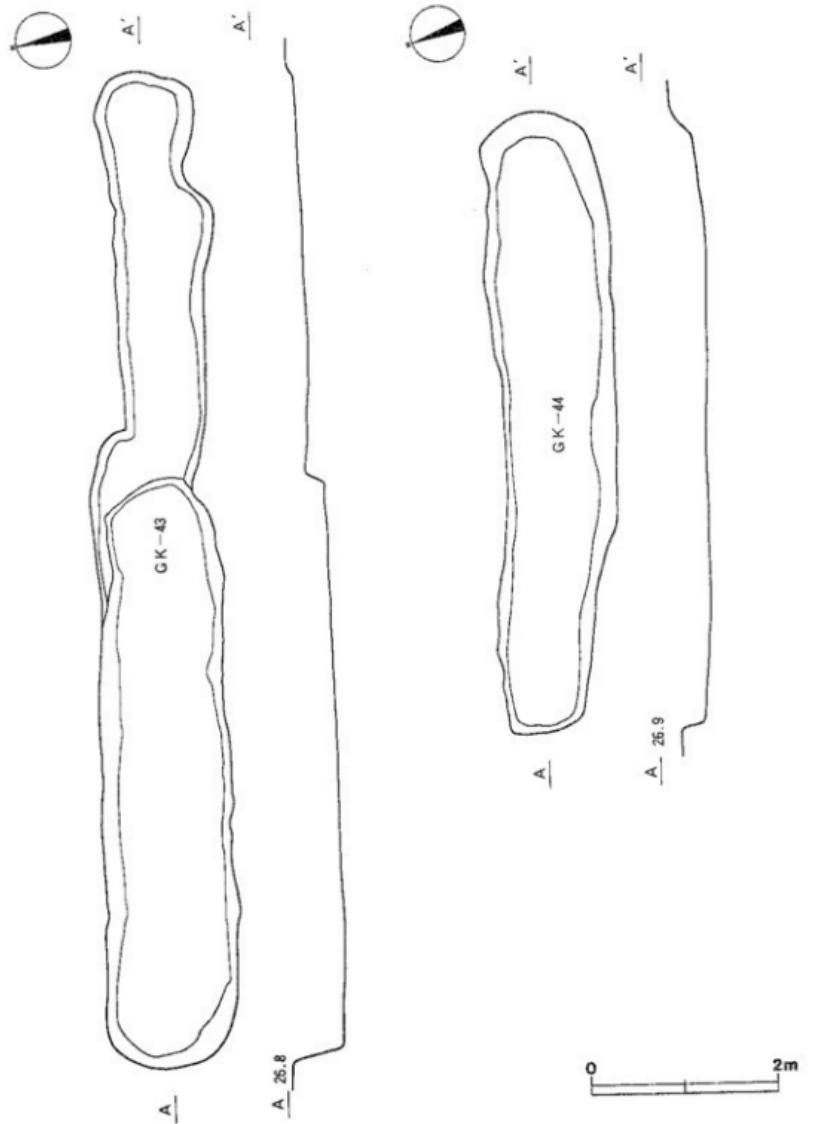
第92図 近・現代造構(2)



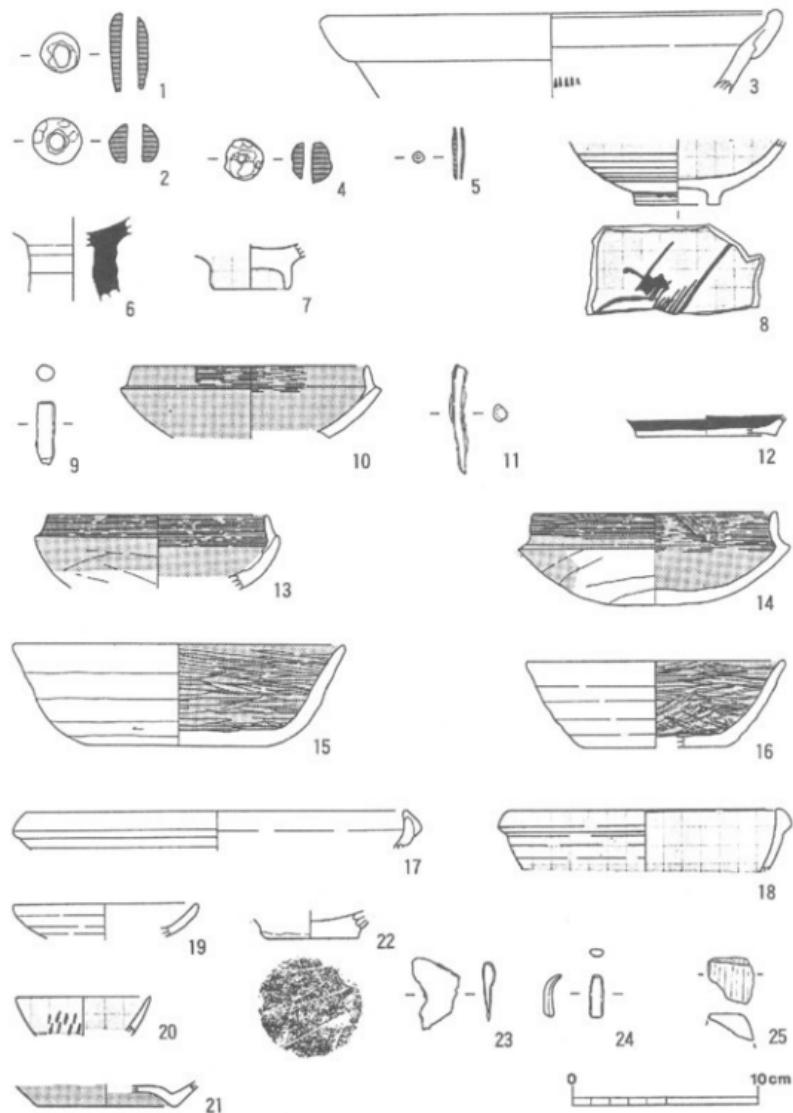
第93図 近・現代遺構(3)



第94図 近・現代遺構(4)



第95図 近・現代造構(5)

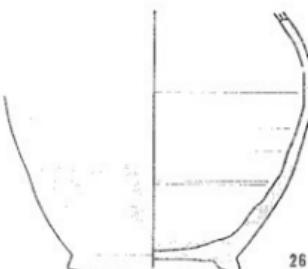


第96図 溝・近現代・遺構外遺物(1)

### 造構外出遺物

第8号住居址覆土上層より出土。

平面では確認出来なかつたが、土層断面に掘り込みがみられた。No26は断面にみられる造構に伴う遺物と考えられる。



第97図 造構外遺物(2)

団査№	器種 器形	法蓋	赤土陶器 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
26	丸窓瓶 灰釉陶器	B : 9.0 C : (14.5)	2/3	良好	黑色粒	灰白 灰白	腹部は「八」字状に窪く短付高台。後地は 埴造。圓輪系網底を残す。胎は外面全体に 施けられている。胴部下端は圓軸へラ折り。	



第98図 第8号住居址出土遺物（追加）

## 第4章 結語

石橋南遺跡発掘調査の成果を簡単にまとめてみたい。

旧石器時代のブロックは2か所で発見された。田村沖宿遺跡群からは寺畠遺跡をはじめ数箇所の石器の遺構が発見されているが、メノウを主体にしたブロックは当遺跡だけである。

縄文時代の遺構・遺物は少なく、土坑3基と後期の包含層が確認された。第6号土坑は、環と貝殻がまとまって出土した。出土した土器から早~前期の可能性が考えられる。この地域において貝が入っている土坑は多いが、環を伴う例は少ない。出土状況から考えると貝採集時に貝とともに運ばれ、廃棄されたと考えられる。

古墳時代後期はこの遺跡の中心となる時代である。遺構として竪穴住居址18軒が検出された。住居址は1期~6世紀前半(1・6・7・13)、2期~後半(5・9・10・11・12・14・15)、3期~6世紀末~7世紀初頭(2・8・16)、4期~7世紀前半(3・4・17)の4期に分けられる。大まかな傾向として、1期は、赤彩品の割合が高く、住居ではカマドの対面に張出しピットをもつ住居址がみられる。2期になると、須恵器を模倣した杯が主体を占めるようになり、黒彩された土器が多くなる。甕では胴部にヘラミガキを施す常縫甕が現れる。3期になると須恵器模倣杯が減少し、浅い杯が出現する。4期は黒彩の杯が減少し、小型化する傾向にある。

出土した遺物は土器器が大部分で、甕、瓶、杯が多い。須恵器は第9号住で出土した蓋?のみである。他に玉などがあるが、1号住からはガラス玉が出土した。

検出された住居址のなかで、第4号住居址は南にカマドを持つ。他の住居址が北西から北東に構築されているのに対して特異な存在である。この住居址は火災を受け、すぐに埋め戻されている。炭化材、炭化物、焼上の量や状況から解体後不要部材を燃やしたのではなく、上層全体が焼失したと考えられる。構築から廃棄まで他の住居址とは大きく様相が異なる住居址である。

平安時代の遺構は、火葬墓2基と土壙墓1基が検出された。他に平安時代の遺構はなく、調査エリア外からも火葬墓が見つかっていることから、墓域としての存在が考えられる。

土器の総年や火葬骨の分析については第11集総集編に掲載予定である。

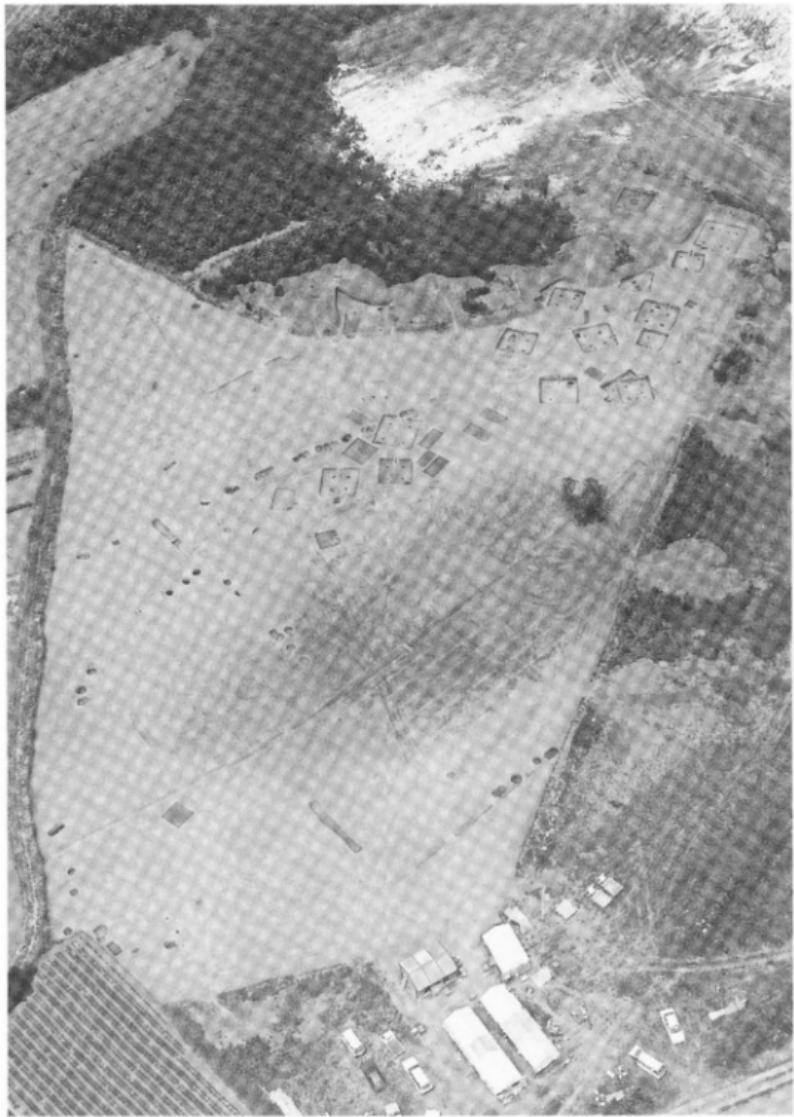
石橋南遺跡は本事業に伴う田村沖宿遺跡群発掘調査の最後の遺跡である。最初の調査から二年がたち、駆け足ではあったが予定の期間内に終了することが出来た。特に本遺跡は調査期間が1か月半と短く、厳しい状況ではあったが、2年間の調査の集大成として無駄のない調査が出来たと自負している。また、本書が当地域の解明に少しでも役立つことが出来れば幸いである。

なお調査から、整理、本書の作成にあたり、関係各位から多くのご助言、ご指導をいただいた。文末ながら厚く感謝の意を表して結語としたい。

## 報告書抄録

ふりがな	いしばしみなみ いせき							
著者名	石橋南 道路							
原書名	田村沖宿地区区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次	7							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	黒澤春彦	著者名	小松葉子 黒澤春彦	岡口満 吉澤悟				
編集機関	土浦市遺跡調査会							
発行機関	土浦市教育委員会							
所在地	〒300-0812 茨城県土浦市下高津2-7-36							
発行年月日	1997年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	北 緯	東 經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
いしばしみなみ 石橋南遺跡	いばらきけんとちくし 茨城県土浦市 沖宿町字石橋 2592外	D-78 5413	36° 64' 45"	140° 15' 20"	19920612 19920731	10,000m <sup>2</sup>	土地の面 整理事業	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
石橋南遺跡	古墳	旧石器	ブロック2	ナイフ・剣片	主に古墳時代後期の集落遺跡。焼失住居や張出しひびトを持つ住居がある。遺物ではガラス玉出土した。			
	集落址	縄文	土坑3(集石)	繩文土器・貝				
	墓址	古墳(後)	墳穴住居址18	土師器・ガラス玉				
		平安	火葬塚2・土壙塚1	鐵器・土師器・須恵器・墨書き・銀器・灰陶器				
		中世以降	溝・土坑	陶磁器				

# 写 真 図 版



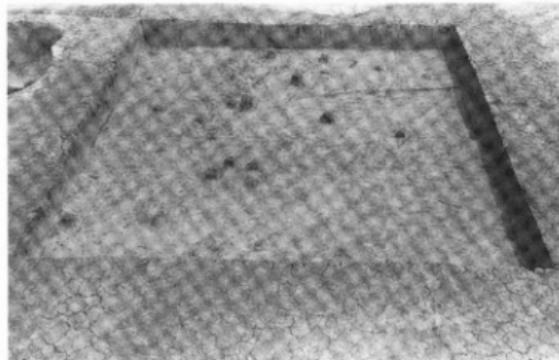
調査区全景航空写真



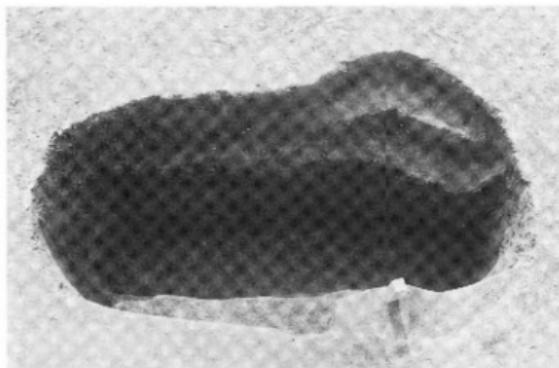
試掘状況



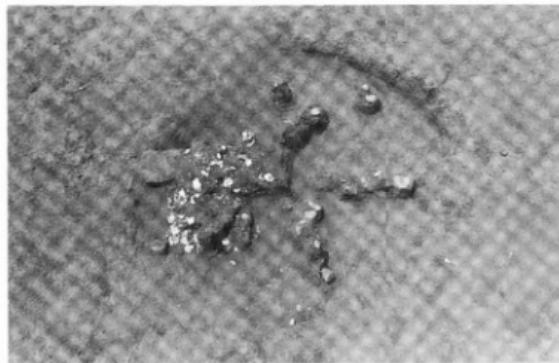
試掘状況



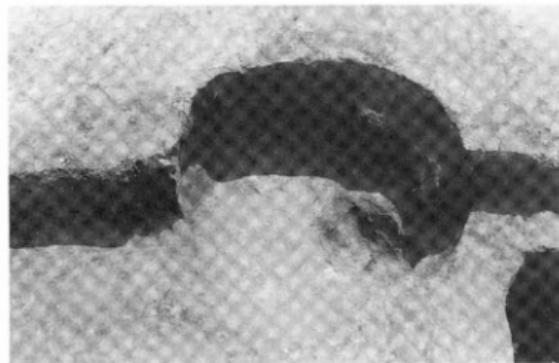
旧石器出土状況



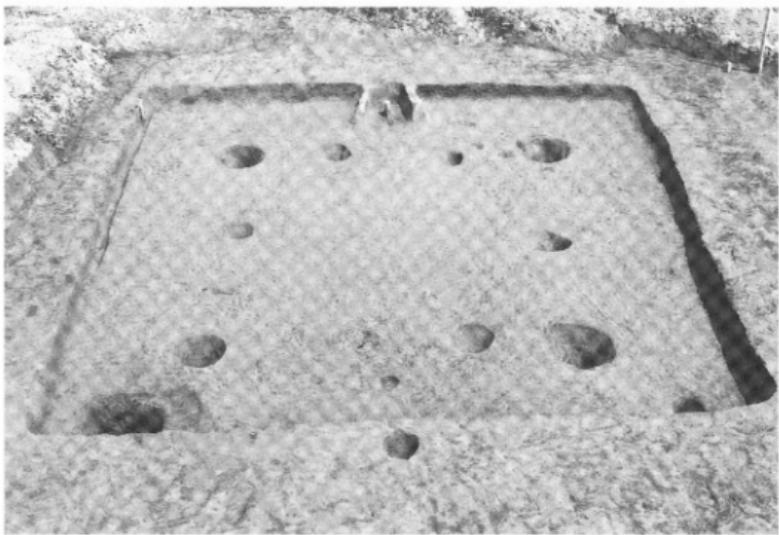
第1号土坑



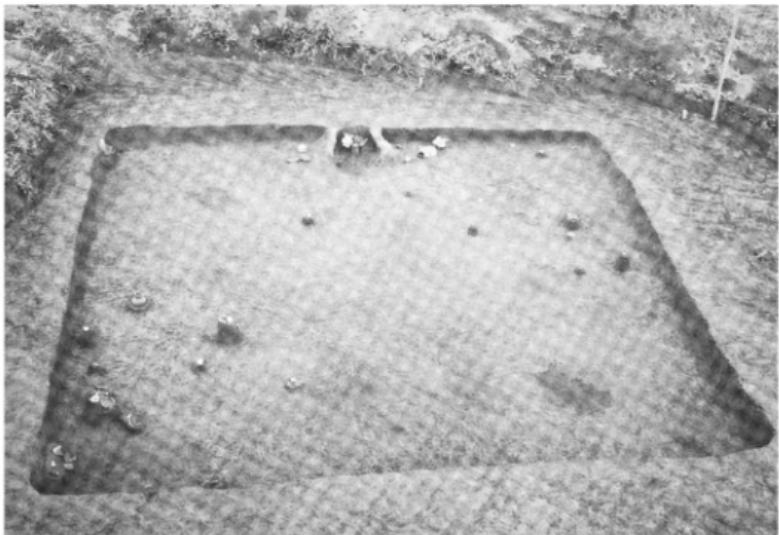
第4号土坑



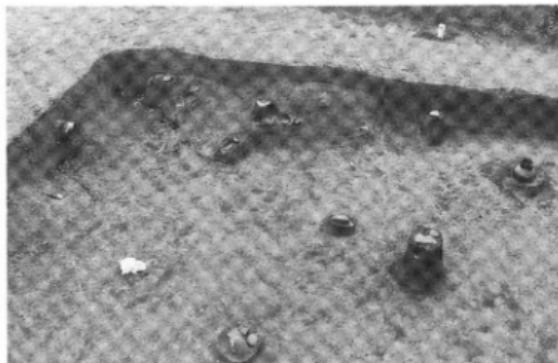
第5号土坑



第1号住居址宪掘



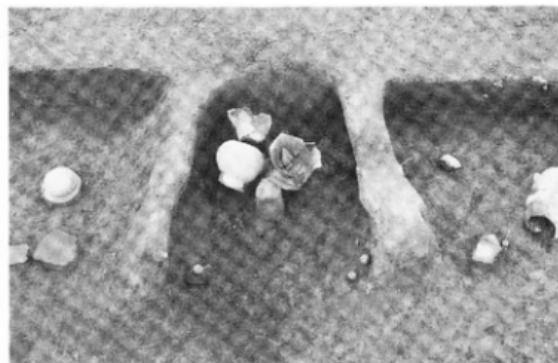
第1号住居址遺物出土状況



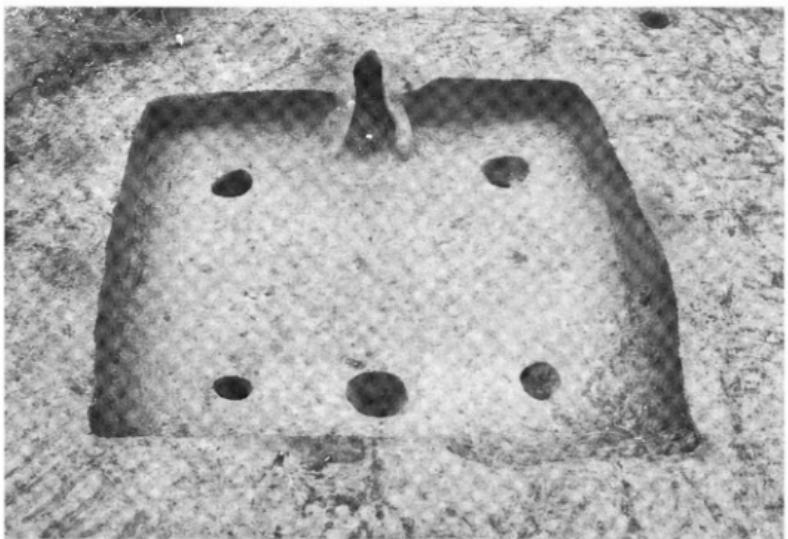
第1号住居址  
遺物出土状況



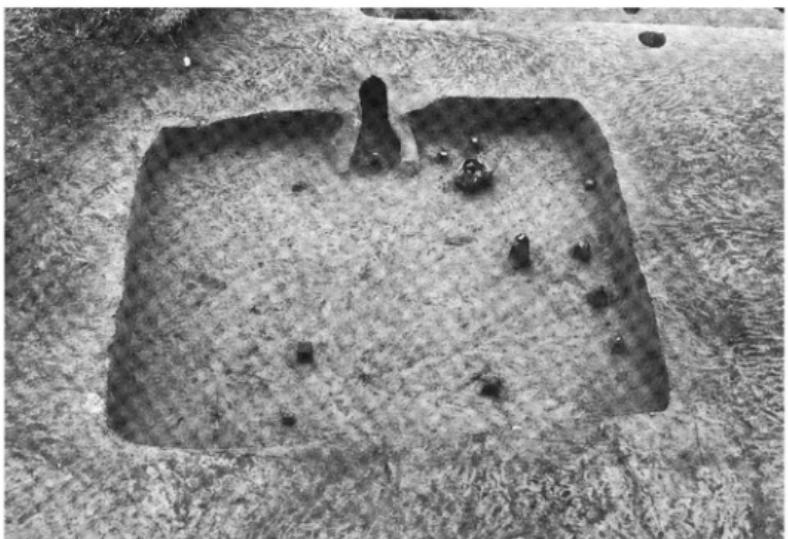
第1号住居址 カマド



第1号住居址  
カマド遺物出土状況



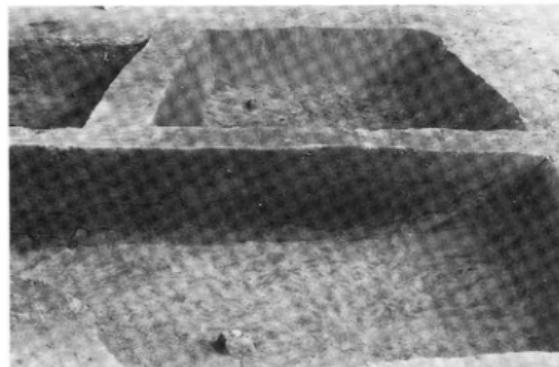
第2号住居址兜掘



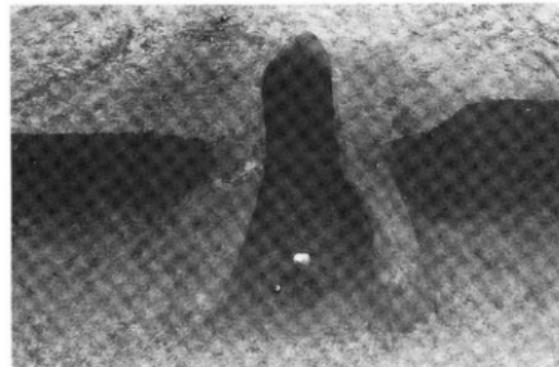
第2号住居址遺物出土状況



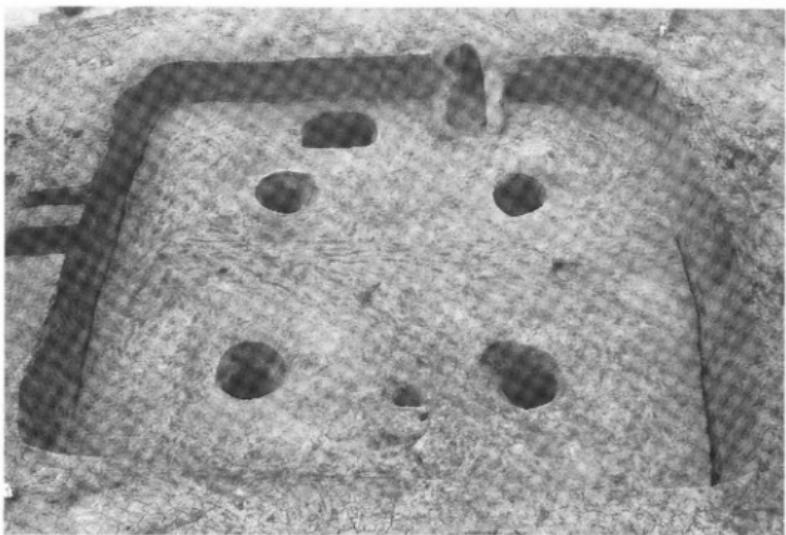
第2号住居址  
遺物出土状況



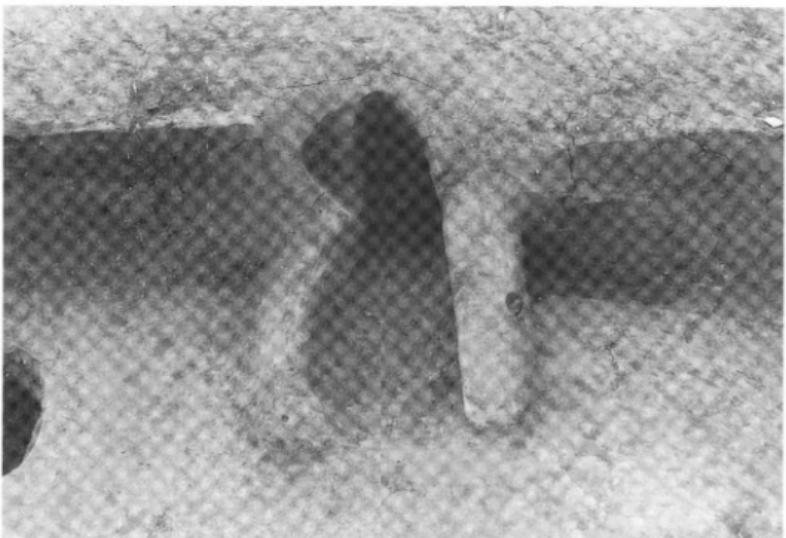
第2号住居址土層



第2号住居址カマド



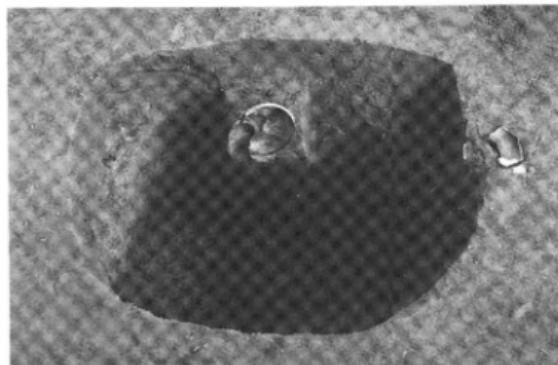
第3号住居址完掘



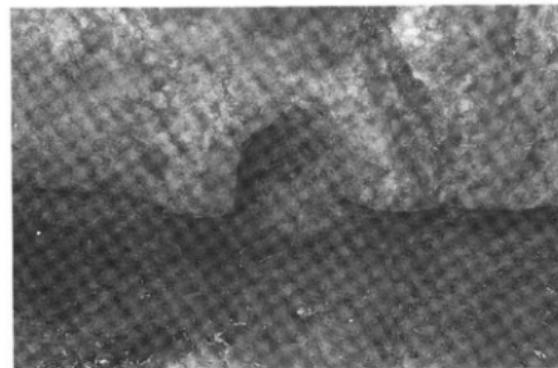
第3号住居址カマド



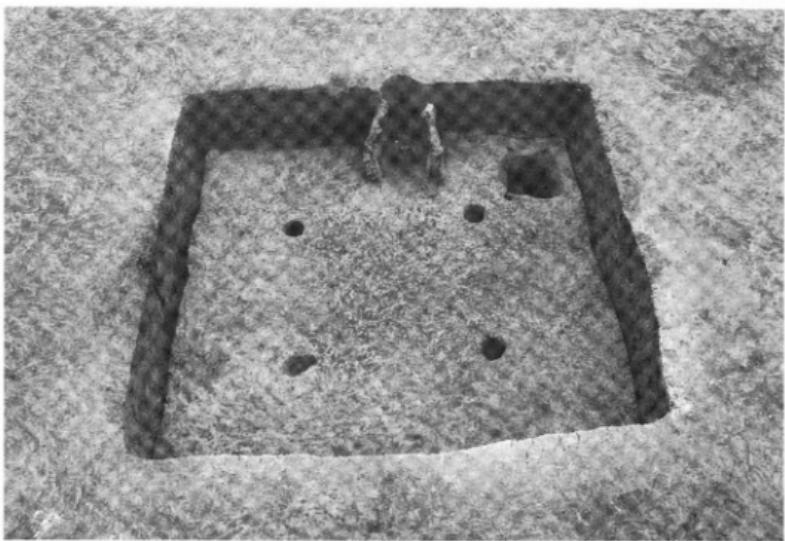
第3号住居址カマド



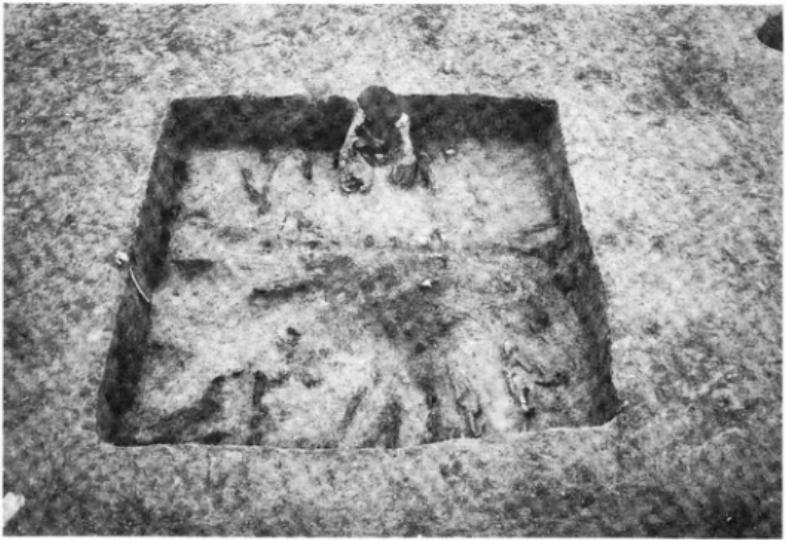
第3号住居址貯蔵穴



第3号住居址入口ピット



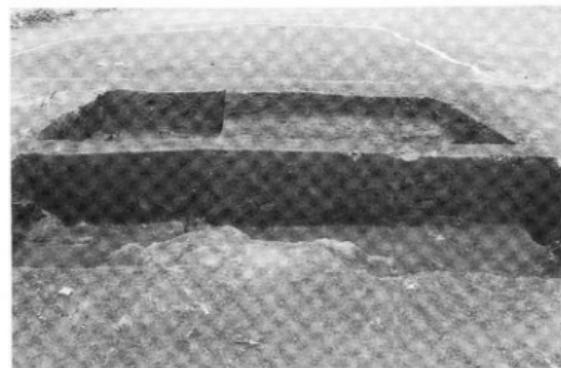
第4号住居址完掘



第4号住居址炭化材出土状况



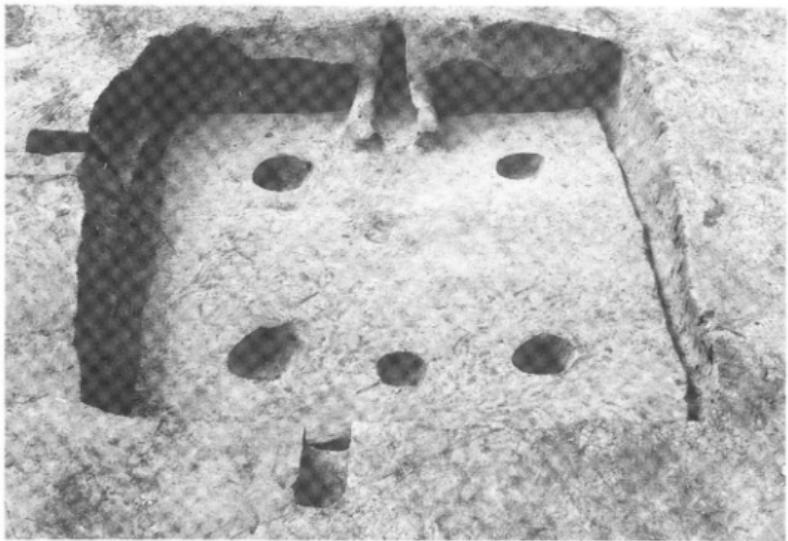
第4号住居址カマド



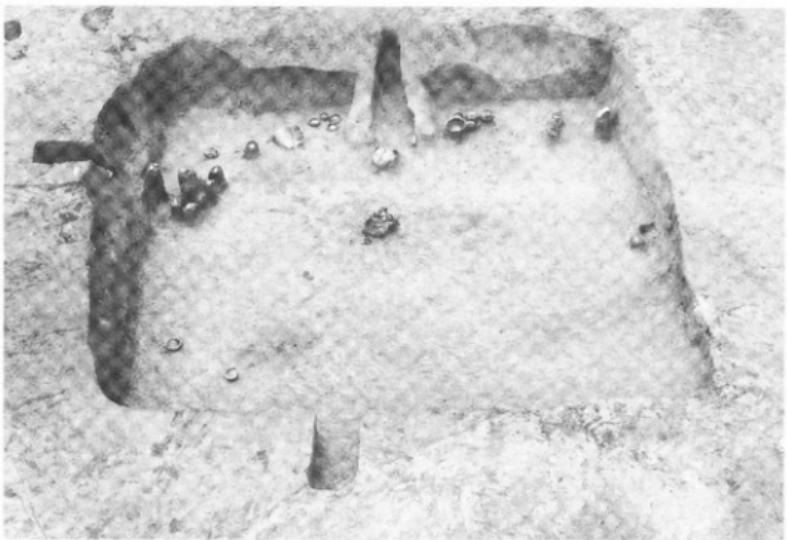
第4号住居址土層



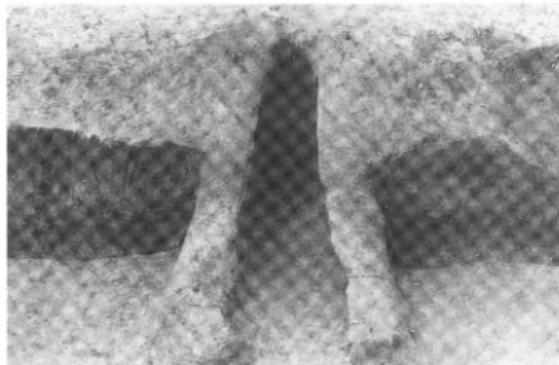
第4号住居址  
炭化材出土状況



第5号住居址完掘



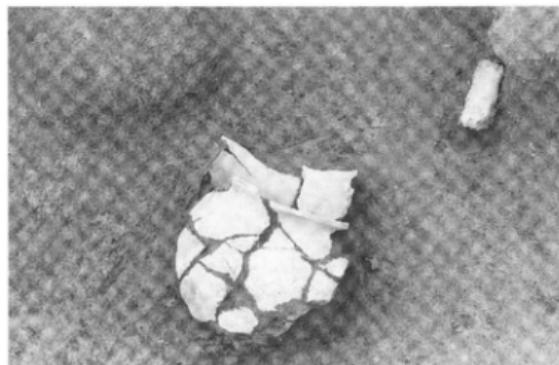
第5号住居址遺物出土状況



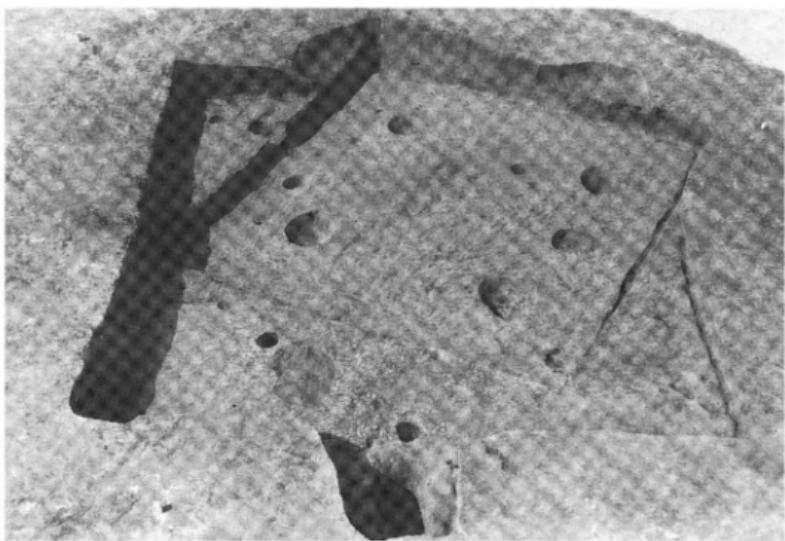
第5号住居址  
カマド



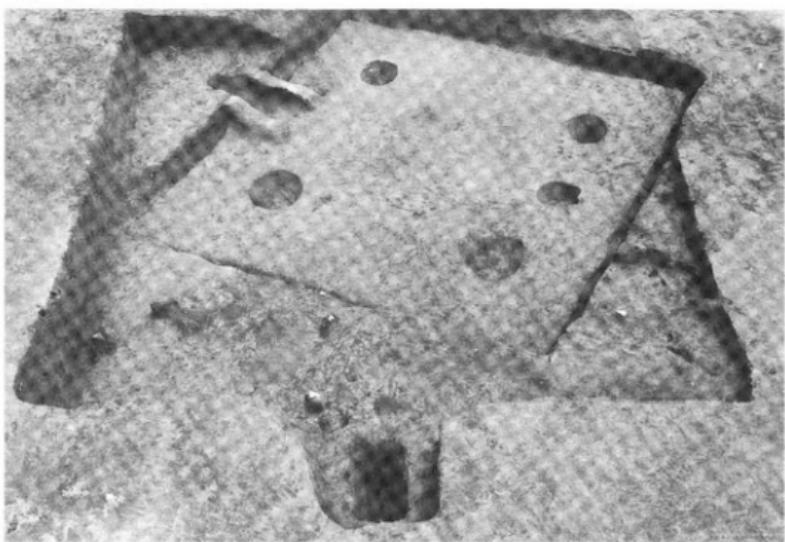
第5号住居址  
遺物出土状況



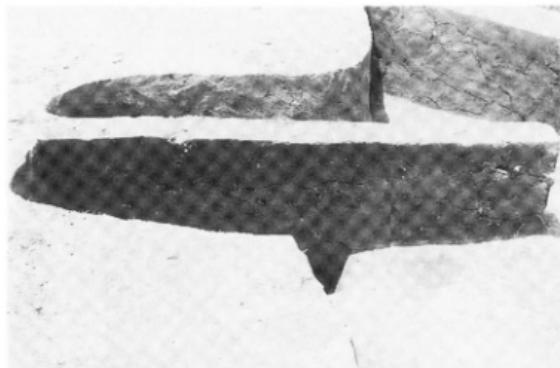
第5号住居址  
遺物出土状況



第 6 号住居址完掘



第 6 号住居址遺物出土状况



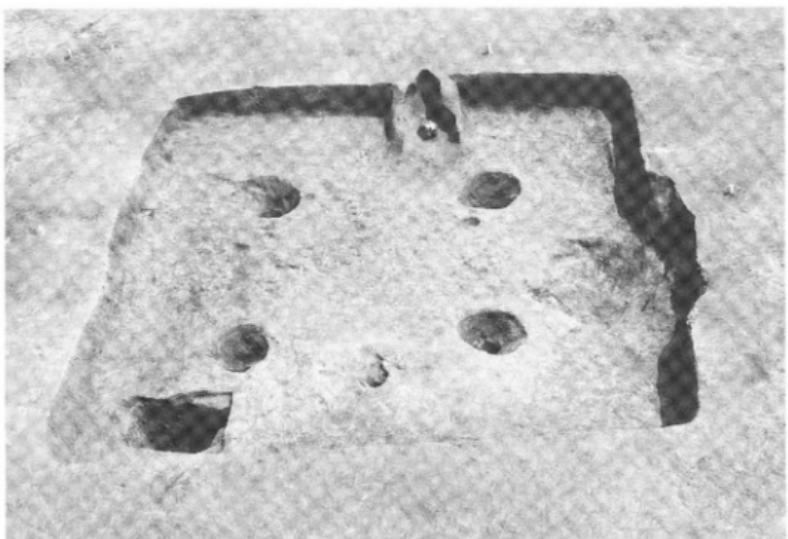
第6号住居址土層



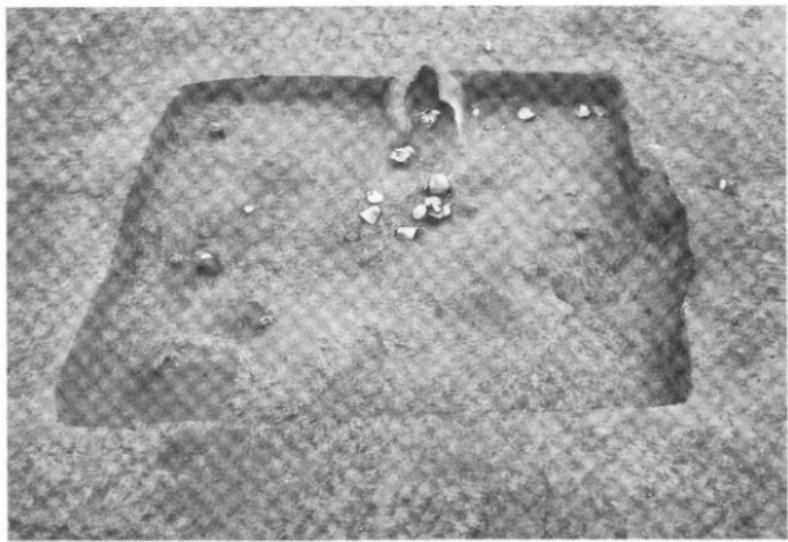
第6号住居址貯藏穴



作業風景



第7号住居址



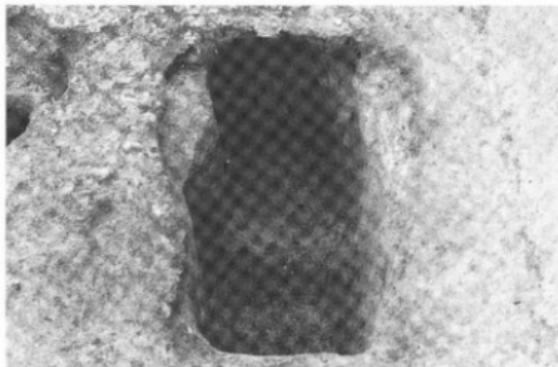
第7号住居址遺物出土状况



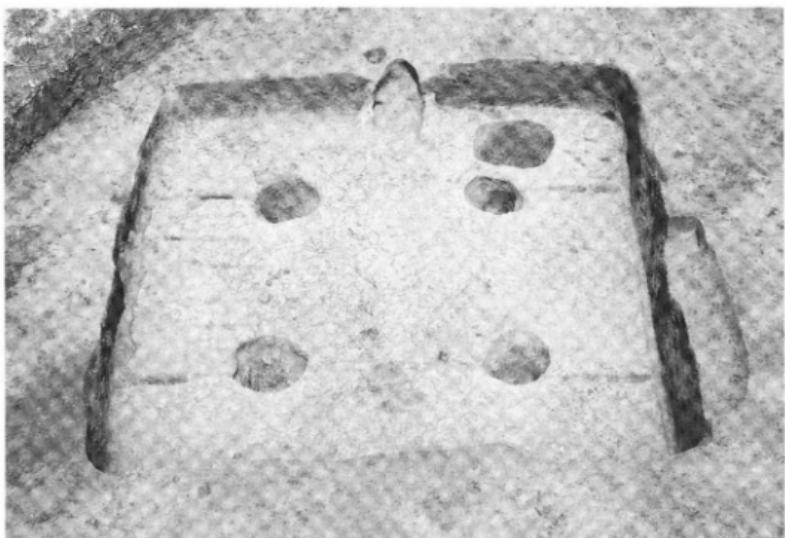
第7号住居址カマド



第7号住居址  
遺物出土状況



第7号住居址貯藏穴



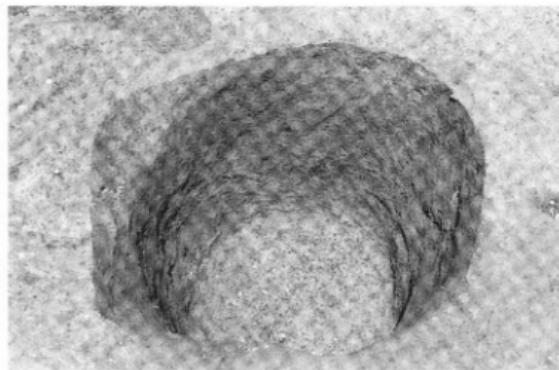
第 8 号住居址完掘



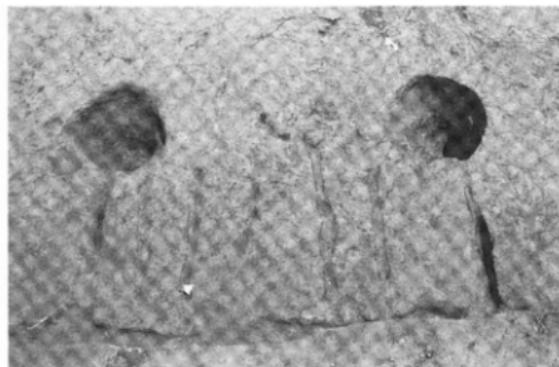
第 8 号住居址遗物出土状况



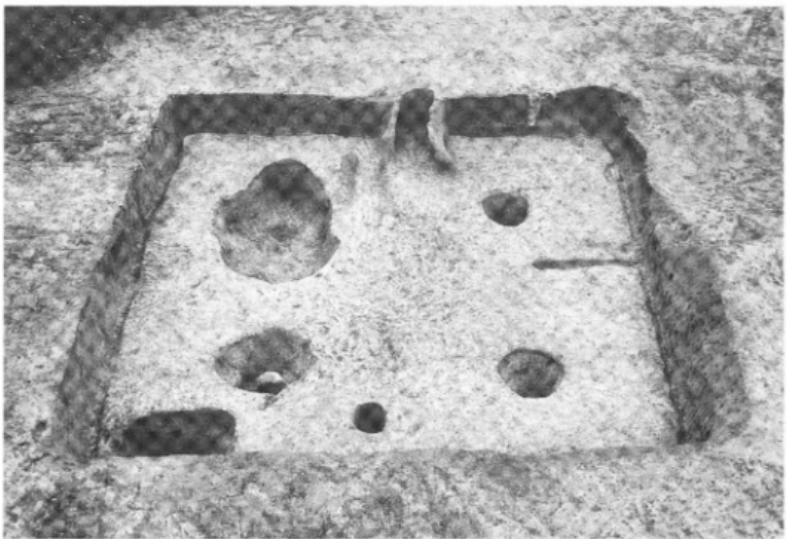
第8号住居址カマド



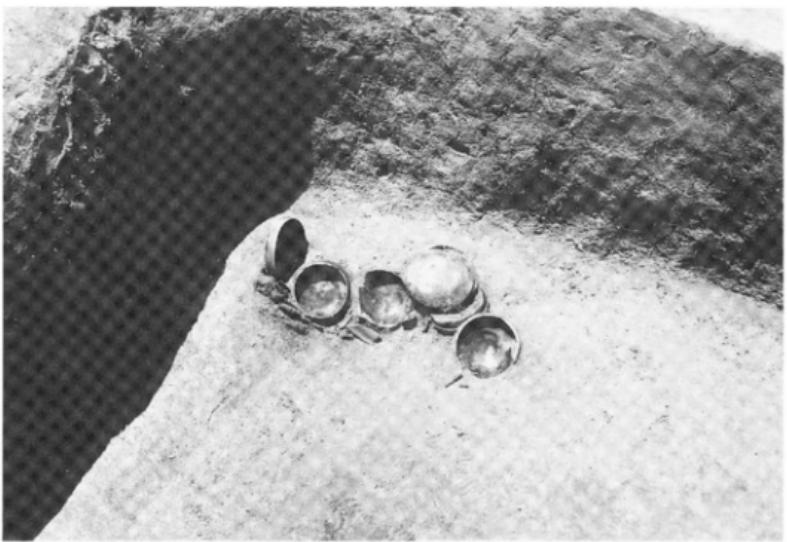
第8号住居址貯藏穴



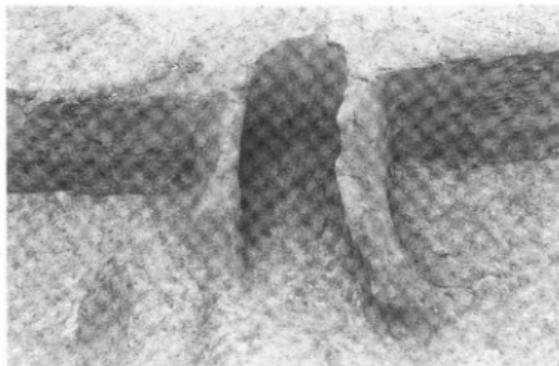
第8号住居址間仕切



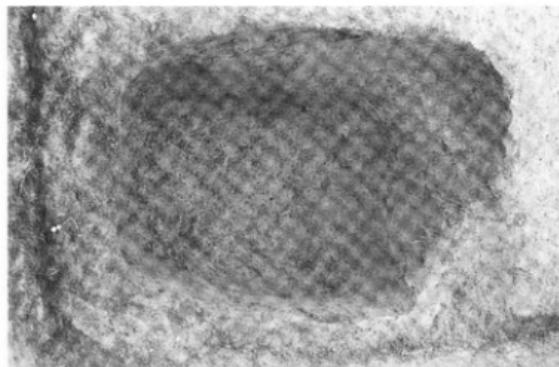
第9号住居址宪掘



第9号住居址遺物出土状況



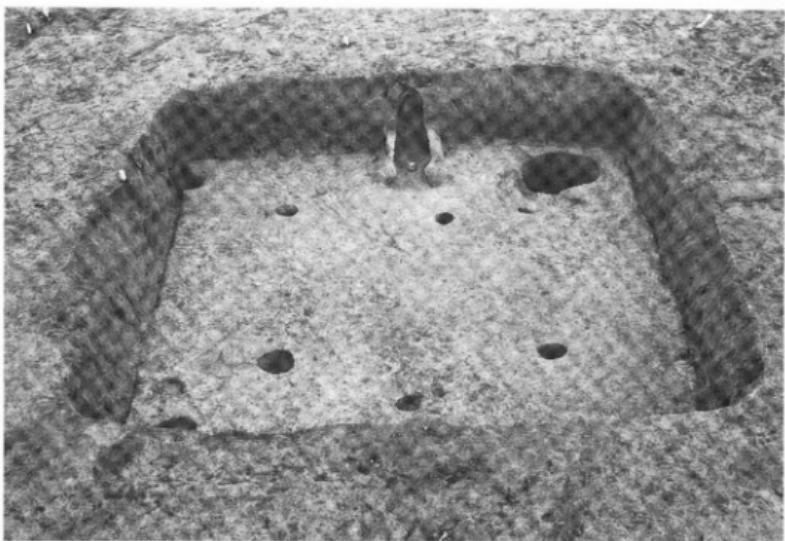
第9号住居址カマド



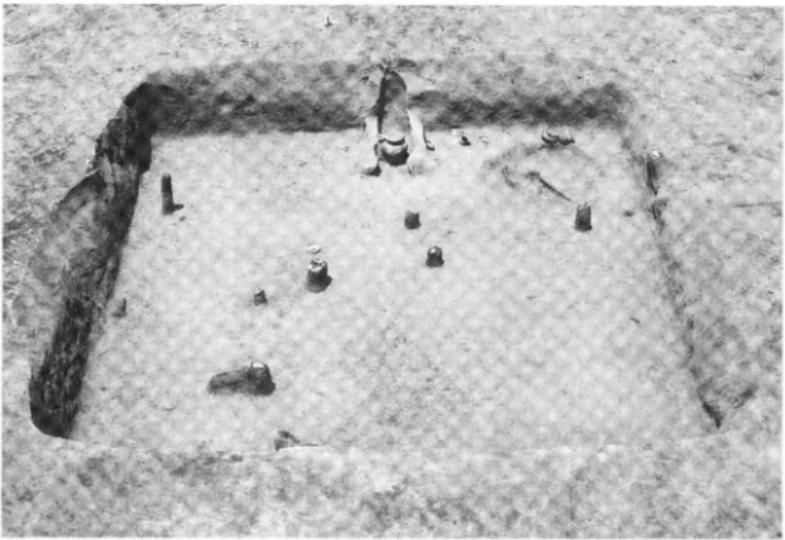
第9号住居址貯藏穴



第9号住居址  
土玉出土状況



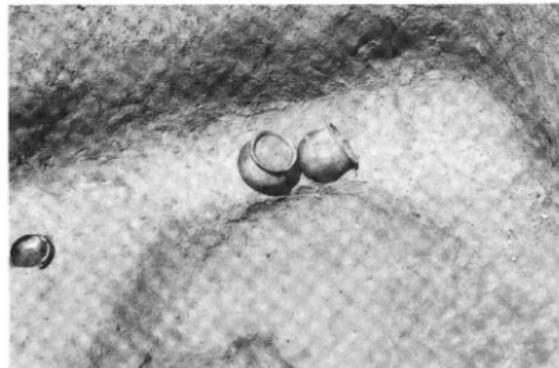
第10号住居址完掘



第10号住居址遺物出土状況



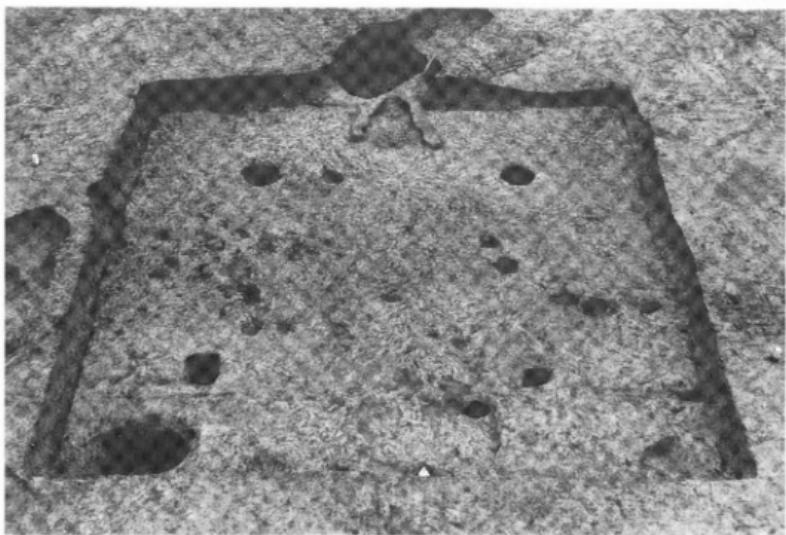
第10号住居址カマド



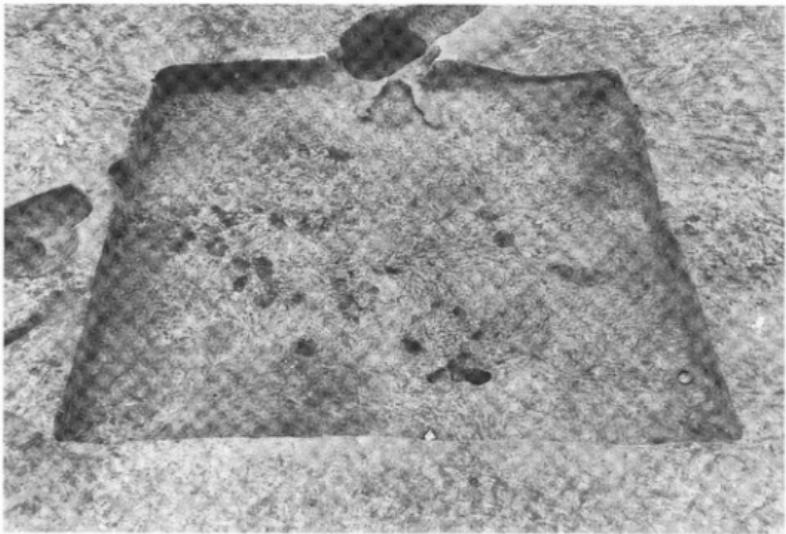
第10号住居址  
遺物出土状況



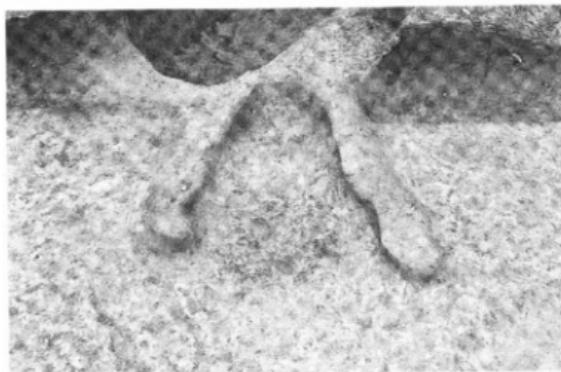
第10号住居址土層



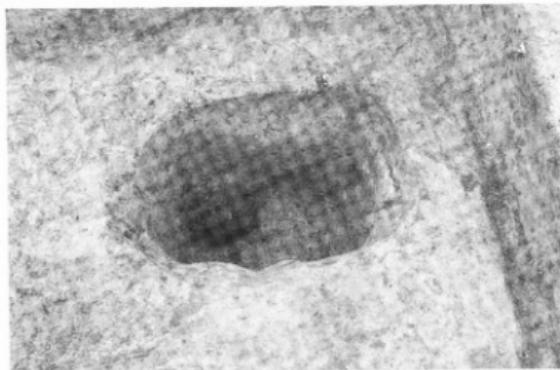
第11号住居址完掘



第11号住居址遺物出土状况



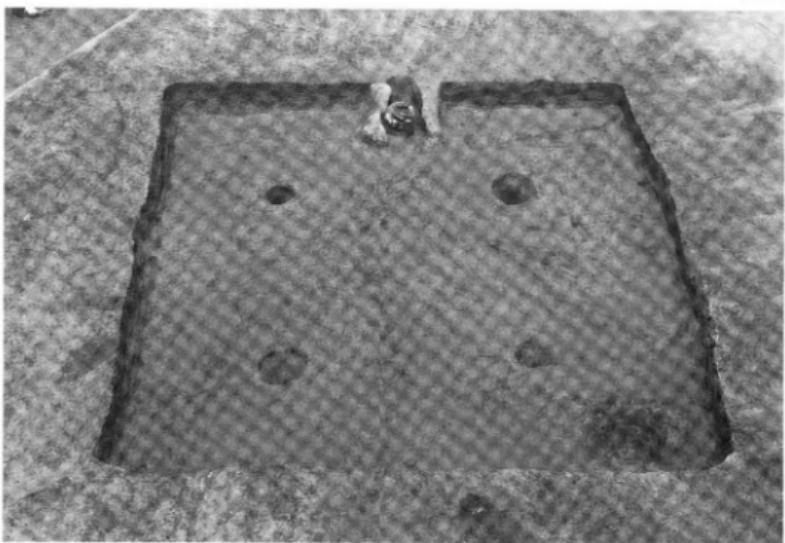
第11号住居址カマド



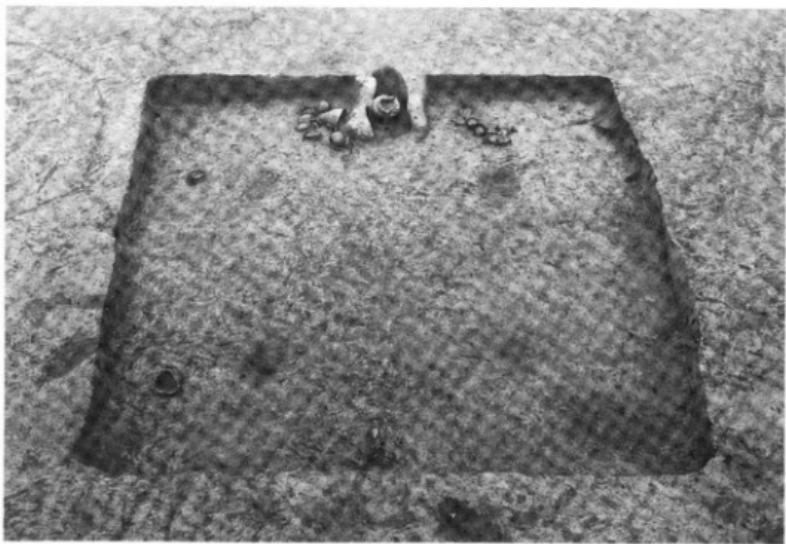
第11号住居址貯藏穴



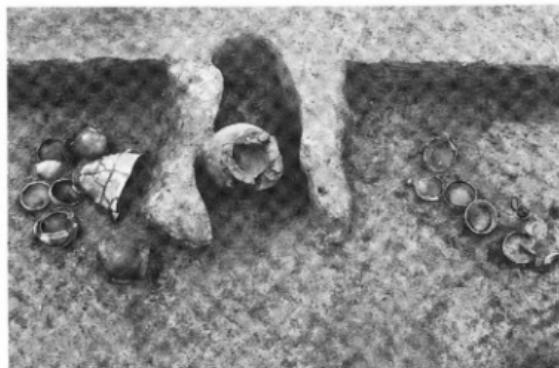
作業風景



第12号住居址完掘



第12号住居址遗物出土状况



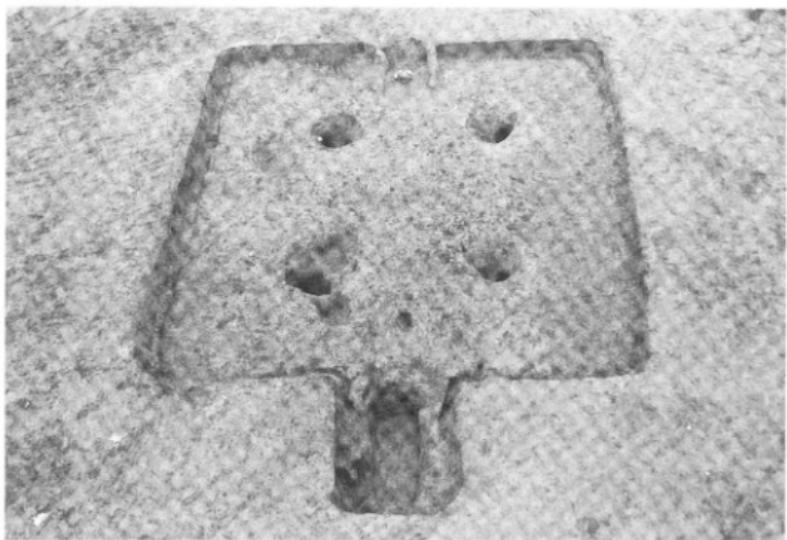
第12号住居址  
カマド



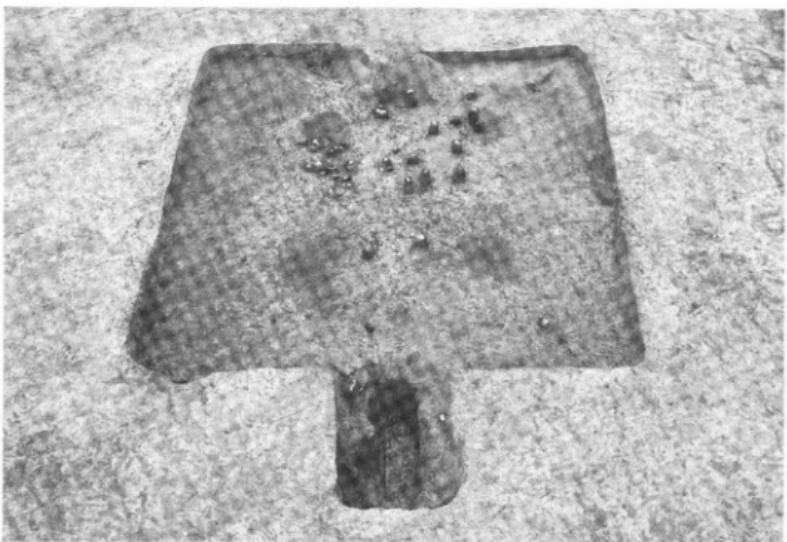
第12号住居址  
遺物出土状況



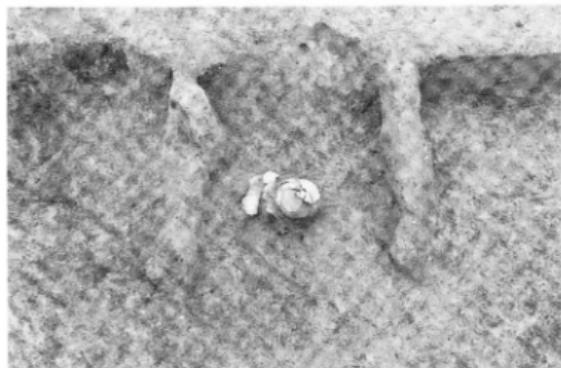
第12号住居址  
遺物出土状況



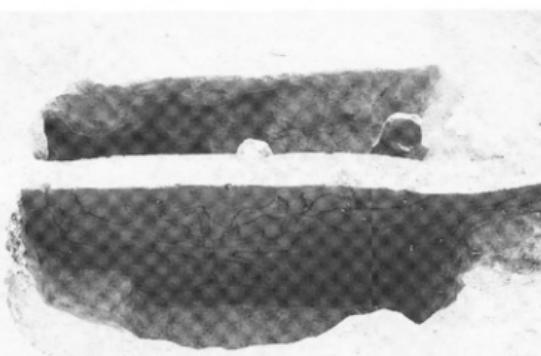
第13号住居址完掘



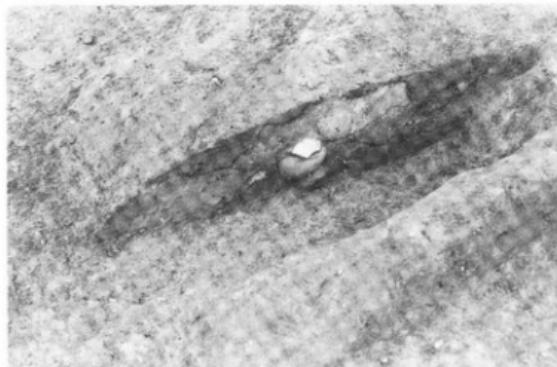
第13号住居址遺物出土状况



第13号住居址カマド



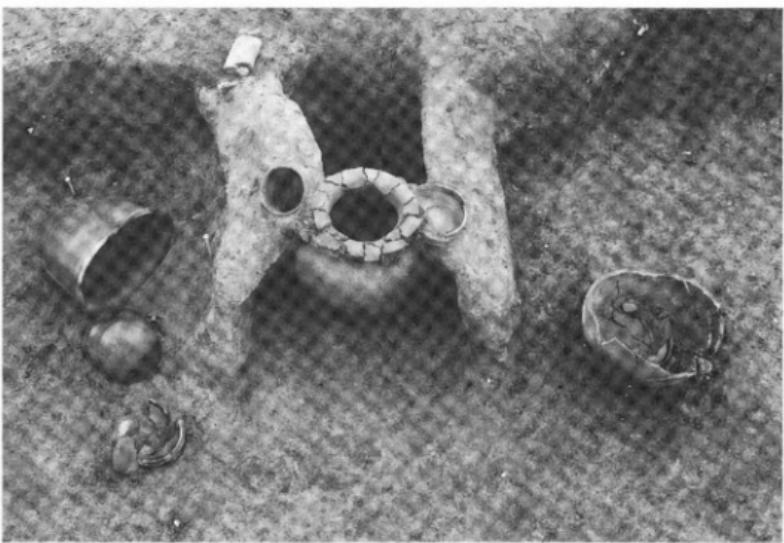
第13号住居址土層



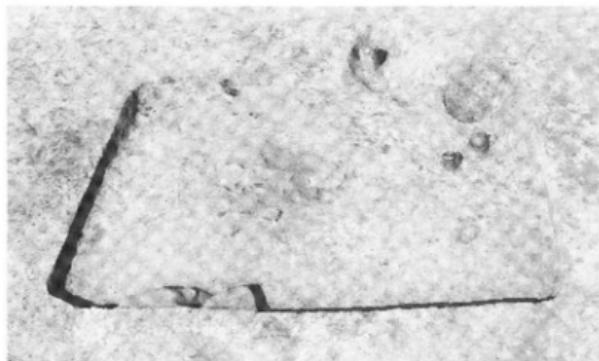
第13号住居址  
カマド土層



第14号住居址完掘



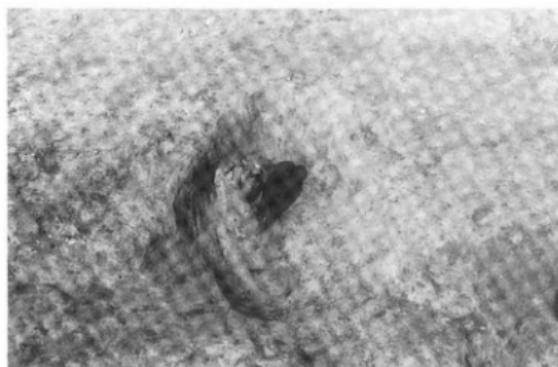
第14号住居址遺物出土状況



第15号住居址完掘



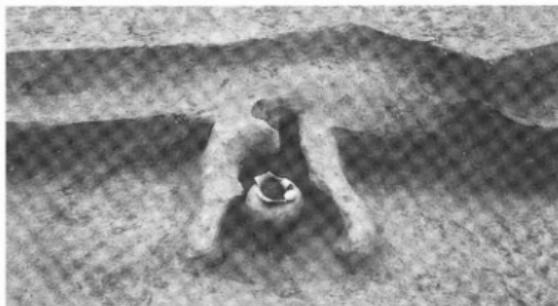
第15号住居址  
遺物出土状況



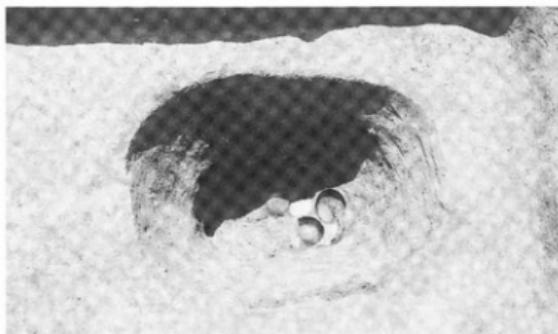
第15号住居址カマド



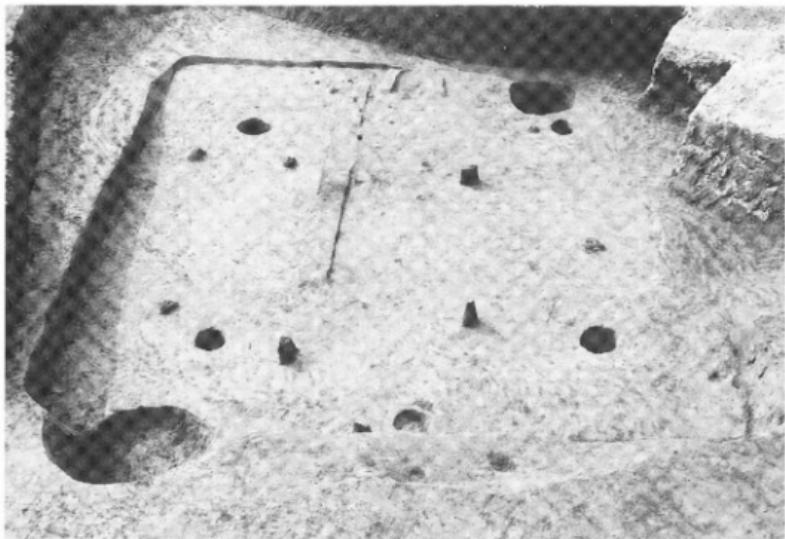
第16号住居址窯場



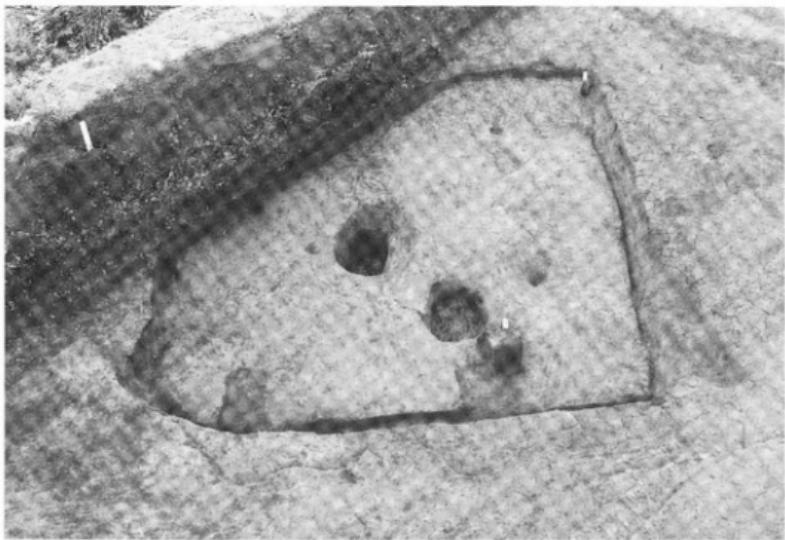
第16号住居址カマド



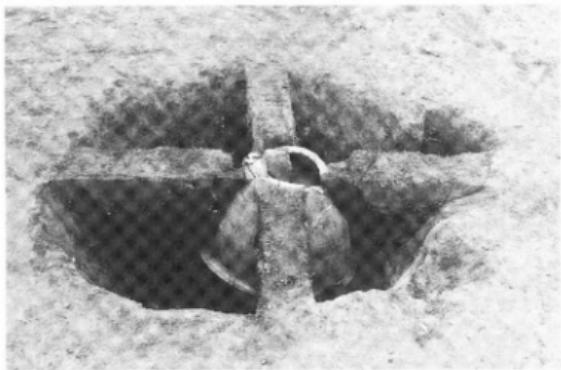
第16号住居址貯藏穴



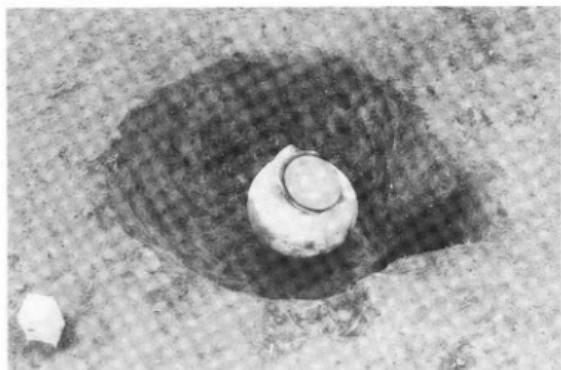
第17号住居址完掘



第18号住居址完掘



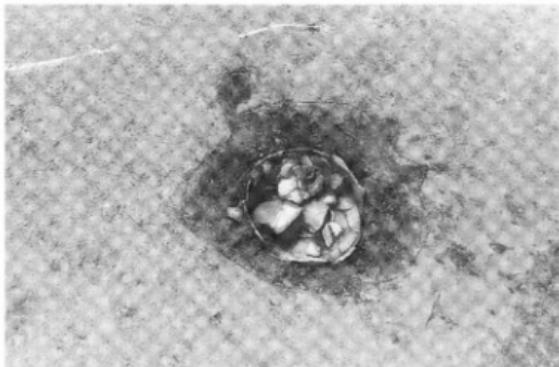
第1号火葬墓



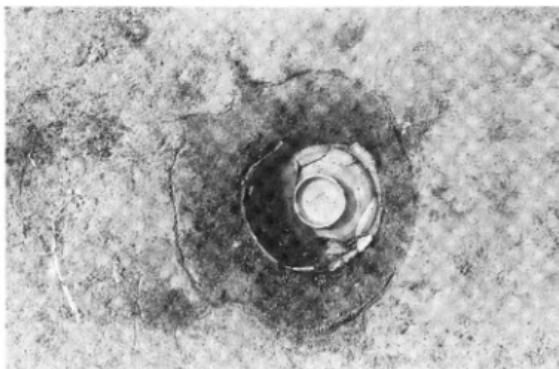
第1号火葬墓



第1号火葬墓



第2号火葬墓



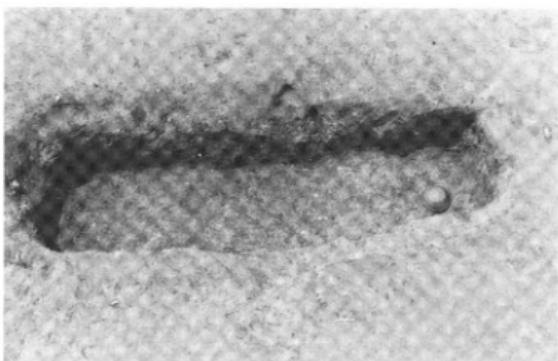
第2号火葬墓



第2号火葬墓



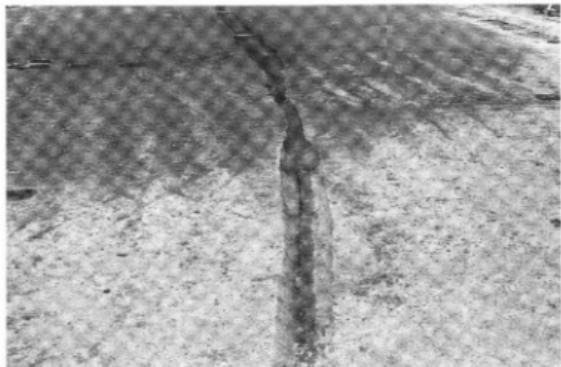
第1号土壤墓



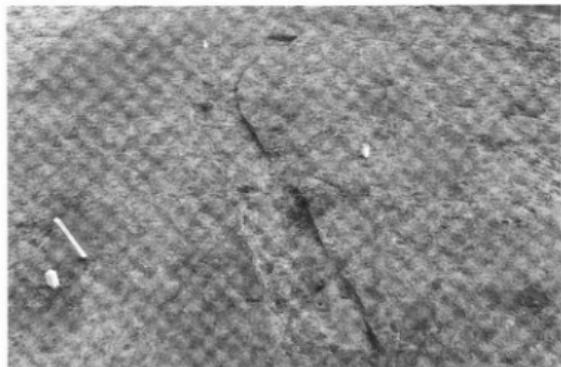
第1号土壤墓



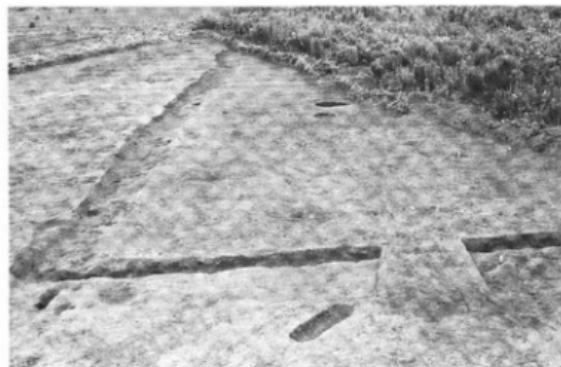
現地説明会



第1号溝



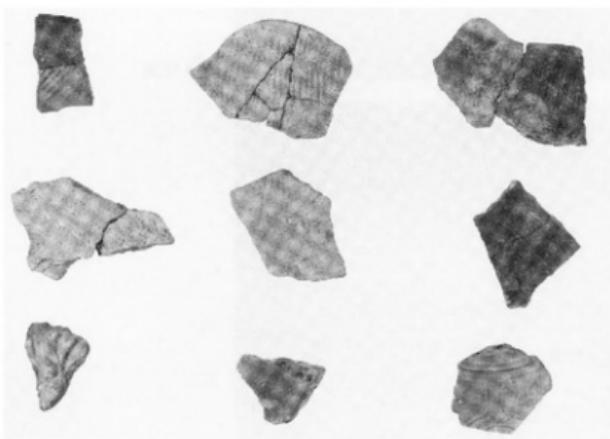
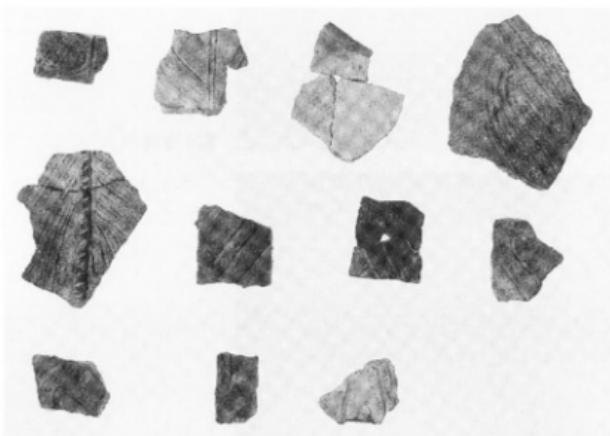
第4号溝



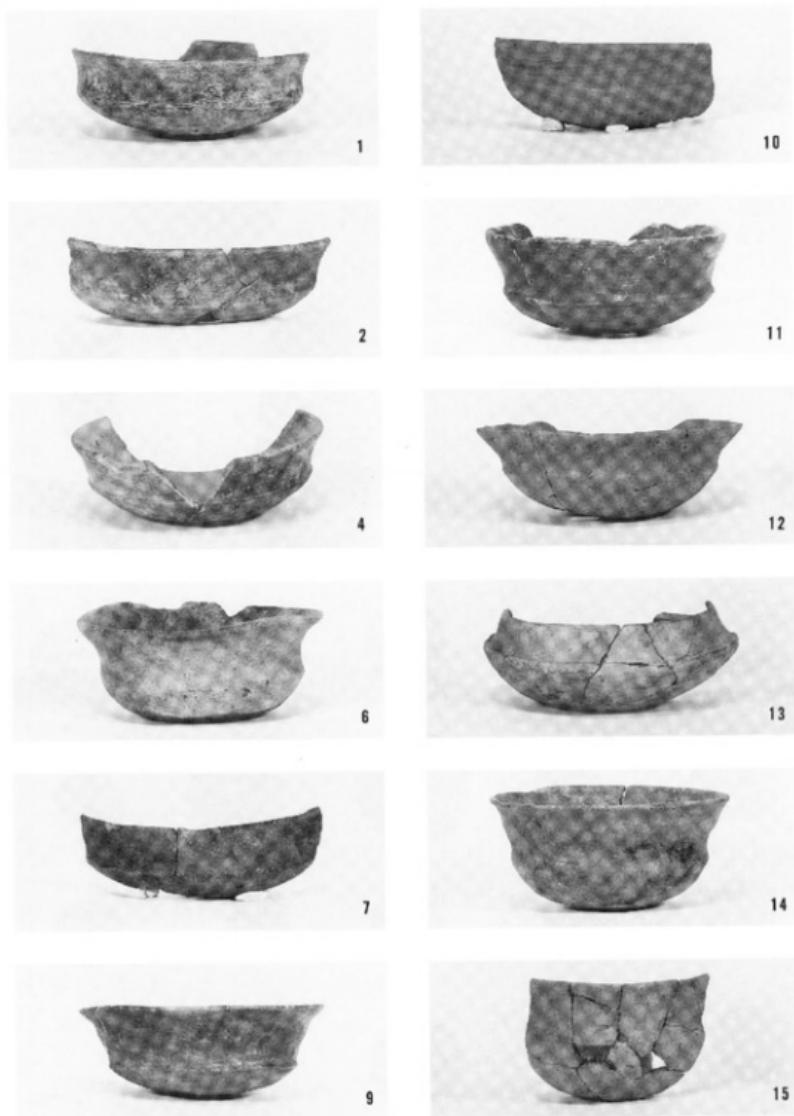
第5号溝



石器



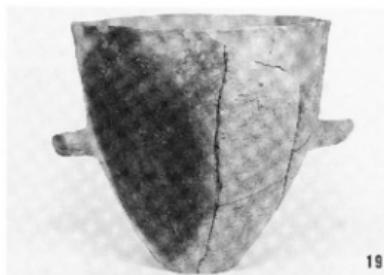
繩文土器



第1号住居址出土遗物



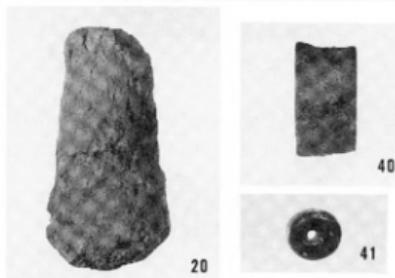
17



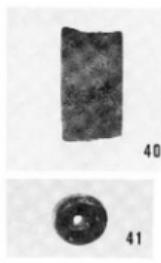
19



18



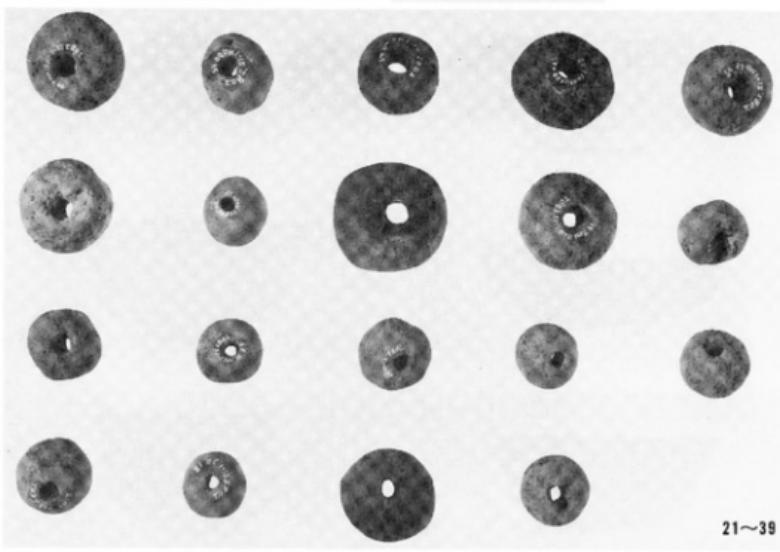
20



40

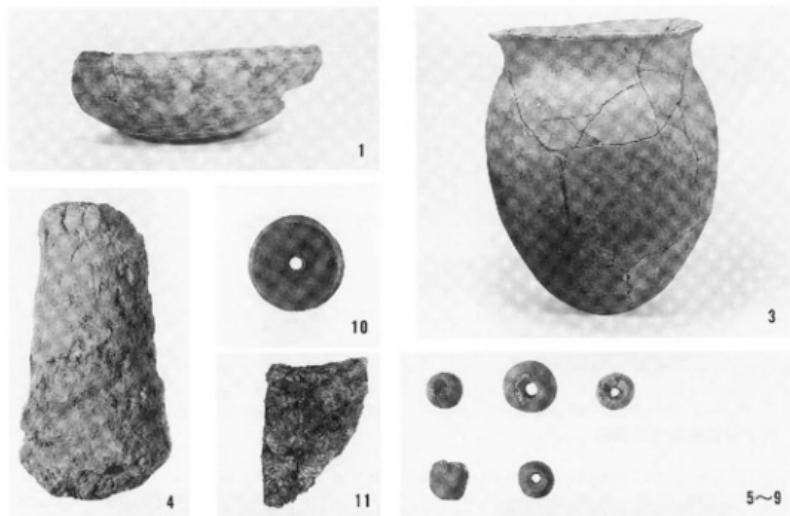


41

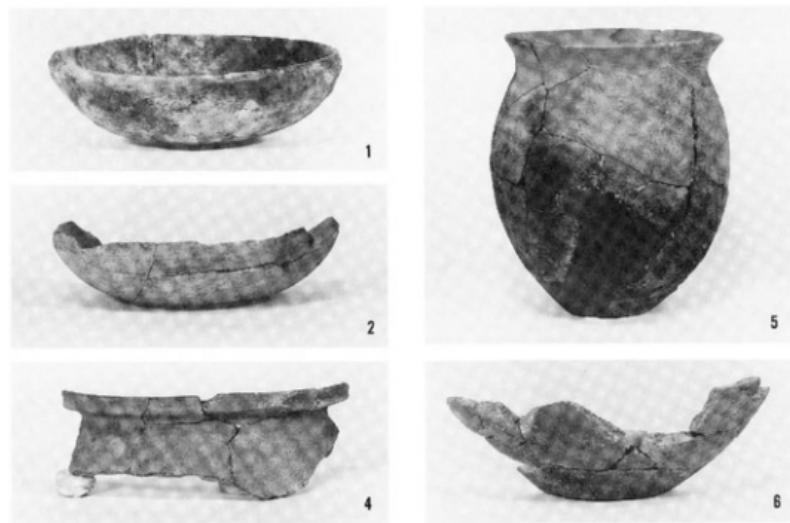


21~39

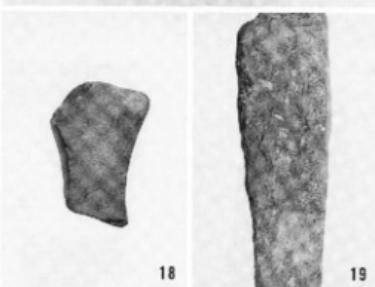
第1号住居址出土遗物



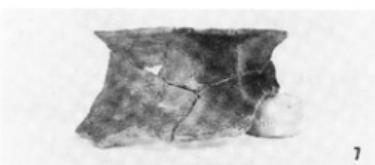
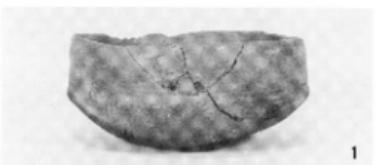
第2号住居址出土遗物



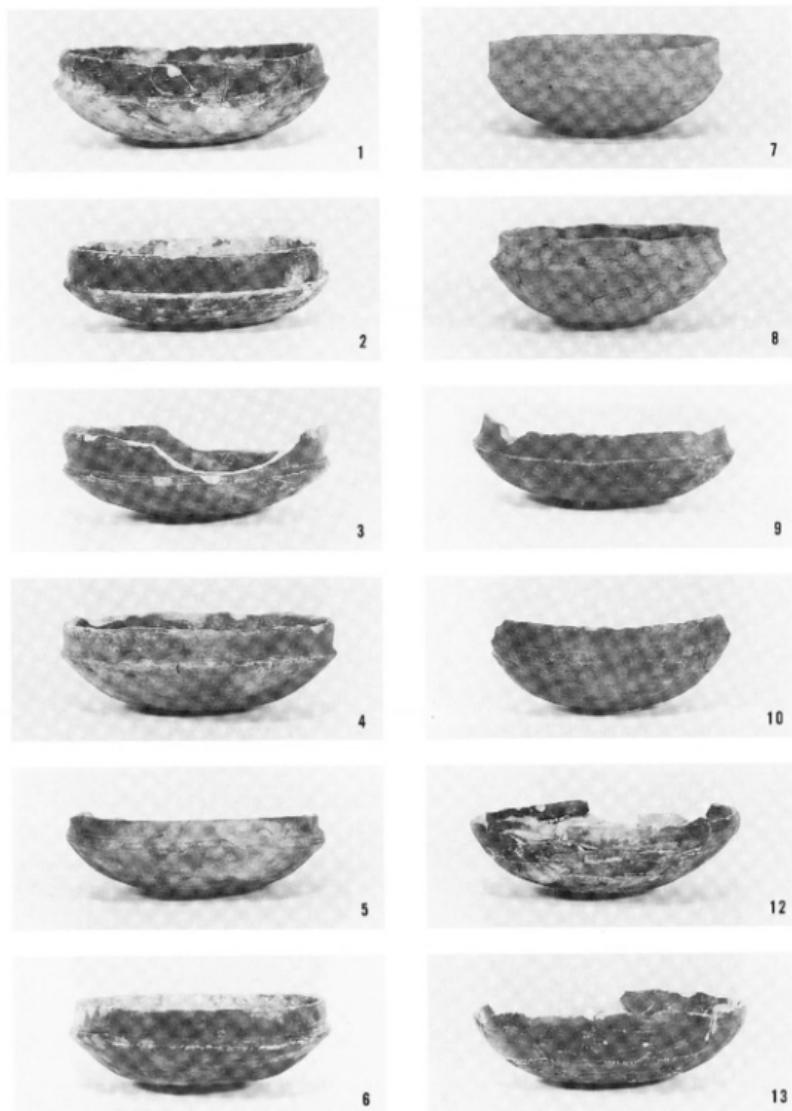
第3号住居址出土遗物



第3号住居址出土遗物



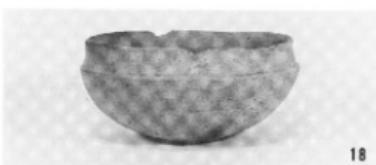
第4号住居址出土遗物



第5号住居址出土遗物



14



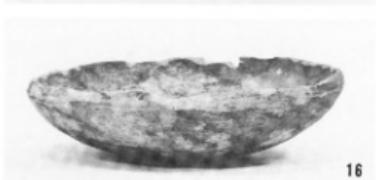
18



15



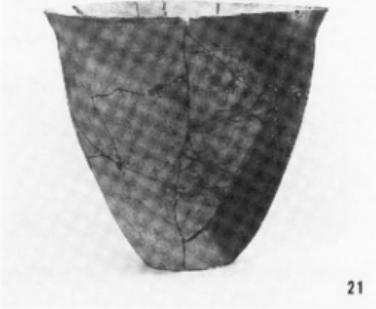
20



16



17



21

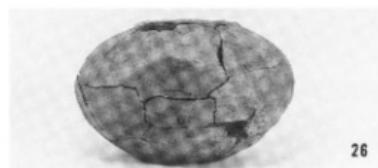


19



24

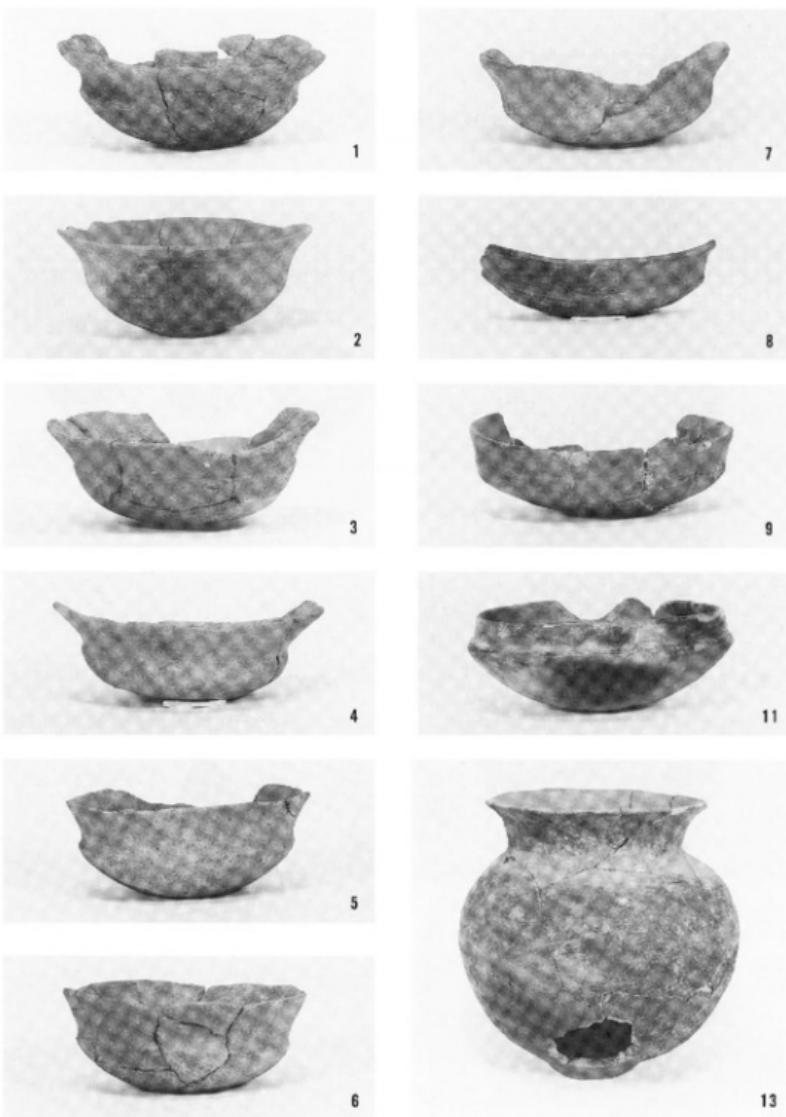
第5号住居址出土遗物



第5号住居址出土遗物



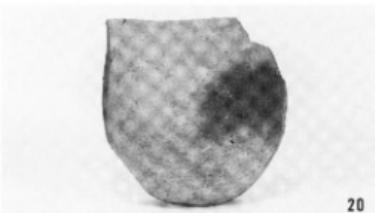
第6号住居址出土遗物



第7号住居址出土遗物



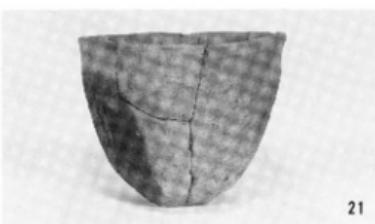
14



20



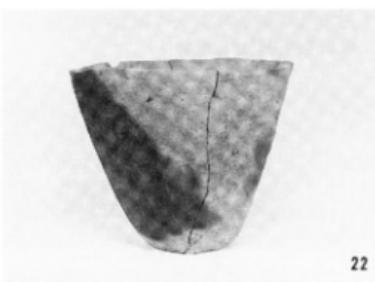
15



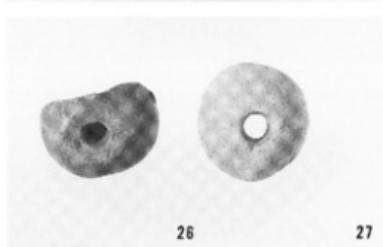
21



16



22

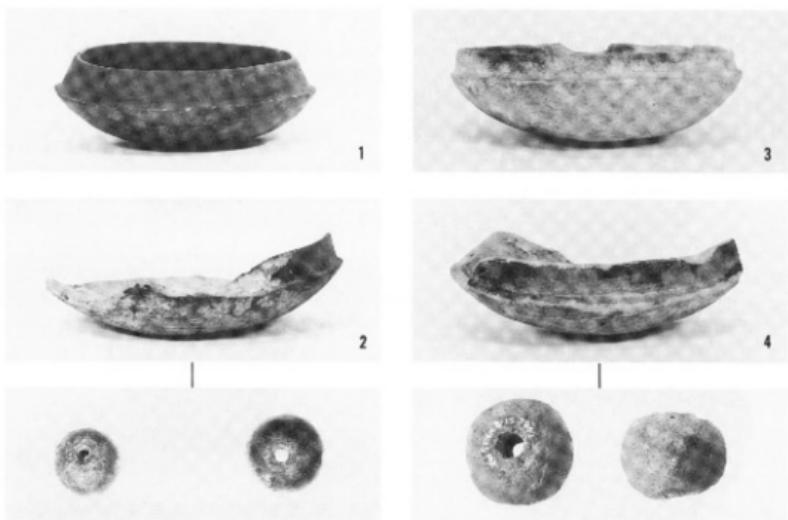


26

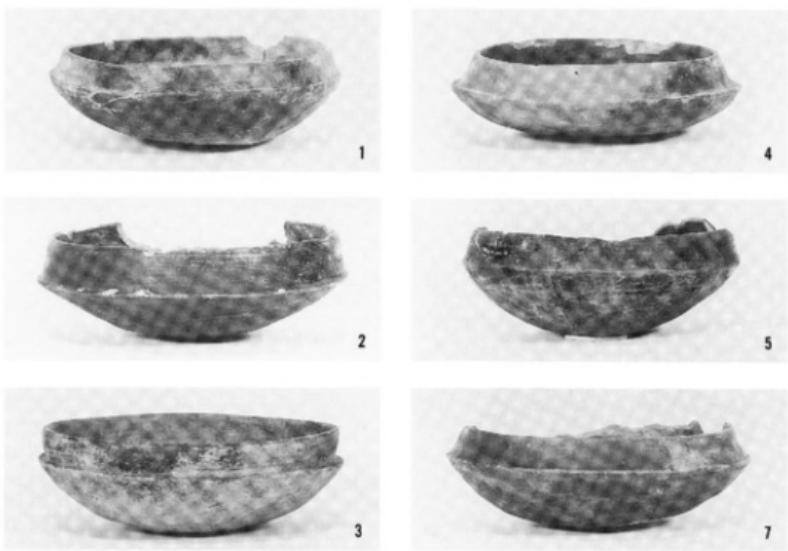


27

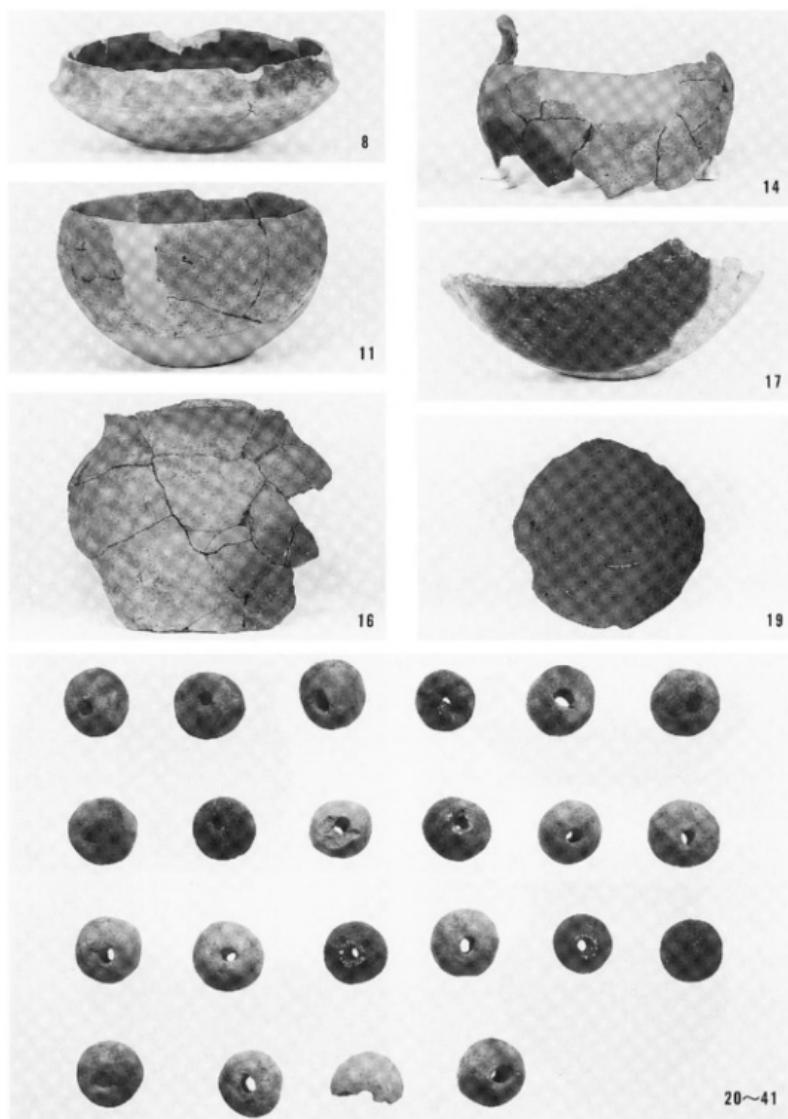
第 7 号住居址出土遺物



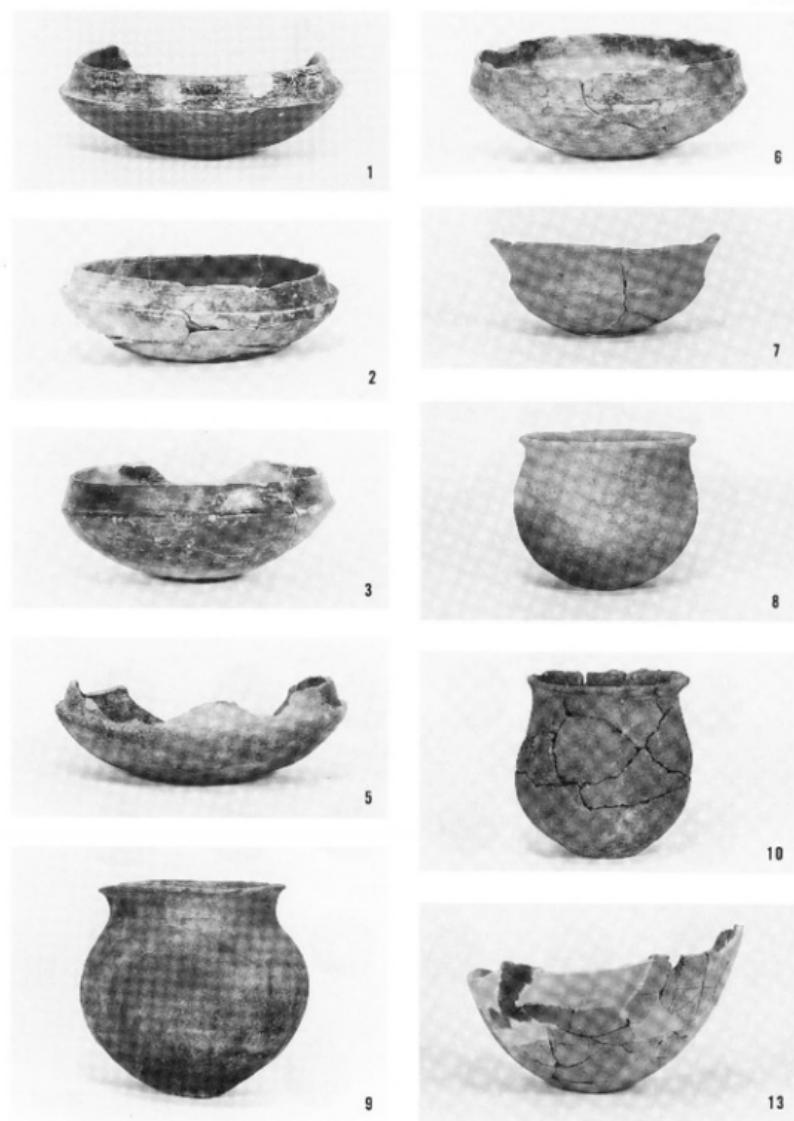
第 8 号住居址出土遗物



第 9 号住居址出土遗物



第9号住居址出土遗物



第10号住居址出土遗物



12



19



20



17



21



22



23



1



4



2

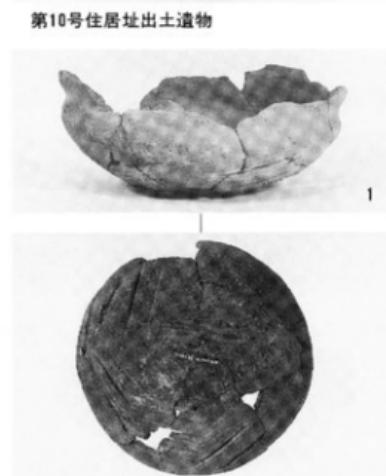


3



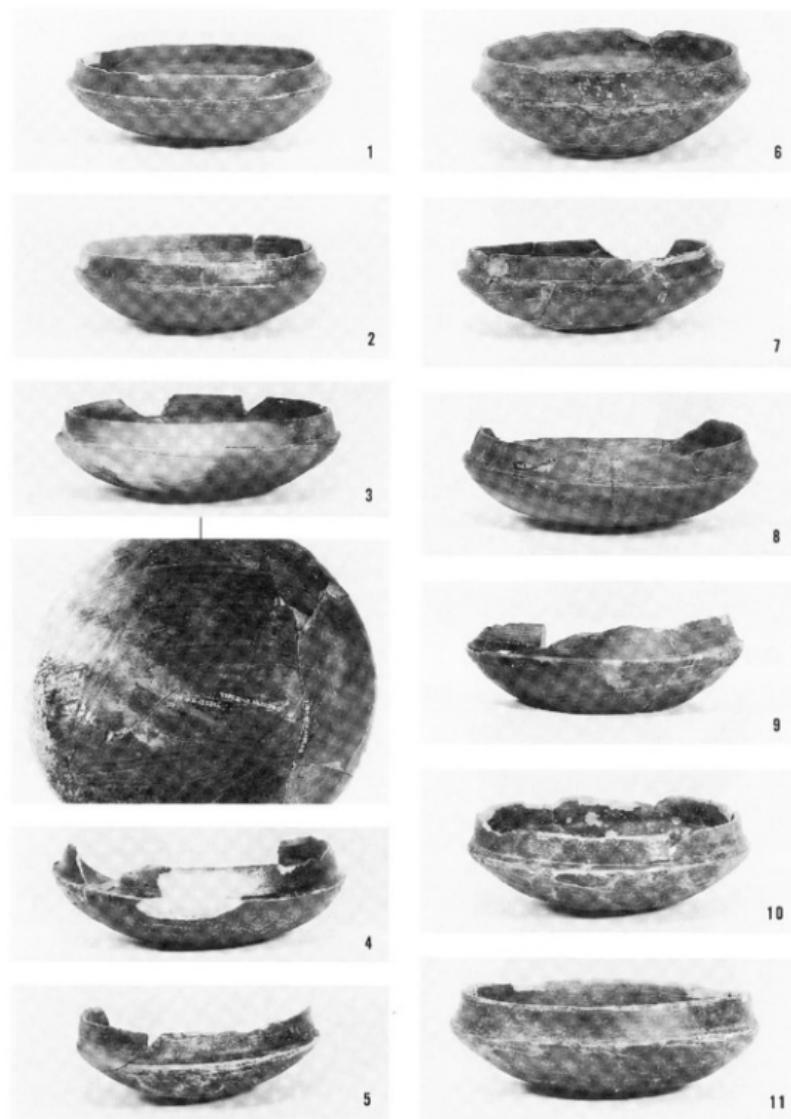
5

第10号住居址出土遗物



1

第11号住居址出土遗物



第12号住居址出土遗物



12



19



13



20



14



22

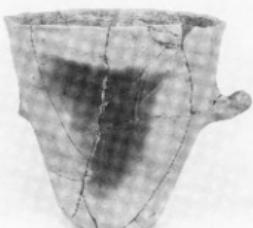


16

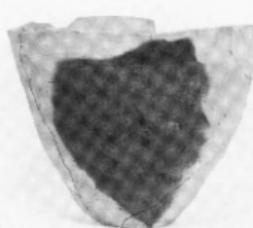


23

第12号住居址出土遗物



24



25

第12号住居址出土遗物



1



7



5



8



6

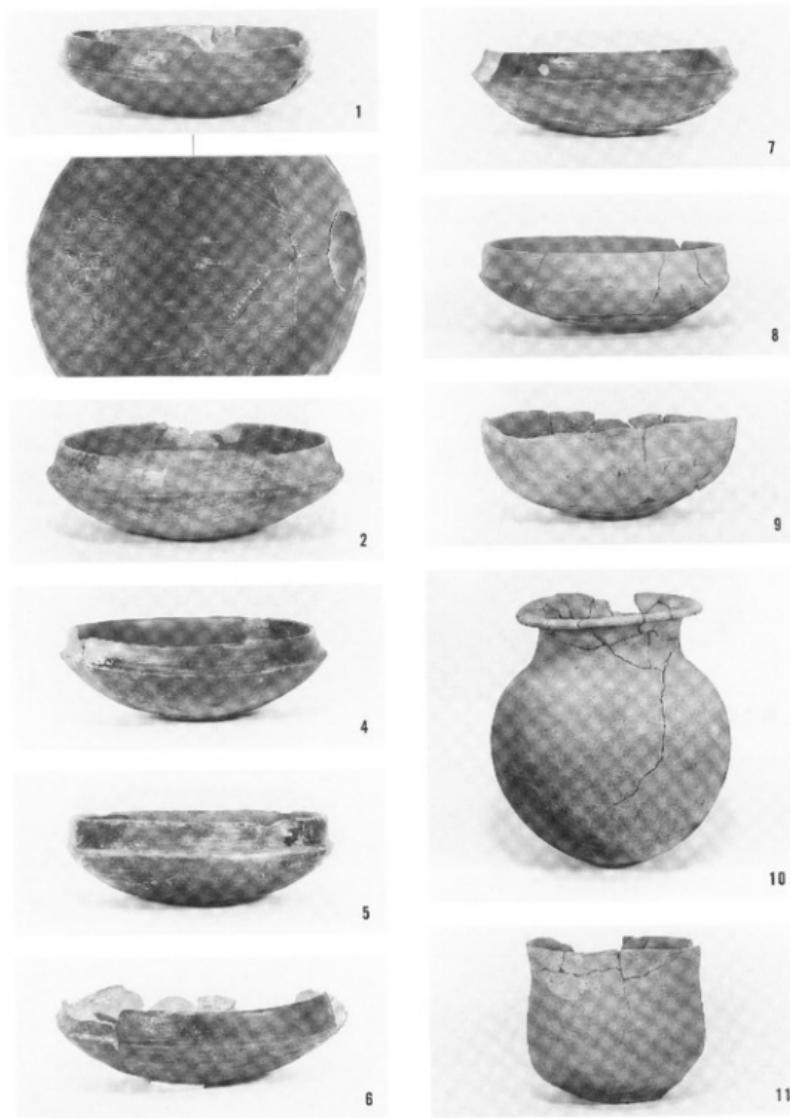


9



10

第13号住居址出土遗物



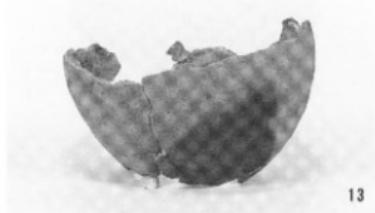
第14号住居址出土遗物



12

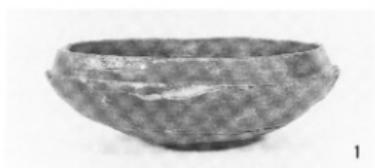


14



13

第14号住居址出土遗物



1



2

第15号住居址出土遗物



1



3

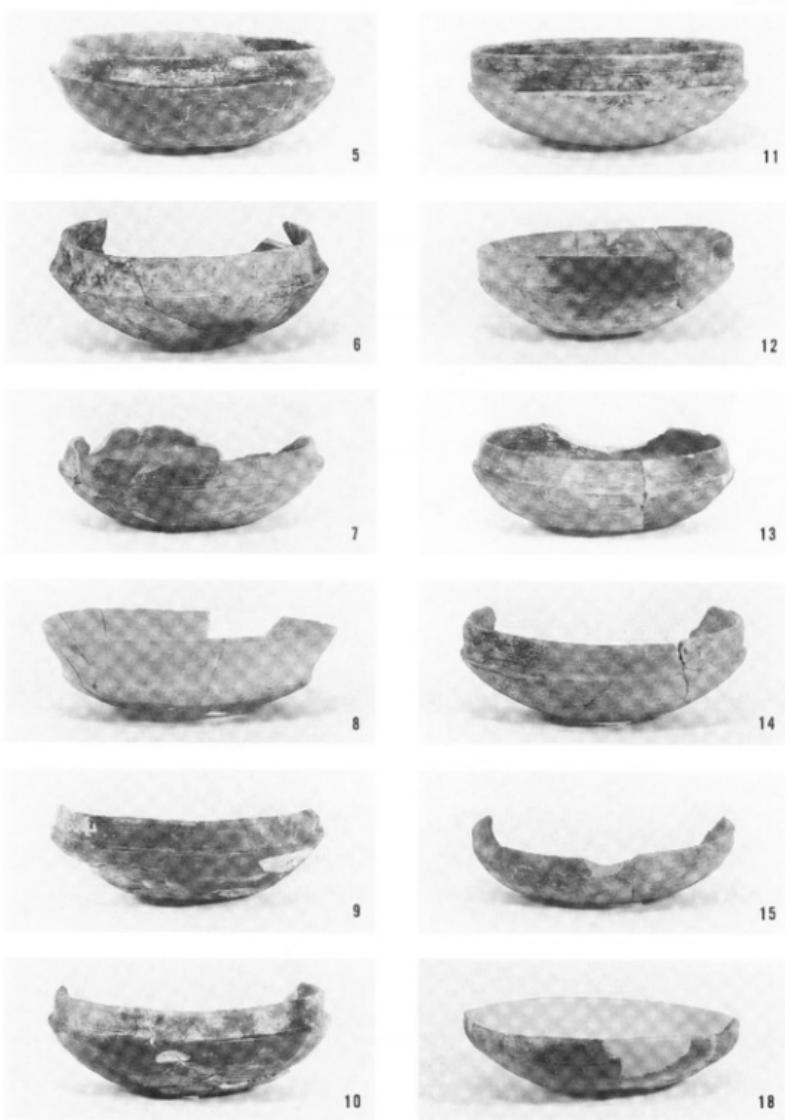


2



4

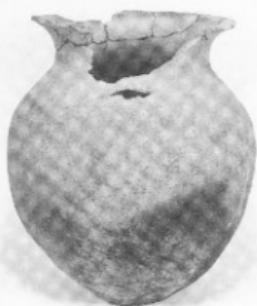
第16号住居址出土遗物



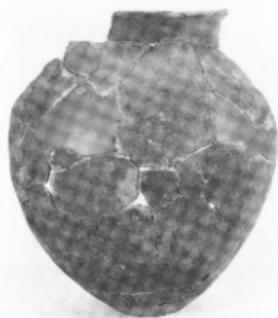
第15号住居址出土遗物



19



22



21



23

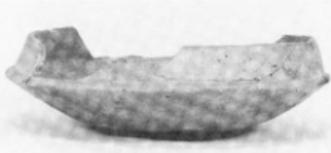


25



26

第16号住居址出土遗物



1



4

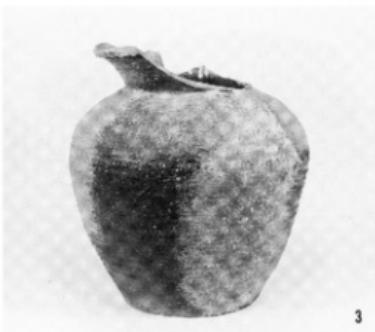


3

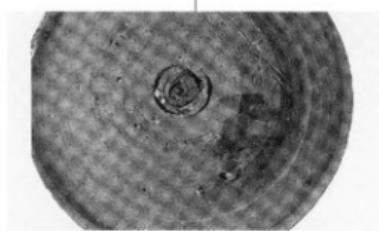
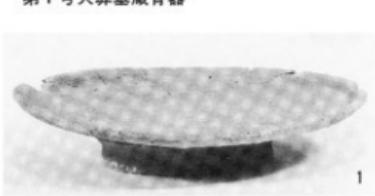


8

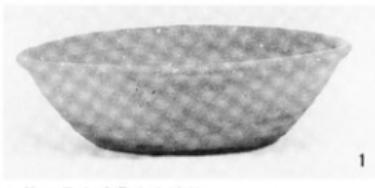
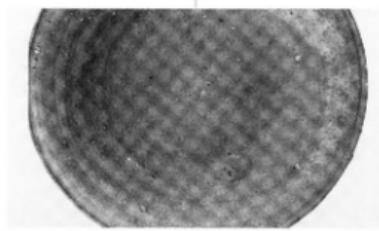
第17号住居址出土遗物



第1号火葬墓藏骨器



第2号火葬墓藏骨器



第1号土壤墓出土遗物



12



14

第17号住居址



15

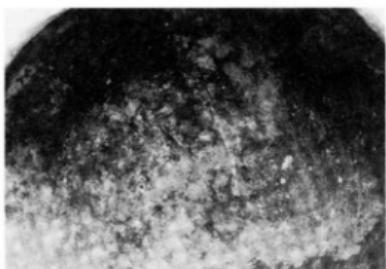
遗構外



26

遗構外

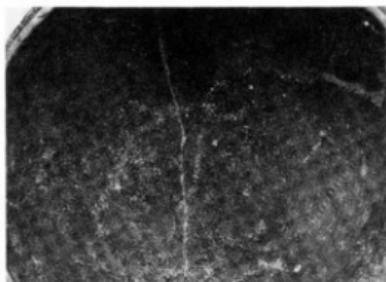
黑色处理土器



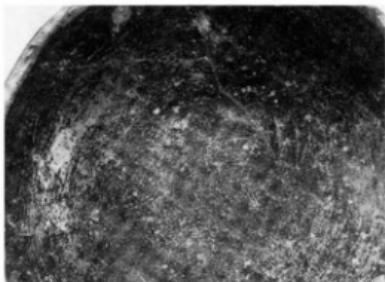
第5号住 2



第5号住 1



第12号住 2



第12号住 8

---

## 石橋南遺跡

田村・沖宿土地区画整理事業に  
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

### 第7集

発行日 1997年3月  
編集 土浦市遺跡調査会  
発行 土浦市教育委員会  
問い合わせ先 上高津貝塚ふるさと歴史の広場  
〒300-0811 茨城県土浦市上高津1843  
TEL 0298(29)7111  
印 刷 土浦印刷株式会社

---